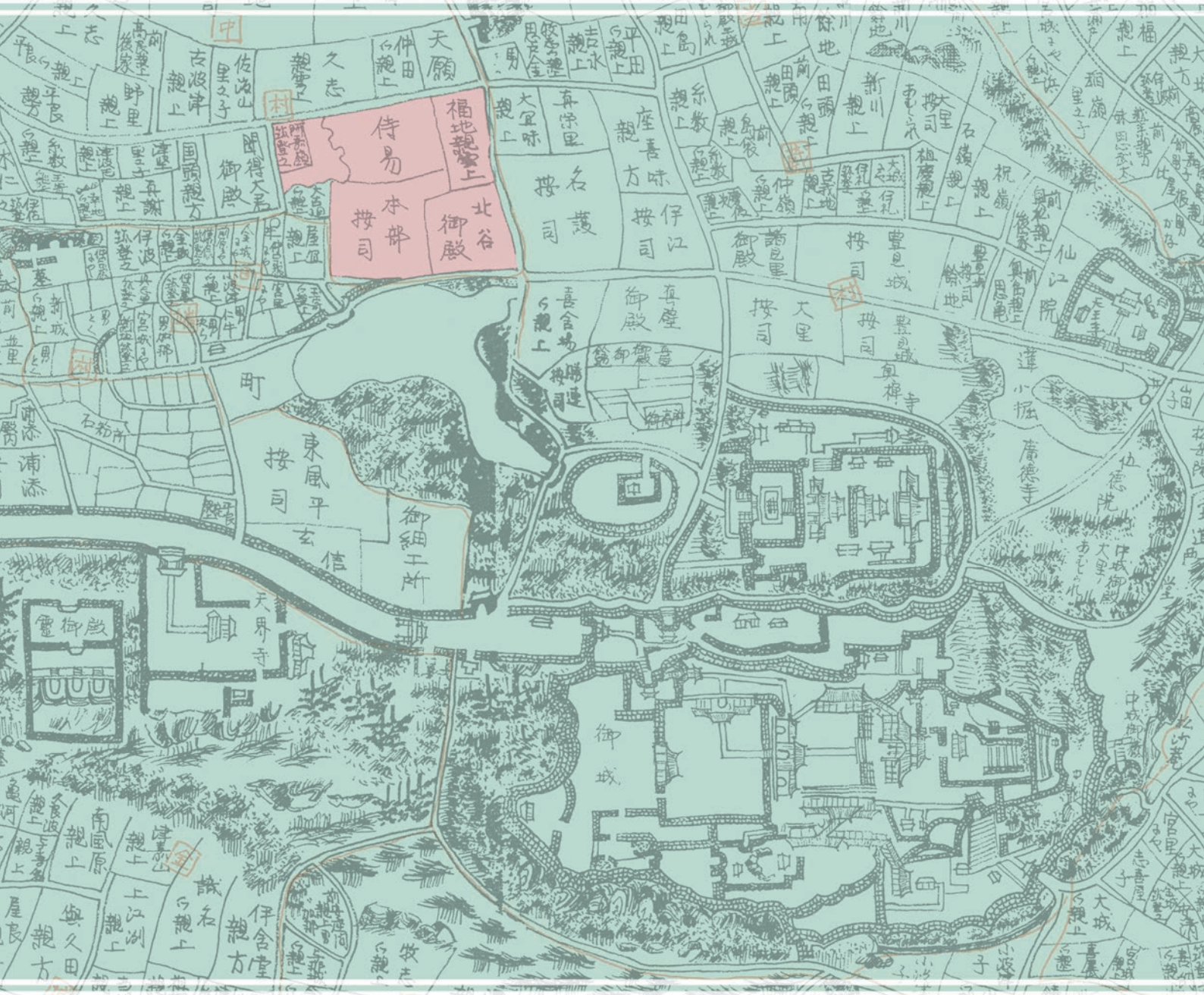
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第95集

中城御殿跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（6）　―



平成３０（2018）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第95集

中城御殿跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（6）　―

平成30（2018）年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター

中 城 御 殿 跡

― 県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（6）―

平成30（2018）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成１９・２０・２１年度に遺構確認調査を実施し、平成２８年度にその一部をまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、１８７０年に今回の調査対象となった大中町に新御殿が建てられ移転します。そして、１８７９年の琉球処分を経て、１９４５年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地にありました。

すでに平成１９・２０・２１年度の調査成果については報告しているが、当該年度調査で出土した金属製品は質ならびに量共にこれまでの調査から類例が見られないことから、それらをまとめて今回、報告するものである。

これら金属製品は中城御殿跡から出土したものですが、１８７４年まで現在の首里高等学校に所在した中城御殿や１８７９年の首里城明け渡しの際に移動させられたと思われる金属製品も多数見ることができます。これらは首里城や中城御殿の日常生活を偲ぶものであると共に、それらの場所で執り行われた祭祀の様相を知る上では貴重な遺物であると言うことができます。また、大量に出土した銅釘、鉄釘なども中城御殿の建物の実態を窺い知る上で欠くことのできない遺物であると言えます。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を離隔する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護･活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成３０（２０１８）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　金　城　亀　信

1　米軍撮影中城御殿

2　中城御殿跡全景

巻頭図版 1

３　平成 20 年度調査区全景（西から）

４　平成 20 年度調査区全景（東から）

巻頭図版２

5　平成 21 年度調査区全景（西から）

6　平成 21 年度調査区全景（北から）

7　金属製品一括出土状況（1）

8　金属製品一括出土状況（2）

巻頭図版 4

９　金属製品一括出土状況（３）

１０　銅製花瓶出土状況

巻頭図版５

１１　銅製蓋出土状況（１）

１２　銅製蓋出土状況（２）

巻頭図版６

１３　飾り金具出土状況（１）

１４　飾り金具出土状況（２）

巻頭図版７

１５　大型香炉出土状況

１６　銅製品出土状況

巻頭図版８

例　言

1　本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 19（2007）年度、平成 20（2008）年度、平成 21（2009）年度にそれぞれ実施した中城御殿跡の埋蔵文化財発掘調査成果と、平成 21（2009）年度と平成 22（2010）年度の未報告の遺物についてまとめたものである。なお、平成 22 年度に報告を行った「第 5 章　遺構」について、一部の内容の加除筆を行い、編集を行った。

2　本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課（平成 23 年度以前）が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　資料整理作業にあたり、調査体制の項目で記した方々に資料の同定・整理作業を賜った。記して謝意を表したい。

4　本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。

5　本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を使用した。

6　本報告書の編集は調査体制の項目で記した多くの方々の協力のもと山本正昭が行い、各章の執筆は下記のとおり行った。
上地　博：第 1 ～ 4 章、第 5 章第 5 節、報告書抄録
山本正昭：第 5 章第 1 ～ 4 節、第 6 ～ 8 節、第 6 章
田村　薫：第 5 章第 5 節、第 8 章
パリノ・サーヴェイ株式会社：第 7 章

7　本報告書に掲載された検出遺構の写真撮影は、上地博、本村麻里衣が行い、出土遺物の写真撮影は領家範夫と安里小弥子が行った。

8　本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、沖縄県立博物館・美術館の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。

9　自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

１０　各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめて掲載した。

１１　発掘調査で得られた出土遺物及び実測図、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序
巻頭図版
例言

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査体制…… 1
第２章　位置と環境
第１節　地理的環境…… 4
第２節　歴史的環境…… 4
第３章　調査の概要
第１節　調査経緯…… 13
第２節　調査区の設定…… 15
第４章　層序と遺構
第１節　層序と堆積…… 17
第２節　検出遺構…… 18
第３節　まとめと考察…… 24
第５章　遺物（金属製品）
第１節　建具…… 79
第２節　器物…… 82
第３節　飾り金具…… 82
第４節　宗教具・茶道具… 98
第５節　釘…… 118
第６節　鎹…… 121
第７節　銭貨…… 136
第８節　その他金属製品…… 136
第６章　遺物（その他の遺物）…… 153
第７章　金属製品の科学分析 …… 156
第８章　総括…… 173

引用・参考文献…… 176
報告書抄録…… 177

挿図目次

第１図　沖縄本島の位置図 …… 5
第２図　首里古地図の中城御殿 …… 6
第３図　中城御殿跡位置図 …… 6
第４図　中城御殿古写真と首里古地図の重ね図 7
第５図　中城御殿屋根伏図 …… 7
第６図　中城御殿間取り復元図 …… 8
第７図　平成 19 ～ 27 年度調査区図 …… 11
第８図　中城御殿跡の堆積模式図 …… 17
第９図　中蓋付溝の構造模式図 …… 25
第 10 図　『首里古地図』にみる近世中城御殿跡の土地利用（沖縄風土記刊行会 1970）…… 28
第 11 図　中城御殿跡　平成 20・21 年度発掘状況 …… 29
第 12 図　主要検出遺構と屋根伏せ位置 …… 35
第 13 図　J-14 TP1　円形石組遺構、ピット群　36
第 14 図　I・J-14 TP2、J-14 TP3　溝２、石畳３①…… 38
第 15 図　I・J-14 TP2、J-14 TP3　溝２、石畳３②…… 39
第 16 図　I -15 TP ４、J-15 TP ５　基壇４ … 42
第 17 図　J-15・16 TP ７　基壇１・３、石畳１ 44
第 18 図　K-14　溝２、石畳３、基壇２ …… 46
第 19 図　K-15　溝１、基壇１、石畳１ …… 48
第 20 図　K・L-14　溝２・４、蓋付溝３、石畳２、舗装面２…… 50
第 21 図　K・L-14　溝２・４、蓋付溝３、石畳２、舗装面２…… 51
第 22 図　I-15 TP ６ …… 53
第 23 図　L-15　溝１・４、蓋付溝１・２、舗装面２…… 54
第 24 図　K-15、L-14・15　石畳４、金属製品溜まり…… 55
第 25 図　K-14・15 北壁、K-15 東壁 …… 58
第 26 図　K-14・15 南壁、L-15 東壁 …… 59
第 27 図　L-16 TP8　石畳１、蓋付溝１、暗渠１ …… 60
第 28 図　K-16　TP9 …… 62
第 29 図　L-13　石畳５、ピット群 ①…… 63
第 30 図　I・J-13　暗渠２…… 66
第 31 図　H・I-13　石畳６…… 69
第 32 図　E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14　石畳７、溝３、基壇５…… 72
第 33 図　G・H-19 TP15・16 …… 78
第 34 図　建具 …… 80
第 35 図　器物１ …… 84
第 36 図　器物２ …… 86
第 37 図　器物３ …… 88
第 38 図　飾り金具１ …… 90
第 39 図　飾り金具２ …… 92
第 40 図　飾り金具３ …… 94
第 41 図　飾り金具４ …… 96
第 42 図　宗教具・茶道具１ …… 102
第 43 図　宗教具・茶道具２ …… 104
第 44 図　宗教具・茶道具３ …… 106
第 45 図　宗教具・茶道具４ …… 108
第 46 図　宗教具・茶道具５ …… 110
第 47 図　宗教具・茶道具６ …… 112
第 48 図　宗教具・茶道具７ …… 114
第 49 図　宗教具・茶道具８ …… 116
第 50 図　銅角釘１ …… 126
第 51 図　銅角釘２・丸釘 …… 128
第 52 図　鉄角釘１ …… 130
第 53 図　鉄角釘２ …… 132
第 54 図　鉄角釘３・鋏 …… 134
第 55 図　銭貨・その他遺物１ …… 138
第 56 図　その他遺物２ …… 140
第 57 図　その他遺物３ …… 142
第 58 図　その他遺物４ …… 144
第 59 図　その他遺物５ …… 146
第 60 図　その他遺物６ …… 148
第 61 図　その他遺物７ …… 150
第 62 図　その他遺物（金属製品以外）…… 154
第 63 図　通し No. 291 の蛍光 X 線定性スペクトル …… 158
第 64 図　通し No. 2223 の蛍光 X 線定性スペクトル …… 159
第 65 図　通し No. 454 の蛍光 X 線定性スペクトル …… 160
第 66 図　通し No. 279 の蛍光 X 線定性スペクトル …… 161

第67図　通しNo.286の蛍光X線定性スペクトル …… 162
第68図　通しNo.275の蛍光X線定性スペクトル …… 163
第69図　通しNo.262（地）の蛍光X線定性スペクトル…… 164
第70図　通しNo.262（加飾）の蛍光X線定性スペクトル…… 165
第71図　通しNo.257の蛍光X線定性スペクトル …… 166
第72図　通しNo.282の蛍光X線定性スペクトル …… 167
第73図　通しNo.255（地）の蛍光X線定性スペクトル…… 168
第74図　通しNo.255（加飾）の蛍光X線定性スペクトル…… 169

図版目次

図版１　琉球政府立博物館の建設 …… 10
図版２　発掘作業状況 …… 16
図版３　平成20・21年度　調査区遺構検出状況34
図版４　J-14 TP１…… 37
図版５　I・J-14 TP2、J-14 TP3 ① …… 40
図版６　I・J-14 TP2、J-14 TP3 ② …… 41
図版７　I-15 TP４、J-15 TP５…… 43
図版８　J-15・16 TP7 …… 45
図版９　K-14 …… 47
図版10　K-15 …… 49
図版11　L-14 …… 52
図版12　I-15 TP６…… 53
図版13　L-15 ①…… 56
図版14　L-15 ②…… 57
図版15　L-16 TP８…… 61
図版16　K-16 TP９…… 62
図版17　L-13　石畳5、ピット群 ① …… 63
図版18　L-13　石畳5、ピット群 ② …… 64
図版19　L-13　石畳5、ピット群 ③ …… 65
図版20　I・J-13　暗渠２ …… 66
図版21　I・J-13 ① …… 67
図版22　I・J-13 ② …… 68
図版23　H・I-13　石畳６…… 69
図版24　H・I-13 ① …… 70
図版25　H・I-13 ② …… 71
図版26　F・G-13 TP12・13・14 ①…… 73
図版27　E・F-13 TP12・13・14 ②…… 74
図版28　E・F-13 TP12・13・14 ③…… 75
図版29　E・F-13 TP12・13・14 ④…… 76
図版30　E・F-13 TP12・13・14 ⑤…… 77
図版31　G・H-16 TP15・16 …… 78
図版32　建具 …… 81
図版33　器物１ …… 85
図版34　器物2…… 87
図版35　器物3…… 89
図版36　飾り金具１ …… 91
図版37　飾り金具2…… 93
図版38　飾り金具3…… 95
図版39　飾り金具4…… 97
図版40　県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料① …… 98
図版41　県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料② …… 99
図版42　宗教具・茶道具1…… 103
図版43　宗教具・茶道具2…… 105
図版44　宗教具・茶道具３ …… 107
図版45　宗教具・茶道具４ …… 109
図版46　宗教具・茶道具5…… 111
図版47　宗教具・茶道具６ …… 113
図版48　宗教具・茶道具7…… 115
図版49　宗教具・茶道具８ …… 117
図版50　銅角釘１ …… 127
図版51　銅角釘２・丸釘 …… 129
図版52　鉄角釘１ …… 131
図版53　鉄角釘2…… 133
図版54　鉄角釘３・鎹 …… 135
図版55　銭貨・その他遺物１ …… 139
図版56　その他遺物2…… 141

図版 57　その他遺物 3…… 143
図版 58　その他遺物 4…… 145
図版 59　その他遺物 5…… 147
図版 60　その他遺物 6…… 149
図版 61　その他遺物 7…… 151
図版 62　その他遺物（金属製品以外）…… 155
図版 63　試料 1…… 170
図版 64　試料 2…… 171
図版 65　試料 3…… 172
図版 66　金属製品溜まり検出状況 …… 173

挿表目次

第 1 表　出土地別遺物集計表（1）…… 31
第 2 表　出土地別遺物集計表（2）…… 32
第 3 表　出土地別遺物集計表（3）…… 33
第 4 表　建具観察表 …… 79
第 5 表　器物観察表 …… 82
第 6 表　飾り金具観察表 1 …… 82
第 7 表　飾り金具観察表 2 …… 83
第 8 表　宗教具・茶道具観察表 1 …… 100
第 9 表　宗教具・茶道具観察表 2 …… 101
第 10 表　銅製角釘類型別集計表 …… 118
第 11 表　銅製丸釘全長別集計表 …… 119
第 12 表　鉄製角釘類型別集計表 …… 120
第 13 表　銅製角釘Ⅱ類全長別集計表 …… 121
第 14 表　銅製角釘Ⅱ類全長別集計表（30 ～ 40 ㎜間）…… 121
第 15 表　釘観察表 1 …… 122
第 16 表　釘観察表 2 …… 123
第 17 表　釘観察表 3 …… 124
第 18 表　調査区別釘出土量集計 …… 125
第 19 表　銭貨観察表 …… 136
第 20 表　その他金属製品観察表 1 …… 136
第 21 表　その他金属製品観察表 2 …… 137
第 22 表　金属製品集計表 …… 152
第 23 表　試料 …… 156

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

沖縄県土木建築部が昭和 59 年度に策定した『首里城公園基本計画』において、「古都首里の歴史的環境を、水系、地形、植生など自然環境の中でとらえ、今後の首里の町づくりの方向性として打ち出した“首里杜構想”のもとに、その中核となる首里城一帯について歴史的な都市公園として保全を図る」という構想を表した。昭和 61 年 11 月 28 日に、首里城公園計画区域約 17.8ha のうち、城郭内側の区域約 4.0ha については沖縄復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として、復元整備されることが閣議決定され、併せて城郭外側の首里城公園区域約 13.8ha を県営公園事業として庁議決定され（計画区域及び、面積は昭和 62 年 2 月 20 日付けで建設大臣の認可を受けた首里城公園区域）、首里城跡及び、その周辺の復元整備等が具体化し、現在までに、国営首里城公園では首里城正殿を始め、多くの歴史的建造物が復元された。

県営首里城公園地区における遺構の確認調査は、沖縄県土木建築部が昭和 63 年度に策定した『首里城公園基本設計』に基づき公園整備を目的としたものである。県営首里城公園では平成元年度から首里城サービスエリア地区の発掘調査が実施され、その成果を受けて、平成３年度から首里杜館地区の整備が行われ、龍潭地区等の発掘調査を実施し、その後、整備が行われている。

中城御殿の過去の発掘調査は、平成 4 年 11 月３日に国営首里城公園の開園に伴って、平成 4 年度から平成６年度まで３次に渡って南側や東側と西側の一部の石牆並びに石垣の整備に伴う発掘調査が当時の沖縄県立博物館（現在、沖縄県立博物館・美術館）によって行われている。同地には、昭和 41 年 11 月３日から平成 19 年３月 31 日まで、本土復帰前の琉球政府が建設した沖縄県立博物館があったが、同博物館は平成 18 年３月 31 日に那覇市おもろまちへ移転の準備のために休館し、平成 19 年３月 31 日に閉館、４月１日に移転、11 月３日に沖縄県立博物館・美術館として開館した。

平成 19 年度から実施の発掘調査は、県営首里城公園地区において、首里城周辺並びに綾門大道地区、守礼門周辺等の発掘調査や公園整備が一部完了し、公園計画で未整備であった中城御殿地区の今後の整備・活用を図るために遺構確認を行う目的で行われた。更に、建物群があった箇所における発掘調査は今回が始めてということもあり、戦後の造成土の堆積状況並びに、遺構の残存状況を確認することも重要視している。発掘調査は公園整備を目的とし、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課から分任予算を受けて、沖縄県教育庁文化課（現文化財課）、事業実施は沖縄県立埋蔵文化財センターが埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

第２節　調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成 19 ～ 21 年度に実施したもので、平成 19 年度調査分は、平成 21 年度に資料整理・報告書刊行を行ったが、一部の遺物（瓦や沖縄産無釉陶器や瓦、貝類遺体、脊椎動物遺体）について、未報告資料があることが確認された。更に、平成 20・21 年度調査分は、平成 22 年度に資料整理・報告書刊行を行ったが、時間の都合上、金属製品（鉄製品と青銅製品）と現代遺物の掲載は割愛した。

よって、平成 19 ～ 21 年度の未報告資料の調査報告書作成に係る資料整理・報告書刊行業務は、平成 28 年度に実施した。その体制は以下のとおりです。

平成 19 ～ 21 年度　発掘調査

事業主体　　沖縄県教育委員会

教育長　仲村　守和（平成 19・20 年）

金武　正八郎（平成 21 年）

教育管理統括監　杉浦　友平（平成 19 年度）

岩井　健一（平成 20・21 年度）

教育指導統括監　金武　正八郎（平成 19・20 年度）

大城　浩（平成 21 年度）

事業所管課　　沖縄県教育庁文化課

課長　千木良　芳範（平成 19・20 年度）

大城　慧（平成 21 年度）

文化班　　班　長　識名　敦（平成 19・20 年度）

副参事兼班長　仲本　興彦（平成 21 年度）

主　事　勅使河原　朋恵（平成 19 年度）

大城　朋恵（平成 20・21 年度）

記念物班　班　長　島袋　洋（平成 19 ～ 21 年度）

専門員　瀬戸　哲也（平成 19 ～ 21 年度）

事業総括・事務

沖縄県立埋蔵文化財センター

所　長　名嘉　政修（平成 19・20 年度）

〃　　玉榮　直（平成 21 年度）

副所長兼庶務課長　瑞慶覧　康博（平成 19 年度）

総務班　班　長　嘉手苅　勤（平成 20・21 年度）

庶務課　主　査　山田　美恵子（平成 19 年度）

総務班　主　査　山田　美恵子（平成 20 年度）

庶務課　主　査　玉寄　秀人（平成 19 年度）

〃　　主　事　村吉　由美子（平成 19 年度）

総務班　主　事　村吉　由美子（平成 20・21 年度）

〃　　主　事（臨時任用職員）　弓削　典子（平成 20 年度）

〃　　主　査　本永　恵（平成 21 年度）

〃　　主　事（臨時任用職員）　中村　久仁子（平成 21 年度）

調査課　課　長　岸本　義彦（平成 19 年度）

調査班　班　長　岸本　義彦（平成 20 年度）

調査課　主任専門員　金城　亀信（平成 19 年度）

調査班　主　幹　金城　亀信（平成 20 年度）

〃　　班　長　金城　亀信（平成 21 年度）

調査課　主　任　上地　博（平成 19 年度）

調査班　主　任　上地　博（平成 20・21 年度）

文化財調査嘱託員　伊藝　由希、天願　瑞笑（平成 19 年度）
天願　瑞笑、本村　麻里衣（平成 20 年度）
天願　瑞笑、大堀　皓平（平成 21 年度）
発掘調査作業員　翁長博明、嘉味田千枝子、米須清太、桃原佐恵美
久田愼子、平安名哲子、仲宗根孝、仲程亜紀（平成 19 年度）
嘉味田千枝子、喜瀬　彰、呉我フジ子、佐渡山正子
砂辺里恵、玉城初美、中塚末子、中村フサ子、平安名哲子
宮國恵子（平成 20 年度）
翁長しのぶ、嘉味田千枝子、川上益子、喜瀬　彰
呉我フジ子、佐渡山正子、砂辺里恵、玉城初美、當眞　哲
中塚末子、橋本圭司、中村フサ子、福地佐枝子、宮國恵子
（平成 21 年度）
聞き取り協力　真栄平　房敬

平成 28 年度　資料整理・報告書刊行

事業主体　沖縄県教育委員会
教　育　長　平敷　昭人
教育管理統括監　宜野座　葵
教育指導統括監　與那嶺　善道

事業所管課　沖縄県教育庁文化財課
課　長　萩尾　俊章
管理班　班　長　稲嶺　盛之
主　査　多和田　友紀
記念物班　班　長　上地　博
指導主事　神村　智子

事業総括・事務　沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　金城　亀信
総務班　班　長　比嘉　智博
主　査　新里　靖
調査班　班　長　仲座　久宜
主任専門員　山本　正昭
専門員　田村　薫
埋蔵文化財資料整理員　酒井若葉、島千香子、下地麻利恵、渡邊那津季
當真　香、根岸敦子、比嘉美智子、渡邉愛依
資料整理指導・助言
久保　智康（元京都国立博物館工芸室長）
倉成　多郎（那覇市立壺屋焼物博物館）
櫻木　晋一（下関市立大学経済学部教授）
資料整理協力者
崎原　恭子（沖縄県立博物館・美術館学芸員）

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした屋敷である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行され、中城王子あるいは中城御殿と呼称されたことによる。当初その建物は、17 世紀前半に現首里高等学校敷地内（首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれていた（第２図）。その後、中城御殿は明治３（1870）年に現在の首里大中町へ移転する。ここでは調査対象となる移転後の環境について記す。

中城御殿は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯 26° 13′ 15″、東経 127° 43′ 05″、標高約 100 m の台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町１丁目１番１～３となる。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し、南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高く、対する北側が下る形状を成すが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡せるほどの景観は有してない。しかし、上之御殿が建つ西側は小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島影を望むことができる。

この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713（尚敬１）年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し。」（『球陽　巻十　688 号　球陽研究会編 1974』）と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ嶽は発祖としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである（都築 2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、明治元（1868）年に久米村の地理師（風水師）である鄭良佐与儀通事親雲上ら３名を閩省（中国福州）に派遣して風水を学ばせ、建築の配置が行われたとされ（球陽　巻二十二　2206 号　球陽研究会編 1974）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

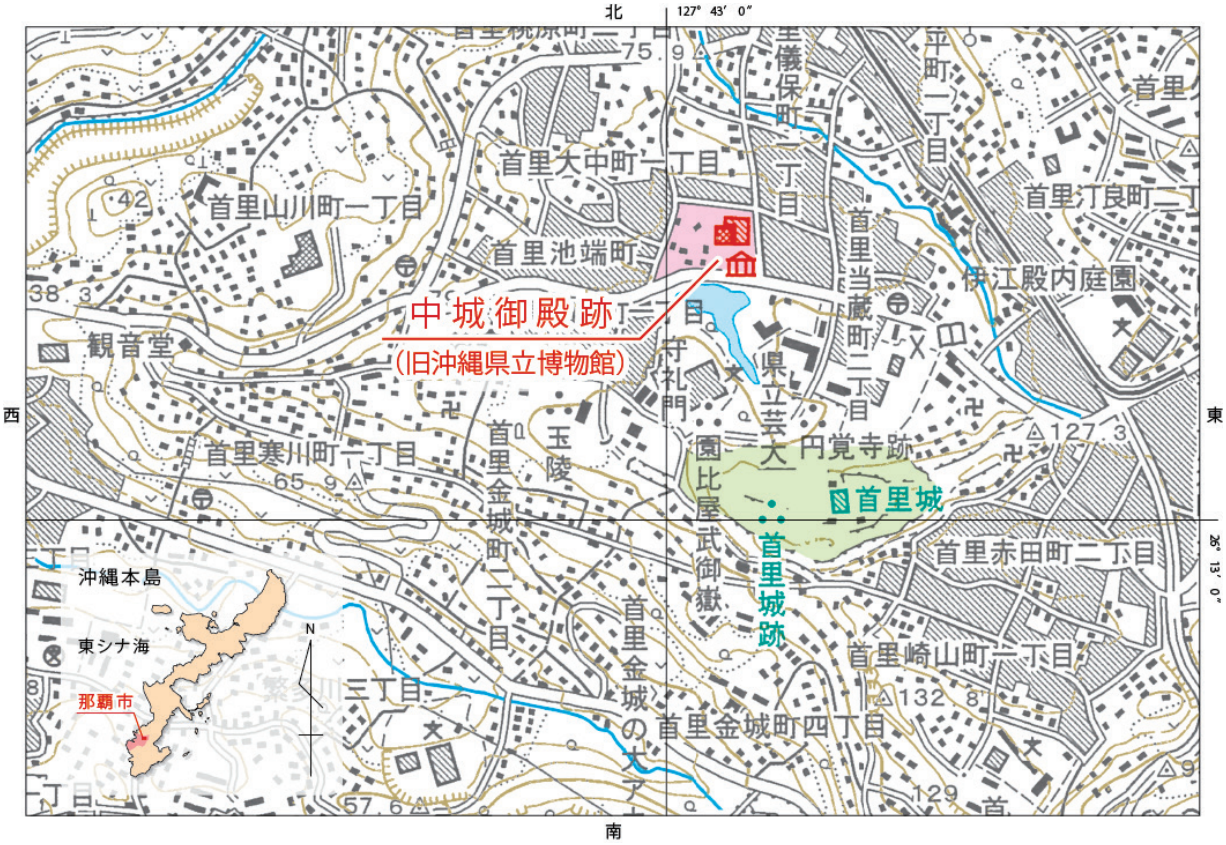
第２節　歴史的環境

中城御殿は、国王の王子殿として、当初は尚豊王代（在位 1621 ～ 1640）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された。その後、明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治３年に着工、明治７（1874）年に完成し、尚典は明治８（1875）年に新殿に移転した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

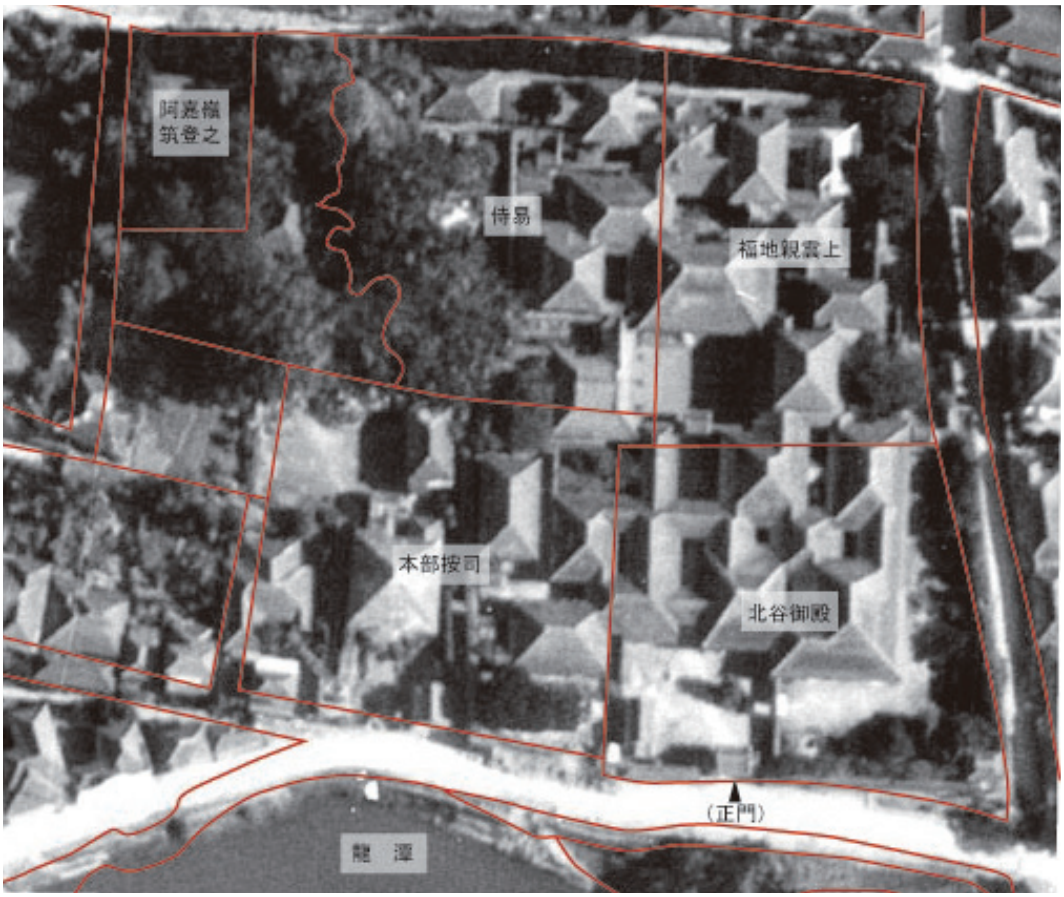
そして、明治 12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占領される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明

第１図　沖縄本島の位置図

第２図　首里古地図の中城御殿



第３図　中城御殿跡位置図



第４図　中城御殿古写真と首里古地図の重ね図

第５図　中城御殿屋根伏図

第６図　中城御殿間取り復元図

治 18（1885）年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿が所蔵する多くの宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなど避難措置を執った。しかし、昭和 20（1945）年 4 月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難していた宝物類は遺されていなかったことから戦利品として持ち去られたことが考えられる（その一部は 1947 年にフィリピンから、1953 年にアメリカから返還）。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる（沖縄県立博物館 1996）。それまでの間、御殿は尚家の屋敷（尚侯爵家首里邸）として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であった。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、首里市役所、首里バス会社として使用され、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するために、琉球政府により買い上げられる（図版 1-1）。そして昭和 40（1965）年から翌年にかけ、米国民政府の援助により琉球政府立博物館が建設され（図版 2-2,3）、昭和 47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から 20 年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。この復元に先立ち、平成 4（1992）年度から平成 6（1994）年度の 3 次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積みの根石や石組み遺構、ピット等の遺構を検出し、この成果を元に平成 4 年度に正面及び東側石牆の復元整備が行われた（沖縄県立博物館 1992、1993、1994）。

その後、博物館は開館から 40 年が過ぎ、施設の老朽化及び資料増による収蔵機能の低下に伴い、新館への移転が計画され、平成 18（2006）年 3 月に休館、平成 19（2007）年 3 月に閉館・移転し、同年 11 月 3 日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成 21（2009）年の解体工事により撤去された。

博物館移転後は、平成 19 年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われ、現在に至る（第 7 図）。

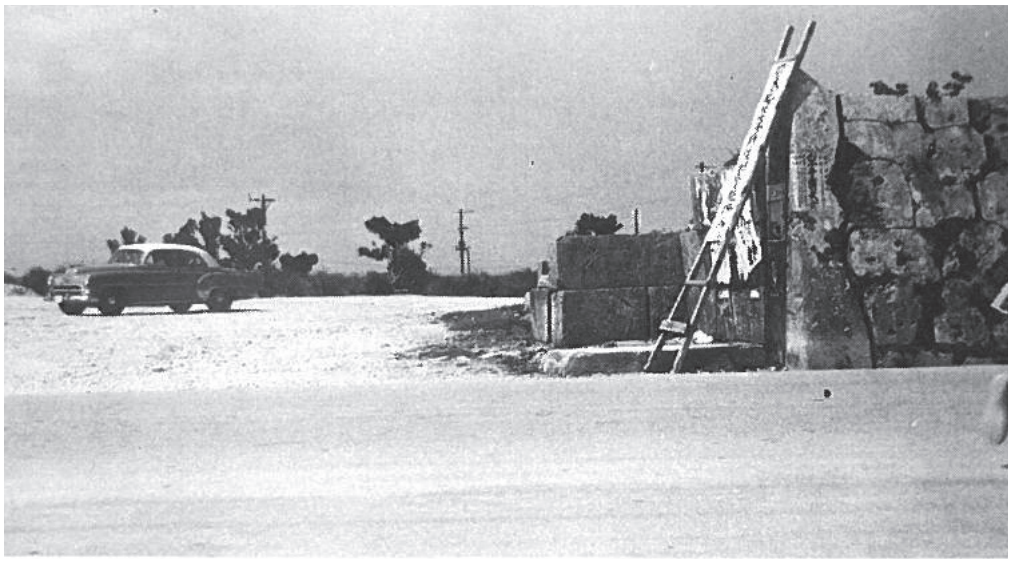
なお、中城御殿ではこれまでの調査により、多くの遺構がその間取りや構造を示す良好な状態で埋蔵されていることが判明している。このような中で、明治 7 年竣工当時の詳細な平面図（中城御殿御普請板図・翻刻図）を写した古写真が発見された。これらの重要な発見から、「遺構は保存されることになり、将来的に復元整備を行うことが取り決められた（平成 24 年 1 月）。現在は中城御殿整理検討委員会（平成 22 年 10 月より開催）により、復元整備計画から利活用についての話し合いが行われているところである。今後は、これまでの遺構確認調査から復元整備計画に合わせた発掘調査を継続して行い、復元整備の基礎資料を作成していく予定にしている。

なお、平成 4 年から平成 6 年に刊行した第 1 ～ 3 次調査の「第Ⅱ章　遺跡の立地と概要　第 2 節遺跡の概要」において、戦前の中城御殿の状況を知る記述があり、一部を抜粋する。

『旧中城御殿概略図』は、1940 年から 1945 年の間中城御殿に出入りして中城御殿を実見し、そこで生活する古老たちと親しく接することのできた真栄平房敬氏からの聞き取りで作図したものである。概略図を参考に御殿の内容を記すと次のとおりとなる。

敷地は約 3000 坪余、建物は米蔵や炭蔵などの別棟を除いて約 800 坪余である。御殿の主要な建物は二十数棟が連結して群立し、すべて赤瓦葺きであった。主殿は表御殿と奥御殿（御内原）に分かれ、表は男性だけ、奥は女性だけでその接点には（鈴引き）で取次ぎがなされた。

表御殿は玄関を入ると御番所があり、その東側に御伺候間、大広間、御書院が並び内部は書院造りであった。さらに政庁の役割をもつ前之御座と取納座殿、御蔵などが西側に連結していた。



1　昭和 20 年代の中城御殿跡

2　建設中の琉球政府立博物館

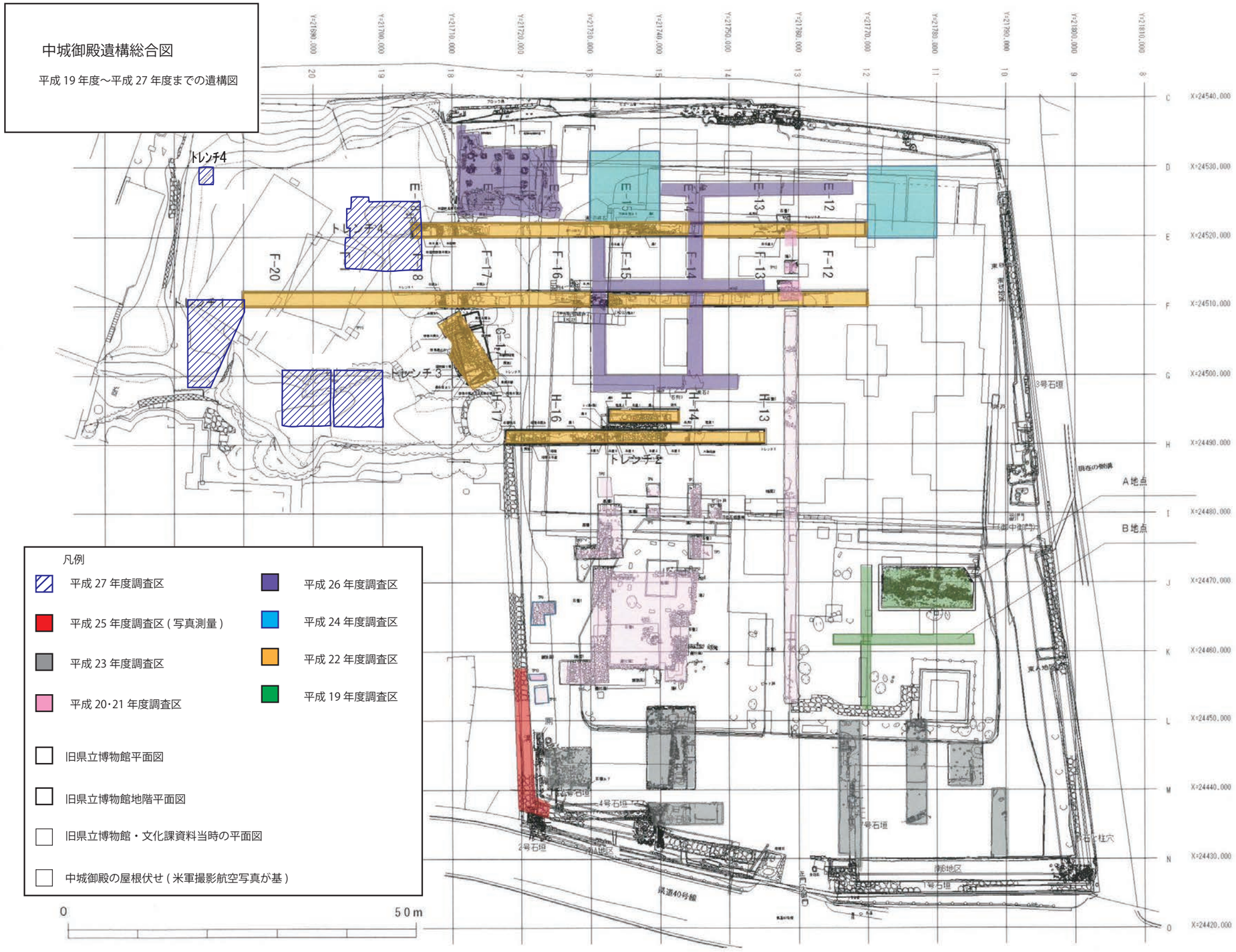
3　完成直後の琉球政府立博物館

図版 1　琉球政府立博物館の建設

御殿に勤める役人は、三司官の一人が中城御殿紫官大親を兼ね、その下に大親以下 46 人が任じられ、さらに下代、門番などがいた。

奥御殿には、屋敷内で一番大きい建物である寝廟殿を中心にして寝殿造りを思わせるコの字型に主要な建物を配し、その回りにいくつかの建物を連結させてひとまとまりになっていた。これらの御殿の内部構造は平安・鎌倉時代の御所造りに似ていたという。

女官から下女にいたるまで数十人の婦女子が仕えていたが、明治以降は大幅な人員削減が行われ、1941 年（昭和 16）には男女あわせて 80 人余が仕えていたという。1879 年（明治 12）の「首里城明け渡し」の時には、国王はこの世子殿に移り、その後大美御殿や聞得大君御殿からも移り住んでいたという。・・・云々・・・』と記載がある（沖縄県立博物館 1993、1994、1995）。これから敷地面積や建物の配置、屋瓦の色、居住空間、中城御殿に勤める役人等とあり、当時の歴史的背景について知ることができる。



第 7 図　平成 19 ～ 27 年度調査区図

第３章　調査の概要

第１節　調査経緯

１．平成 20（2008）年度

平成 19（2007）年度に引き続き、12 月 1 日（月）から 2 月 27 日（金）まで 57 日間に渡って、約 400㎡の範囲で発掘調査を実施した。当該年度の調査の目的は、前年度に調査を実施した調査区の西側に位置する旧沖縄県立博物館敷地内の南西箇所と、北西にあった上之御殿の南側にある庭園内の池の背後における遺構の残存状況の確認調査を行った。

調査区内全体の草刈り作業と同時に並行しながら、調査区内でグリッド設定を行った。先ず、前年度Ａ地点とした箇所をＡ地区、その西側をＢ地区、旧沖縄県立博物館敷地内の北西にあった上之御殿の南側にある庭園をＣ地区とした。それぞれ、遺構と堆積層の深度を確認するために１ｍ四方の試掘坑を設定し、試掘を行った。なお、前年度調査を行ったＡ地区では、石列や溝、石敷等の建物に関連する遺構が確認されたが、発掘調査は往時に造られた中城御殿の遺構の確認調査を目的としており、記録保存の調査は行わず、同遺跡を確認した場合は遺構の露出を行い、それ以外遺跡の遺構を確認した時点で調査を終えた。なお、調査期間は２ヶ月という時間の制約があったため、平面図の実測を当該年度で実施した。

そのうちＢ地区内の K-14 グリッドに設定した試掘坑№１の東側でコンクリート製の溝が確認された。また、Ｂ地区内の L-15 グリッド内に設定した試掘坑より石敷遺構の一部が確認されたため、試掘坑№２が含まれる L-15 グリッド（10 ｍ四方）を対象として掘削を開始した。

同時に、Ｃ地区内に所在する庭園の遺構の残存状況の確認も行った。庭園は残りが良く、丹念に樹木の伐採と除草を実施すると良好な状態で庭園の池を露出させた。そこで庭園内の池の北側（試掘坑№３）と、池の上部（試掘坑№４）にそれぞれ１ｍ四方の試掘坑を設定した（№３：G-19 グリッド内、№４：H-19 グリッド内）。調査の進捗状況に伴って、試掘坑№３を東側に１ｍ延長した。両方の試掘坑から遺構は確認出来なかったが、池の北側の試掘坑№３から被熱した鳩目銭や染付、貝、動物の骨等が得られた。このような遺物の出土状況と黒色の層を確認した後に、実測図と写真撮影等の記録を撮り、埋め戻しを実施した。

一方、L-15 グリッドでは土層の堆積状況を確認するために東西方向に 10 ｍ×１ｍのトレンチを設定して掘削を行った。その結果、良好な状態で遺構が検出されたことから、グリッドの境界にベルトを残しながら L-15 グリッドの東西トレンチを東側に延長し、更に K･L-14 グリッドの東側に南北トレンチを設定して層序の確認と堆積層の深度の確認を行った。その結果、コーラル層の下層より旧首里市役所及び、首里バスターミナルの時期のものと思われるコンクリート製の基礎やコンクリート製の溝、レンガ等が検出され、K-14 グリッドの南北トレンチでは更にその下層より赤黒く焼けた焼土面や舗装面、切石のようなものを確認した。これらの遺構も中城御殿に伴う可能性があることから、トレンチの掘削から遺構面を確認する調査に切り替えた。調査区中央において、表土剥ぎを行っている最中に往時の中城御殿のものとみられる石造の溝が各グリッドにおいて確認された。これらの確認された遺構までの掘削深度は約 30 ～ 50㎝と浅かったため、人力で掘削を行った。

１月末までには調査範囲のほぼ全面に渡って往時に造られた中城御殿の石造の溝や石敷遺構、戦災による焼土が確認された。その後、石造の溝や石敷遺構を覆う焼土を掘削すると、ガラス玉や金属製品が大量に検出された。特に、K-14 グリッドの石造の溝付近より多量のガラスや希少な金属製品が検出された。ガラス玉はあまりにも多量で掘削によって、全てのガラス玉を取り上げることが不可能であったため、サンプリングした土を篩掛けし、ビーズを収集した。また、K•L-15 グリッドにおいて、層序観察用の畦を掘削した際に、旧首里市役所の遺構の直下から金属製品が集中して検出されたため、実測図と写真撮影等の記録を撮り、遺物を取り上げた。

２月中旬頃には遺構の検出が完了し、記録を撮る作業を行い、終了後は次年度も引き続き調査を実施する予定だが、遺構を保護砂で保護し、その上からブルーシートで覆い、保護して平成 20（2008）年度の調査を完了した。

２．平成 21（2009）年度

平成 20（2008）年度から継続して６月２日（火）から 10 月 30 日（金）までの 78 日間に渡り、約 250㎡の範囲で調査を行った。平成 20（2008）年度調査の結果を受け、大規模に遺構が残されることが分かった中城御殿の遺構残存範囲の把握を目的として、Ｋ・Ｌ -14・15 の周辺を対象に調査を開始した。調査面積は合計で約 250㎡となった。

まず昨年度調査区の周囲に２ｍ×２ｍの試掘坑を５箇所設定して遺構の確認を行った結果、平成 20（2008）年度に検出された石敷•石溝遺構の続きがほぼ未破壊の状態で残されていることが分かった。また脇門付近 L-16 の試掘坑からは傾斜した石敷遺構と被熱した舗装面が検出され、中城御殿当時の建物区画が復元可能なほどの遺構残存状況が見込まれるに至った。そこで遺構残存範囲を確認するために昨年度調査区の北側•西側に徐々に離れながら試掘坑を随時設定していき、遺構の確認を行った。最終的には計 16 箇所の試掘坑を設定した。この試掘の結果、旧県立博物館の南西部のほぼ全域に渡って遺構が包蔵することが確認された。また中城御殿の遺構が検出されなかった２つの試掘坑からは、中城御殿旧表土より下位の地層より近世期と思われる遺構や造成層が検出された。

調査中盤には、旧県立博物館建物の中庭に該当するＥ・Ｆ -13 にも３つの試掘坑を設定して人力で掘り下げを行った。その結果、中城御殿当時のものとみられる石溝・基壇や旧表土、中城御殿以前のものとみられる造成層が検出された。

調査後半にはＧ -13 からＬ -13 に旧県立博物館敷地内を南北に貫く 60 ｍ×２ｍのトレンチを設定し、重機によって表土を除去して遺構の確認を行った。その結果トレンチのほぼ全面に渡って石敷遺構や暗渠といった遺構や中城御殿当時の旧表土が検出され、旧県立博物館建物の下にも遺構が包蔵されることが確認された。しかし調査期間が限られていたこともあり、検出状況の図化・写真記録に留め、遺構の完掘作業は行わずに現地保存して調査を終了した。10 月 30 日に発掘調査は終了したが、11 月 29 日には現地説明会を行い平成 20（2008）・21（2009）年度の調査成果を報告し、のべ 244 名の見学者が訪れた。現地説明会終了後、遺構に砂を敷いて保護したのち、３月に重機により埋め戻して調査を終了した。

第２節　調査区の設定

１．グリッド設定

発掘調査を実施する前に調査区の設定に伴って、平成 18（2006）年度に沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課が測量業者へ測量の委託を行った際の 4 級基準点 21-4（X ＝ 24,435.973、Y ＝ 21,719.010）と 21-5（X ＝ 24,424.239、Y ＝ 21,763.968）が県道 29 号線沿いの歩道上に設置されていることを確認した。

調査区については、4 級基準点を基準に平成 19（2007）年度に調査区内に L-14（X ＝ 24,450.000、Y ＝ 21,750.000）を新設した。それを基準とし、10 m間隔でラインを設定し、方位に併せて、南北ラインにアルファベット（・・・J ～ O・・・）、東西ラインに算用数字（・・・７～ 24・・・）を用いた名称のラインでグリッドを設定した。標記方法は J-10、K-10 等とした。

２．調査区設定

平成 20（2008）年度

平成 19(2007)年度に設定したグリッドに沿って､K･L-14･15 グリッドに調査区を設定した。しかし、その当時、旧沖縄県立博物館の建物の解体前で、K-15 グリッドの北西際に中庭の縁石と樹木があったため、この場所を避ける形の調査区となった。また、庭園付近は遺構が確認される可能性が高い場所を前提として、任意に試掘坑を設定した。

平成 21（2009）年度

前年度に残された K -15 北西際とともに、設定したグリッドに従いながら平成 20（2008）年度の北側に２m × ２mの試掘坑を設定した。試掘坑は調査の進展に伴って繋がるなどしたため、結果的に図のような形となっている。また跡地中央部での遺構残存状況を確認するため、13 ラインに沿うように F ～ L までの南北 60 m、東西２mのトレンチを設定した。

３．資料整理の経過

発掘調査で得られた遺物や遺構図、写真等は調査終了後に全て沖縄県立埋蔵文化財センターへ移動し、発掘調査報告書の刊行に向け、資料整理作業を実施し、金属製品以外は平成 22 年度にまとめて報告書を刊行した。

今回、平成 22 年度の報告書から外した金属製品の資料整理作業について、出土遺物の洗浄は現場の雨天時にほぼ終了していたことから、注記（ナンバーリング）を先に開始した。今回、報告書に掲載する予定の金属製品について、未洗浄のものはアルコールで洗浄作業を入念に行った。その後、順次、分類や接合、集計、図化対象遺物の抜き出しを行って、遺物の実測やデジタルトレース、手書きのトレース、図版作成、写真撮影等を行った。また、資料整理作業中に金属製品の専門家に鑑定及び、同定を行って頂いた。なお、青銅製品の耳杯の自然科学分析とクリーニング及び、青銅製品の産地同定をパリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。

報告書の刊行については、図版（実測図と写真等）や表、原稿執筆後に文字原稿をデジタル化し、デジタルによる原稿を完成させた。それに伴って、指名競争入札によって、落札した印刷業者と契約を行って、データ入稿を行い、報告書を刊行した。

資料整理後の遺物や図面、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターの収蔵庫や記録保存室で保管し、外部機関や研究者等の閲覧の対応や貸出等の活用が図れるようにしている。

1　調査区設定作業状況

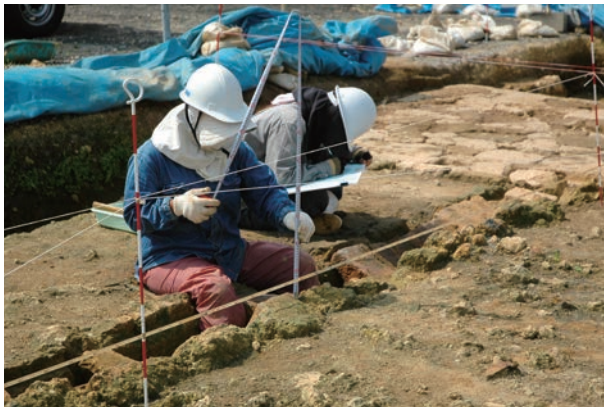
2　表土掘削作業状況

3　遺構検出作業状況（1）

4　遺構検出作業状況（2）

5　職場体験学習実施状況

6　壁面図作成状況



7　遺構図作成状況

8　掘削作業終了後状況

図版２　発掘作業状況

第４章　層序と遺構

第１節　層序と堆積

平成 20・21 年度調査区は、中城御殿の遺構・旧表土より上の堆積が中心であったため、ほとんどが戦後の堆積であった。戦後の造成は客土が中心であったため、現地記録では多種多様な堆積が記録されるに至った。

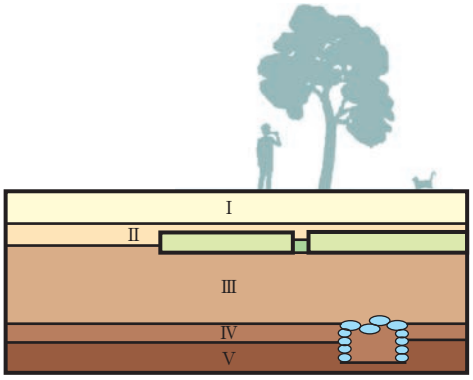
ここでは有効とみられる時期区分によって大別し、今次調査範囲の堆積状況について報告する。

Ⅰ層　　戦後から現代までの堆積をまとめてⅠ層とした。Ⅰ層は大きく２つの堆積に分けられる。上層は平成 21 年４月の旧県立博物館解体工事において舗装されたアスファルト・コーラル層で、下層は旧沖縄県立博物館や旧首里市役所等に伴う造成層である。造成層はⅡ層と客土とが撹乱した混礫土層で、混ぜられる客土によって場所ごとに大小の土質の違いがみられる。

層中には旧首里市役所のレンガ積み遺構やコンクリート溝が残っている。また出土遺物は中城御殿に伴うとみられる瓦や陶磁器をはじめ、戦時中の弾丸、米軍統治下時代のジュース瓶や１セントコインなども出土している。

Ⅱ層　　Ⅱ層は遺構直上に堆積する焼土・炭層や側溝内を埋める瓦層が該当する。焼土・炭層は層中に溶解した金属製品や炭化木材が含まれることから、戦時中における中城御殿焼失時のものと断定される。次に側溝内を埋める瓦層は、遺構との間に上記の焼土・炭層を挟む。出土遺物には多量の瓦をはじめ、陶磁器や稀少性の高い金属製品、多量なガラス玉の一括出土など、多くの特徴的な遺物がまとまって包含する。また弾丸などの戦時中とみられる遺物は出土するが、米軍統治下時代の遺物はみられないことから、中城御殿焼失の直後に瓦礫を側溝内に片付けたことによって形成された層とみられる。

本来検出時より厚く堆積していたとみられるが、戦後の開発によってⅠ層に撹乱されたことによって、明確な堆積は遺構直上のみに残されたと推定される。以上の状況から、Ⅱ層の年代観は 1945 年頃と目される。



Ⅰ層：戦後の造成層（戦後～現代）
Ⅱ層：焼土層、溝内覆土等（戦中・戦後直後）
Ⅲ層：中城御殿当時の遺構・旧表土、中城御殿造営時の早世土
Ⅳ層：中城御殿以前の遺構・旧表土・造成層（近世）
Ⅴ層：泥岩（クチャ）層・赤土（マージ）層（中世・近世もしくは地山）

第８図　中城御殿跡の堆積模式図

Ⅲ層　中城御殿の遺構やその当時の旧表土、及び中城御殿造営時の造成土層をⅢ層としてまとめた。旧表土は瓦礫が平面的に散布する状況、あるいは平坦で填圧を受けた赤土にピット群が残るような状況から推測した。年代的には中城御殿の移築造営が着工される 1870 年から、中城御殿焼失直前の 1945 年までが考えられる。

Ⅳ層　Ⅲ層より下位で検出される填圧を受けた赤土・コーラル互層や、出土遺物に近代のものが含まれない造成層をⅣ層とした。TP 1 ・ 6 ・12・13・14 において確認され、年代的には近世が想定される。遺構には TP 1 から円形石組遺構やピット群が検出されている。遺物はタイ産褐釉陶器、明朝系赤瓦・灰瓦などが出土している。

Ⅴ層　TP 1 において検出された。無遺物の赤土層と、直上にみられる同じく無遺物層の灰褐色粘土層とのセット関係が認められる。TP 1 円形石組遺構はこのⅤ層を掘り込まれて造られる。

本層は無遺物層であることを含めて地山の様相をなすが、TP12 では赤土の整地面が検出されていることから、結論は岩盤の検出がなされるまで慎重を期したい。

第２節　検出遺構

遺構は、中城御殿当時の遺構と、それ以前の遺構とに大別できる。以下にテストピット（TP）毎にその状況を示す。なお、遺構内出土遺物の集計表は第１～８表に示した。

１．J-14 TP 1（第 13 図、図版 4）

堆積　Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層が認められる。表土から約 80㎝下まではⅠ層が厚く堆積する。Ⅲ層最上面の南西際には TP 2 ・ 3 で検出された石畳３と同一の遺構とみられる石盤状の石が検出されているが、覆土に焼土や炭層は一切認められないことからⅡ層はⅠ層に飛ばされたとみられる。石畳の下には褐色の粘質土層が堆積し、中城御殿の遺構との層位関係や若干の包含遺物からⅢ層に目される。さらにその下に無遺物層の暗褐色粘質土層が堆積し、層中に遺構を包蔵するためⅣ層と目される。その下には無包含の明褐色粘質土層が堆積し、この土を掘り込んで遺構が構築されることからⅤ層とした。地山の赤土（マージ）層とみられる。

遺構　TP 1 は中城御殿当時では酒御蔵であった場所に当たるが、ここからは２つの時期の遺構が検出されている。Ⅲ層からは上記のように中城御殿の石畳とみられる石が検出されているが、かなり大きいことから礎石の可能性もあり判然としない。

一方でⅣ層からはピット群と円形石組遺構が検出された。ピット群は TP 1 東側に検出された計 12 口のピットである。いずれのピット覆土からも遺物はほとんど出土せず、またピットに規則的な配列もみられないことから、植栽痕と想定される。円形石組遺構はⅤ層を掘り込み、内側に面の作られた琉球石灰岩を円形に４段積んで構築されている。天井部には板状の礫が水平に積まれ、さらに中ほどの深さで再度水平に礫が敷かれている。この状況から、円形石組遺構は一度蓋をされたのち、さらに上に再構築された可能性が挙げられる。底面はⅤ層の赤土を固く填圧して床面を形成している。埋土中からは中国産白磁や薩摩焼、沖縄産施釉陶器、明朝系瓦などの遺物が出土したが、製品以外には多量の魚骨片が包含されており、この点からゴミ捨て坑（シーリ）の可能性が考えられる。試掘坑の設定上で検出された部分のみを完掘し、残

り部分は未検出の状態で現地保存した。また掘削した遺構埋土は全てサンプルとして回収している。

首里古地図によればTP 1は本部按司もしくは侍易の屋敷区画内に該当しており（第10図）、近世琉球における高位の家柄の生活像を窺わせる遺構として注目される。

２．I・J-14 TP ２、J-14 TP ３の層序と遺構（第14・15図、図版５・６）

層序　TP ２・３にはⅠ・Ⅱ・Ⅲ層が認められた。現地表面より約40㎝はⅠ層が堆積し、層中には現代の製品と共に中城御殿のものとみられる多量の遺物が包含している。石畳・側溝底石直上には焼土・炭層が薄く堆積しており、戦時中における中城御殿焼失時のものとみられる。溝内は焼土・炭層の上に瓦層が溝内を埋め、瓦をはじめとした多量の遺物が出土する。Ⅲ層は遺構以外でTP ２北側に認められ、中城御殿造営時の造成土とみられる。

遺構　I･J-14 TP ２・３は酒御蔵の西隣で､TP ２は新御殿と酒御蔵を結ぶ通路部分に当たるとされる。ここからはK-14から繋がる蓋のつかないタイプの溝（溝２）とその東側に石畳（石畳３）が検出されている。中城御殿当時の建物配置から、酒御蔵に隣接する石畳・側溝とみられる。TP ２の中間付近から北側ではこの状況と一致するように溝幅が半分になるとともに石畳が一段高くなっている。溝西側の縁石も同じ位置を境に形状が変化する。この箇所は上述のように建物間を結ぶ通路に当たるとされ、検出遺構と一致した状況を呈している。

またTP ２南側の溝の縁石には直線的な擦痕が残されており、蓋のようなものが設置されていた痕跡と考えられる。溝２内は、北側のTP ２から中国産・本土産の色絵・染付や所謂スンカンマカイが出土する。またTP ３からはTP ２と同様の遺物に加え、イギリス産陶器の鉢や陶質の土管が出土している。

３．I-15 TP ４、J- ５ TP ５の層序と遺構（第16図、図版７）

層序　TP ４・５はⅠ・Ⅲ層が認められる。Ⅲ層はTP ５西側に残る基壇４と、造成土とみられるクチャ・赤土層が認められる。残る箇所は戦後の破壊を受け、多量の琉球石灰岩礫やコンクリート塊が含まれるⅠ層のみが堆積する。

遺構　TP ４は新御殿の下、TP ５は漆喰壁が配置された箇所に当たる。検出遺構はTP ５の東西際に基壇とみられる切石（基壇４）が認められるのみである。基壇４はTP ７基壇３と東西方向で直線的に一致することから同一の遺構とみられる。

４．I-15 TP6（第22図、図版12）

堆積　Ⅰ層・Ⅲ層・Ⅳ層が認められる。Ⅰ層はⅡ層の土と客土が混ざり、瓦片などの遺物が多量に包含する。最下面にはコンクリート壁もみられることから、戦後から現代にかけての造成層とみられる。Ⅲ層はコンクリート壁の下から検出され、出土する遺物も僅かとなることから中城御殿の造成層と評価した。Ⅳ層は粘質土層と混土礫層が互層となって1.5ｍ以上堆積しているが、安全のために掘削を途上で中断したためにどの程度の深度まで堆積するのか不明である。おそらく岩盤に局地的な落ち込みがあり、それを造成時に埋め立てたことによって深く堆積したものとみられる。遺物は褐釉陶器などが僅かに出土する。

遺構　TP 6は新御殿付近の漆喰壁が配置される箇所であるが、上記のように戦後の撹乱の影響により、元位置を留める遺構は検出されなかった。

5．J-15・16 TP 7（第17図、図版8）

堆積　Ⅰ層とⅢ層が認められる。Ⅰ層は客土とⅡ層の混土層で現在の地表面から約40㎝堆積する。多量の琉球石灰岩片が混入する混礫土層で、土中からは現代の製品とともに中城御殿当時のものとみられる遺物が多量に包含する。

Ⅲ層はTP 7西側のＪ-16グリッドに当たる箇所において検出される。中城御殿の遺構とほぼ同じ深度に堆積する灰褐色粘質土層（クチャ層）で、中城御殿の造成層とみられる。また同じ程度の大きさの礫が粗い密度で堆積している。この状況はＫ-16TP 9にも認められる。

遺構　TP 7は高御蔵の東隣部分に当たり、遺構には石畳1の北側部、基壇1・3が検出されている。石畳1はＬ-15から南北に伸びる石畳で、中城御殿当時の建物配置からは高御蔵に隣接する石畳とみられる。基壇1はＫ-15から南北に伸びる石列遺構である。石畳1より大きい方形の切石が使われ、石畳1より10㎝程度高くなっている。また北端にはＬ字状の凹みが残り、切石の上に何らかの構造物が設置されていたことを窺わせる。一方で基壇3は幅の狭い切石を列状に並べており、類似するTP 5基壇4と同一の遺構とみられる。基壇1は門と井戸を結ぶ漆喰壁、基壇3は新御殿に関わる基壇と考えられる。

6．K-14（第18・25・26図、図版9）

堆積　Ⅰ層・Ⅱ層が認められる。Ⅰ層からは多量の遺物が包含するが、様々な客土が混じる。またその下層には戦後の首里市役所のものと目されるレンガの敷かれる遺構が検出されている。Ⅱ層は、L-14と同じものである。

遺構　Ｋ-14は2つの御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝2と基壇2が検出された。溝2はＫ-14南側でＳ字状に曲がるが、この箇所は水流が止まらないように底石が斜めに設置され、縁石にも高低差が作られている（C-C‘）。今次調査で検出された溝のうち、直角でないカーブはこの箇所のみである。覆土中からは多種多様な遺物が出土した。陶磁器には中国産白磁・色絵・染付・褐釉陶器、本土産色絵・染付・陶器、沖縄産施釉・無釉陶器、西洋陶器が得られた。また陶磁器以外では煙管や陶管、漆製品などが出土している。これらの中には有田焼の色絵や西洋陶器といった上級の製品が含まれているが、その背景には御蔵が隣接していることが考えられる。また基壇2・石畳3と接する箇所で右に分岐するが、破壊を受けており詳細は不明である。

基壇2はＫ-14北側に東西方向で設置される、幅広な切石を並べた遺構である。K-15基壇1と直線的に一致し、構造上も類似することから同一の遺構とみられる。

7．K-15（第19・25図、図版10）

堆積　Ⅰ層とⅡ層が認められる。Ⅱ層は石畳の抜けた部分に認められる灰褐色粘質土層で、中城御殿の造成層とみられる。その上には戦後の造成層である混礫土層のⅠ層が堆積し、層中にはＫ-14のものと同様とみられるレンガの敷かれる遺構が検出されている。

遺構　K -15 は御蔵と、高御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝１、石畳１、基壇１が検出されている。溝１は屈曲部にのみ蓋石が確認され、構造は蓋石３類が用いられる。そのすぐ東側で北方向と東方向へ分岐する。北方向へ分岐した溝は、TP ６で確認できないため短い溝とみられる。西側縁石は階段状になっており、東側縁石と高さが一致することから蓋を受けるための構造とみられる（F-F'）。一方、東方向の溝は西側に下傾する構造となっているが、戦災で東側が破壊されているため、中城御殿往時の構造かどうか判然としない。L -15 と同様、溝１の西側に石畳１が伴うが、K-15 南側にかけて西側縁石と石畳がなく底石も傾いている状況になっている。おそらく溝１東側分岐部分と同様に、戦災で破壊されたものとみられる（H-H´）。

基壇１は J -15 TP ６から繋がる幅広の切石が並ぶ遺構で、方形に区画されている。構造上の特徴や区画から、K -14 基壇２と同一の遺構と目される。

中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝１・石畳１は御蔵西側の通路、基壇１は御蔵北側にあったとされる漆喰壁に関連する遺構と考えられる。

８．L-14（第 20・21・26 図、図版 11）

堆積　Ⅰ層とⅡ層が認められる。Ⅰ層は客土を主体とする混礫土層で、琉球石灰岩片を中心に多量の近代・現代の遺物が包含している。Ⅱ層は遺構直上に堆積する焼土・炭層である（K-14 南壁断面図参照）。

遺構　L-14 は中城御殿当時では御蔵・取納座部分に当たる。ここからは溝２・４、蓋付溝２・３、石畳２、舗装面２が検出された。溝２は K-14 より続き、西側に曲がるが２m先でさらに南に直角に曲がる。蓋が付かず弧を描く屈曲部と、蓋が付き直角に曲がる屈曲部の２つの屈曲部が認められる。遺物には数千点にも及ぶガラス玉がまとまって出土したほか、金属製の耳杯などの特異な遺物が得られている。中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝２・石畳２は２つの御蔵の中間の石畳道と推定される。

一方で溝４は L -14 南端に検出され、部分的に底石と南北両縁石が残ることから溝として取り扱った。北隣には舗装面２が検出されている。舗装面２は溝４と石畳２・蓋付溝２の間に位置している。溝４・舗装面２は中城大親の離れ屋敷・取納座と御蔵の間を通る道とその側溝と目される。

蓋付溝３は溝２から東に分岐した溝の途中から出現する。蓋の構造は２類が用いられる（第９図）。戦後のコンクリート壁建設によって一部が破壊されているが、蓋石・側溝ともに保存状態は良好である。注目されるのは蓋付溝が石畳２の範囲外より始まることで、側溝と石畳との構造上の関係性を窺わせる箇所である。蓋付溝３は御蔵と取納座の間に位置しており、蓋が付いて暗渠となるのは両建物の通用の邪魔にならないことを意図したものと思われる。

９．L-15（第 23・24・26 図、図版 13・14）

堆積　Ⅰ層とⅡ層が認められる。Ⅰ層はいずれの場所にもみられる混礫土層で、多量の遺物が含まれる。Ⅱ層は遺構直上に堆積する焼土・炭層で、L -15 の東側に残されていた。

遺構　L -15 は御蔵・中城大親の屋敷が位置するが、遺構は溝１・４、蓋付溝１・２、暗渠１、石畳１・４、舗装面２、金属製品溜まりが検出された。溝１は幅の狭い蓋の付かない溝で、西に

石畳１が隣接することから石畳道の側溝であると判断される。水流は北から南に向かい、暗渠１へと流れる構造となっている。石畳１は脇門から御蔵の西を通り、門Ｆへと至る石畳道と推定される。溝４はＬ -14 から続く遺構で、蓋付溝２との間に舗装面２が検出されている。そのことから、溝４は舗装面２の側溝とみられる。蓋付溝１はＬ -15 南側にみられ、全長は不明である。水は南から北へ向かい、暗渠１へと流れる構造となっている。西に石畳１が隣接しており、石畳１の側溝であるとみられる。蓋の構造は唯一左右両方の縁石に受けをもつ１類である（第７図）。蓋付溝２は東西方向に約 10 m通る遺構で、平成 20・21 年度調査において検出されたうちで最も長い蓋付溝である。水流は東から西へと向かい、暗渠１へと流れる構造となっている。蓋石は一部で失われているものの、残存状況は概ね良好である。

暗渠１は溝１、蓋付溝１・２の結節点にあり、石畳１の下を北西方向に向かっている。各溝から流れる水の合流地点となっており、おそらく龍潭に排水する仕組みとなるとみられる。溝３・４を除く溝の水は、最終的にこの暗渠１へと流れる構造になっている。

金属製品溜まりはＬ -15 の北東側にある土坑状の穴に、複数の大形金属製品が折り重なった状態で出土したものである。土坑内覆土はⅠ層のものであることから、戦時中に形成された穴に廃品となった製品を投げ込んだものと考えられる。付近には石畳４が検出されるが、破壊を受けており全容は不明な状態となっている。

10. L-16 TP ８（第 27 図、図版 15）

堆積　Ⅰ層とⅡ層が認められる。Ⅰ層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。Ⅱ層は舗装面１の直上に薄く堆積する焼土・炭化物層で、炭化物はまだ土壌化が進んでおらず年輪が残る。

遺構　中城御殿当時の石畳１、舗装面１、暗渠１が検出されている。舗装面１は石畳が下傾した先にみられるが、当時の写真から舗装面は中城御殿内壁の外側を通る道と想定される。従ってこの境界線に中城御殿の内壁があった可能性が高い。

11. K-16 TP ９（第 28 図、図版 16）

堆積　Ⅰ層とⅢ層が認められる。Ⅰ層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。Ⅲ層はＪ -15・16TP ７と同じく、大きい礫が雑然と含まれるクチャブロック層が堆積する。

遺構　Ｋ -16 は高御蔵の南西際部分に当たるが、ここから遺構は検出されなかった。

12. L-16 TP10

堆積　Ⅰ・Ⅲ層が認められる。Ⅰ層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。その下には中城御殿当時の遺構が検出される。

遺構　東側で舗装面が検出され、検出レベルなどから舗装面１とみられる。なおⅠ層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

13. L-16 TP11

堆積　Ⅰ層のみ認められる。Ⅰ層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。なおⅠ層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

遺構　石牆下から石牆の根石が検出されているが、崩落が激しく、詳細な観察は行えなかった。

14. L-13（第 29 図、図版 17 ～ 19）

堆積　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層が認められる。Ⅱ層は石畳遺構の周囲に確認され、瓦片と小礫片で成る、戦後まもなく戦災で破壊された瓦礫を整地した瓦礫層とみられる。Ⅲ層は明褐色で粘質の赤土層で、平坦に整地される。遺構直下のレベルであることから、中城御殿の造成土とみられる。

遺構　石畳 5 とピット群が検出されている。石畳 5 は元位置を留めるものの半壊した状態である。なおトレンチ南端にも石畳がみられるが、破損状態が激しく元位置を留めるか不明であったことから遺構としなかった。ピット群はⅢ層を掘り込んだもので、南北方向におよそ直線的であるが、間隔は不規則であることから、植栽痕と判断した。なおピット群は検出のみで、覆土の掘削は行っていない。

15. I-13（第 30 図、図版 20 ～ 22）

堆積　Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層が認められる。南側に設けたサブトレンチの堆積からは、小礫の混ざる粘質土層であるⅢ層の上に、填圧を強く受ける瓦礫層が乗ることが分かる。瓦礫は戦災で破壊された瓦や石造遺構の残骸とみられることから、それぞれⅢ層が中城御殿の造成層、Ⅱ層が戦中・終戦直後の造成層であるとみられる。

遺構　暗渠 2 が検出された。これは石敷の下に空洞が認められたことによる。内部の掘削は行っていない。

16. H-13（第 31 図・図版 23 ～ 25）

堆積　Ⅰ層とⅡ層が認められる。Ⅱ層は遺構周囲で確認される瓦小片と礫小片が密に堆積する瓦礫層で、終戦直後の造成層とみられる。

遺構　石畳 6 が検出された。トレンチ東側は元位置を留めており、北側には石畳の縁石が残される。しかしトレンチ西側と中央南側は破壊され、石畳の切石が数点残るのみである。

17. E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14（第 32 図・図版 26 ～ 30）

堆積　Ⅰ層からⅣ層が確認された。Ⅱ層は TP12 で焼土が検出されているのみである。Ⅲ層は中城御殿の遺構の下に堆積する。TP13・14 では下層から多くの遺物が包含し、上層は赤土とコーラル層が平坦に填圧を受けている状況が認められる。また TP12 ではⅢ層下より赤土とコーラルが版築状に堆積した層が検出され、TP14 Ⅲ層上面と同様の工法であることから、Ⅲ層以前の旧表土とみなしⅣ層とした。TP14 からは TP12 Ⅳ層とほぼ同じレベルから瓦溜まりが検出され、さらにその下よりコーラル層が検出されたため、これらもⅣ層と評価した。

遺構　　２つの時期の遺構が認められる。この場所は中城御殿の御内原に当たるが、Ⅱ層の遺構にはTP12より石畳７、TP13より溝３、TP14より基壇５が検出されている。溝３は底にコンクリートが敷かれており、中城御殿が機能する当時からコンクリートが使われていた可能性を窺わせる。またⅣ層の遺構には瓦溜まりが認められる。瓦溜まりはTP14北東際にのみで極めて範囲が狭く、瓦が集中的に廃棄された跡とみられる。

18．G-19 TP15（第33図・図版31）

堆積　　Ⅰ層とⅢ層が認められる。Ⅰ層は約70㎝に渡って堆積し、東壁以外ではコンクリート壁が検出されている。Ⅲ層はⅠ層でみられたコンクリートがなくなることから中城御殿の造成層とみなした層である。宮古式土器や中国産染付などの陶磁器をはじめ、16点の無文銭が一括して出土している。

遺構　　検出されなかった。

19．H-19 TP16（第33図・図版31）

堆積　　Ⅰ層・ⅢもしくはⅣ層・Ⅴ層が認められる。Ⅰ層は森林下に堆積する腐植土層で、戦後のものである。Ⅱ層は検出されていない。Ⅰ層の下の層はⅣ層の傾斜を埋め、整地することを企図した堆積と推察されるが、遺物が包含していないため年代が不明でⅢ層かⅣ層か判然としない。Ⅴ層は他の試掘坑でも確認される粘質の暗褐色土層で無包含層である。

遺構　　検出されなかった。

第３節　まとめと考察

１．遺構の検出状況

以上より、今次調査では中城御殿当時とみられるⅢ層と、それ以前とみられるⅣ層の２つの時期の遺構が認められた。特にⅢ層では広範囲にわたって多岐の遺構が戦中・戦後の破壊を免れ、今日まで土中に残されていた。各層ごとの検出遺構は以下の通りである。

Ⅲ層　溝・・・・・・・・・・・９基
　　石畳・・・・・・・・・・７基
　　基壇・・・・・・・・・・４基
　　舗装路・・・・・・・・・２基
　　ピット・・・・・・・・１３口
　　金属製品溜まり・・・１箇所

Ⅳ層　円形石組遺構・・・・１基
　　ピット・・・・・・１２口
　　瓦溜まり・・・・・１箇所

２．Ⅳ層の遺構

遺構の年代的位置付け

前年度報告でも中城御殿以前として検出遺構が報告されたが（沖縄県立埋蔵文化財センター2010）、今次では同一の試掘坑から層位的に確認されたことにより、中城御殿以前の遺構が包蔵する

ことが確実であることが理解された。また円形石組遺構は石造技術においても首里城などでみられるものに近く、方形に切られる中城御殿の切石とは差異がみられる。これらの状況から、おそらく近世に比定される遺構と考えられる。

遺構の評価

首里城跡周辺の近世遺跡は、これまで円覚寺跡などで調査成果があるものの、士族の屋敷跡の調査成果は得られてこなかった。中城御殿跡の地は近世では北谷御殿・本部按司屋敷などがあったことが首里古地図にあり（第 10 図）、明確に士族の屋敷跡が残されることが確認されたことになる。今次調査では極めて断片的な調査のみであるが、近世士族の生活像を復元する端緒となり得る遺構であると理解される。

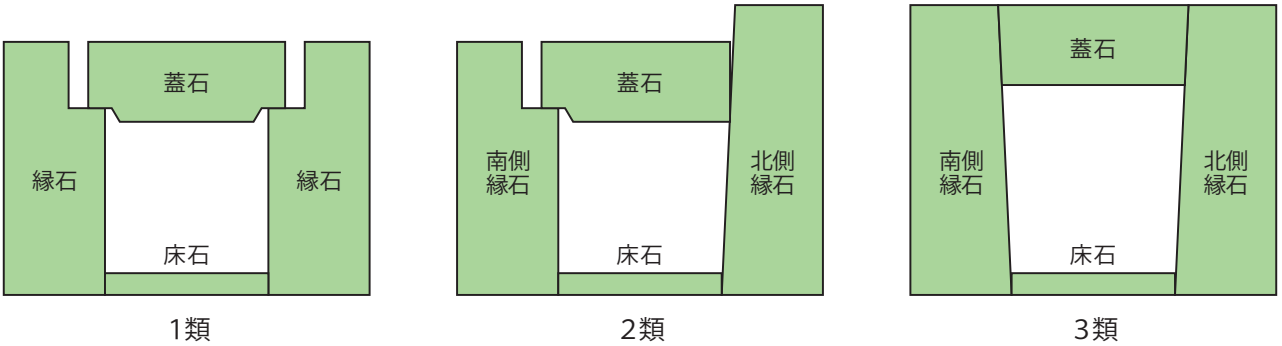
３．Ⅲ層の検出遺構（第９図）

溝

全９基の溝が検出され、全て方形の琉球石灰岩切石が用いられていた。今次調査ではＩ・Ｊ・Ｋ・Ｌ－ 14、Ｋ・Ｌ－ 15 と広い範囲で検出され、石畳や舗装面とセット関係であることに加え、残される古写真から道の側溝であることが分かる（沖縄県立博物館 1992）。これら側溝は、その構造から蓋の付かない溝（溝１～４）、蓋の付く溝（蓋付溝１～３）、他に遺構の下に造られるもの（暗渠１・２）に細分される。水流はそれぞれ御寝廟のある北から南に流れ、最後は暗渠１に流れるように設計される。また蓋石の設計構造にも機能によって以下の３種が使い分けられている（第９図）。

１類：長方形の石盤状で長軸の左右に縁石に乗せる凹みが作られるもの。蓋付溝１に用いられる。
２類：１類よりは長軸長と短軸長が近い長方形の石盤で、長軸側に片側のみ縁石に乗せる凹みが作られる。蓋付溝２・３に用いられる。
３類：ほぼ正方形の石盤で、左右に縁石に載せる凹みが作られる。また蓋を持ち上げられるように、上下が台形状に切られている。蓋付溝２の直角に曲がる箇所と溝２の直角に曲がる箇所に用いられている。

このように蓋石も側溝の機能や場所に合わせて数種のものが製作されており、中城御殿の石造遺構の多様性のみならず、当時の石造技術を窺える資料でもある。



第９図　中蓋付溝の構造模式図

石畳

全７基が検出され、全て多角形の琉球石灰岩切石が用いられる。遺される古写真から、中城御殿内の石畳道であることが確認される。左右どちらかに蓋の付かない溝が側溝として機能し、石畳とセット関係となることが理解される。

基壇

方形で他の遺構より大きい切石が用いられるもの（基壇１・２）と、幅の狭い切石によるもの（基壇３・４）とに分けられ、基壇１・２と基壇３・４は同一の遺構であるとみられる。古写真より建物・漆喰壁の基壇であることが理解される（沖縄県立博物館 1992）。

舗装面

２箇所で検出された。細かく砕いた琉球石灰岩を敷き、填圧して舗装したもので、首里城跡などで同様の舗装面が確認されている。古写真にも記録されており、これによると中城御殿内縁部を一周する道であることが分かる。

ピット群

Ｌ－ 13 にのみ認められ、計 13 口が検出されている。検出のみで覆土掘削は行っていないが、ピット同士の位置関係から植栽痕とみられる。

金属製品溜まり

Ｋ－ 15 のグリッド交点付近で検出され、土坑状の穴から銅製の香炉や花瓶などがまとまって出土している。この穴からは他のＩ層と同様に瓦片なども多く出土していることから、意図的な掘り込みではなく爆弾などによって形成された穴に、周囲に散らばる破損品を一括して廃棄したものと考えられる。

遺構と建物配置（第 12 図）

中城御殿の遺構は、写真記録が残されているという近代遺跡ならではの特性により、かなり精度の高い機能復元が可能である。そこで、当時の航空写真と聞き取り調査から作成した旧中城御殿の間取り図（以後「間取り図」とする）を参考に、今次調査において検出された主要な遺構の機能について考察を加えたい。

石畳は概ね建物間に位置し、古写真からも建物間に石畳道が記録されていることから、検出された石畳が古写真にも写されている石畳道であることが容易に理解される。また「間取り図」からは、石畳１が新御殿付近の門から御蔵・高御蔵間、中城大親屋敷を通り、同じく古写真から建物外縁部の道であることが確実視される舗装面１を通って脇門へ至る石畳道であることが推定される。また溝１が石畳１の側溝であることも古写真に記録される石畳と側溝の関係性をみる限り明らかである。石畳２・舗装面２は、前者が御蔵と取納座を結ぶ石畳道、後者は全てが残されていないものの石畳２から続き取納座・中城大親屋敷を抜けて石畳１に合流する通路であったことが窺える。蓋付溝１は石畳１と舗装面１の、蓋付溝２は舗装面２と御蔵の通用を阻害しないために蓋付溝となっていたとみるのが妥当であろう。また同様に、蓋付溝３は取納座と御蔵の通用を阻害しないためと考えられる。以上は「間取り図」と検出遺構の位置関係が比較的判然としたことによる解釈であったが、対して石畳４は御蔵

の中心部に位置しており「間取り図」との整合性が掴めない。実際は御蔵の中央部に石畳道が敷設されていたのだろうか。

一方で２種類の基壇もそれぞれ「間取り図」との照合によって概ねその機能を把握することができた。基壇１・２は蔵区画と大御庭や御寝廟・新御殿といった住居区画を区切る漆喰壁の基壇であることが推定される。基壇３は「間取り図」との整合性が判然としなかったために機能の推定には至らなかったが、これも門Ｆ付近の中庭と住居区画とを仕切る壁の基壇と想定される。

以上のように、今次調査において元位置を留めた礎石や礎石抜け穴、柱穴は全く検出されず、確定的な建物配置を検討する遺構は得られなかった。しかし検出された遺構からは御蔵周辺の建物配置を想定することが可能である。また溝内では他の遺跡ではみられない宝物クラスの遺物が多数出土していることから溝内遺物は御蔵内の収蔵品であった可能性が高く、いずれも近代の琉球王家を理解する上で極めて重要な遺構であると考えられる。

第 10 図 『首里古地図』にみる近世中城御殿跡の土地利用（沖縄風土記刊行会 1970）

第 11 図　中城御殿跡　平成 20・21 年度発掘状況

第１表　出土地別遺物集計表（１）

材質・器種	グリッド	E・F-13	F-13					F・G-13							G-13		H-13		I-13		I・J-13	J-13			K-13			L-13	G～L-13	I-14
	層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅰ層			Ⅱ層	Ⅲ層		Ⅳ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層		Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層
		TP12	TP13	TP13	TP13 (ST1)	TP13 (ST2)	TP13 (ST1)	TP14	TP14 (ST1)	TP14 (ST2)	TP14 (ST4)	TP14 礫群	TP14 (ST2)	TP14 (ST2)	LT	LT	LT			LT		LT	LT (ST)			LT	LT	LT	LT	TP2北
銅製品	建具																1				2		1							
	器物																													1
	飾金具														1				1											
	祭祀具																													1
	装身具	1	1								1																			
	煙管													1																
	鋲																						1							
	角釘														1		1			3	2	2	12					1		1
	丸釘																						1							
	ネジ																									1				
	銭貨																													
	その他																													
	不明	1	2	1				2	1			1		1		1	3			1		1	3				1		2	2
鉄製品	角釘	1	3	2	1	1	1	3	1		1	1	1	5			1	1	1	2	2	1	7	1	1	6		3		1
	丸釘	2	1			1		3		1					3		1	1		1	1	3	8		1	1	1		1	
	鎹																													
真鍮製品	飾金具																													
	装身具													1																
	煙管																													
	不明																								1					
アルミ製品	ドックタグ																													
	煙管																													
	不明																				1									
ガラス製品	ビーズ																													
材質不明	不明							1						1																
合計		5	7	3	1	2	1	9	2	1	2	2	1	9	5	1	7	2	2	7	8	7	33	1	3	8	2	4	3	6

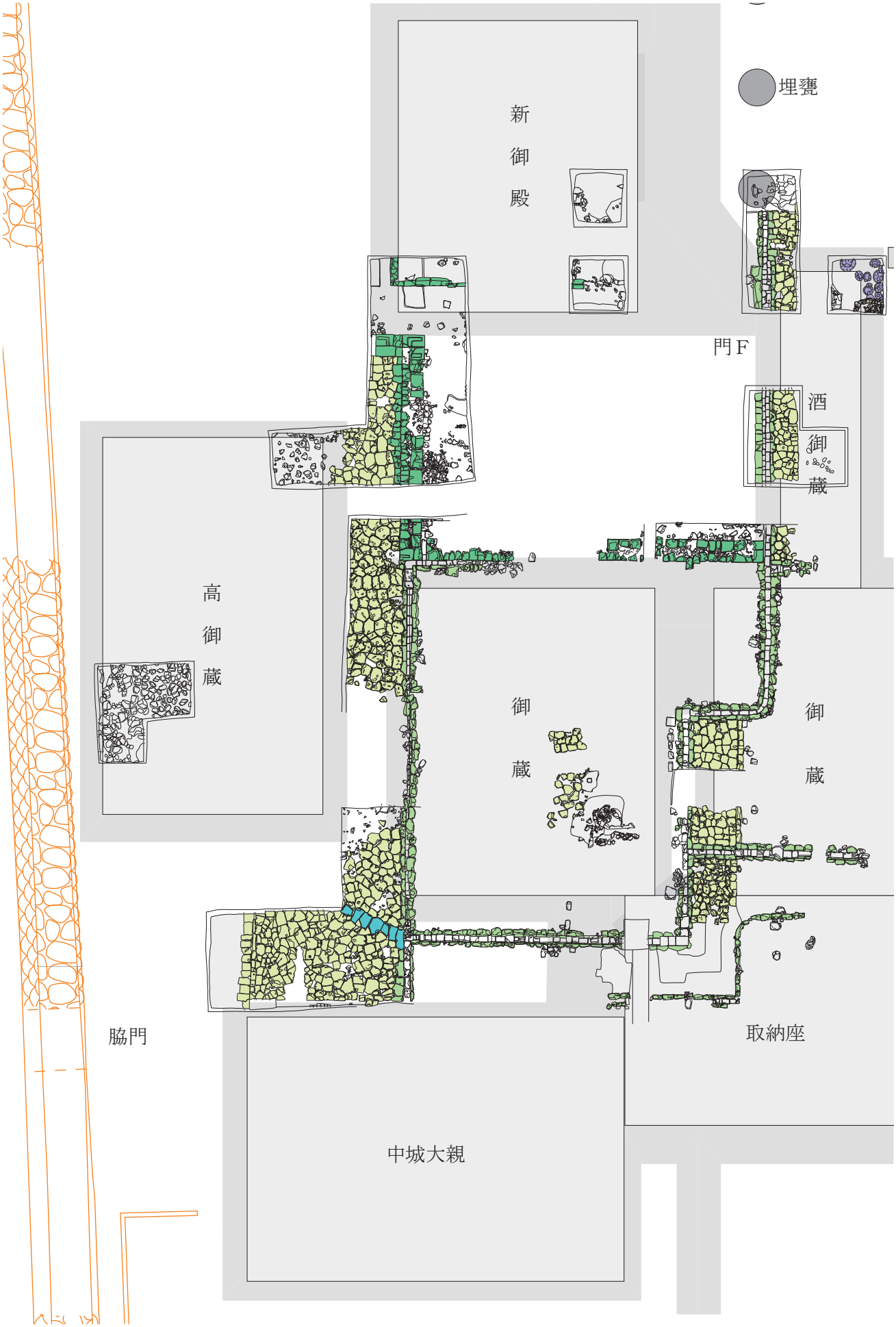
第２表　出土地別遺物集計表（２）

材質・器種	グリッド	I・J-14		I・J-14		J-14											K-14				L-14				O-14	K・L-14	K-14・15	I-15		
	層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層			Ⅱ層					Ⅲ層	Ⅳ層	清掃	Ⅰ層	Ⅱ層		清掃	Ⅰ層	Ⅱ層		清掃	Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅳ層
		TP2	TP2	TP2 溝2内	TP2	TP1	TP2北	TP3	TP2	TP2南	溝2内	TP3	溝2内	TP3 溝2内	TP1 石(0～20cm)								溝内		TP3			TP4	TP6	TP6
銅製品	建具						1	1									6	4	7		2	5				1	1			
	器物																3	1	6		1	1								
	飾金具					1							2				6	7	9		1	20	3						1	
	祭祀具											5					4	28	4		5	2								
	装身具	1																1									1			
	煙管																2				1									
	鋲					1											1	1	1			3					1			
	角釘	3	1			2						1	1				12	52	6	1	130	10	2	1	1					
	丸釘	1															6	4	17		3	5					1			
	ネジ																2													
	銭貨																													
	その他				3													6	1		3	3								
	不明	4	5	2		1		14	1	1	2	2	17	1			39	32	69	1	42	19						4	2	1
鉄製品	角釘	2	2			1	1	7		3					1	1	15	19	18		23	28	5				4	2		
	丸釘	3	1		1	1		1		1		1	2				20	1	11		6	3					2	2		
	鋌																1		1		1									
真鍮製品	飾金具																													
	装身具																													
	煙管							1																						
	不明																				1	1								
アルミ製品	ドックタグ																													
	煙管																													
	不明		1							1							2													
ガラス製品	ビーズ																	1												
材質不明	不明																8													
合計		14	10	2	4	7	2	24	1	6	2	9	22	1	1	1	127	157	150	2	219	100	10	1	1	1	10	8	3	1

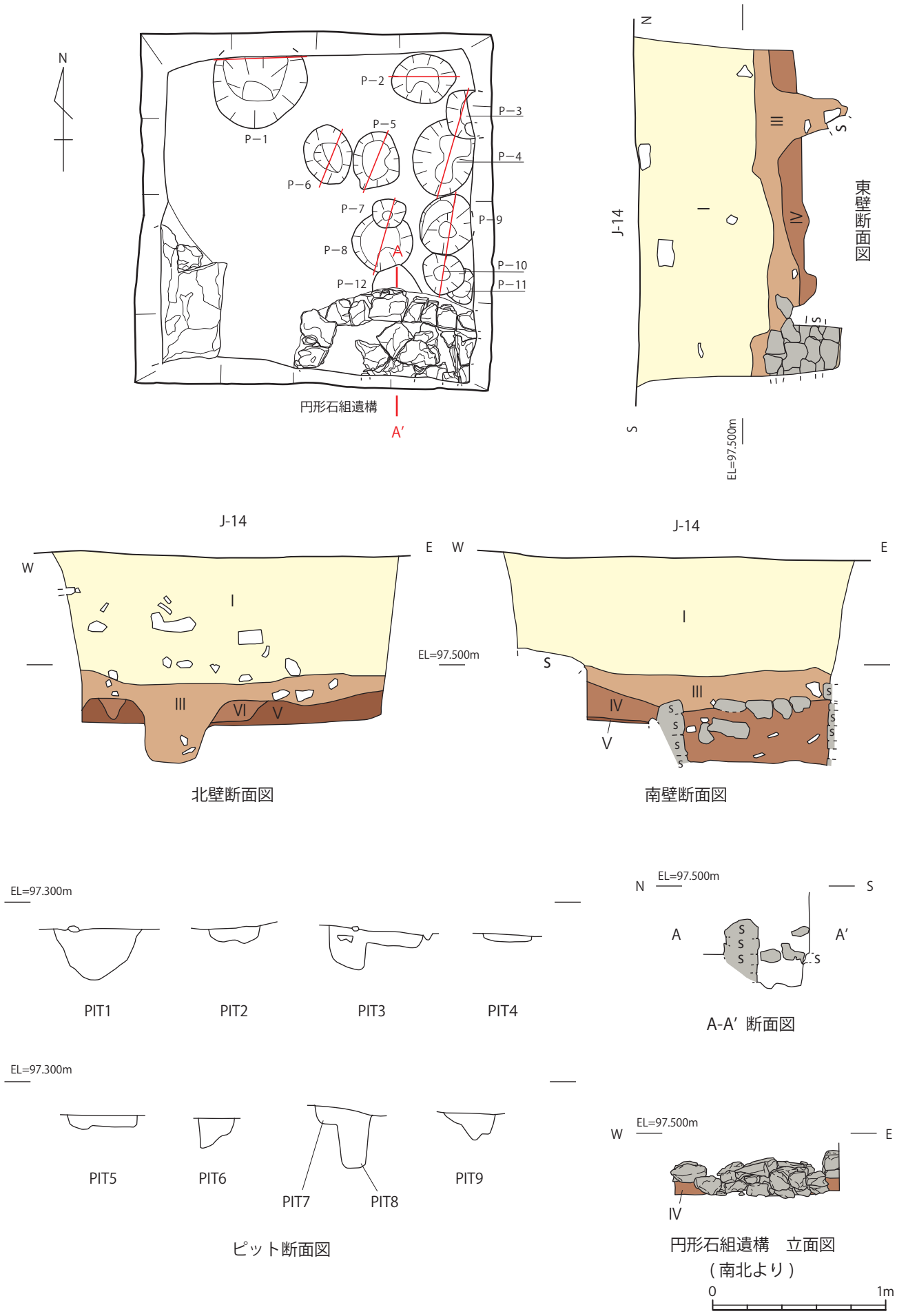
第３表　出土地別遺物集計表（３）

材質・器種 ＼ グリッド		J-15	J-15		K-15					K・L-15	L-15					J-15・16		J-16	K-16	L-16			G-19	不明			合計
	層	Ⅰ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層	清掃	清掃	Ⅰ層	Ⅰ層			Ⅰ層	Ⅰ層			
		TP5	TP7			畦		溝1内	溝2内			石敷清掃		蓋溝2内	ドウ一括	TP7	TP7	TP5	TP9	TP8	TP10	TP11	TP15		表採		
銅製品	建具		2		8						8		1	4						2		1		1			59
	器物														5					2							20
	飾金具		4		6	1			1		29	1		9	1					18	2			1	1		126
	祭祀具				1						2				14									1	1		68
	装身具				2																						8
	煙管				3										1												8
	鋲		1		6						9		1			4				2				1			33
	角釘		5		12						31		1	6		5				8				2	10		326
	丸釘		1		3						28			8						1					3		82
	ネジ				1																						4
	銭貨										1									1		3		1	1		7
	その他		1		1										3	2				1							24
	不明	2	7		23		1	1			46	1	4	3	74	2		1		19	2		1	7	5	1	482
鉄製品	角釘	2	5	1	20	1					59	2	1	9		6			1	12	8	1	1	7	16		332
	丸釘	5	11		7	3	1			8	74		1			3			1	5				10	3		218
	鋏		1													1								1	1		7
真鍮製品	飾金具																1										1
	装身具																										1
	煙管																										1
	不明				1						2									1							7
アルミ製品	ドックタグ	1																									1
	煙管																			1							1
	不明				1						1																7
ガラス製品	ビーズ																										1
材質不明	不明				1																						11
合計		10	38	1	96	5	2	1	1	8	290	4	9	39	98	23	1	1	2	73	12	5	2	32	41	1	1835

図版 3　平成 20・21 年度　調査区遺構検出状況



第 12 図　主要検出遺構と屋根伏せ位置



第 13 図　J-14 TP1　円形石組遺構、ピット群

J-14 TP 1　遺構検出状況及び北壁断面

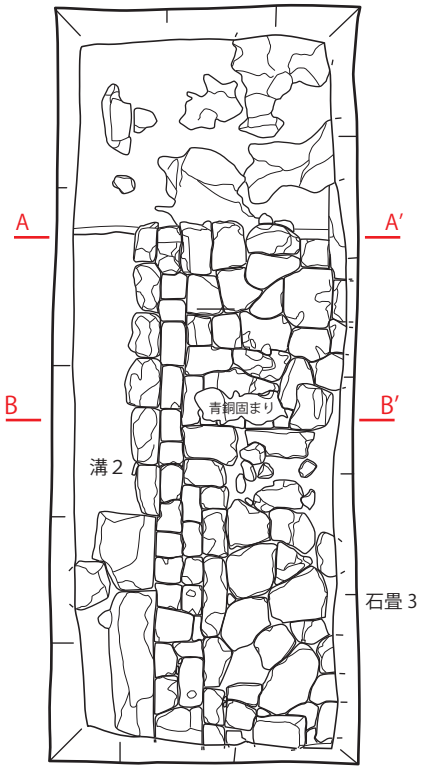
円形石組遺構　検出状況

円形石組遺構　半裁断面

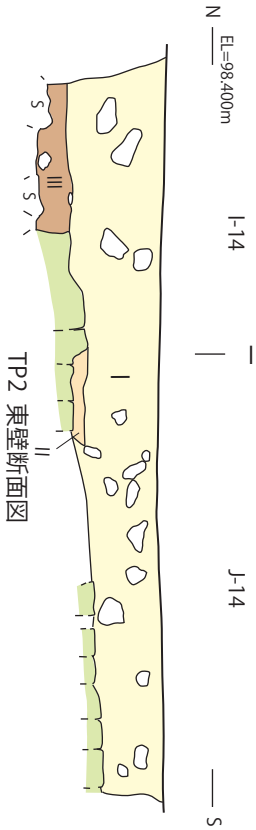
円形石組遺構　完掘状況

ピット群　半裁断面

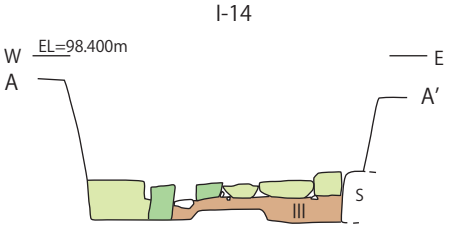
図版 4　J-14 TP 1



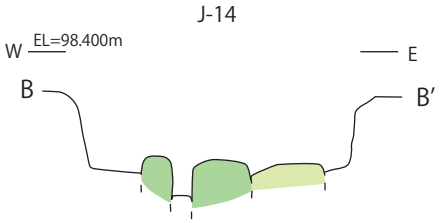
TP 2



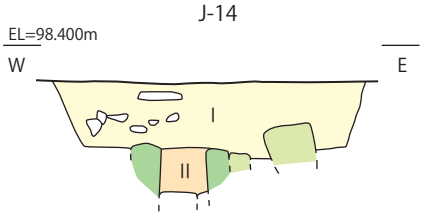
TP2 東壁断面図



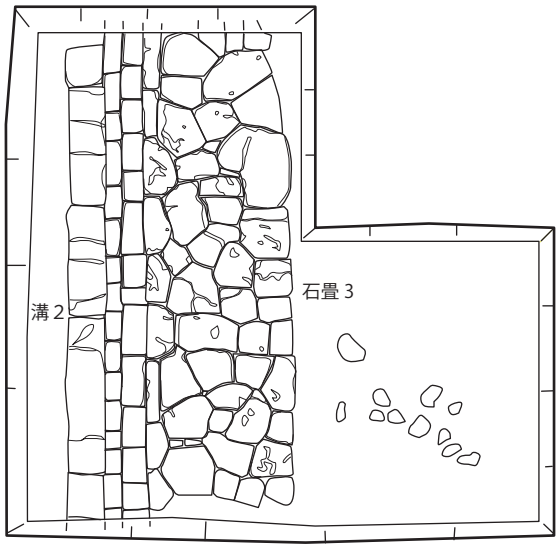
A-A′ 断面図



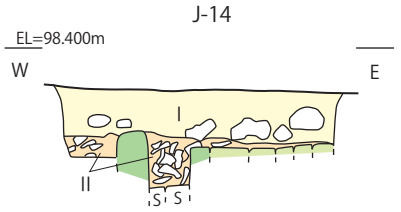
B-B′ 断面図



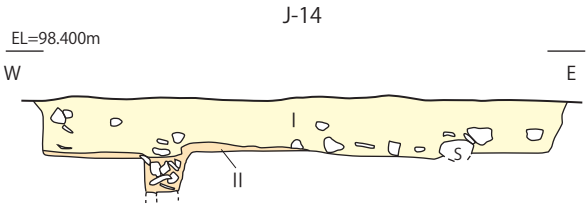
TP 2 南壁断面図



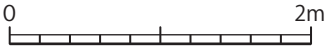
TP 3



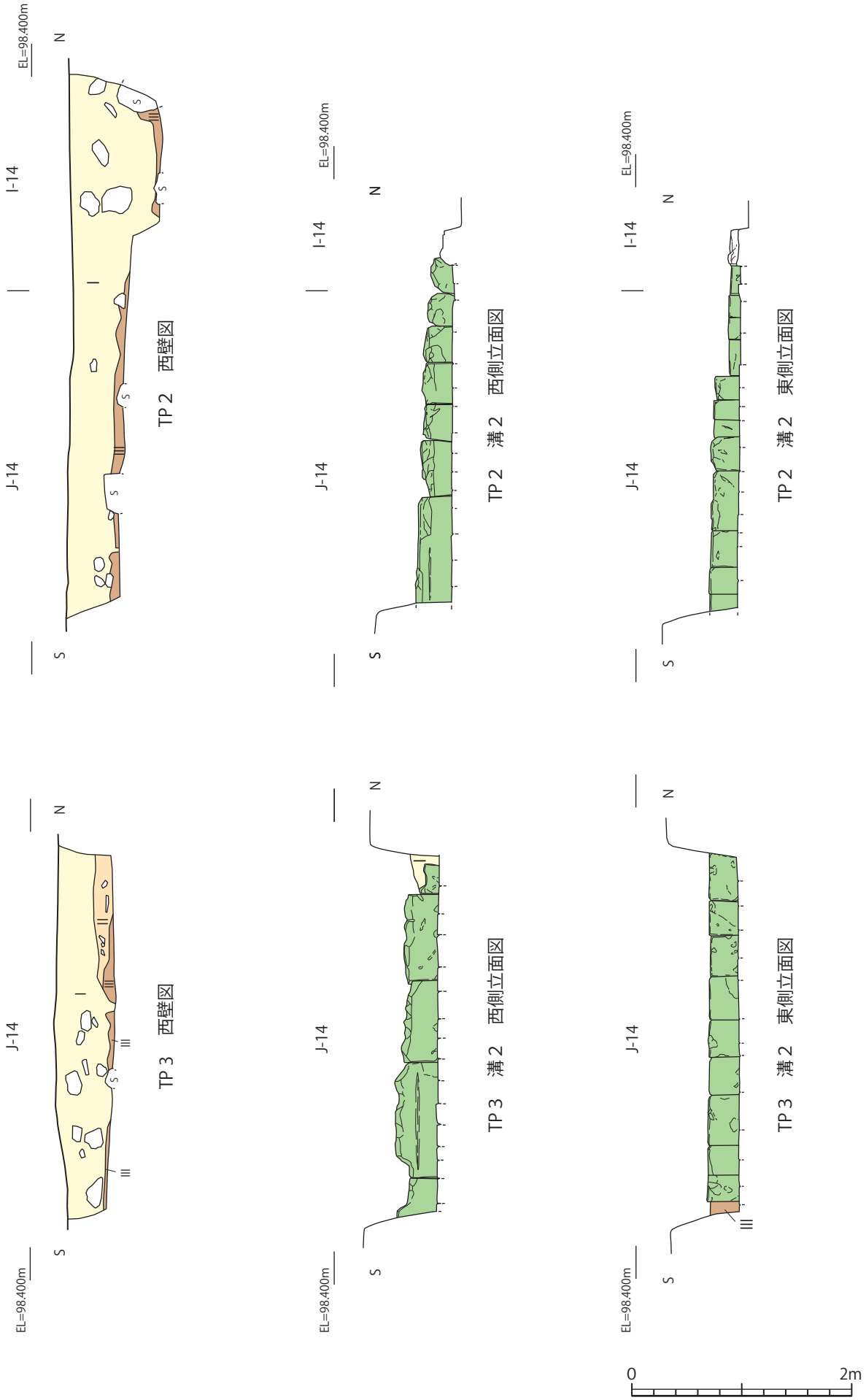
TP 3 北壁断面図



TP 3 南壁断面図



第 14 図　I・J-14 TP2、J-14 TP3　溝 2、石畳 3 ①



第 15 図　I・J-14 TP2、J-14 TP3　溝 2、石畳 3 ②

I・J-14 TP 2　J-14 TP 3　遺構検出状況（北から）

TP 2　東壁（北側）

TP 2　東壁（中央）

TP 2　東壁（南側）

溝２立面（北から）

図版５　I・J-14 TP2、J-14 TP3 ①

TP 2　北壁

TP 2　南壁

TP 3　南壁

TP 3　西壁（南側）

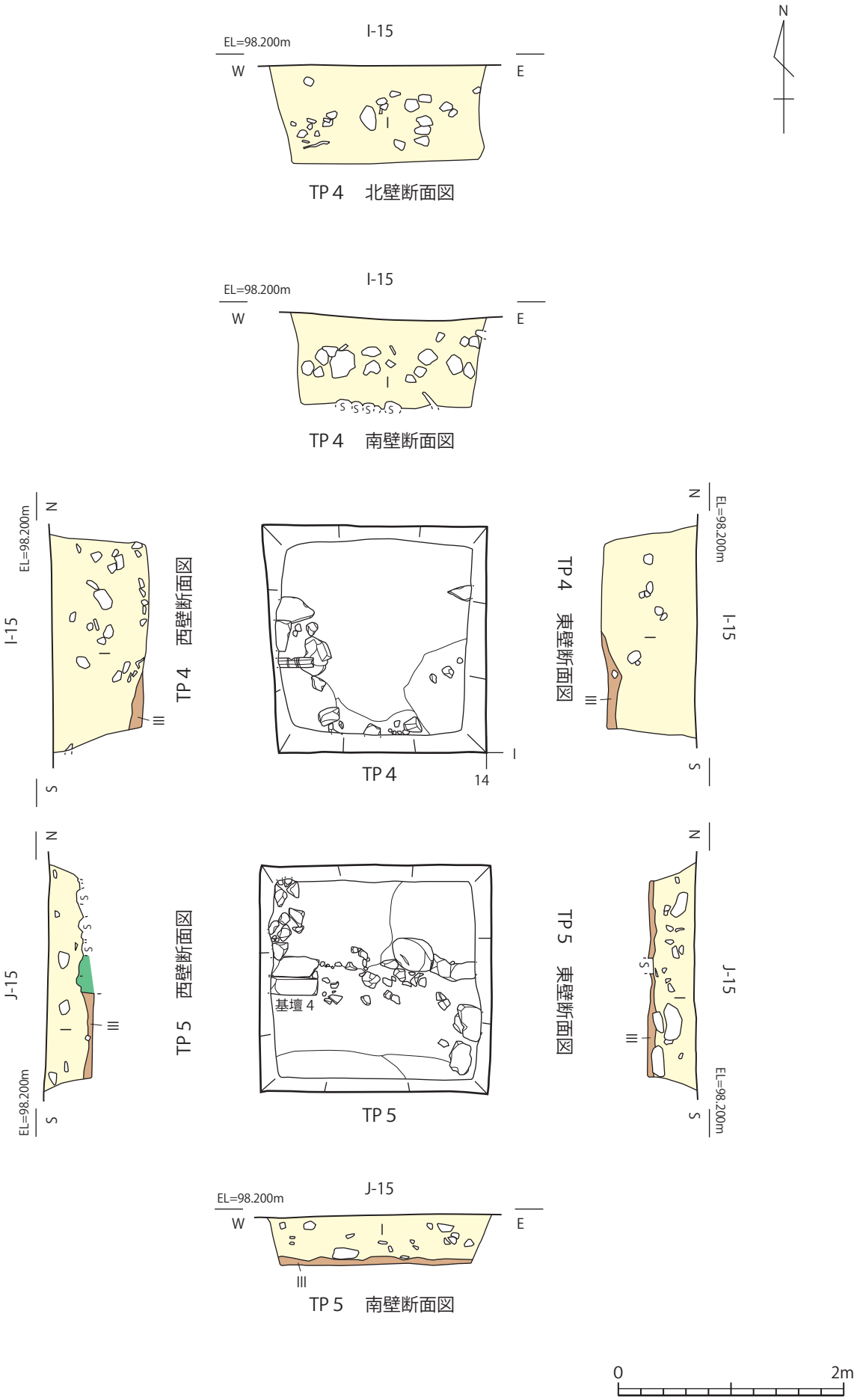
TP 3　西壁（中央）

TP 3　西壁（北側）

TP 3　東壁（北側）

TP 3　北壁

図版 6　I・J-14 TP2、J-14 TP3 ②



第 16 図　I -15 TP 4、J-15 TP 5　基壇 4

I-15 TP 4、J-15 TP 5　遺構検出状況（北から）

TP 4　北壁

TP 4　東壁

TP 4　西壁

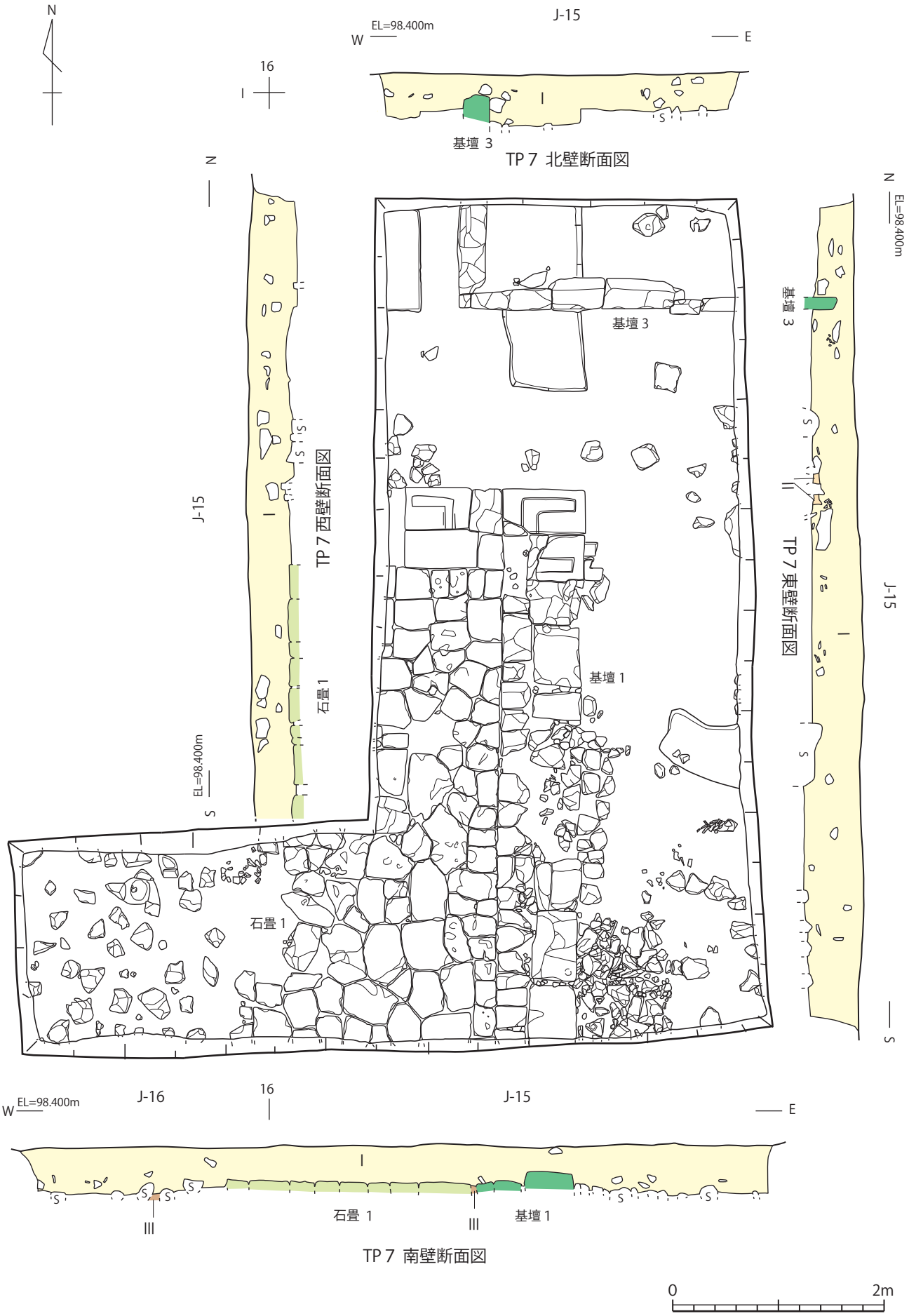
TP 5　北壁

TP 5　東壁

TP 5　西壁

TP 5　南壁

図版 7　I-15 TP 4、J-15 TP 5



第 17 図　J-15・16 TP 7　基壇 1・3、石畳 1

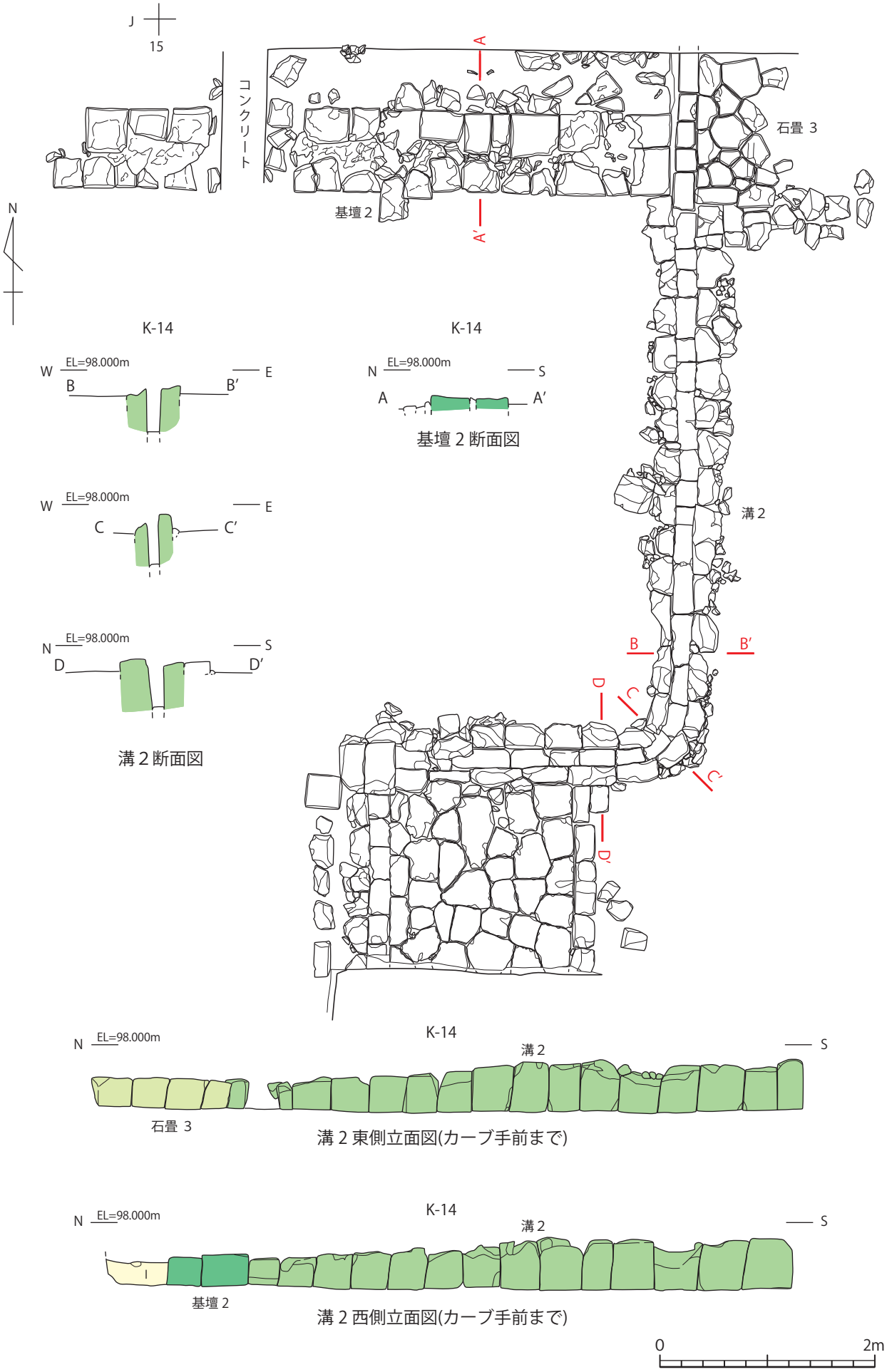
J-15・16 TP 7　遺構検出状況（北から）

基壇１・３　石畳１（北から）

基壇１（東から）

基壇１直上　肥前産染付皿出土状況

図版８　J-15・16 TP7



第 18 図　K-14　溝 2、石畳 3、基壇 2

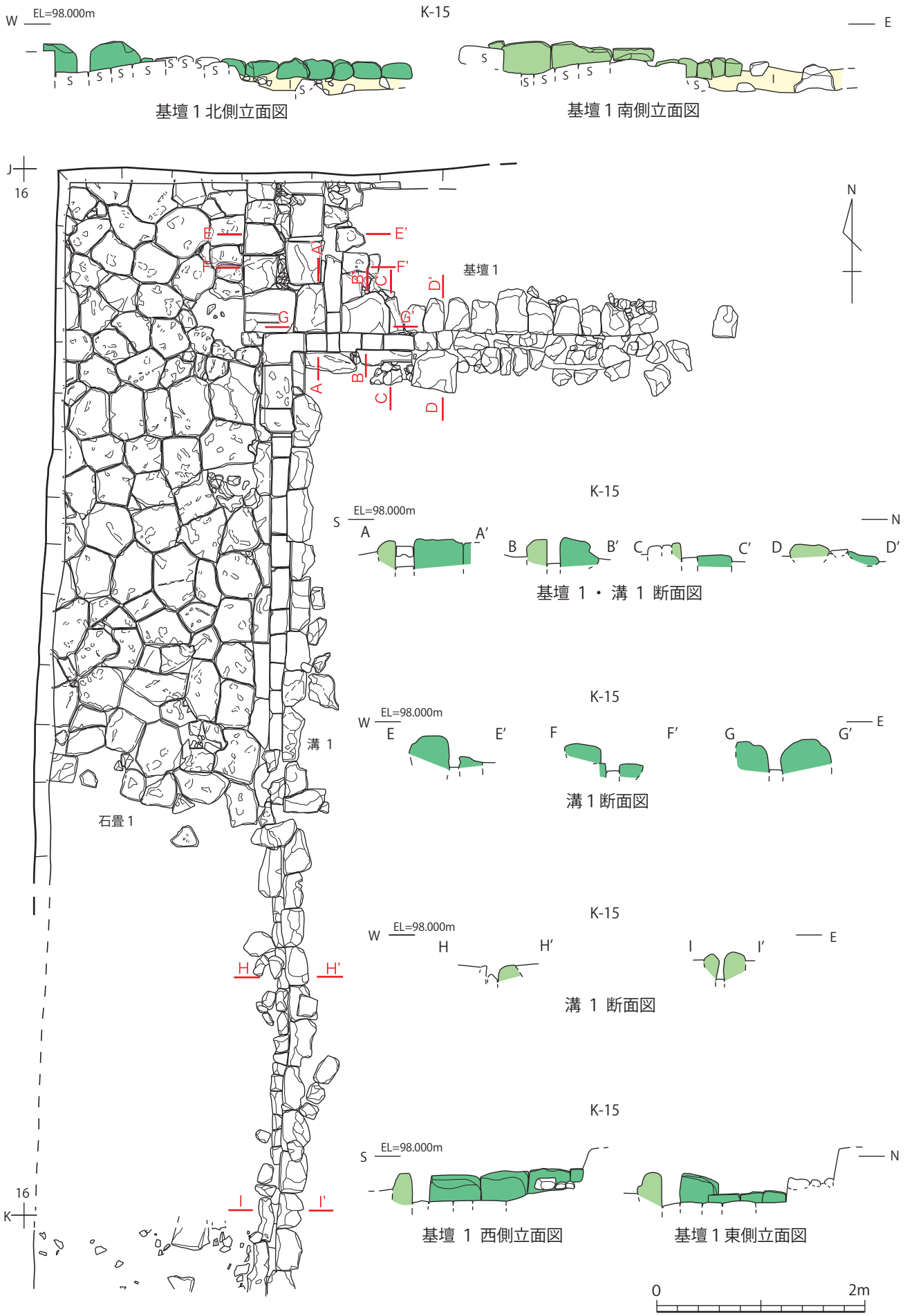
K-14　遺構検出状況（北から）

溝２・基壇２断面（南から）

溝２内　ガラス玉一括出土状況

溝２（北から）

図版９　K-14



第 19 図　K-15　溝１、基壇１、石畳１

K-15　遺構検出状況（北から）

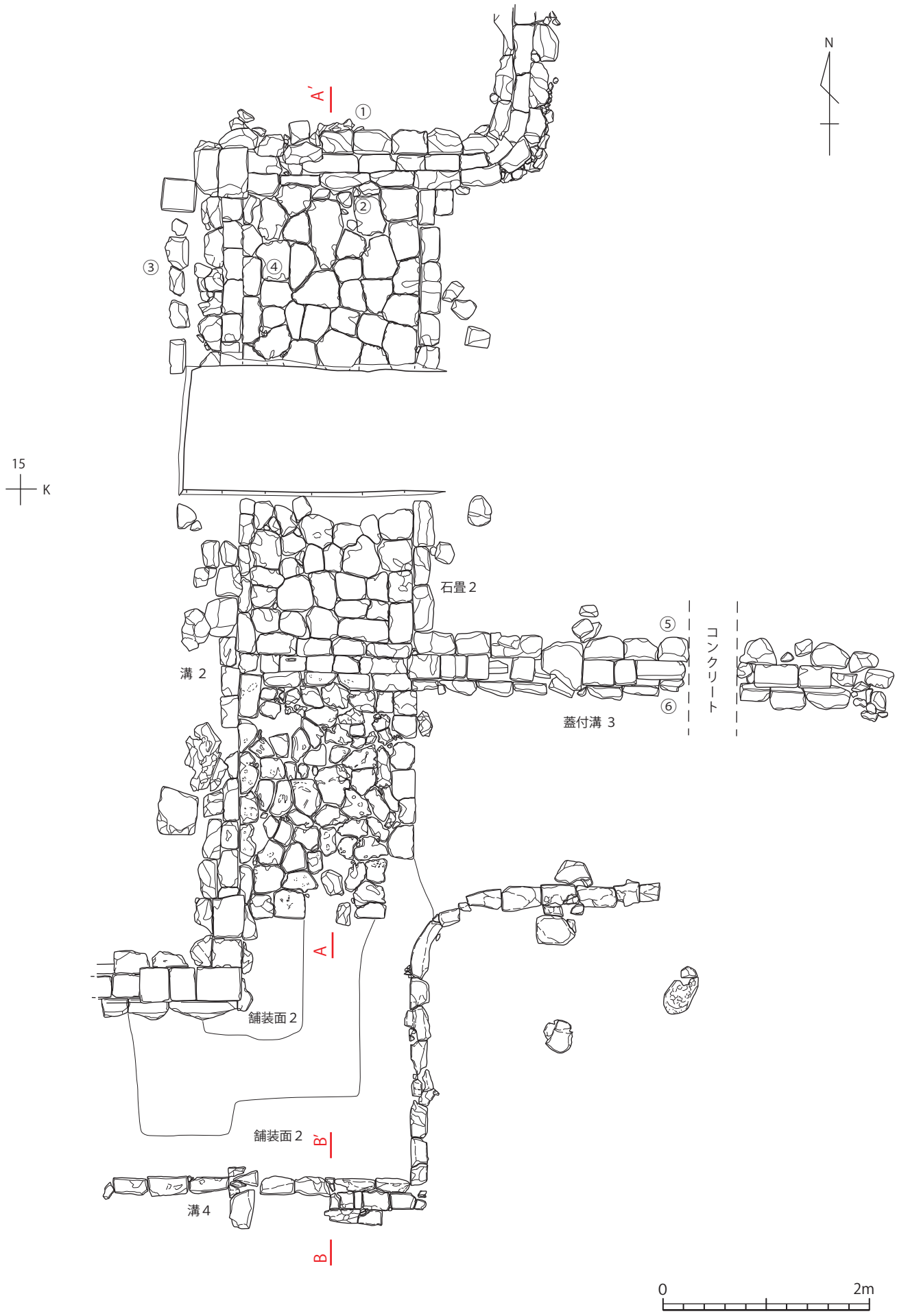
K-15　東壁

K-15　北壁断面（溝１部分）

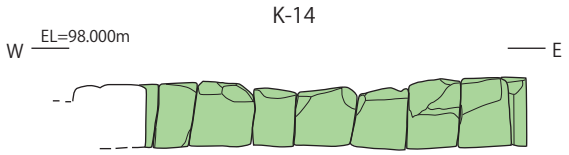
K-15　南壁

K-15　溝１　北壁断面部分

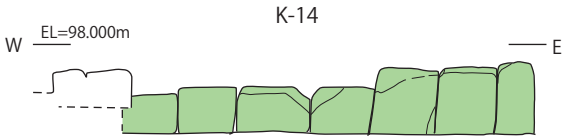
図版 10　K-15



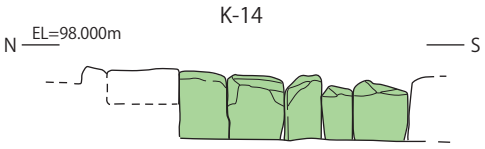
第 20 図　K・L-14　溝２・４、蓋付溝３、石畳２、舗装面２



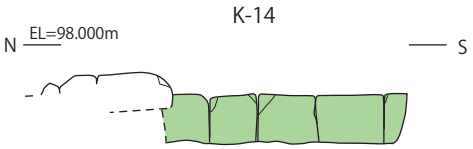
① 溝 2　北側立面図



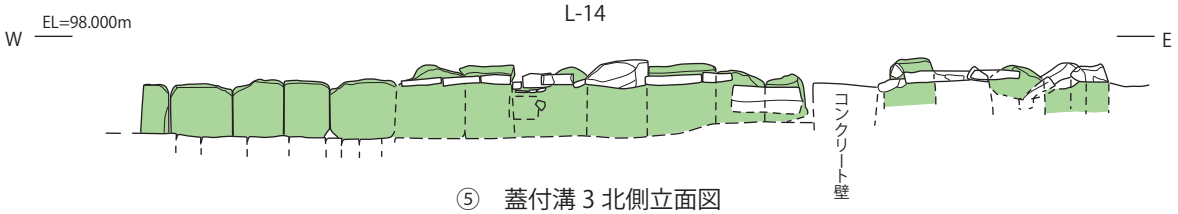
② 溝 2　南側立面図



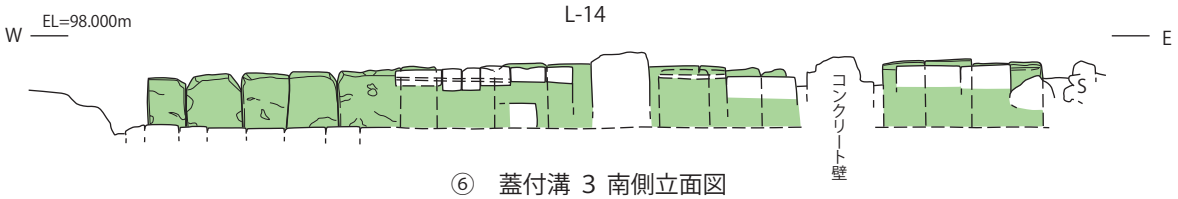
③ 溝 2 西側立面図



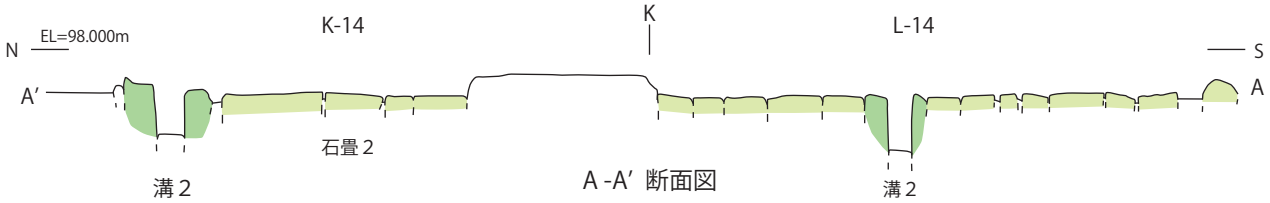
④ 溝 2 東側立面図



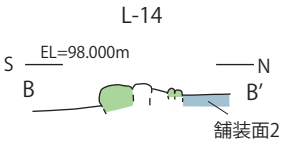
⑤ 蓋付溝 3 北側立面図



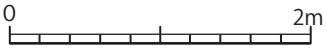
⑥ 蓋付溝 3 南側立面図



A -A′ 断面図



B-B′ 断面図



第 21 図　K・L-14　溝 2 ・ 4、蓋付溝 3、石畳 2、舗装面 2

L-14　遺構検出状況（北から）

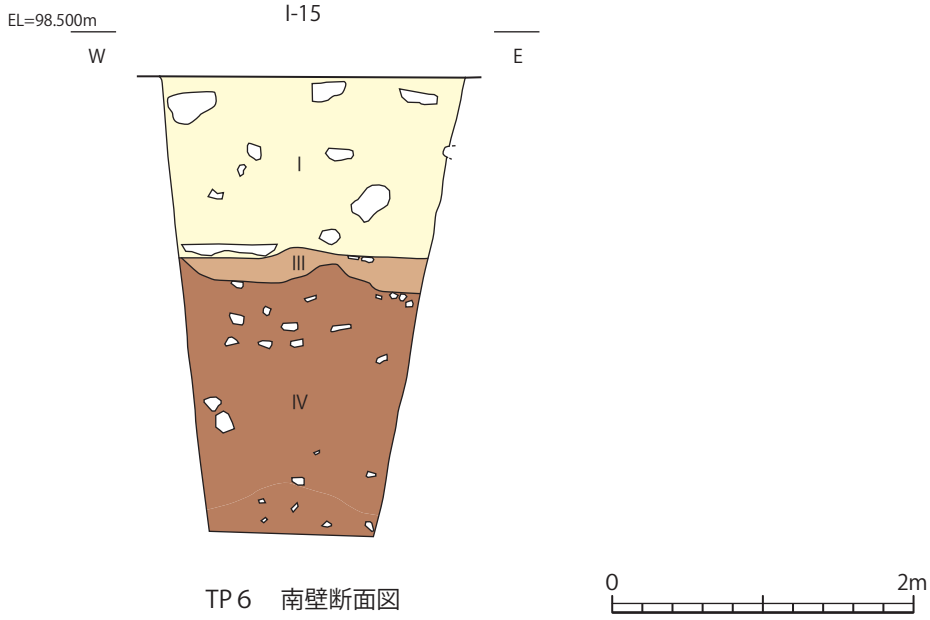
L-14　北壁

蓋付溝３（北東から）

L-14　西壁

蓋付溝３（西から）

図版 11　L-14



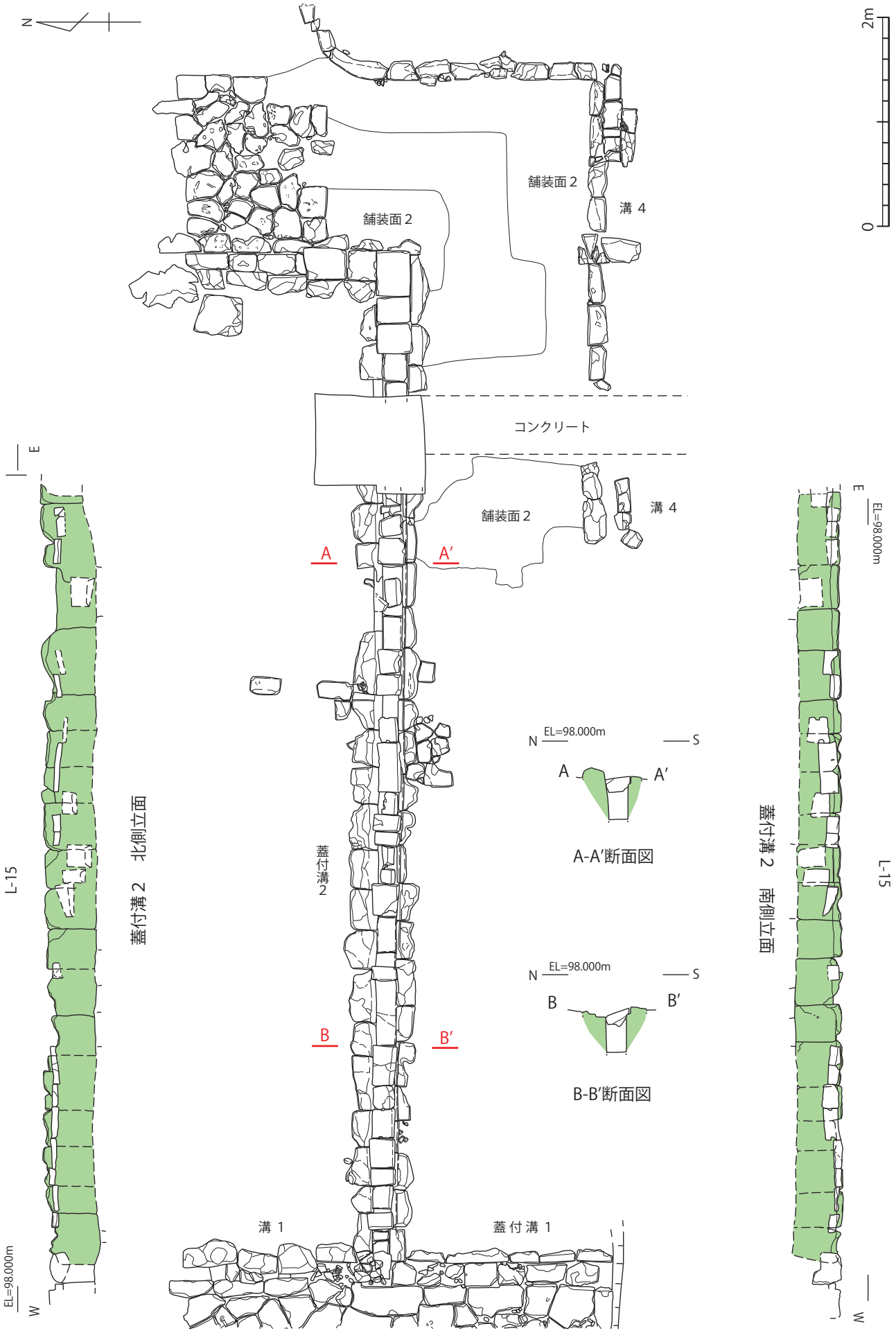
第 22 図　I-15 TP 6

TP 6　南壁

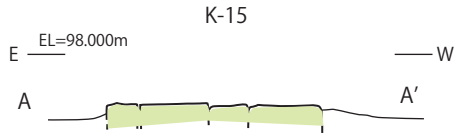
TP 6　Ⅳ層　中国産褐釉陶器壷出土状況

TP 6　Ⅳ層　中国産褐釉陶器壷出土状況

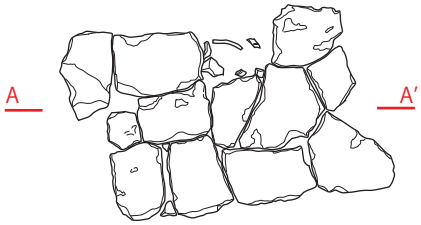
図版 12　I-15 TP 6



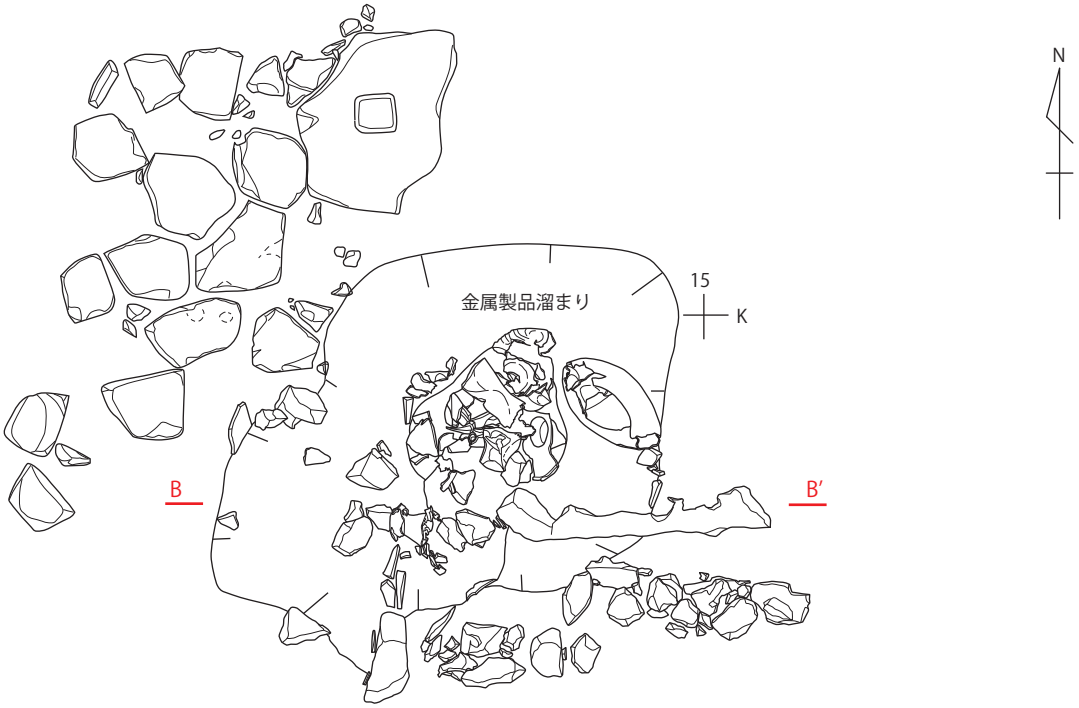
第 23 図　L-15　溝１・４、蓋付溝１・２、舗装面２

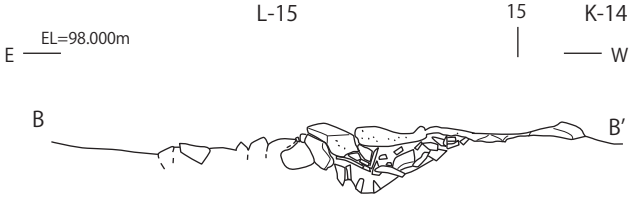


石畳 4 断面

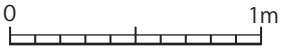


石畳 4





金属製品溜まり断面



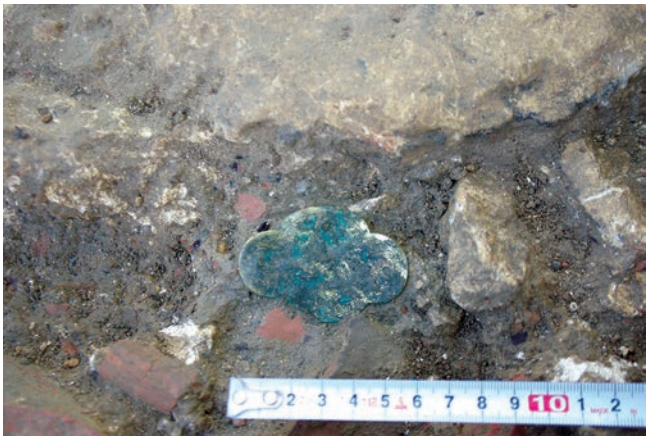
第 24 図　K-15、L-14・15　石畳 4、金属製品溜まり

L-15　遺構検出状況（北から）

L-15　北壁

溝１　石畳１（北から）

L-15　東壁



石畳１　金属製品出土状況

図版 13　L-15 ①

L-15　蓋付き溝２（東から）

金属製品溜まり検出作業状況

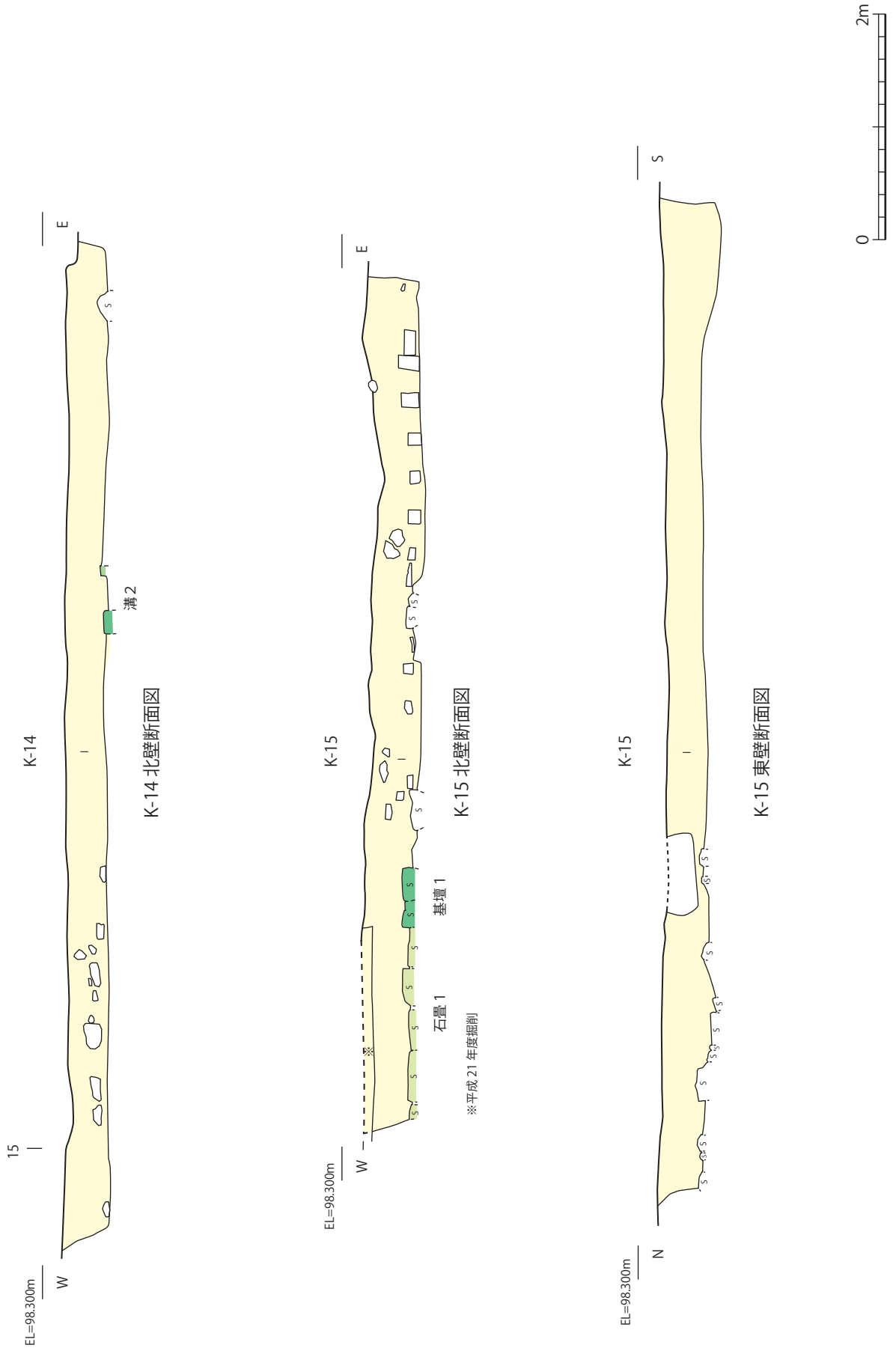
金属製品溜まり検出状況

L-15　遺物出土状況

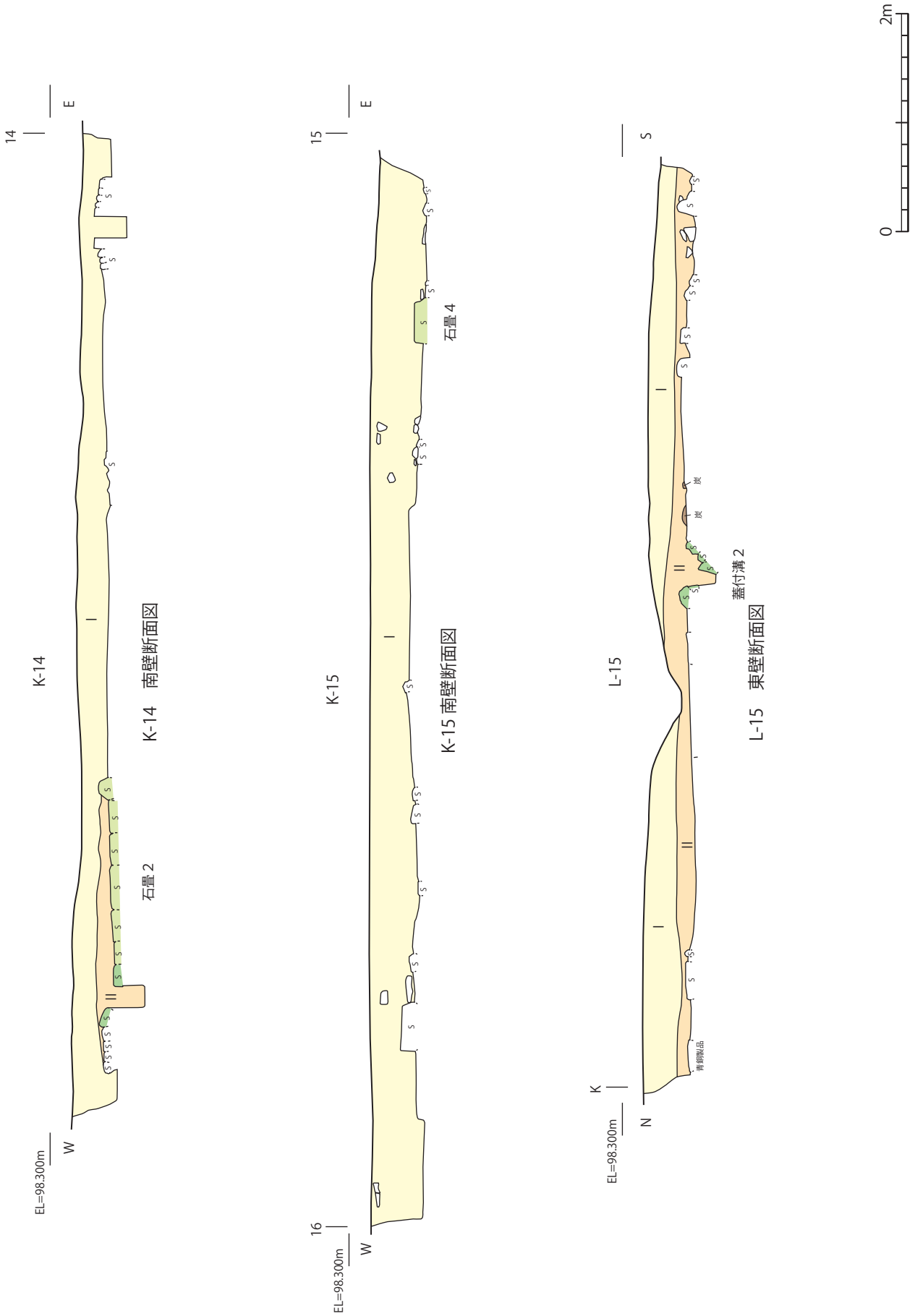
蓋付溝２　断面①（東から）

蓋付溝２　断面②（西から）

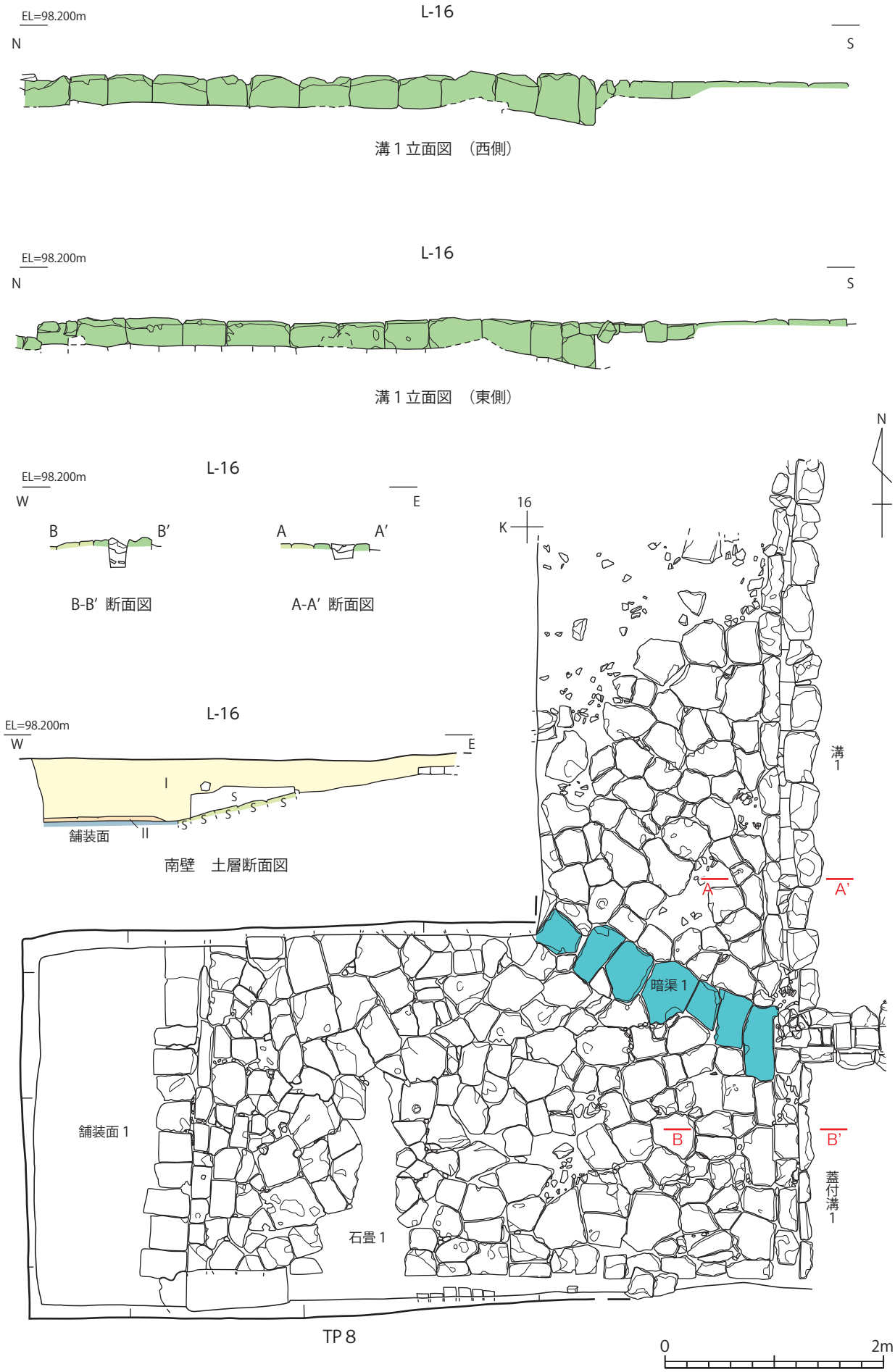
図版 14　　L-15 ②



第 25 図　K-14・15 北壁、K-15 東壁



第 26 図　K-14・15 南壁、L-15 東壁



第 27 図　L-16 TP8　石畳１、蓋付溝１、暗渠１

L-16 TP 8　遺構検出状況（西から）

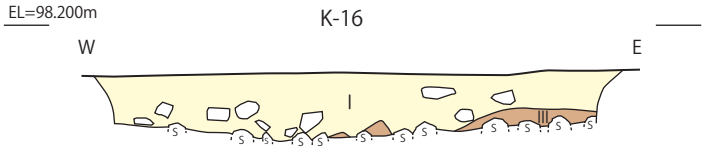
L-16　石畳１傾斜部・舗装面１検出状況（北から）

L -16　ベルト断面（西から）

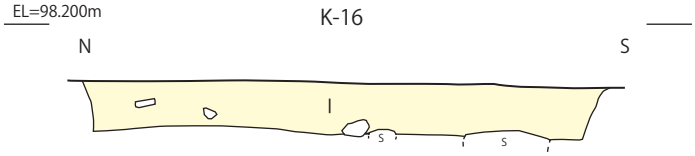
L-16　炭化物出土状況（東から）

L -16　暗渠１（東から）

図版 15　L-16 TP 8



TP 9　北壁



TP 9　西壁

第 28 図　K-16　TP9

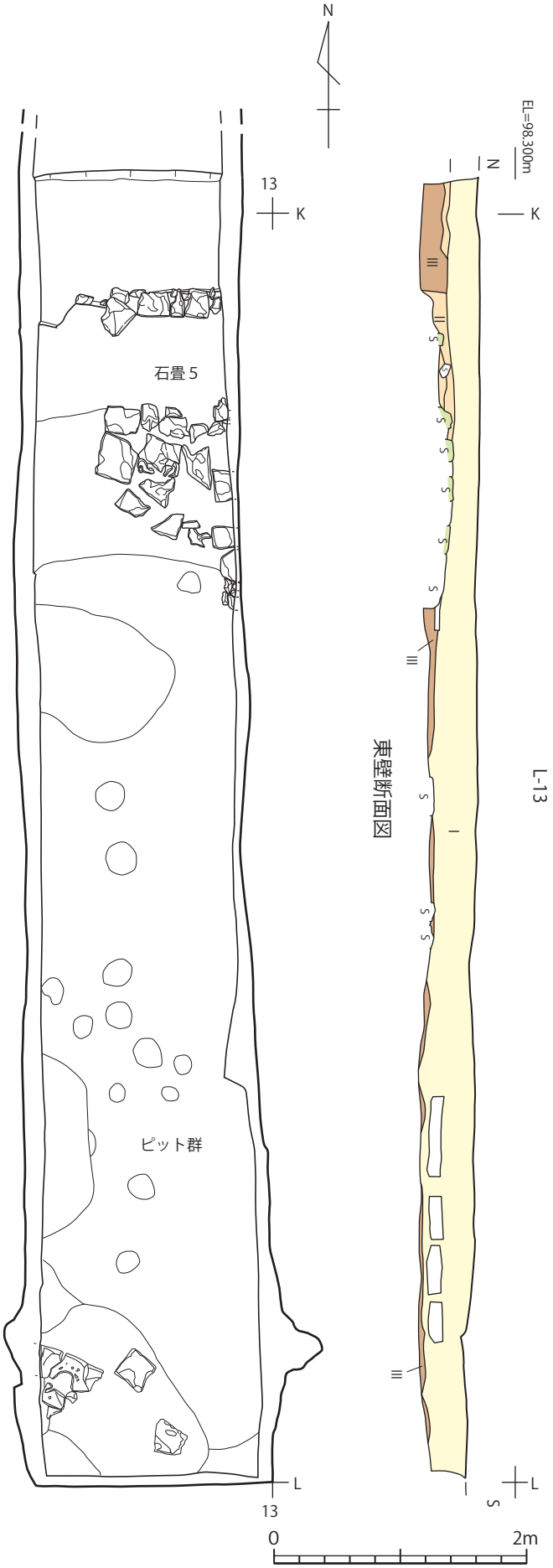
TP 9　遠景（西から）

TP 9　北壁

TP 9　完掘状況（南から）

TP 9　西壁

図版 16　K-16 TP 9



図版 17　L-13　石畳５、ピット群 ①

第 29 図　L-13　石畳５、ピット群 ①

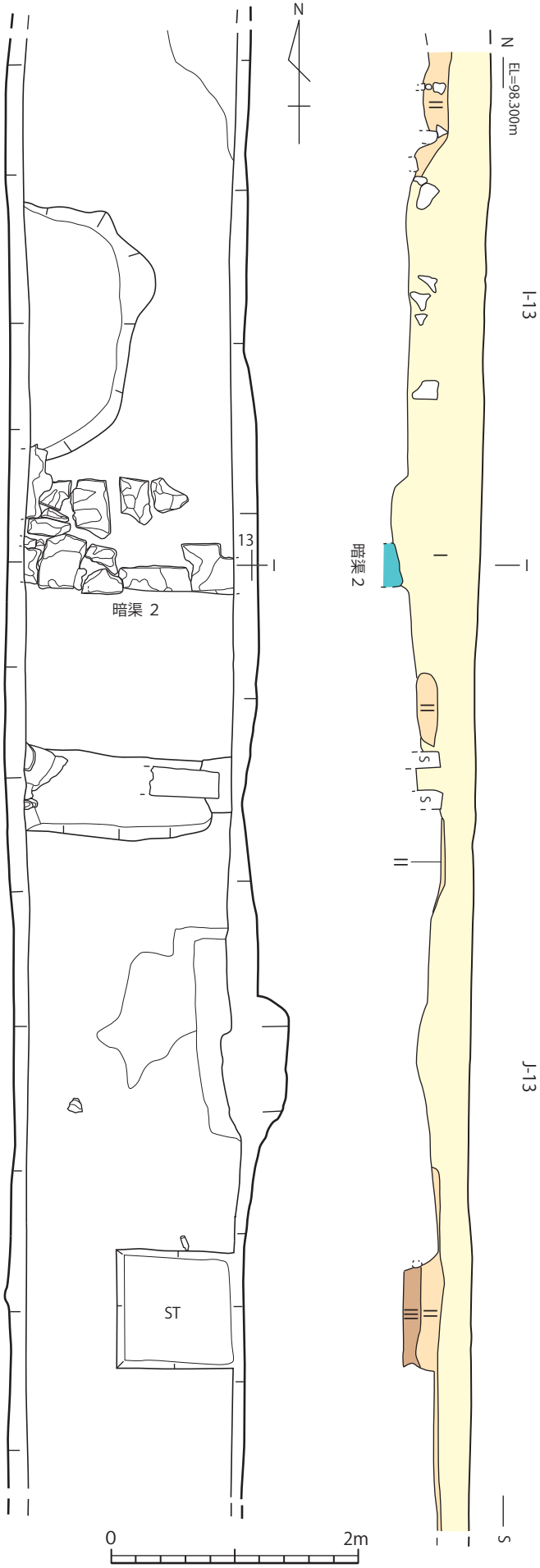
L-13　ピット群南側

L-13　ピット群北側
図版 18　L-13　石畳 5、ピット群 ②

L-13　石畳 5 南側

L-13　石畳 5 北側

図版 19　L-13　石畳 5、ピット群 ③



図版 20　I・J-13　暗渠 2
第 30 図　I・J-13　暗渠 2

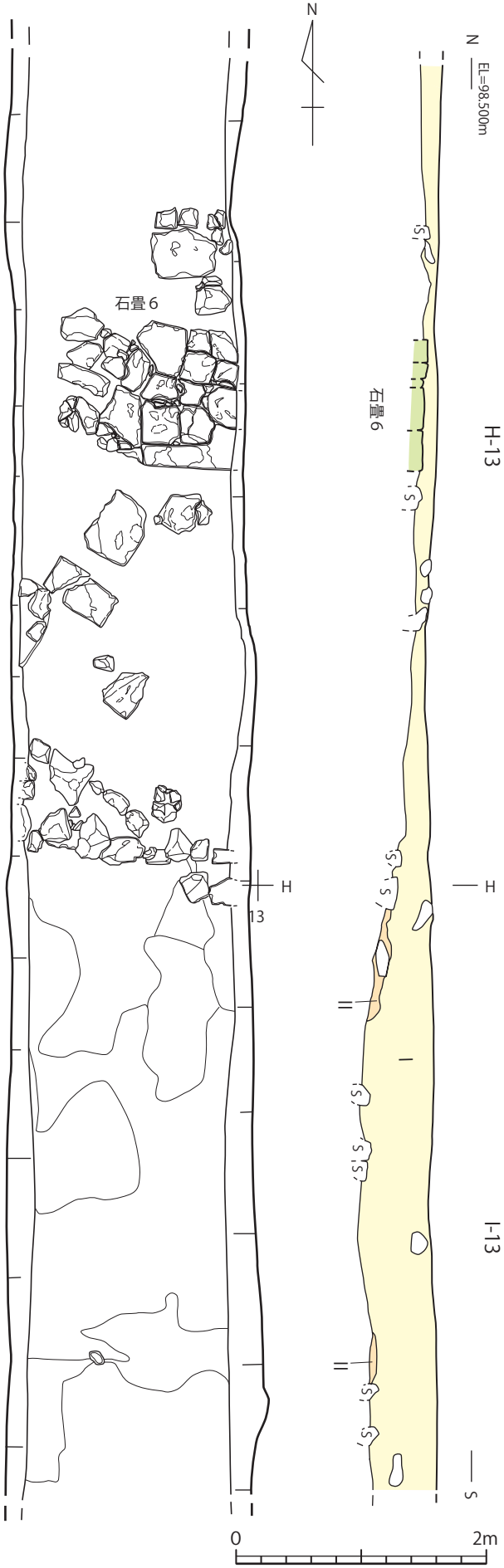
J-13　サブトレ付近

J-13　サブトレ東壁
図版 21　I・J-13 ①

I-13　暗渠付近

I-13　暗渠付近（北側）

図版 22　I・J-13 ②



図版 23　H・I-13　石畳 6

第 31 図　H・I-13　石畳 6

I-13　北側

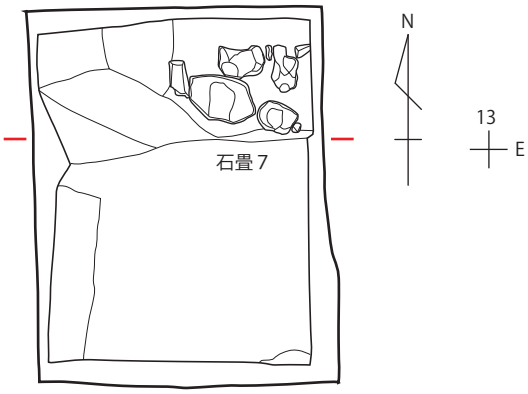
H-13　石畳 6

図版 24　H・I-13 ①

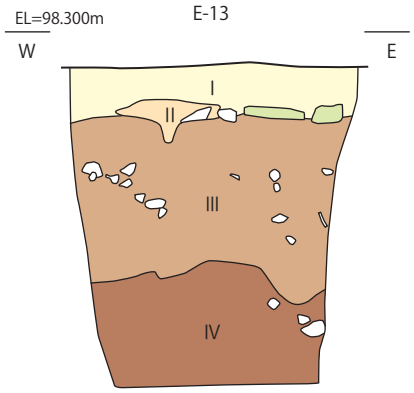
H-13　石畳（南側）

遺構検出作業風景

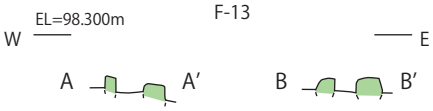
図版 25　H・I-13 ②



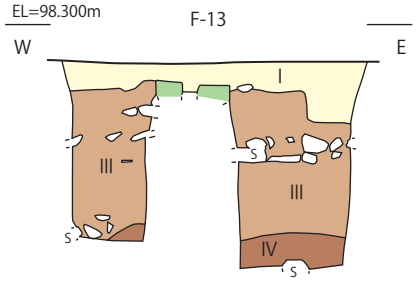
TP12



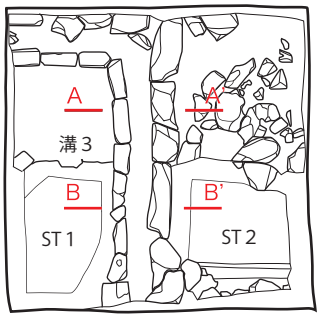
TP12　北壁断面図



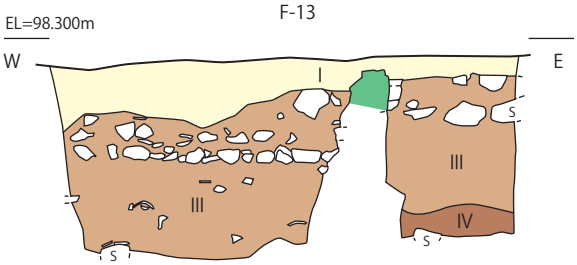
溝３断面



TP13　南壁断面図

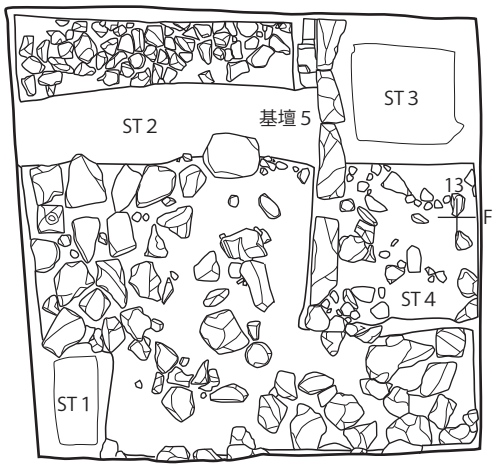


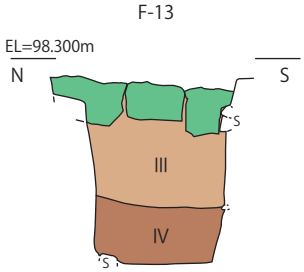
TP13



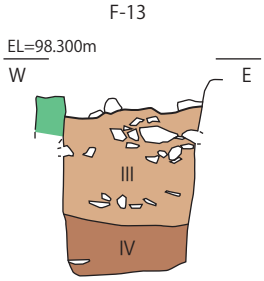
TP14　北壁断面図

TP14

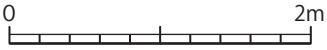




ST３　西壁断面図



ST３　南壁断面図



第 32 図　E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14　石畳７、溝３、基壇５

F・G-13 TP13・14　遺構検出状況（北から）

TP14 ST 2　北壁

TP14 Ⅲ層　簪（ジーファー）出土状況

TP14 ST 2　Ⅱ層　遺物出土状況

TP14 ST 2　Ⅲ層　遺物出土状況

図版 26　F・G-13 TP12・13・14 ①

TP14 Ⅳ層　瓦溜まり検出時（東から）

TP14 Ⅳ層　瓦溜まり完掘時（東から）

図版 27　E・F-13 TP12・13・14 ②

TP14 サブトレ 2 Ⅲ層　遺物出土状況

TP12 Ⅳ層　遺物出土状況（北西から）

図版 28　E・F-13 TP12・13・14 ③

TP12　北壁

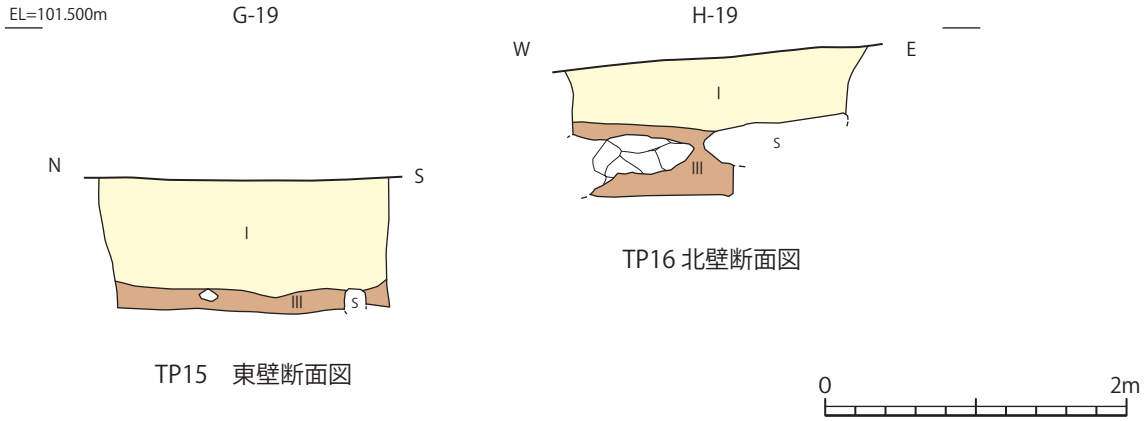
TP12　東壁

図版 29　E・F-13 TP12・13・14 ④

TP13　溝４完掘状況（南から）

TP13　溝４断面

図版 30　E・F-13 TP12・13・14 ⑤



第 33 図　G・H-19 TP15・16

TP15　遺物出土状況（東から）

TP15・16　遠景（北東から）

TP16　完掘状況（東から）

図版 31　G・H-16 TP15・16

第５章　遺物（金属製品）

本章での報告対象の金属製品は 1835 点であり、出土した殆どが破片資料であることと、経年劣化による破損が見られることから、用途不明のものが大半を占めている。これらの中でも本章では原形が窺えるものを優先的に報告する。

銅製品は比較的、原形を留めているものが見られる一方で鉄製品は錆化が進行しているものが多く、釘、鎹以外に原形を留めているものはほとんど確認することができなかった。とくに銅製品では飾り金具類で鍍金と細やかな彫金が施されるものを多数見ることができ、かなり大型の製品も 10 点以上見られた。これらの製品は主に首里城跡や円覚寺跡等で出土している遺物に共通点を見出せることから、中城御殿が首里王府と密接に関連する施設であったことを示す重要な遺物であると言える。

また、真鍮製の飾り金具や把手が確認されていることも注目される。真鍮製品は主に煙管の雁首や吸口、簪にほぼ限られていたが、中城御殿からはそれ以外の製品で真鍮製が確認されたことは、やはり他の遺跡とは性格が異なる遺跡であるといえる。

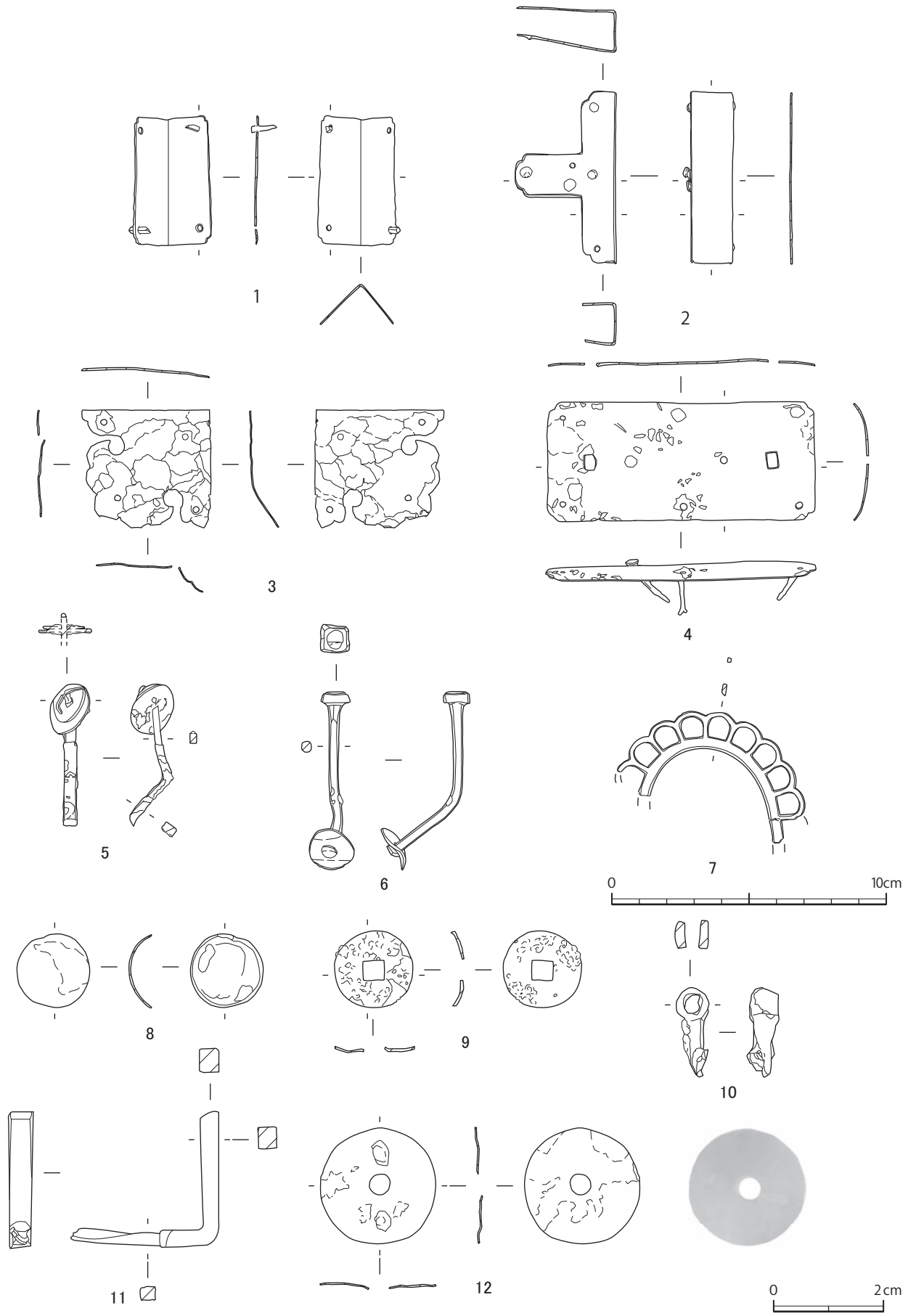
金属製品はそれぞれ用途ごとに銅製品は建具、飾り金具、器物、宗教具・茶道具、煙管、簪に、鉄製品は釘、鎹に分類し、1 点のみを報告するものに関してはまとめて、その他に分類した。また、用途不明であるが、文様が施される破片資料は全て飾り金具として報告する。

第１節　建具

縁金具や座金具、軸釘、吊金具、襖の取っ手等、建物に関係すると思われる金具をここで対象とした。また、調度品に付属すると思われる縁金具は第８節でまとめて報告した。

第４表　建具観察表

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第34図 図版32	1	銅製品	縁金具	10.5	K-14 Ⅱ層溝２内	角部が角欠きされた板状の銅板をL字に折り曲げている。また、鋲を通す小孔が四隅に開けられている。芯部が方柱状となる鋲が２か所の孔に残っている。文様は見られない。
第34図 図版32	2	銅製品	留め具	17.44	K-14 Ⅰ層	板材等を繋ぐための留め具。十字に切り取った銅板をコの字状に曲げ、Ｔ字状となる。鋲を留める孔が裏表面に12か所開けられている。角部は２つの円弧をモチーフとした角欠きがなされている。厚さ約1㎜。
第34図 図版32	3	銅製品	縁金具	7.5	K-14 Ⅱ層溝2内	床飾りや櫃などの調度品の端部に取り付く縁金具か。板状製品を花咲形に縁取り、４カ所の小孔が開けられている。文様は見られない。厚さ約１㎜。
第34図 図版32	4	銅製品	板状製品	37.3	L-16 TP8Ⅰ層	欄干に取り付く板状製品か。方孔が２か所、円孔が６か所開けられる。円孔には鋲が３か所残る。角部は角欠きがなされる。文様は見られず、縦断面は弓形状に屈曲する。縦約4.4㎝、横約9.8㎝、厚さ約３㎜。
第34図 図版32	5	銅製品	軸釘	10.5	L-15 Ⅰ層	折れ曲がっているがほぼ、完形である。径の異なる２枚の座金具が付属している。端部は外側へ大きく反る。
第34図 図版32	6	銅製品	吊り具	8.2	L-15 Ⅰ層	端部は方形状の笠が見られ、もう一方の端部は円盤状の笠となり、打痕が見られる。厚さ約1㎜の座金具が附属している。芯部の断面形は楕円状となる。
第34図 図版32	7	銅製品	引手金具	6.7	K-15 Ⅰ層	引手金具の菊座。花弁は透かしとなり、内側の引手部は楕円形状となる。厚さ約３㎜。
第34図 図版32	8	銅製品	円球状製品	0.7	L-14 Ⅱ層	円球状製品。文様は見られない。鋲の笠部か。直径約1.3㎝。
第34図 図版32	9	銅製品	座金	0.7	K-14 Ⅱ層	中央に正方形の孔が見られる。文様は見られず、断面形は弓形状となる。直径約1.4㎝。
第34図 図版32	10	銅製品	吊り金具？	0.9	L-15 Ⅱ層溝2内	吊り金具若しくは取っ手に付属する釘か。頭部は鐶を取り付けるための孔が開けられる。
第34図 図版32	11	銅製品	軸釘	4	L-14 Ⅱ層溝内	Ｌ字状に折れており、端部には反りが見られる。
第34図 図版32	12	銅製品	座金	1.3	K-14 Ⅰ層石敷	文様は見られず、中央に真円形の孔が開けられている。直径約2.1㎝、厚さ約1㎜。



第 34 図　建具

図版 32　建具

第２節　器物

蓋、取っ手、瓶が見られる。蓋が最も多く確認されており、バリエーションも多く見られる。取っ手は器物に附属するものを主に対象とした。

第５表　器物観察表

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第35図 図版33	13	銅製品	蓋	210	K-14 Ⅱ層溝2内	独楽状の摘みが中央に取り付く。摘みの上面には渦巻きの連続文が、摘みと蓋本体の接続部には沈線による文様が施される。草花文と思われるが、錆により不鮮明となる。やや厚みがあり、断面形はほぼ平坦である。裏面には浅い掛かりと摘みを留める鋲と座が見られる。
第35図 図版33	14	銅製品	蓋	84	K-14 Ⅱ層溝2内	摘みは歪な球状となり、摘みと蓋本体部との間には菊座を咬ましている。円形と扇形の透かし文様が見られることから、香炉の蓋である可能性が指摘される。高さ3.7㎝、直径9.5㎝。
第35図 図版33	15	錫	蓋	83.1	I-14 TP2北Ⅰ層	薬缶の蓋か。摘みは円柱状となり、蓋甲部がくぼむ。外側へ拡がる掛かりが見られる。一部が錆化により変形しているが、ほぼ原形を保っている。高さ3.7㎝、直径9.5㎝。
第36図 図版34	16	銅製品	蓋	270	K-14 Ⅱ層	甲頂部は扁平で端部は窪みを持たせてから上方へ僅かに反る。縁は平坦に仕上げて、裏面には小さな掛かりが付く。裏面中央には鋲の頭部が見られることから、甲部中央に摘みが取り付いていたものと思われる。一部、歪みが見られる。直径は11.9㎝、厚さは甲頂部で0.5㎝、端部で0.4㎝となる。
第36図 図版34	17	銅製品	蓋	170	L-14 Ⅰ層	２次的に火を受けており変形している。甲部と内面にはそれぞれ段が見られ、甲部の外縁近くに４条の圏線が見られる。中央部あたりと端部の厚さは３㎜で、屈曲部の厚さは５㎜とやや厚みを有する。直径は16㎝。
第36図 図版34	18	銅製品		279	L-15 Ⅱ層ドウ一括	壺または瓶の高台部か。破損により大きく変形しているが、末広がりに開く、方形の筒状になると思われる。縦位に半円状の突帯が2条見られ、その内部に横位の沈線が見られる。厚さは５㎜で突帯の幅は７㎜。大きく開く胴下部が一部見られる。
第36図 図版34	19	銅製品	取っ手	40.6	L-14 Ⅱ層	調度品等に取り付く取っ手か。楕円形状に屈曲し、両端には長さ約３㎝の鋲が付く。中央部分の断面形状は直径７㎜の円形状となり、端部近くは直径５㎜とやや小さくなる。端部は鋲が外れないように傘状に肥厚する。有鐶付きの鋲は銅板を曲げて成形している。
第37図 図版35	20	銅製品	蓋	40.5	L-15 Ⅱ層ドウ一括	方形状の蓋。縁が曲がり、一部が欠損しているものの、全形は窺うことができる。厚さは３㎜で、内外面共に文様は見られない。また、直径5㎜前後の歪な円孔が2か所に見ることができる。縦14.8㎝、横26.5㎝、縁の高さは1.6㎝。
第37図 図版35	21	銅製品	取っ手	285	K-14 Ⅱ層溝2内	大型の器に付く取っ手で、端部が屈曲している以外はほぼ原形を保っている。持ち手部分の断面形は縦位の方形状となり、端部は横位の方柱状となる。両端部には嵌め込みのための小型の突起が見られ、片側には縦1.6㎝、横1㎝、幅0.5㎝の、方柱状の鐶状金具が取り付く。

第３節　飾り金具

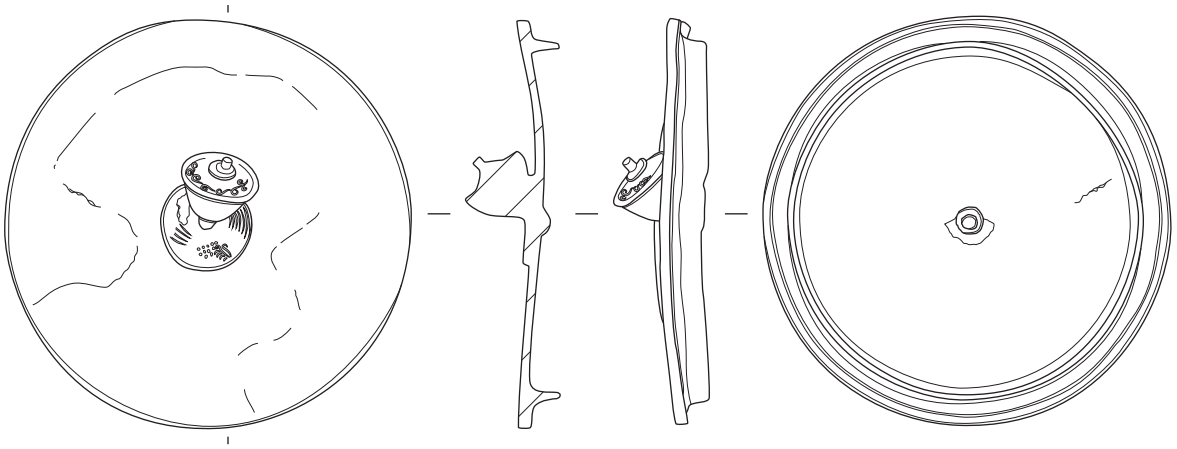
主に彫金が施される金具を中心に取り上げた。八双金具には鍍金が施され、また細かな彫金で唐草文が描かれているものが多数みられる。

第６表　飾り金具観察表１

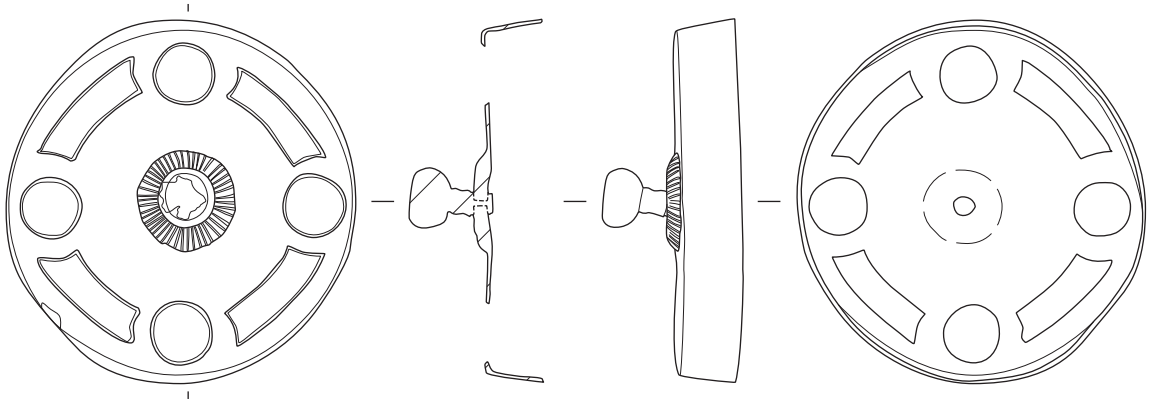
挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第38図 図版36	22	銅製品	座金	13.8	K-14 Ⅱ層	鐶付き座金。座金の縁辺部を鋸歯状に縁取り菊花の弁先を表す。弁先の突端は丸く収め、弁間の沈線は施されない。鋲の先端は二又状に分かれている。座金の厚みは２㎜で鐶の直径は3.1㎝、鐶の厚さは7㎜。
第38図 図版36	23	銅製品	座金	9.5	K-14 Ⅰ層	鐶付き座金。座金の縁辺部を鋸歯状に縁取り菊花の弁先を表す。弁先の突端は尖り、弁間を表す沈線が見られる。鋲の先端は二又状に分かれているが、一部が欠損している。座の厚みは２㎜で鐶の直径は3.1㎝。
第38図 図版36	24	銅製品	座金	7.2	K-14 Ⅱ層	鐶付き座金。文様は見られない。楕円形状の鐶が付き、鋲の先端は二又に分かれ、さらに小さな直径7.2㎝の座金具が付く。座の厚みは２㎜で鐶の直径は2.1㎝、鐶の厚さは6㎜
第38図 図版36	25	銅製品	座金	5.3	表採	菊座で中央に長方形の孔が開けられる。花弁は肉彫りであらわされており、縁辺部は鋸歯状となる。僅かに鍍金が残る。厚みは２㎜
第38図 図版36	26	銅製品	座金	11.1	J-14 TP3Ⅱ層溝2内	鐶付き座金。座金の縁辺部を鋸歯状に縁取り菊花の弁先を表す。
第38図 図版36	27	銅製品	棒状製品	25.1	L-14 Ⅱ層	くの字状に曲がる直径8㎜の棒状製品で端部は傘状に肥厚する。両端には大小の菊座の座金がそれぞれ2つ付く。座金は棒状製品の端部が表面になるように取り付いていることから、把手としての可能性は低いものと思われる。
第38図 図版36	28	銅製品	板状製品	14.5	K-14 Ⅱ層溝2内	摘みと菊座が取り付く板状製品。銅板は厚さ２㎜で縁辺部に円孔が3か所、見られる。また端部が直角に折れ、長方形上の方孔が縦位に開けられている。裏面には帯状の銅板が摘みと端部で接続し、もう一方の端部は銅板の方孔から突出している。錠前の一部か。

第７表　飾り金具観察表２

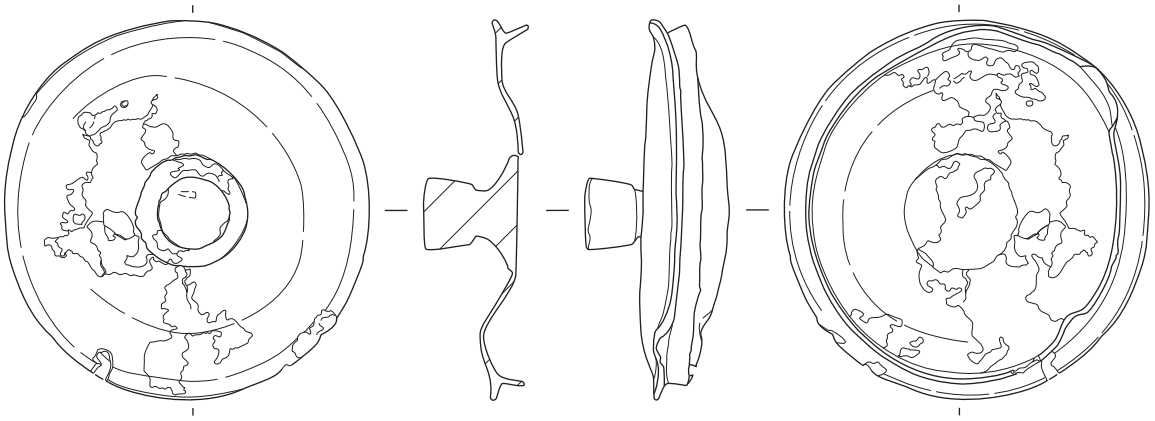
挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(ｇ)	グリッド・層	所見
第38図 図版36	29	銅製品	座金	13.4	K-14 Ⅱ層溝2内	両面共に中央の円孔から放射状に延びる沈線が見られる。中央部の厚み５㎜で端部は2.5㎜と薄くなる。鋳造品か。
第39図 図版37	30	銅製品	八双金具	7.2	L-15 Ⅱ層溝2内	表面には鍍金が施され、蹴り彫りによるやや大振りの唐草文が描かれる。魚々子は基本的に充填打ちであるが縦列打ちが一部見られる。また、空白部も見られる。文様は下方から上方へ向けて、幅広の蔓を持つ唐草が展開していく。端部は破損が見られるものの、細身の花咲状に縁取られてた出八双であることが分かる。留め釘用の直径約2㎜の孔が2カ所に見られる。琉球製。
第39図 図版37	31	銅製品	八双金具	9.24	L-15 Ⅰ層石敷清掃	表面には鍍金が施され、蹴り彫りによる唐草文が描かれる。唐草の蔓は細身で下方から上方へ向けて展開していく文様である。魚々子は、縁部は縦列打ちで、唐草周辺は充填打ちが主に見られる。また、一部に空白部がある。留め釘用の直径約2㎜の楕円形状の孔が2カ所に見られる。端部は大きく変形しているが全体的に残存状況は良好である。琉球製か。厚さ１㎜、重量9.24ｇ。
第39図 図版37	32	銅製品	八双金具	25.9	L-15 Ⅰ層	錆化と破損が著しいが、文様構成は窺い知ることができる。蹴り彫りによる唐草文は細身の蔓を全体的に描き、幅広の葉を付けている。魚々子は蔓に沿って縦列打ちがなされている。端部は出八双となる。留め釘用の直径約2㎜の円孔が４カ所見られる。琉球製。厚さ１㎜
第39図 図版37	33	銅製品	八双金具	9.54	L-14 Ⅱ層溝２内	片側は魚尾状となる入八双で、もう片側は平坦となる。入八双の切れ込み中央は円孔状に縁取られる。留め釘用の直径約2㎜の円孔が３カ所見られる。全体的に錆化が進行しているため、文様構成は不鮮明であるが、魚々子は微小でかなり細い毛彫りで唐草文と思われる文様を描いているのが分かる。全長5㎝、幅3.2㎝、厚さ１㎜。
第39図 図版37	34	真鍮	飾り金具	18	K-15 Ⅰ層	調度品に付く真鍮製の飾り金具。L字状に折れ、各々文様が施される。端部は出八双様となり、それぞれの面に直径２㎜の円孔が２カ所、計４カ所開けられる。唐草は毛彫りで幅広の葉文が施される。また、魚々子は充填打ちで相互に重なりが見られる。かなり密に打たれており、空白部はほとんど見られない。また、唐草文の中に魚々子がはみ出して打たれているのが１カ所見ることができる。全長9.5㎝、幅4.5㎝、厚さ１㎜。
第39図 図版37	35	銅製品	飾り金具	15.7	K-14 Ⅱ層溝２内	調度品に付く飾り金具。破損しているものの、全形を窺うことができる。L字状に折れ、各々文様が施される。端部は破損しているが出八双様になり、もう一方は平坦になる。留め釘用の直径約2㎜の円孔が３カ所見られる。毛彫りで唐草文が施される。魚々子はやや大きい。また、充填打ちで浅く打っているため、円形にならない部分が多く見られる。空白部も見られるが、総じて密に打たれている。全長9.1㎝、幅4.6㎝、厚さ１㎜。
第39図 図版37	36	銅製品	飾り金具	8.1	L-16 TP8Ⅰ層	調度品に付く小型の飾り金具。L字状に折れ、各々文様が施される。端部は出八双様となり、それぞれの面に直径２㎜の円孔が２カ所、計４カ所開けられる。表面には鍍金される。蹴り彫りで唐草文が施される。小さい魚々子がややまばらに充填打ちされている。琉球製。裏面には別の銅製品の一部が溶着している。全長7.3㎝、幅2.6㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	37	銅製品	飾り金具	10.8	L-15 Ⅰ層	調度品に付く小型の飾り金具。端部は出八双様となり、直径２㎜の円孔が中央と両端部の計3カ所に開けられている。文様はやや幅広の蔓と小振りな葉が毛彫りで施される唐草文で、かなり小さい魚々子を密に充填打ちする。琉球製。全長10.4㎝、幅1.3㎝、厚さ1.5㎜。
第40図 図版38	38	銅製品	飾り金具	4.5	L-14 Ⅱ層	調度品に付く小型の飾り金具。直径２㎜の円孔が両端部にそれぞれ開けられている。蹴り彫りによる唐草文は中央から細身の蔓を展開させる。この文様構成から横位に取り付けられた金具である事が考えられる。小さい魚々子がややまばらに充填打ちされている。琉球製。全長7.2㎝、幅1.3㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	39	銅製品	飾り金具	29.7	L-15 Ⅰ層	大型の飾り金具で、両端は入八双となる。被熱による破損と変形が著しいが原形はL字状であったと思われる。両端には丁寧な猪目透かしが見られ、縁には6カ所の円孔が見られる。表面は鍍金され、大振りの華唐草文が毛彫りと蹴り彫りで描かれる。華唐草文の輪郭線は幅広で、先端部の文様は蕨手となる。魚々子はまばらに充填打ちされ、浅く打っているためか円形にならない部分が多く見られる。幅4.2㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	40	銅製品	飾り金具	3.6	L-14 Ⅱ層	調度品に付く小型の飾り金具。直径２㎜の円孔が両端部にそれぞれ開けられている。端部は平坦で、もう一方の端部は出八双様となる。蹴り彫りによる唐草文は中央から細身の蔓を展開させ、略化した葉文を付ける。この文様構成から横位に取り付けられた金具である事が考えられる。魚々子は小さくまばらに充填打ちされている。幅1.25㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	41	銅製品	飾り金具	3.9	L-15 Ⅱ層溝2内	調度品に付く小型の飾り金具。両端が出八双様となり、表面は鍍金される。文様は第40図38,39と同様であるが、蔓が太く、図式的になる点でやや異なる。中央部の下端が少し欠損する。魚々子は小さく、やや密に充填打ちされている。琉球製。全長7.2㎝、幅1.2㎝、厚さ１㎜
第40図 図版38	42	銅製品	飾り金具	9	L-16 TP8Ⅰ層	木瓜形の飾り金具。一部、欠損しているがほぼ完形である。表面は鍍金され、上下左右に各々1か所直径３㎜の円孔が開けられる。蔓がやや太めの唐草文を蹴り彫りで描き、蔓の先端は蕨手となる。小さい魚々子を密に充填打ちしており、外縁部に魚々子が打たれているのを、後処理で消しているのが確認できる。琉球製。縦4.2㎝、横6㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	43	銅製品	飾り金具	29.5	K-15 Ⅰ層	大型の飾り金具で、両端は出八双となる。大きく変形しているが、全形は窺うことができる。両端には丁寧な猪目透かしが見られ、上、下の縁辺部には直径2㎜の円孔がそれぞれ3カ所、計6カ所開けられている。表面には毛彫りまたは蹴り彫りで華唐草文が全面的に描かれている。茎は太く、葉は小振りに描き、微小な魚々子がその空閑に充填される。浅く打っているためか円形にならない部分が多く見られる。琉球製か。第40図39と対になる資料と思われる。幅9.8㎝、厚さ１㎜。
第40図 図版38	44	銅製品	飾り金具	8.9	L-15 Ⅰ層	木瓜形の飾り金具。同図42と同一の形態であるが、全体的に破損を受け、大きく変形している。琉球製。縦3.9㎝、横5.7㎝、厚さ１㎜。
第41図 図版39	45	銅製品	飾り金具	29.5	K-14 Ⅱ層	隅部に取り付く飾り金具。破損に側面と端部が大きく変形している。縁は唐草の蔓を縁取るように曲線を呈し、中央には丁寧な猪目透かしが見られる。側面には列点による唐草が描かれ、正面は牡丹唐草文を前面に描く。蹴り彫りと毛彫りで大振りの牡丹文と葉文が描かれており、その空閑はやや大きめの魚々子が充填される。魚々子はまばらに打たれており、浅く打っているためか円形にならない部分が見られる。加えて、唐草文を切って魚々子が打たれていることから、唐草文を描いた後に魚々子を打っていることが分かる。これらの文様の構成から16世紀以前に位置付けられる。側面には直径２㎜の円孔が３カ所、正面には７カ所開けられている。また、２か所の孔には鋲がそのまま残るが何れも芯部は丸く変形している。円覚寺跡から類例資料が出土している。
第41図 図版39	46	銅製品	飾り金具	17.1	L-14 Ⅱ層	飾り金具。端部は平坦となるが、もう一方は欠損しているため、全形は窺えない。表面には蔓が太く、葉が小振りな唐草文が蹴り彫りで描かれている。やや大きい魚々子を密に充填打ちしているが、一部に空白部が見られる。直径２㎜の、鋲留めの円孔が４カ所開けられている。幅1.6㎝、厚さ１㎜。
第41図 図版39	47	銅製品	飾り金具	14.92	K-14 Ⅱ層溝2内	端部は出八双様となるが、もう一方は欠損しているため、全形は窺えない。大きく捻じれて変形しているものの、端部以外に欠損は見られない。表面には蔓が細く、葉が三角形状で小振りな唐草文が毛彫りと蹴り彫りで描かれている。やや大きい魚々子を密に充填打ちしており、魚々子が相互に切り合う箇所が多くみられる。直径２㎜の、鋲留めの円孔が３カ所開けられている。幅1.6㎝、厚さ１㎜。
第41図 図版39	48	銅製品	八双金具	5.5	L-15 Ⅰ層	飾り付きの鋲留め。両端は欠損しており、文様も一部が剥落する。文様は透かし彫りの唐草文を銅の地板に重ねて、肉彫り状とする。幅は1.5㎝。



13



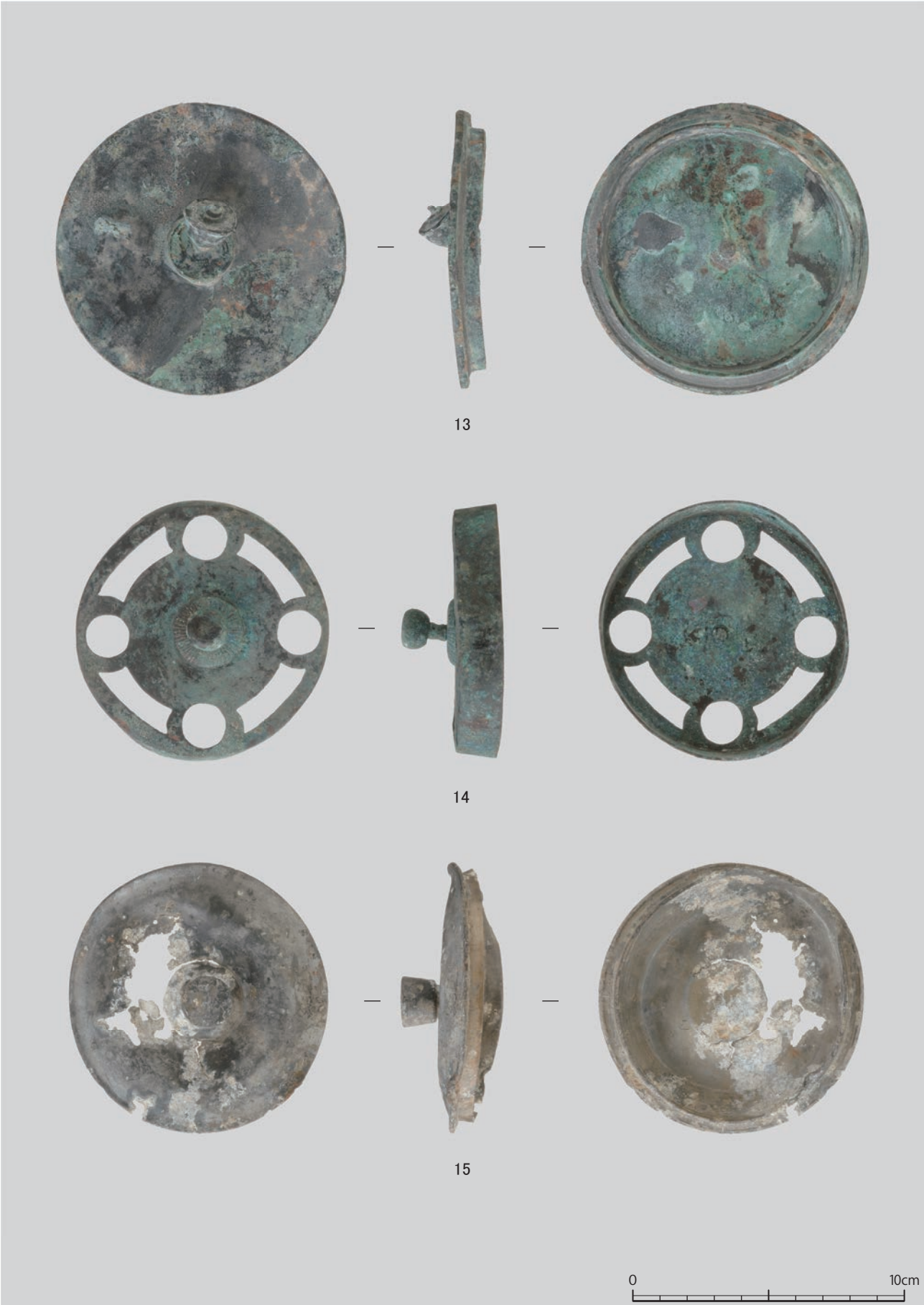
14



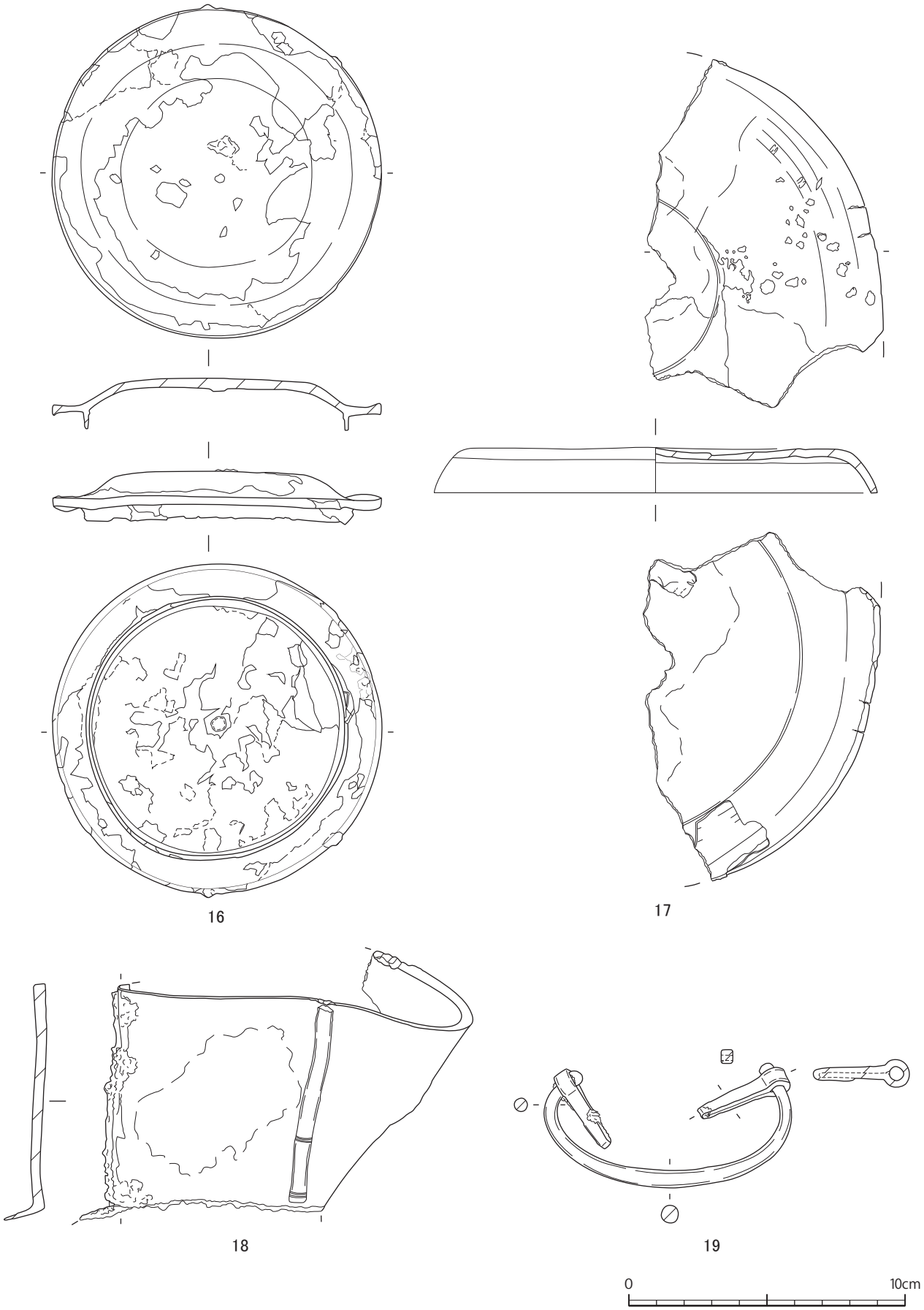
15

0 10cm

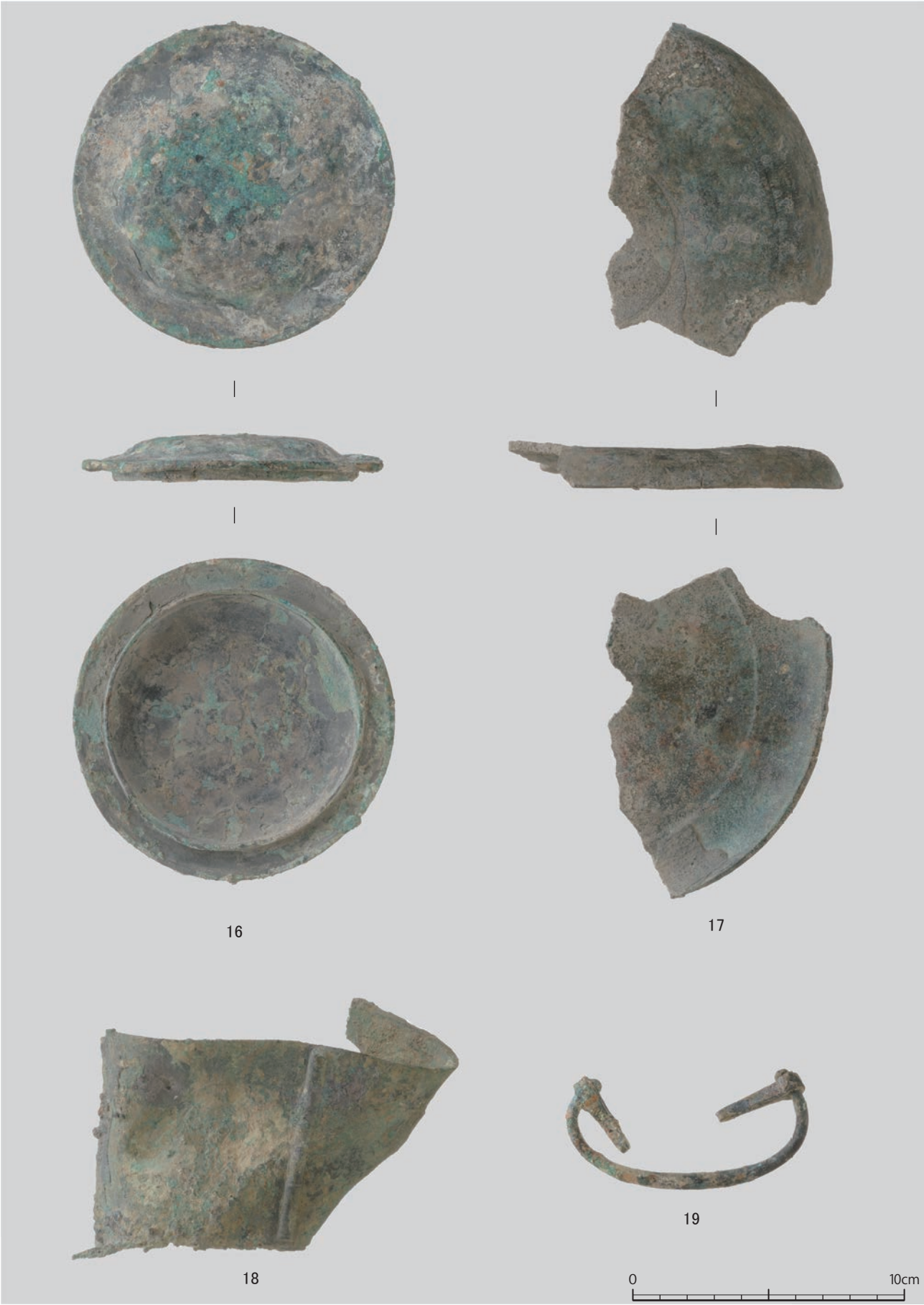
第 35 図　器物 1



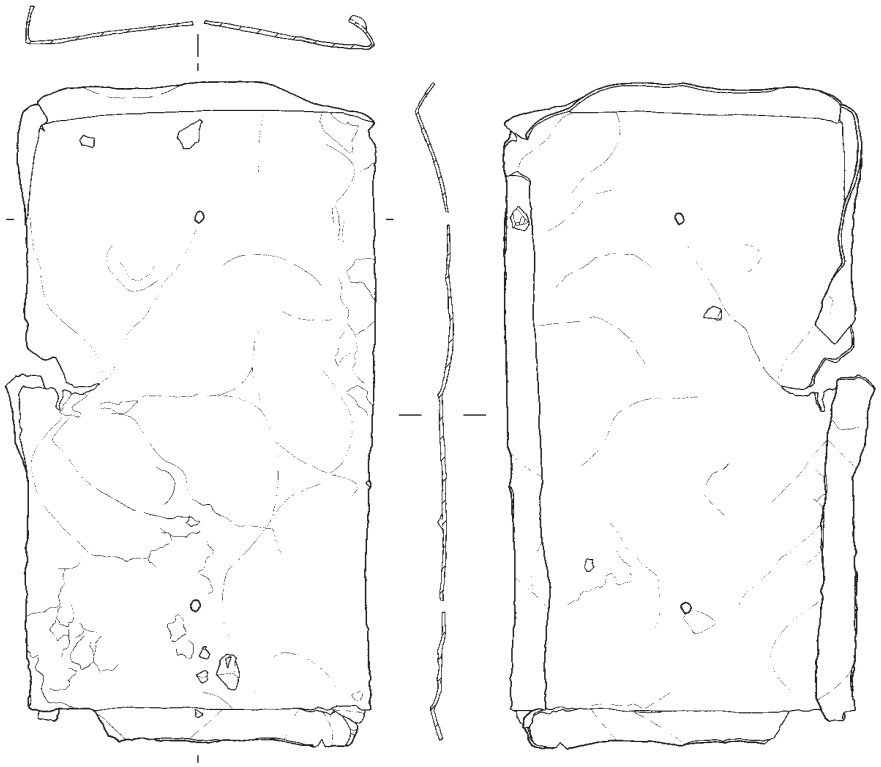
図版 33　器物 1



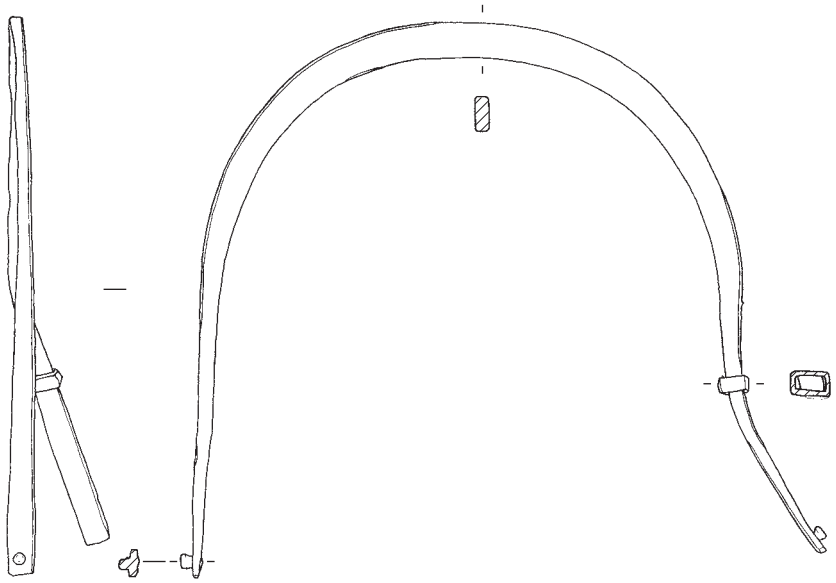
第 36 図　器物 2



図版 34　器物 2



20



21

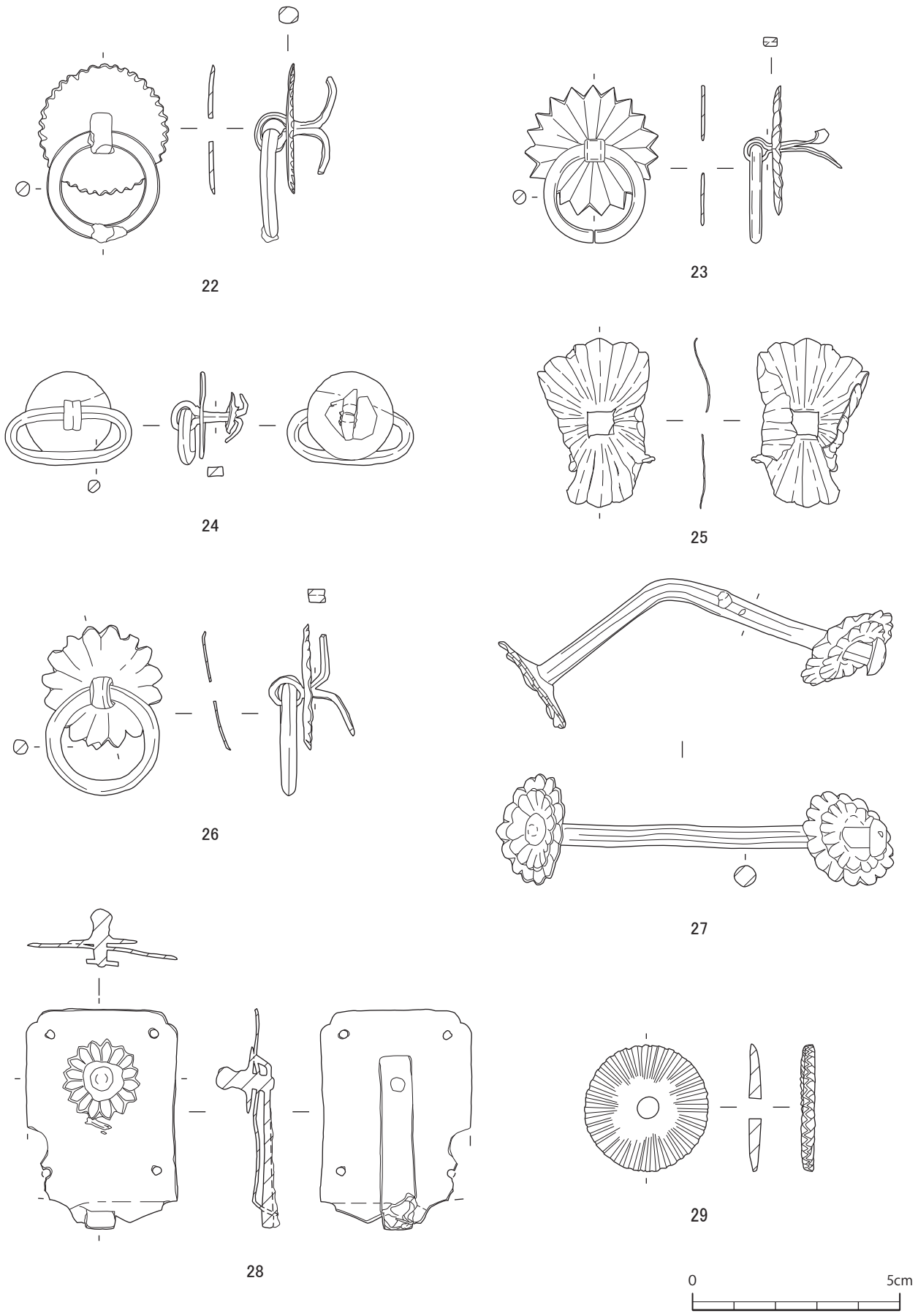
第 37 図　器物 3

20

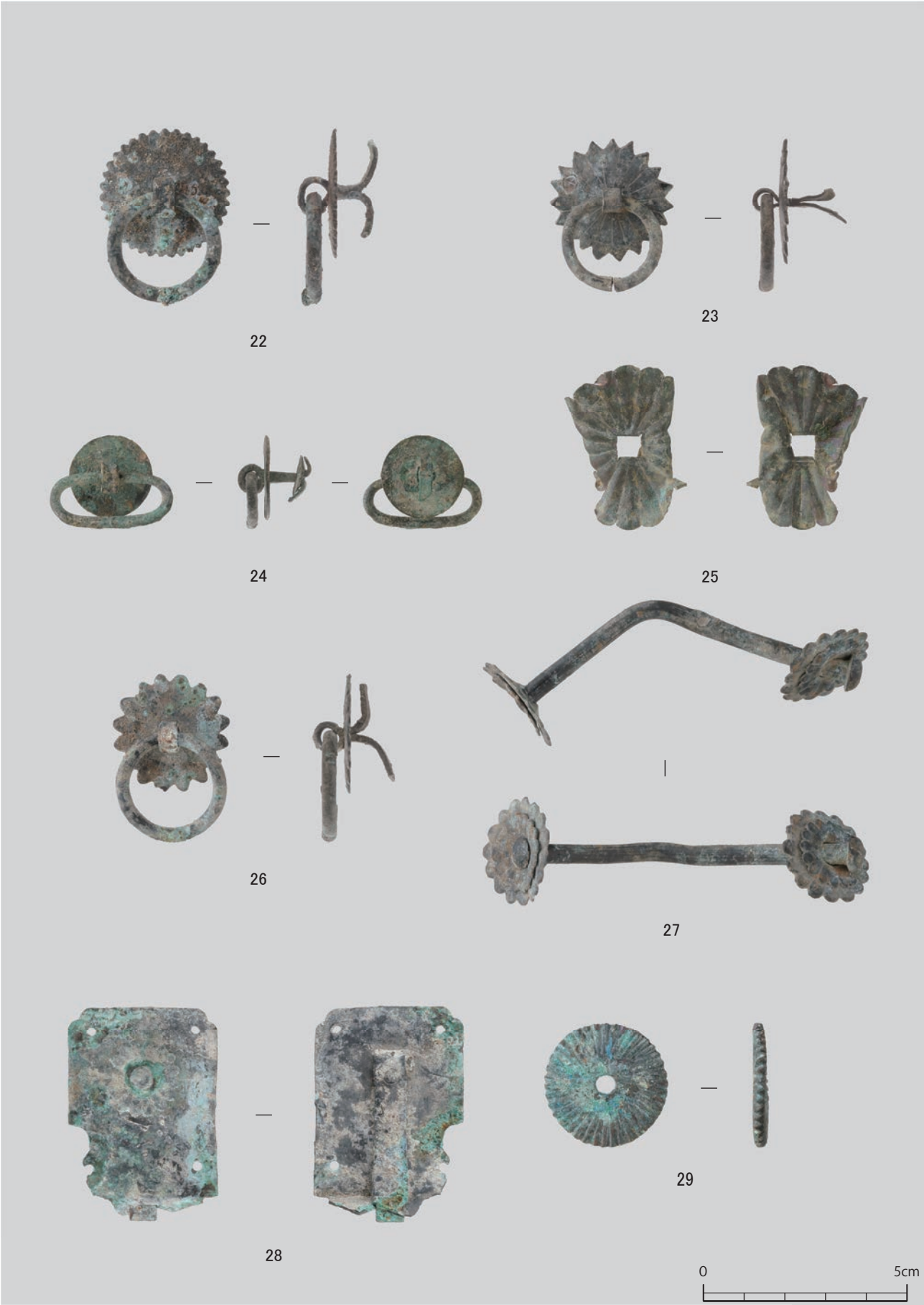
21

0 10cm

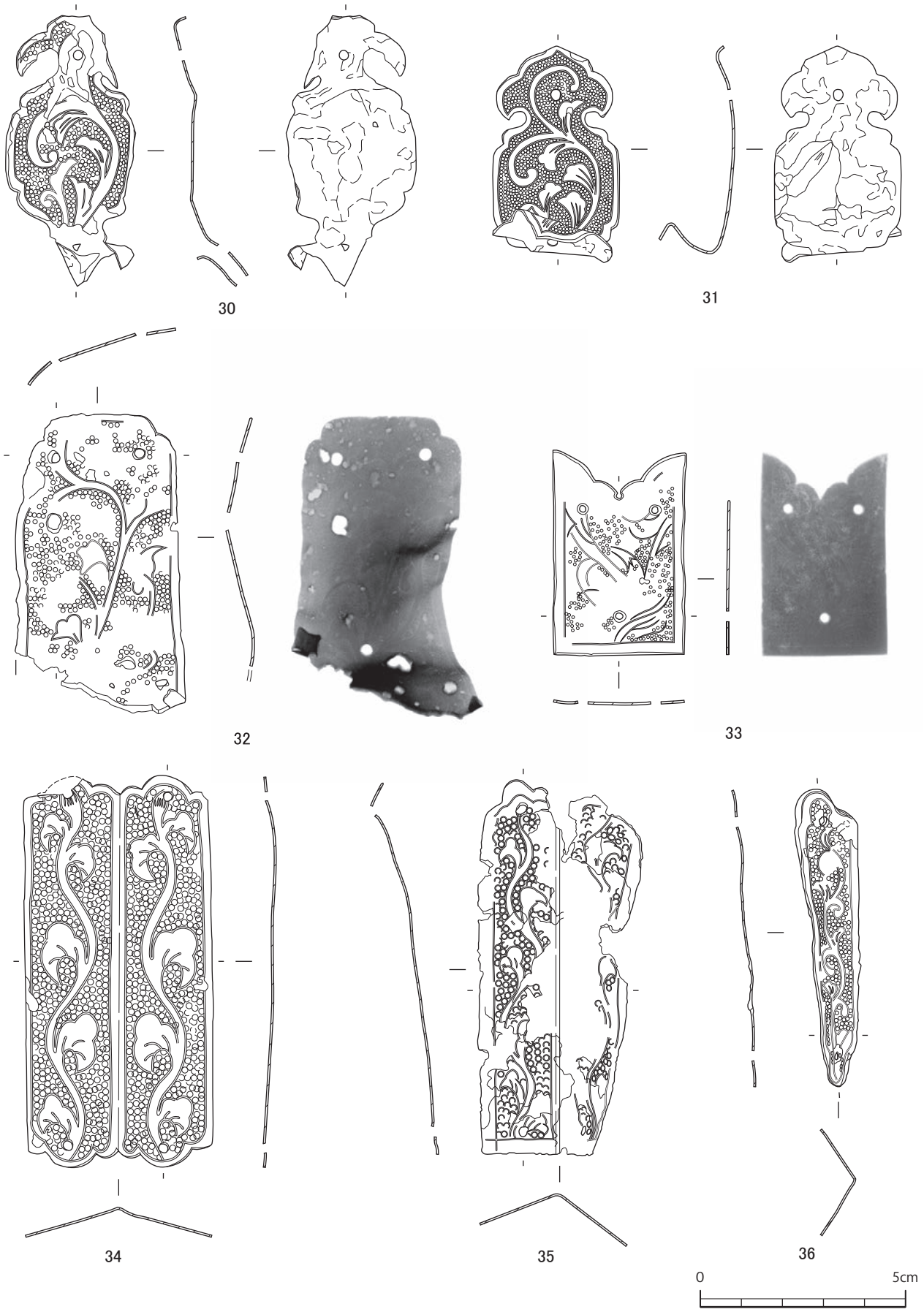
図版 35　器物 3



第 38 図　飾り金具 1

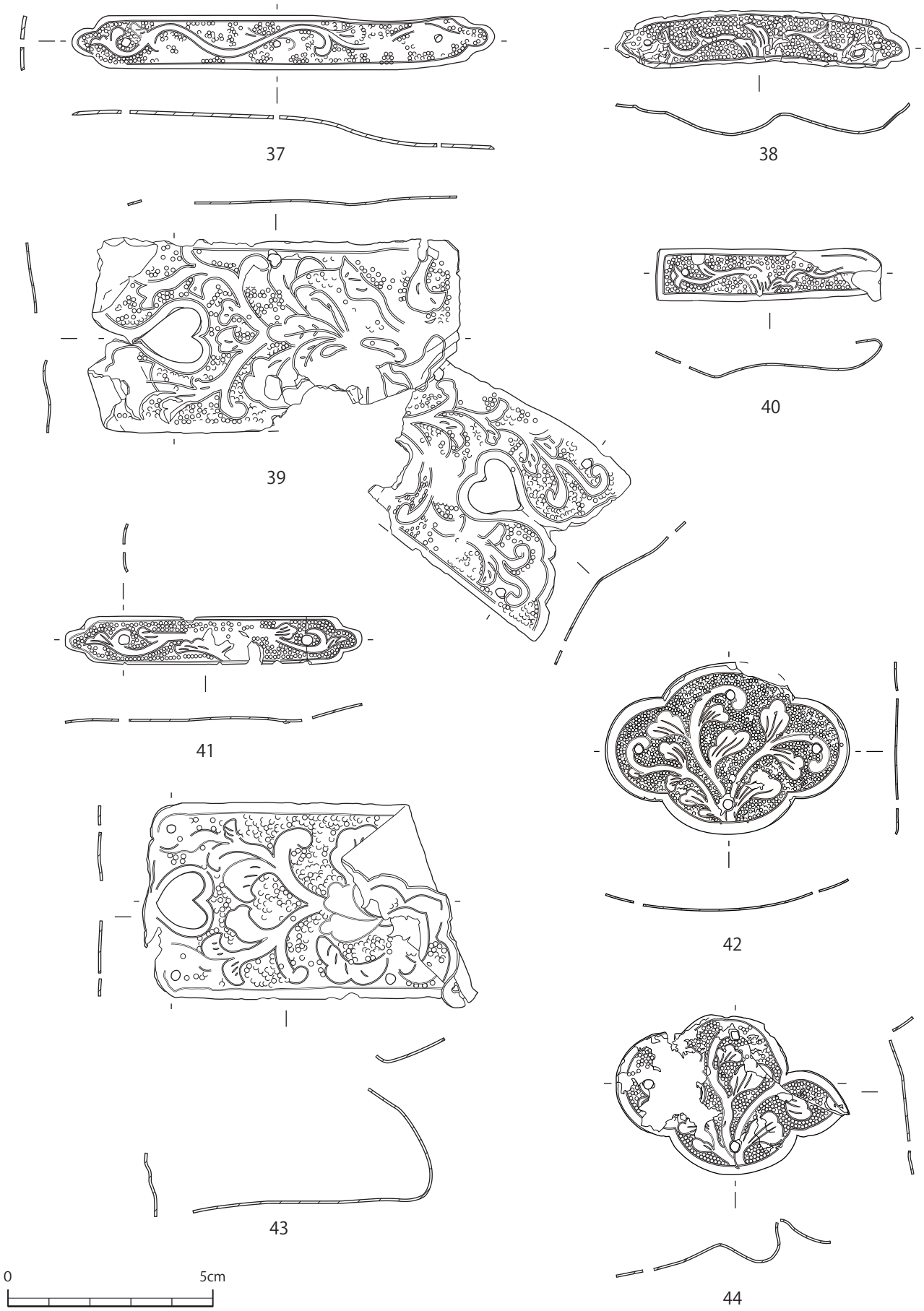


図版 36　飾り金具 1

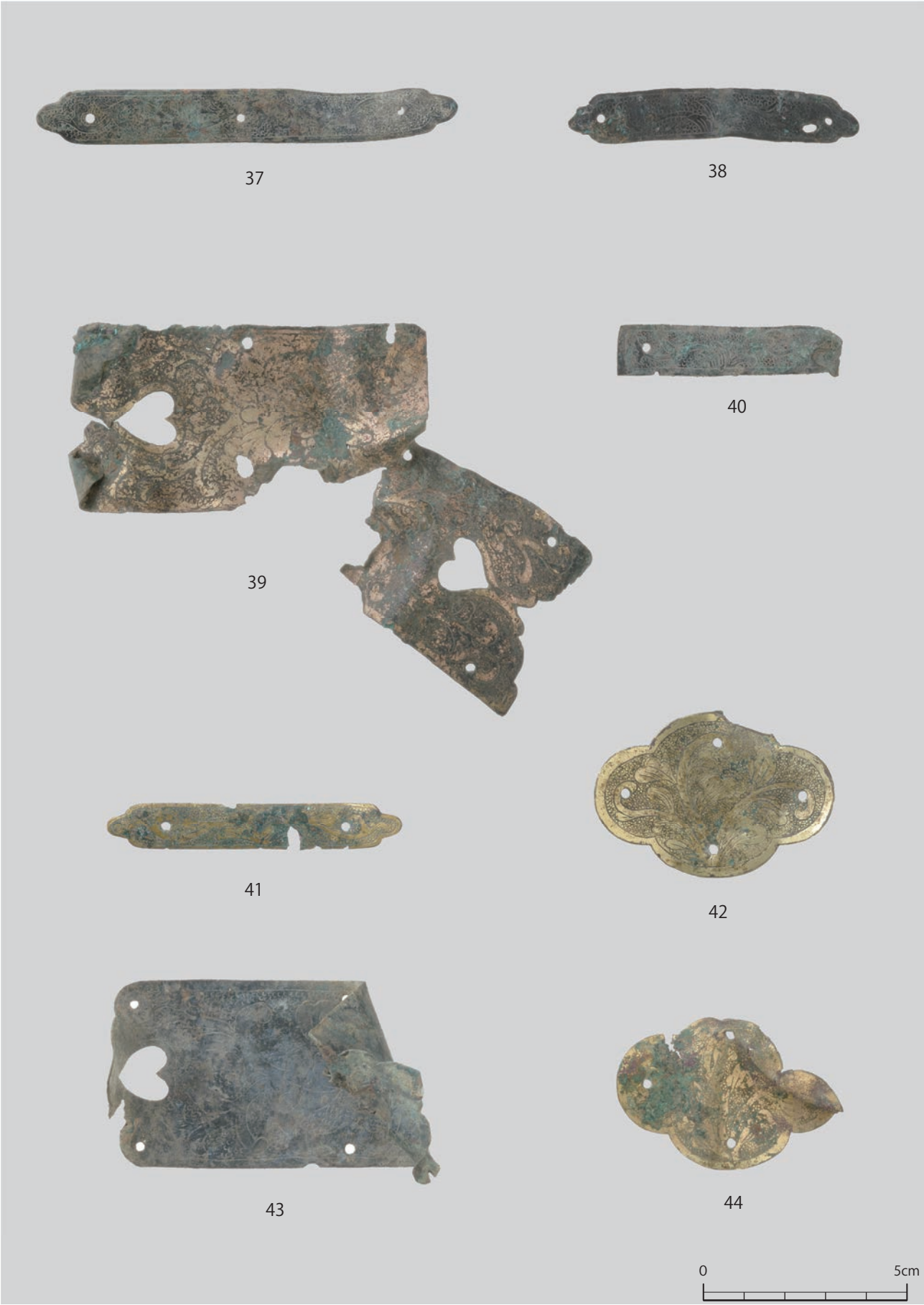


第 39 図　飾り金具 2

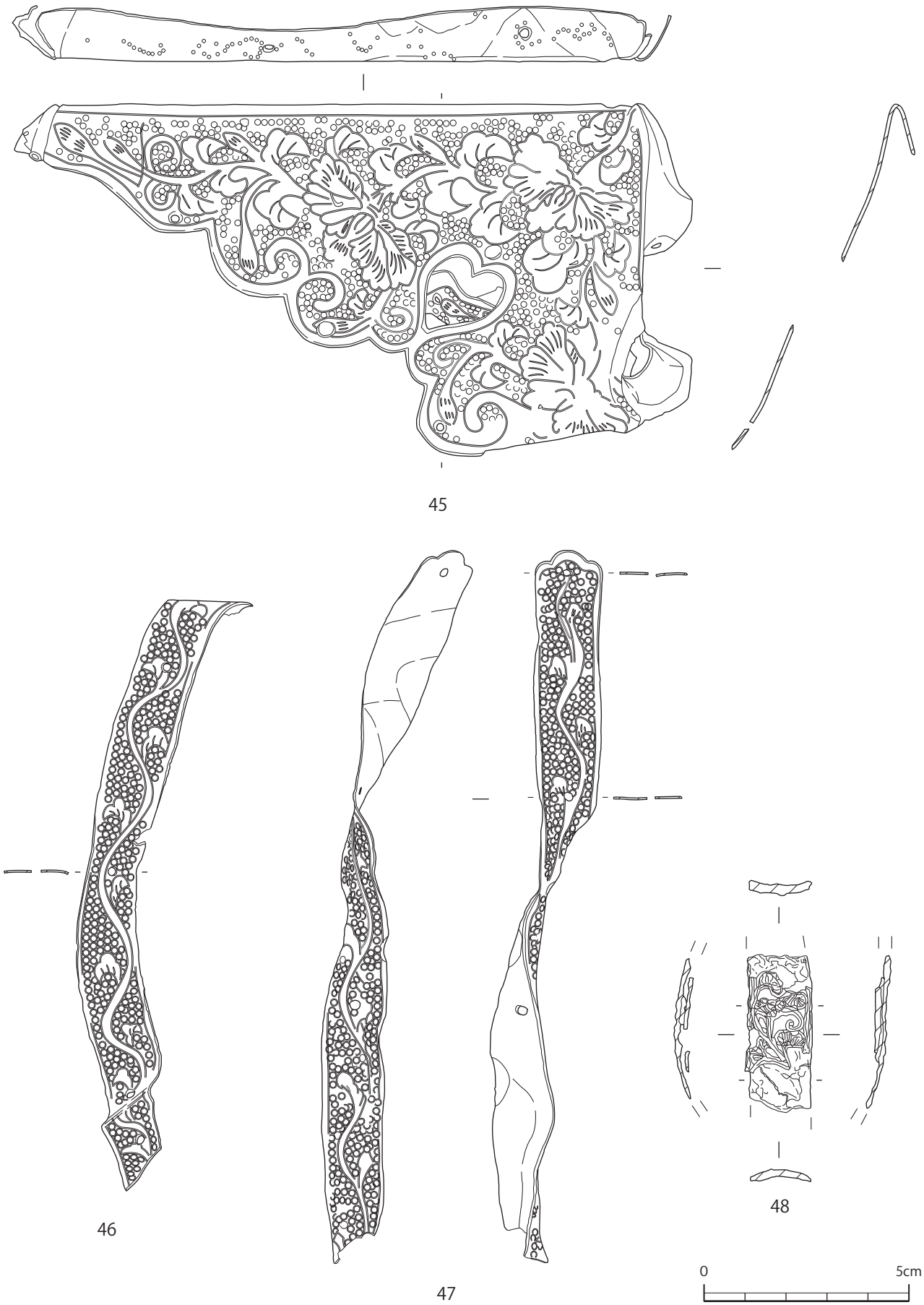
図版 37　飾り金具 2



第 40 図　飾り金具 3



図版 38　飾り金具 3

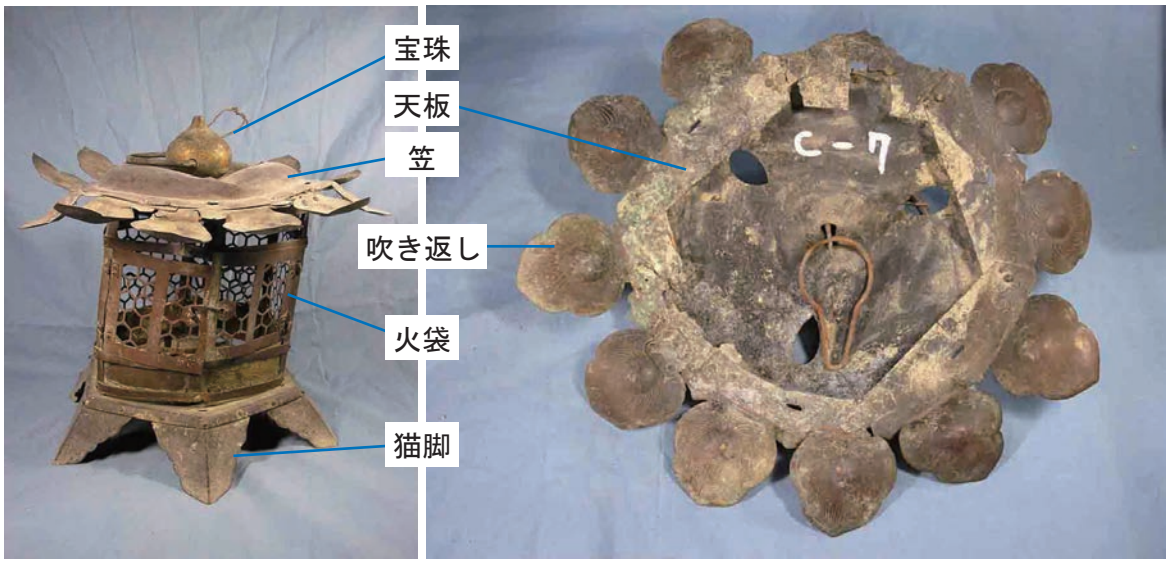


第 41 図　飾り金具 4

図版 39　飾り金具 4

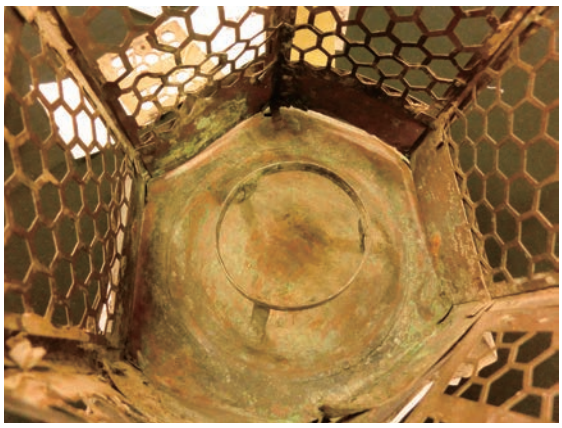
第４節　宗教具・茶道具

本節では祭祀に使用された道具類や寺社内において配置される道具を宗教具として、香炉や灰匙といった茶道具に類するものをまとめて本節で報告する。釣り灯籠については各部位が出土しており、とりわけ残存率の高いものを今回報告する。また、今回未報告ではあるが幅５㎜前後の短冊状の銅板が大量に出土している。これらは釣り灯籠の火袋の透かし金具片であるものと考えられる。



１（参考）　釣り灯籠全景と笠と吹き返し取り付け状況（沖縄県立博物館所蔵）

２　火袋の内部（１）



３　火袋の内部（２）

４　火袋金具

５　火袋金具と出土資料

図版 40　県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料①

1　宝珠と宝珠受け金具

2　宝珠と出土資料

3　吹き返しと出土資料

4　天板と出土資料

5　猫脚

6　猫脚と出土資料

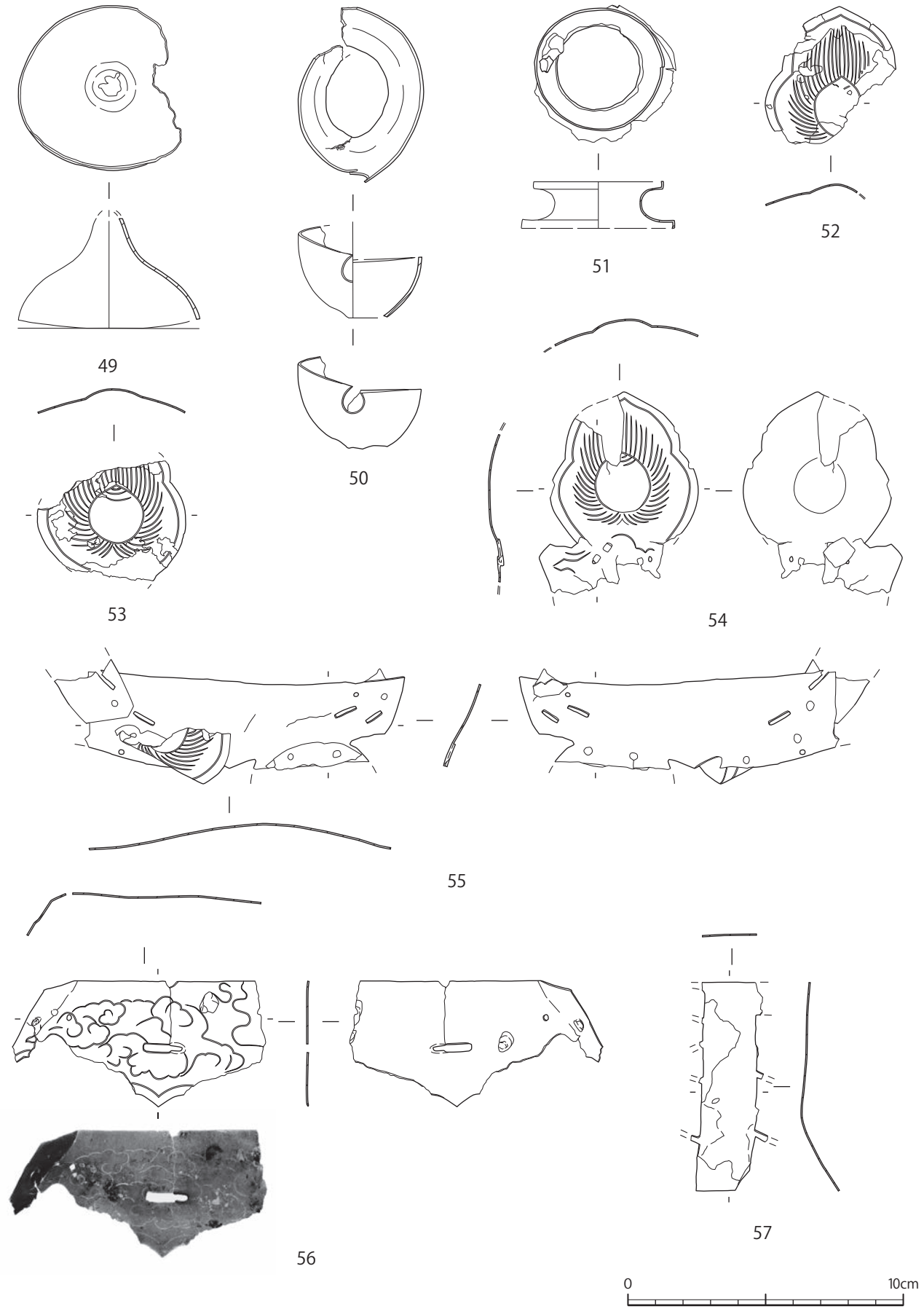
図版 41　県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料②　　（比較資料は全て沖縄県立博物館所蔵資料）

第８表　宗教具・茶道具観察表１

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(ｇ)	グリッド・層	所見
第42図 図版42	49	銅製品	釣灯籠	23.5	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の頂部に附属する宝珠の上半部。鋳造品で一部、欠損している。厚さ1.5㎜。
第42図 図版42	50	銅製品	釣灯籠	17.4	K-15 Ⅱ層	釣り灯籠の頂部に附属する擬宝珠の下半部。破損しているものの、全形を窺うことができる。下面は水平に切られ、側面には鐶を通す直径８㎜の円孔が開けられている。厚さ1.5㎜。
第42図 図版42	51	銅製品	釣灯籠	21.6	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の宝珠を受ける鐶台で下部は大きく歪み、欠損している。受け口は直口となり、緩やかにくびれ部に移行する。下部の接続部も直下に折れている。上部の直径は4.7㎝で下部の直径は5.6㎝
第42図 図版42	52	銅製品	釣灯籠	3.8	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。欠損が著しいが、全形は窺うことができる。宝珠状の銅板で表面には火炎宝珠文が毛彫りで描かれる。宝珠の部分を立体的に見せるために、少し盛り上げている。厚さ1㎜。
第42図 図版42	53	銅製品	釣灯籠	6.4	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。先端部と基部は欠損している。第42図52とは同一形態である。厚さ1㎜。
第42図 図版42	54	銅製品	釣灯籠	8	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。第42図52,53とは同一形態である。基部には別の銅板に留めるための円孔が見られるのと、吹き返しに取り付けていた銅板の一部が残る。厚さ1㎜。
第42図 図版42	55	銅製品	釣灯籠	21.5	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の吹き返しを取り付けるための天板で、第42図52,53,54と同一形態の吹き返しが鋲で留められている。何れの端部にも鋲留めの円孔があけられており、幅3㎝、厚さ1㎜の銅板を複数枚、繋ぎ合わせていることが窺える。また、長方形上の孔が2カ所ずつ端部に開けられている。これらは火袋の金具を留めるための孔と思われる。
第42図 図版42	56	銅製品	釣灯籠	10.2	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の吹き返しを取り付けるための天板。大きく欠損しているため全形は窺えない。横位の方孔が1カ所と直径1㎜の円孔が２カ所見られる。また、毛彫りによる雲文が全面的に描かれている。厚さ1㎜。重量10.2ｇ
第42図 図版42	57	銅製品	釣灯籠	10.4	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の火袋。亀甲の透かし文を区分する仕切りで、両端には透かし文の一部が取り付く。厚さ1㎜。
第43図 図版43	58	銅製品	釣灯籠	11.2	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の火袋に付く、飾り金具を留める軸。断面形はくの字状にとなり、上端はT字状の銅板と幅８㎜の銅板が鋲で留められている。厚さ1㎜、幅1.5㎝。
第43図 図版43	59	銅製品	釣灯籠	4	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の火袋。上部の欄間部分には花菱、下部の煙出し部分には亀甲の透かし文様が見られる。花弁には毛彫りで皺が描かれている。厚さ1.5㎜。
第43図 図版43	60	銅製品	釣灯籠	5.6	L-14 Ⅰ層	釣り灯籠の火袋。上部の欄間部分の透かしによる花菱文。下部の亀甲文と思われる金具が見られるが、変形が著しい。厚さ1.5㎜。
第43図 図版43	61	銅製品	釣灯籠	10	表採	釣り灯籠の火袋に付く、飾り金具を留める軸。六角形状が取り付く銅板が鋲で留められており、六角板の中央には直径２㎜の円孔が開けられている。火袋の扉を閉める掛かりと思われる。厚さ1.5㎜。
第43図 図版43	62	銅製品	釣灯籠	58.2	K-15 Ⅰ層	釣り灯籠の地板で大きく変形している。火袋の金具を留めるための、長方形状の孔が1カ所見られる側面には鋲が2カ所、留められている。
第43図 図版43	63	銅製品	釣灯籠	7.4	K-14 Ⅱ層	釣り灯籠の猫脚。毛彫りによる牡丹唐草文が全面的に描かれている。花弁は大きく、そして蔓は細く描かれる。小さい魚々子を縦列打ちで空白部を埋める。18～19世紀における日本本土の意匠と類似する。厚さ1㎜。
第43図 図版43	64	銅製品	長頸花瓶	710	L-15 Ⅱ層ドウ一括	長頸花瓶の胴部。大きく変形し、欠損しているが全形は窺える。口縁部は玉縁状に肥厚し、頸部から緩やかに胴部へ移行する。肩は大きく張り、胴部は底部にかけて窄まる。頚部には突が一条見られる。底部近くで外側へ少し張る。口縁部から頚部にかけては松文が、胴部には波濤文が毛彫りで描かれる。類例資料として沖縄県立博物館所蔵の長頸花瓶がある。
第44図 図版44	65	銅製品	灰匙	24.5	K-14 Ⅰ層	変形し、柄は欠損している。先は丸く、つぼは浅い。全体的に厚みは1㎜以下と薄く、表面には凹凸が見られる。
第44図 図版44	66	銅製品	香炉	185.3	K-14 Ⅰ層	大型香炉の脚。雲文に象られており、内部には渦文が深く刻まれている。本体部との接続は曲面を有し、接地部は丸く収める。鋳造品。

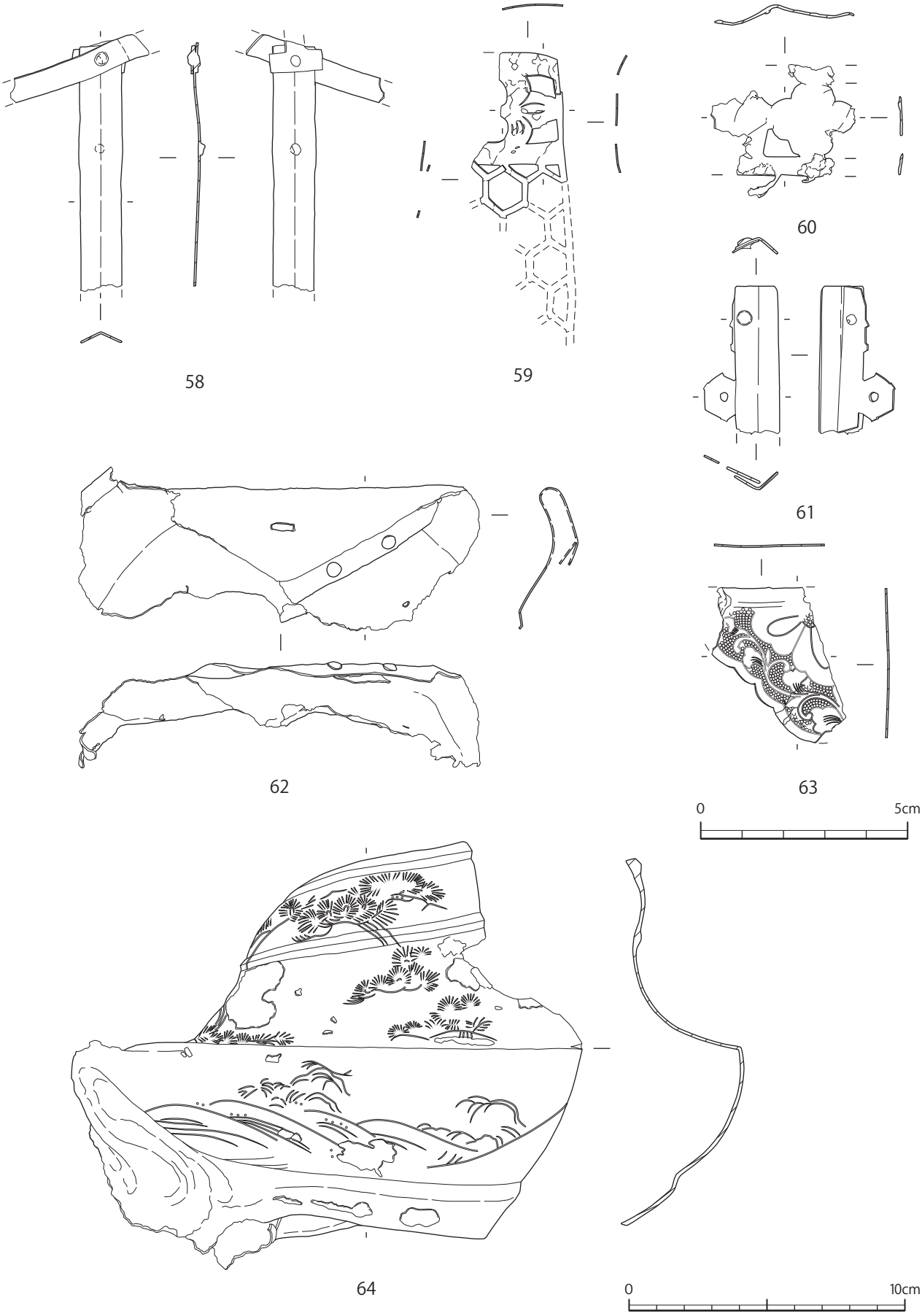
第９表　宗教具・茶道具観察表２

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第44図 図版44	67	銅製品	花瓶	38.2	I-14 TP2北Ⅰ層	花瓶の一部か。ほとんど欠損しているため、全形は窺うことができない。不規則な雷文が肉彫りで刻まれる。また、雷文上には肥厚帯が見られる。沖縄県立博物館・美術館蔵の龍耳花瓶に類似する。
第44図 図版44	68	銅製品	香炉	100	L-15 Ⅱ層ドウ一括	香炉の一部か。変形が著しくほとんど欠損しているため、全形は窺うことができない。箱形香炉の底部もしくは胴部と考えられる。幅広の溝が1条見られる。
第44図 図版44	69	銅製品	長頸花瓶	2325	L-15 Ⅱ層ドウ一括	口縁部。頸下部から下は欠損している。ラッパ口状に広く開き、口縁端部で段を有しており、直口する。口唇部は平坦となり、内傾する。文様は見られない。口径38.5㎝。
第44図 図版44	70	銅製品		875	J-14 TP3Ⅱ層	かなり変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。扁壺状の製品または香炉の一部か。側面はふくらみを有しており、底部は平坦となる。底面は円弧状に象っており、正面は面を有する。文様は見られない。
第45図 図版45	71	銅製品		630	L-15 Ⅱ層ドウ一括	かなり変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。長方形の箱状製品で香炉の一部か。口縁部への立ち上がりは直で、大きく開く。口唇部は平坦となり、底部はベタ底となる。
第45図 図版45	72	銅製品		661.8	J-14 TP3Ⅱ層	高熱による融解で変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。俵形の大型香炉の一部か。破損により4点に分割されており、それぞれの接合面が変形しているため、接合はできない。中央には横位で幅広の溝が2条、そして端部には縦位で波状の溝が1条見られる。上は開き、口縁端部は平坦になる。
第46図 図版46	73	銅製品	銚子	154.6	L-15 Ⅱ層ドウ一括	長柄付銚子。全体的に変形が著しい。容器は内側へ逆三角形状に肥厚し、口唇部は平坦となる。柄受け部には切り込みが見られ、断面形が長方形状となるL字状の金具が差し込まれる。柄を受ける金具は雲文状に縁取られており、中央下部と両端の計５カ所に鋲が取り付く。鋲にはそれぞれ座金が付されており、容器の内側は鋲芯部を潰して、容器と固定している。文様は容器の外面に唐草文が毛彫りで描かれ、小さい魚々子を密に充填打ちしている。柄を受ける金具にも同様の文様が施される。首里城跡京の内跡からも類似資料が出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター2009）。
第46図 図版46	74	銅製品	耳盃	52.2	K-14 Ⅱ層	双耳で高台付盃。薄手での作りで鋳造口縁部は直口。胴部は僅かに膨らみを有し、高台は高く、板金を環状に繋いで底に蝋付けする。文様は毛彫りによる牡丹唐草文を胴部中央に描き、口縁部には列点による唐草を、胴下部には花弁の連続文を描く。高台にも唐草文が描かれる。耳は厚さ３㎜の板金を切透しし、身に蝋付けされる。また、耳は左右対称の花唐草形で両面ともに用若と皺が描かれる。口径6㎝、底径3㎝、器高4.7㎝。
第47図 図版47	75	銅製品	香炉	4460	L-15 Ⅱ層ドウ一括	俵形の大型香炉か。高熱による融解で大きく変形し、破損も著しい。口縁部は直口し、口縁部近くに雷文帯が肉彫りで描かれる。両側面は渦巻状の隆帯文が見られる。底部には厚さ３㎜の板金を環状に繋いで底に蝋付けした高台が付く。
第48図 図版48	76	銅製品	香炉	6980	L-15 Ⅱ層ドウ一括	大型の香炉。大きく変形し、破損しており、全形は窺えないが扁平に膨らみを有する球状の香炉であると思われる。胴上部には花咲状の文様を板金で縁取り、それを本体に重ねて文様としている。１つの花弁に半球状の突起が２つ位見られる。
第49図 図版49	77	銅製品	香炉	326.7	L-15 Ⅱ層ドウ一括	大型の香炉の口縁部か。大部分が欠損しており、全形は窺えない。口縁は内傾しており、直線状に延びる。縦位で屈曲する突帯が見られ、その隣に鉤状の掛かりが付く。掛かりは本体を貫通させて、内側を潰して留めている。第49図78は同一個体であると思われる。
第49図 図版49	78	銅製品	香炉	3060	L-15 Ⅱ層ドウ一括	大型の香炉。高熱による融解で大きく変形、破損しており、全形は窺えない。胴部が膨らみ有する俵状の香炉で正面には１条の縦位の突帯が中央に、そして、そこから側面まで２条の溝が横位に走っている。底部はベタ底で、隅部に直径1.7㎝の円孔が開けられている。内面には鉄板が錆化により密着している。第49図77は同一個体であると思われる。



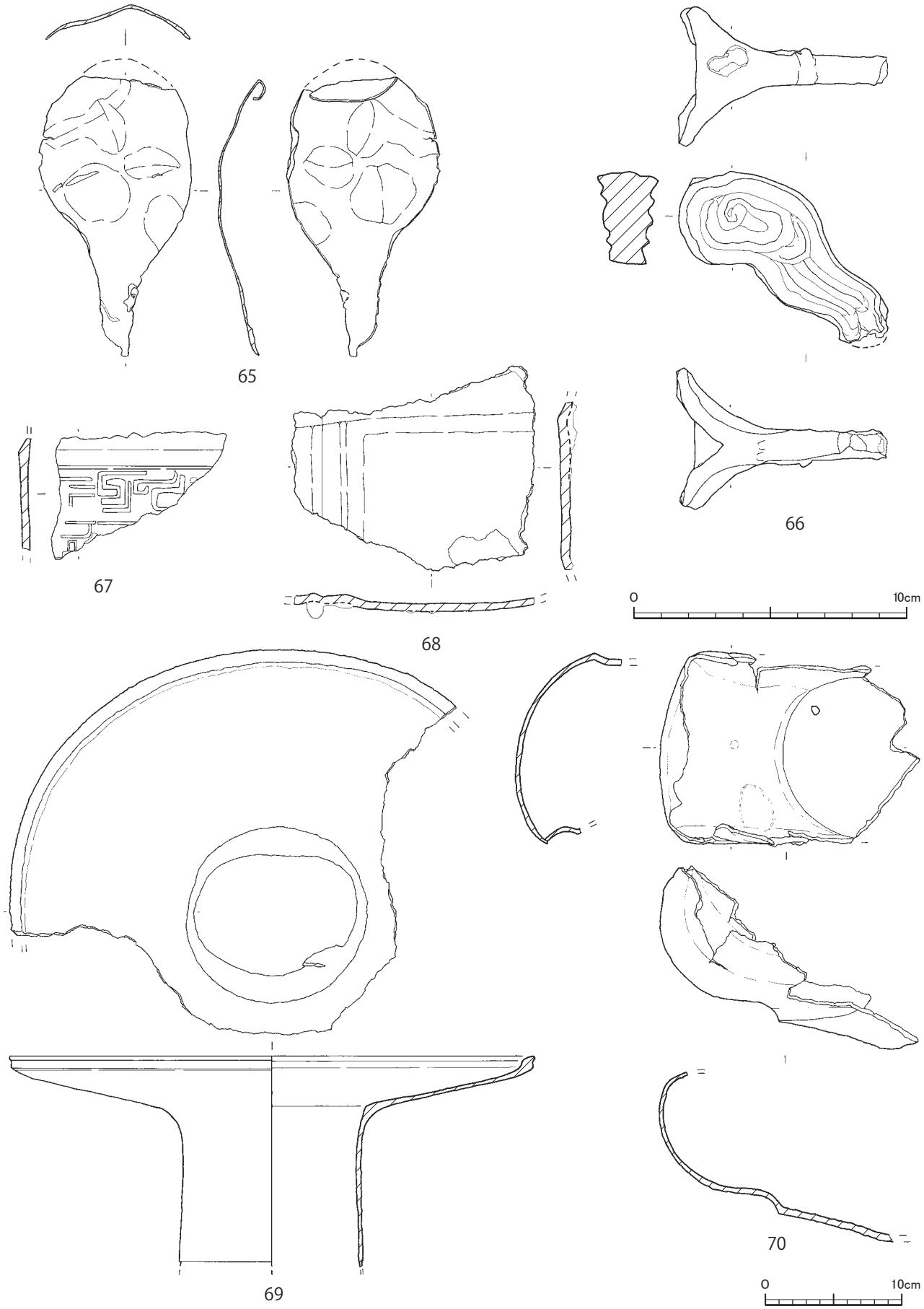
第 42 図　宗教具・茶道具 1

図版 42　宗教具・茶道具 1

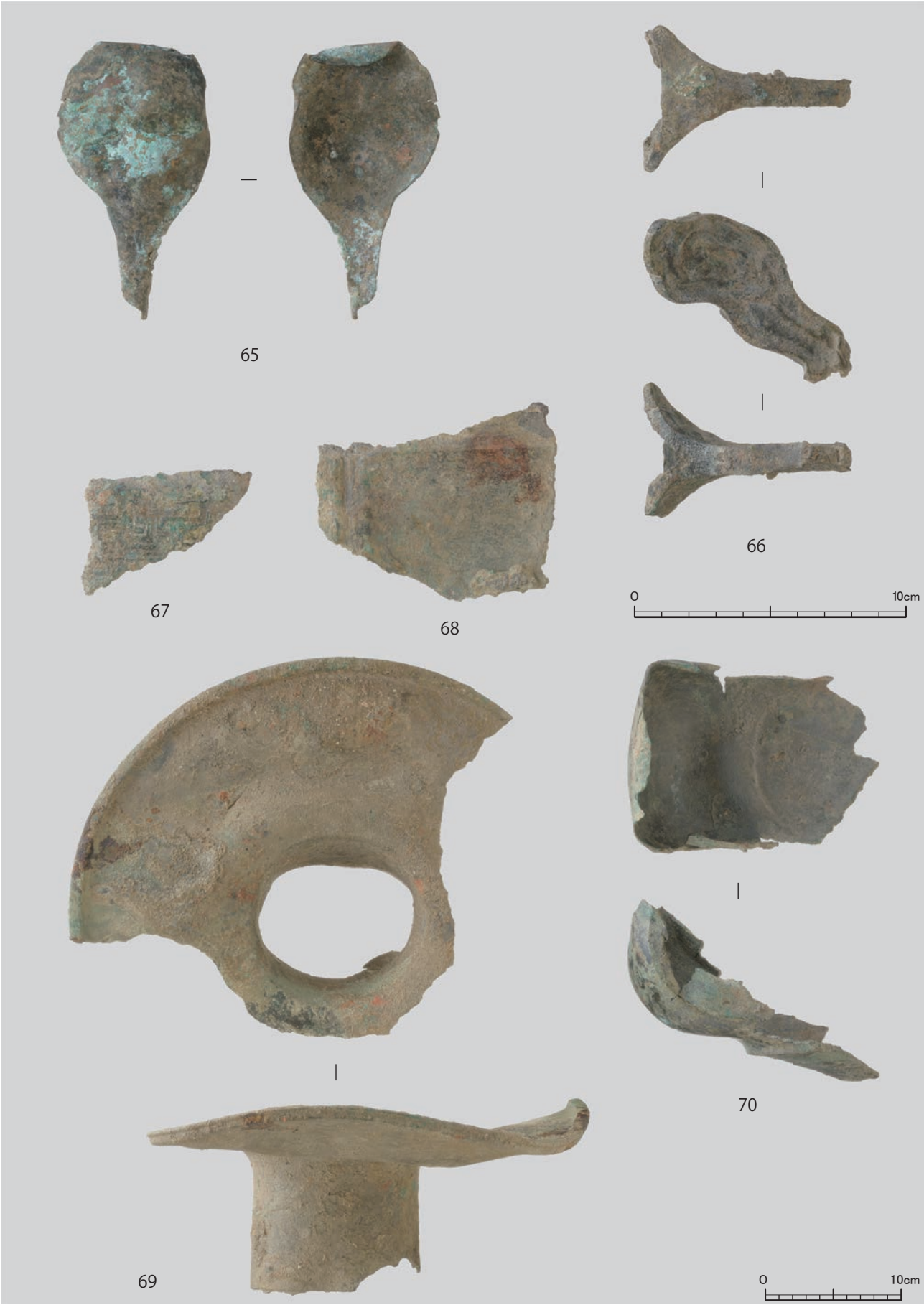


第 43 図　宗教具・茶道具 2

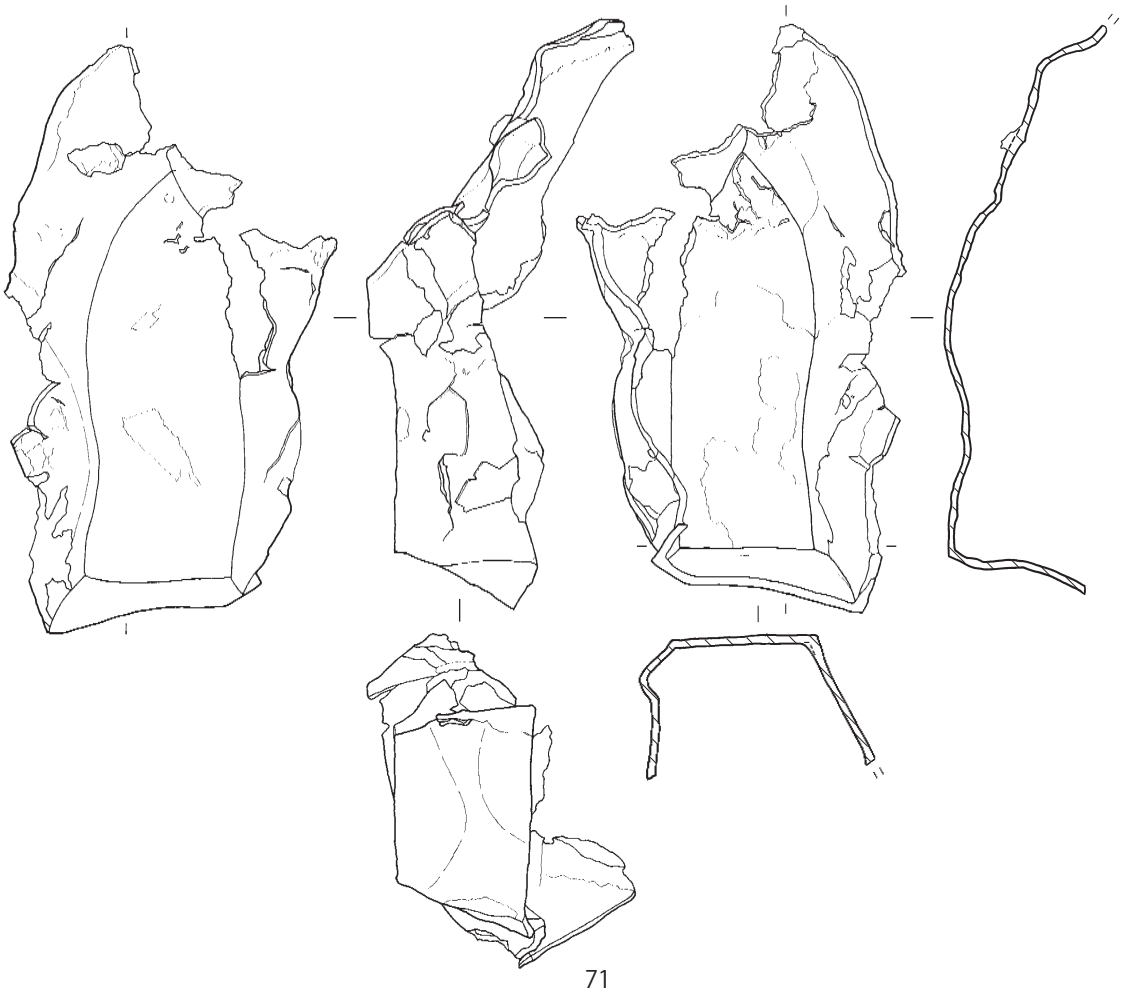
図版 43　宗教具・茶道具 2

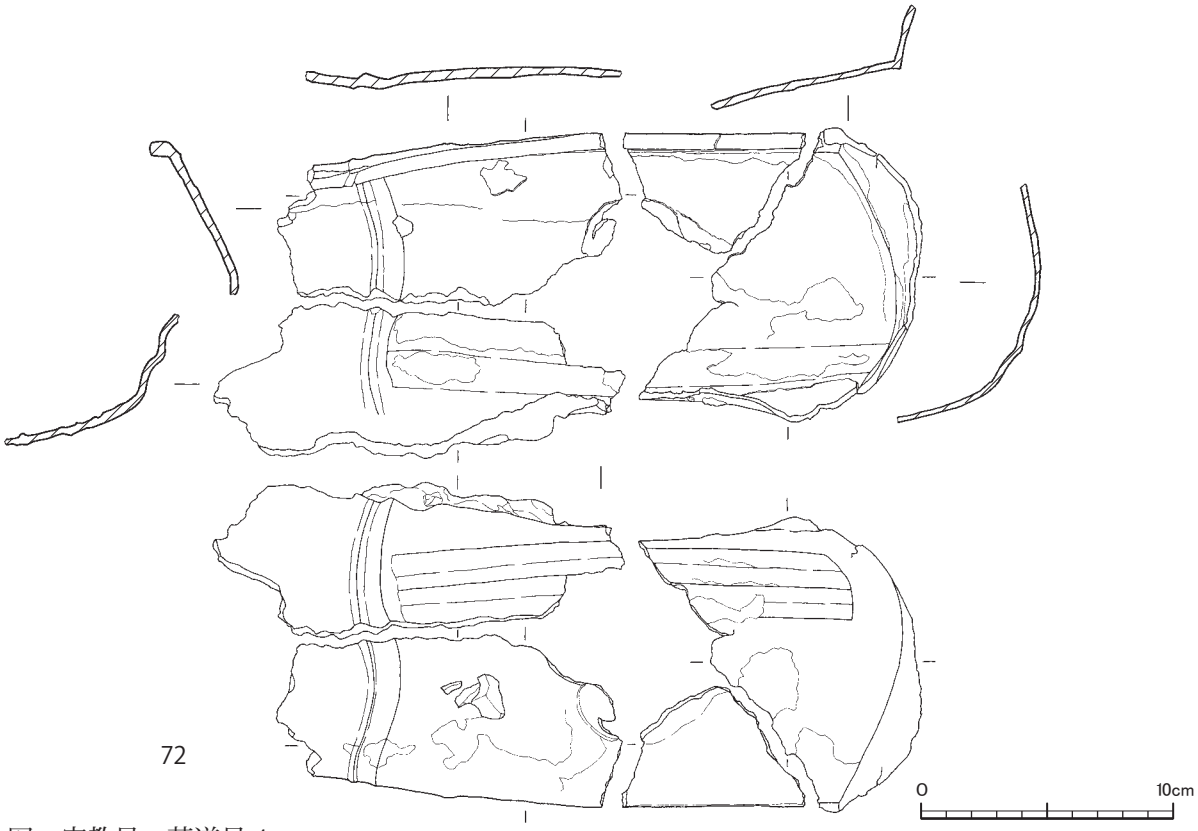


第 44 図　宗教具・茶道具 3

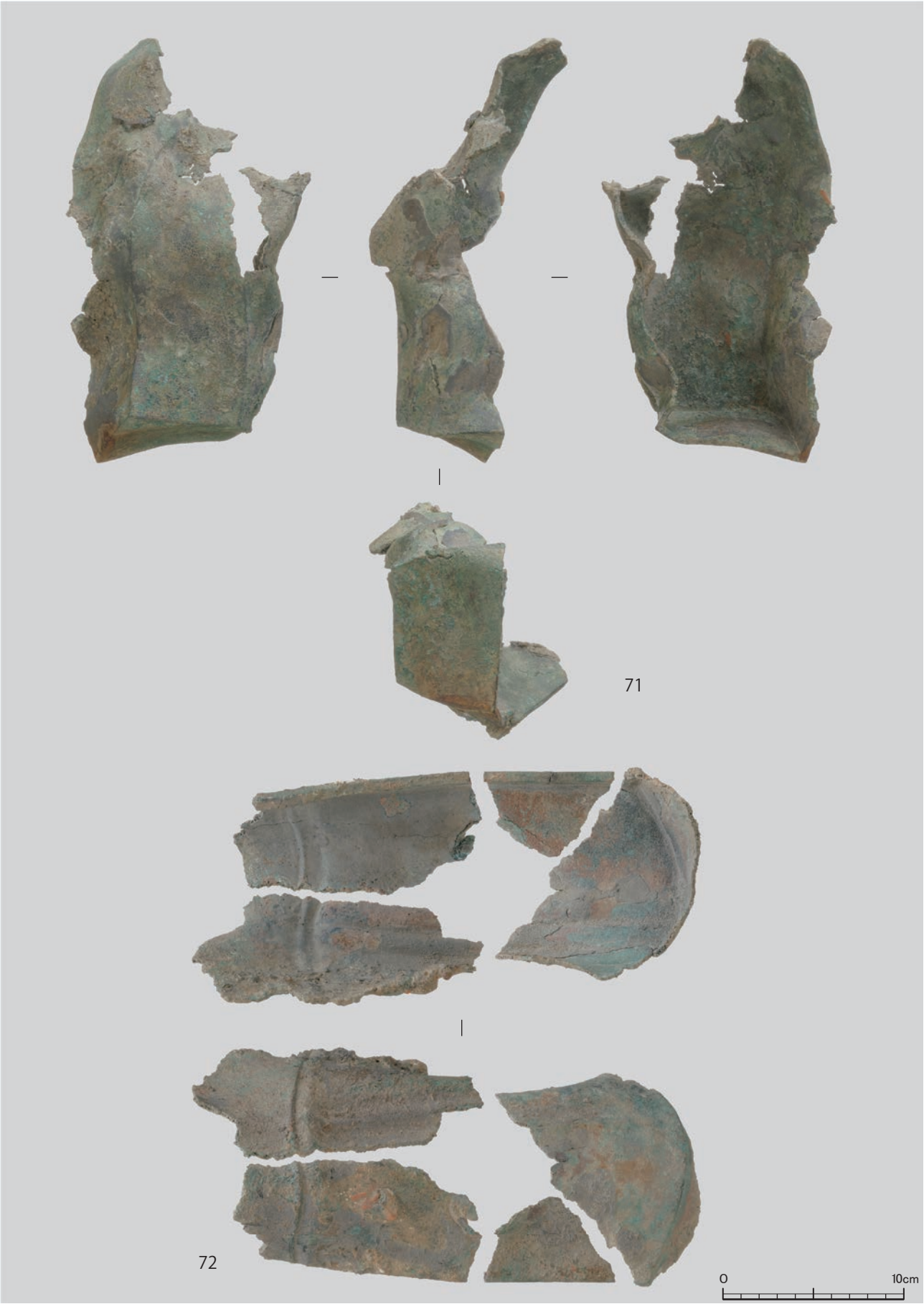


図版 44　宗教具・茶道具 3





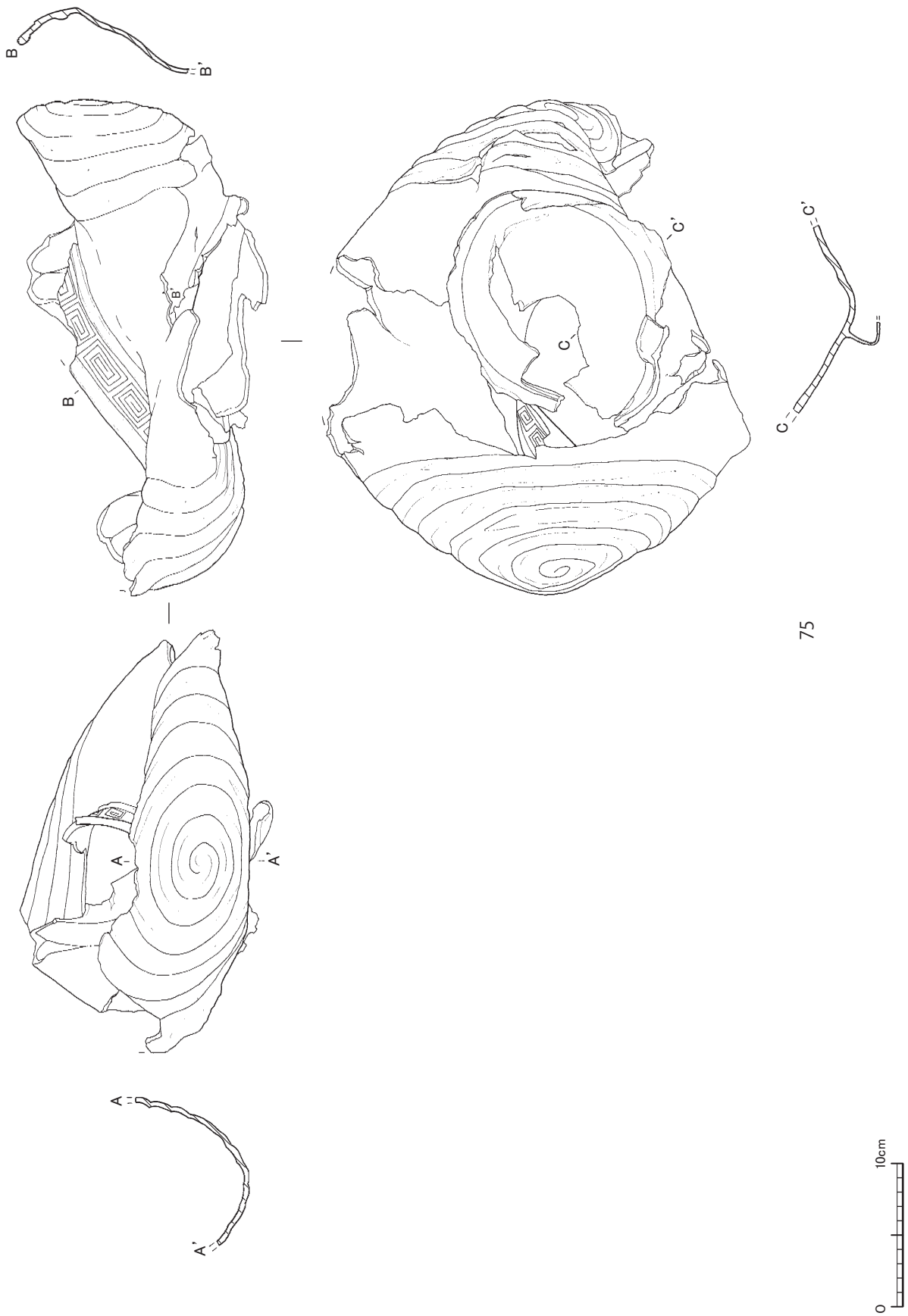
第 45 図　宗教具・茶道具 4



図版 45　宗教具・茶道具 4

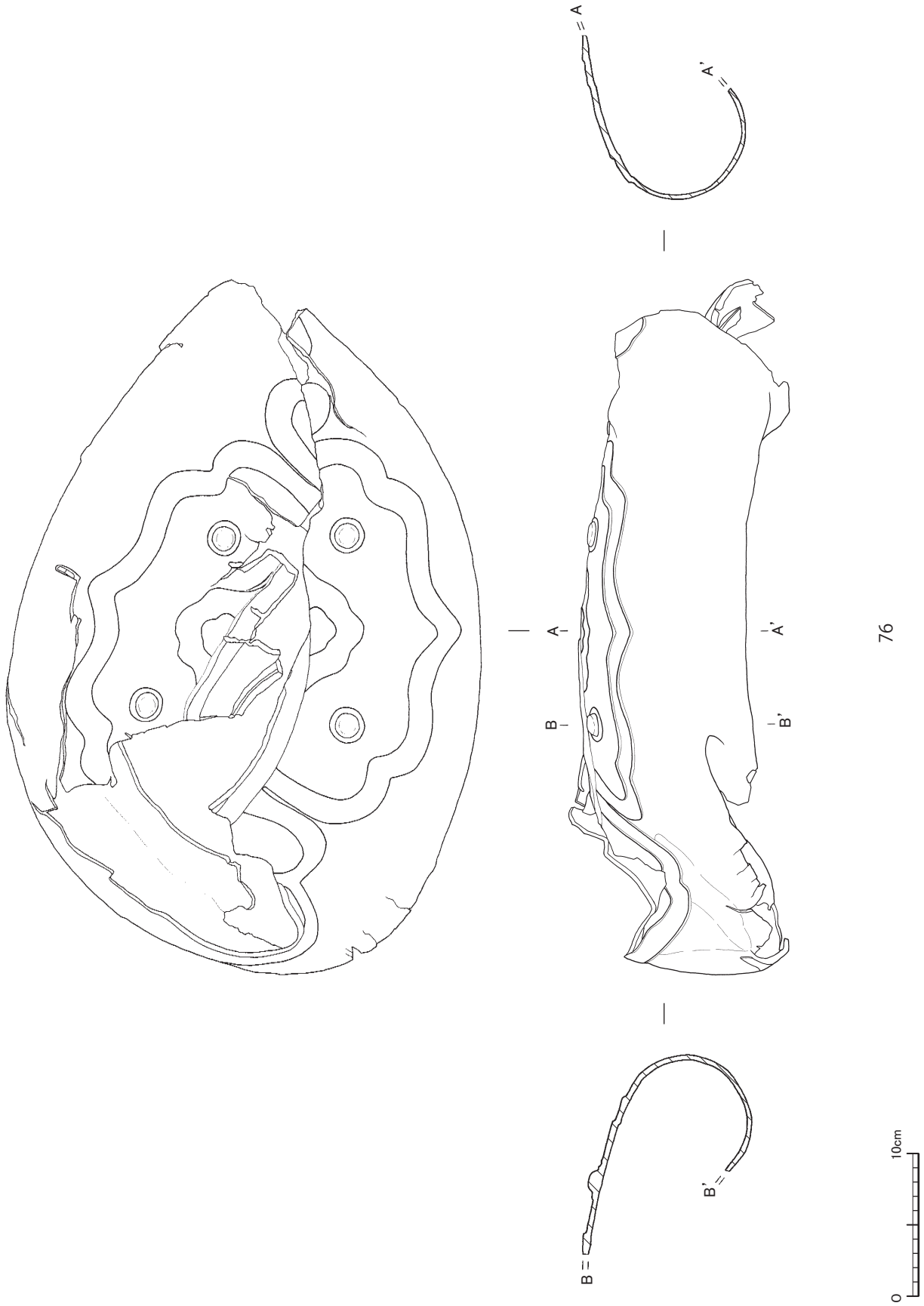
第 46 図　宗教具・茶道具 5

図版 46　宗教具・茶道具 5



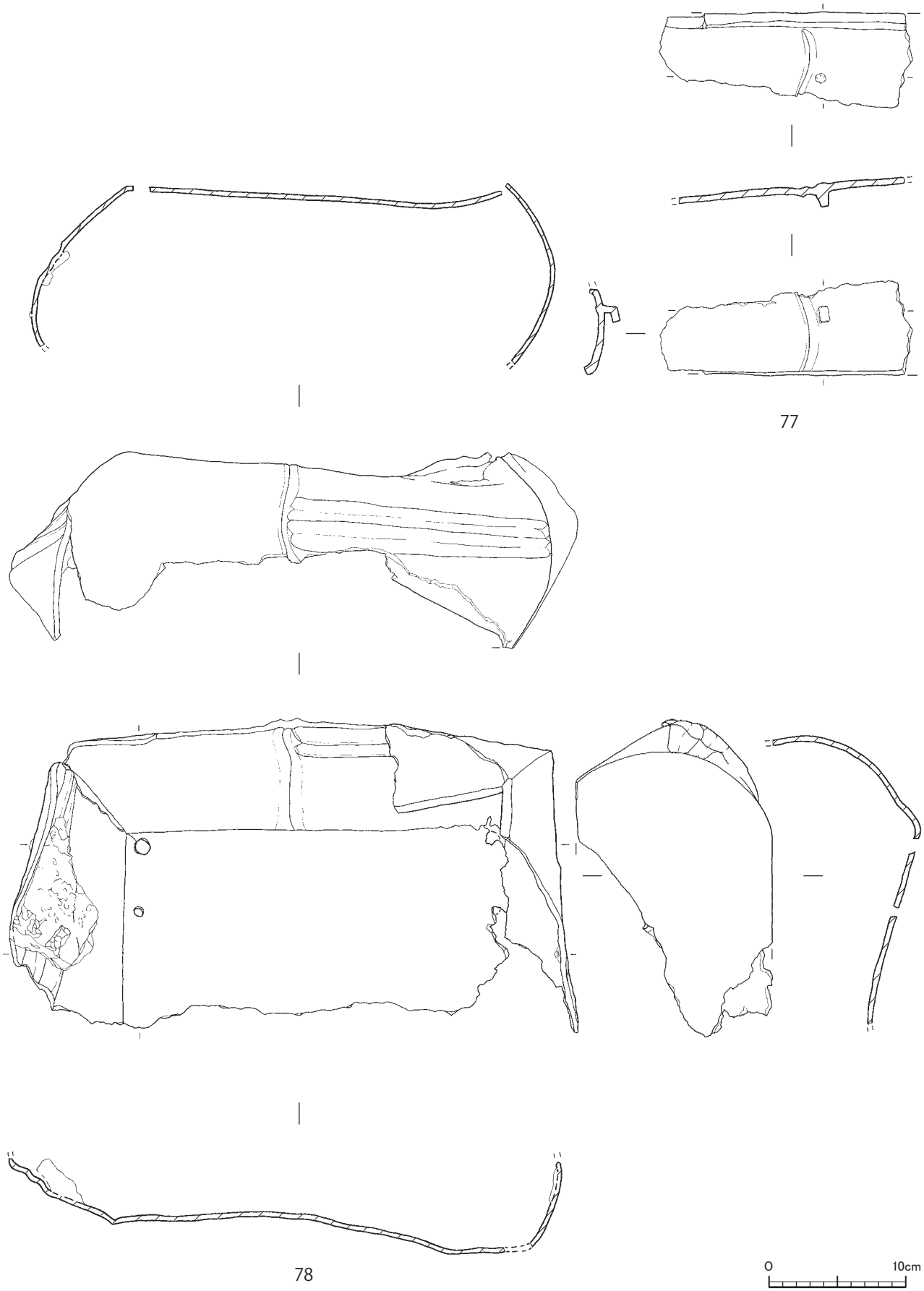
第 47 図　宗教具・茶道具 6

図版 47　宗教具・茶道具 6

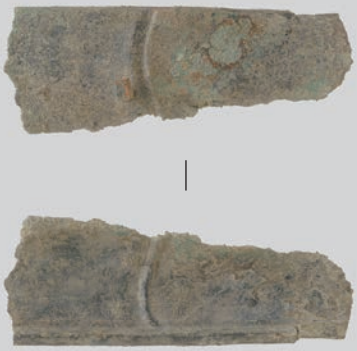


第 48 図　宗教具・茶道具 7

図版 48　宗教具・茶道具 7



第 49 図　宗教具・茶道具 8



77

78

0 10cm

図版 49　宗教具・茶道具 8

第５節　釘

角釘、丸釘などの木材に打ち付けて固定する、先端の尖る棒状の道具を釘とした。釘に含める遺物は 992 点出土しており、鉄製のものは 583 点で、銅製のものは 409 点出土している。以下に銅製釘、鉄製釘の順に紹介する。個別の観察については、銅製釘は第 15 ～ 17 表、鉄製釘は第 17 表に記載した。

１　銅製釘

銅製釘に含めるものは、角釘が 326 点、丸釘が 83 点出土している。全形を窺えるものは角釘 284 点、丸釘 50 点あり、鉄製釘と比べて状態の良好なものが多い。その中から形態の特徴的なもの、錆の少ないものなどを角釘は 35 点、丸釘は 26 点図化した。

（１）角釘

完形で得られた資料を対象に、銅製の角釘を頭部の形状別に分類した。

Ⅰ類：正面観での頭部が軸部より一回り幅広くなるもの。上面観が方形状となり、軸部断面も方形状になる。頭部が明確に造られているかどうかで細分した。

Ⅰ－１類：頭部を幅広く造り出しているもの。鍛造時の敲打により頭部付近の軸部に稜が形成される。稜のある軸部断面が隅丸方形状になる。稜のある軸部より以下の断面は方形状となる。

Ⅰ－２類：頭部周辺の軸部断面が方形状になるもの。頭部を幅広く形成したのか、Ⅱ類を打ち付けた際に頭部が潰れたものかの判別は難しい。

Ⅱ類：正面観での頭部と軸部の幅がほぼ変わらないもの。上面観は方形状となり、軸部断面も方形状になる。

Ⅲ類：頭部を曲げて逆Ｌ字状に造るもの。頭部と軸部の径が変わらないものが多く、Ｌ字状に曲がる部分の背は角が立つ。正面観では頭部と軸部の幅が変わらず、上面観は長方形状で、軸部断面は方形状になる。

Ⅳ類：頭巻き釘とされるもので、頭部は軸部に比べて薄く幅広で、正面観では頭部が軸部より幅広くなる。頭部が軸部に対して垂直に立ち上がるものも一部あるが、丸みを帯びて曲がるものが多い。頭部先端は薄く尖る。

その他：掛軸等を掛ける為の軸釘や、軸部に孔のあく、器具を掛けるための釘など、建築物に直接関係しないと考えられる釘。

第 10 表　銅製角釘類型別集計表

全長 ＼ 類型	10～20㎜	20～30㎜	30～40㎜	40～50㎜	50～60㎜	60～70㎜	70～80㎜	100～110㎜	合計
Ⅰ-1		2	2	3	13	4			24
Ⅰ-2		1	8	4	12	10			35
Ⅱ	1	5	175	9	6	10	1		207
Ⅲ	3		1		1			1	6
Ⅳ	2								2
合計	6	8	186	16	32	24	1	1	274

Ⅰ類

Ⅰ類はⅠ-1、Ⅰ-2類共に全長約20～70㎜の範囲に分布し、特に50～60㎜のものが多い。鉄製のⅠ類と比べると小型のものが多く、使用目的が異なることが考えられる。

Ⅱ類

全長10～80㎜の間に分布するが、そのほとんどは全長30～40㎜に集中する。一定の規格を持って造られたものと考えられる。

Ⅲ,Ⅳ類は点数が少なく、傾向について具体的なことを述べることはできない。

（2）丸釘

軸部断面が円形となるものを丸釘とした。全長の差はある程度あるものの、頭部が丸みを持ち、軸部から端部にかけて徐々に細く尖るものがほとんどであり、形態的に大きな違いは見られない。丸釘に含める83点の内、全形の窺える48点を対象に全長、頭部径を比較したところ、全長10～20㎜、頭部径3～5㎜の幅に集中した。一定の規格を持って造られている傾向にあり、全長も短いものが多いことから、飾り鋲としての使用が考えられる。

第11表　銅製丸釘全長別集計表

全長＼頭部径	3～4㎜	4～5㎜	5～6㎜	6～7㎜	7～8㎜	8～9㎜	合計
10～20㎜	20	9	1				30
20～30㎜	3	3	2		1		9
30～40㎜	3	1	1			1	6
40～50㎜		1					1
50～60㎜		1	1				2
合計	26	15	5	0	1	1	48

2　鉄製釘

鉄製釘に含めるものは、角釘356点、丸釘220点、鎹7点が出土している。丸釘については、明らかに現代の遺物がほとんどで、錆による浸食によって図化に堪えないほど脆弱なものが多いため、図化は行わなかった。鉄製の角釘も錆による劣化の著しいものが多く、全形を窺えるもの201点の内、17点を図化した。

（1）　角釘

完形で得られた資料を対象に、鉄製の角釘を頭部の形状別に分類した。

Ⅰ類：正面観での頭部が軸部より一回り幅広くなるもの。上面観が方形状になり、軸部断面も方形状になる。錆による頭部の腐食が強いものが多いため、頭部を幅広く造り出しているのか、Ⅱ類を打ち付けた際に頭部が潰れたのか、判別は難しい。

Ⅱ類：正面観での頭部と軸部の幅がほぼ変わらないもの。上面観は方形状となり、軸部断面も方形状となる。頭部を平坦に造るか、斜めに造るかで細分した。

Ⅱ－1類：頭部を平坦に造るもの。上面観は方形状、軸部断面も方形状となる。

Ⅱ－2類：頭部を斜めに造るもの。上面観は方形状、軸部断面も方形状となる。

Ⅲ類：頭部を曲げて逆L字状に造るもの。L字状に曲がる部分の背は角が立つ。正面観では頭部と軸部の幅が変わらず、上面観は長方形状で、軸部断面は方形状となる。

今回の調査では出土しなかった。

Ⅳ類：頭巻き釘とされるもので、頭部は軸部に比べて薄く幅広で、正面観では頭部が軸部より幅広くなる。頭部が軸部に対して垂直に立ち上がるものも一部あるが、丸みを帯びて曲がるものが多い。頭部先端は薄く尖る。

その他：掛軸等を掛ける為の軸釘など、建築物に直接関係しないと考えられる釘。

第 12 表　鉄製角釘類型別集計表

類型＼全長	10～20㎜	20～30㎜	30～40㎜	40～50㎜	50～60㎜	60～70㎜	70～80㎜	80～90㎜	90～100㎜	100～110㎜	110～120㎜	120～130㎜	130～140㎜	140～150㎜	150～160㎜	合計
Ⅰ			1	2		4	6	5	5	1	4	4	1	1	1	35
Ⅱ-1				3	4			13	5	2	9	14	3		1	54
Ⅱ-2				1	1	2			5	3	1	1				14
Ⅳ		5	14	9	6	4	6		3	1	1					49
合計	0	5	15	15	11	10	12	18	18	7	15	19	4	1	2	152

Ⅰ類

全長約 30 ～ 160㎜の間に分布。全長 60 ～ 130㎜の中型のものが比較的多い。小型の釘を必要とする調度品から、建具として使用する大型釘まで、様々な使用方法が推察される。

Ⅱ類

Ⅱ－１類:全長約 40 ～ 160㎜の間に広く分布する。全長 80 ～ 90㎜（54 点中 13 点）、120 ～ 130㎜（54 点中 14 点）に多く分布する。Ⅰ類同様、調度品や建具などの使用方法が推察できる。

Ⅱ－２類：全体的に資料数が少ないため、傾向を窺うことはできない。

Ⅳ類

全長約 20 ～ 120㎜の間に分布する。特に 20 ～ 70㎜の小型のものに分布が集まっており、ある程度規格、使用方法が定まっていることが窺える。

３　小結

銅製角釘及び鉄製角釘それぞれにおいて頭部形状の類型と全長に基づいて集計を行った結果、分布の偏りが見られた。銅製の角釘は全長 80㎜以下のものがほとんどであるのに対し、鉄製の角釘は全長 20 ～ 130㎜の間に広く分布しており、銅製角釘が鉄製角釘に比べて短い傾向にある。頭部の形状などに関係なく、全体的に銅釘と鉄釘で全長に大きな差が出ることから、銅と鉄という素材の時点で、異なる使用目的で製作されたことが考えられる。

先端部の形状では、鉄製角釘はすべて、軸部から端部にかけてゆるやかに先細ることで、打ち込んだ際に圧力が高まり、釘としての機能が働く。一方、銅製角釘は鉄製のものとは異なり、軸部から先端付近までの径がほぼ同じで先端部分のみ尖る、簪の先端形状に酷似する形になるものがほとんどである。先端近くから頭部付近まで厚みが変わらないことで、木材にかかる圧力は鉄製の角釘に比べて弱くなるため、銅製角釘は釘としての機能は弱く、大きな部材等を留めるのには適していない。調度品等の小型の製品に対して使用されたと見るのが妥当と思われる。また、釘としての機能の弱さ、簪に酷似した先端形状から、簪を作る職人によって作られた可能性も考えられる。

頭部形態について各類型を個別に見ていくと、頭部の幅が胴部よりも広くなるⅠ類については、鉄

製のものは全長 60 ～ 130㎜の比較的大型のものが多くなるが、銅製のものは 70㎜以下と比較的小型になる。鉄製も銅製も部材に打ち込んで繋ぐという同じ使用方法が考えられるが、対象物は銅製の場合、鉄製のものより小型になると推察される。頭部と胴部の境のないⅡ類においても、鉄製のものは 80㎜以上のものがほとんどであるのに対し、銅製のものは多くが全長 35 ～ 40㎜に収まる（第 10・12 表）。小型で、打ち込んだ際に頭部が木材表面に埋め込まれ目立たない構造になっていることから、使用対象は調度品等の小型のものが想定される。Ⅲ類の構造は、頭部を曲げるという点から留め具としての機能を持つと考えられるが、資料数が少なく、具体的な使用方法について述べることはできない。Ⅳ類は頭部が薄く広がる小型の釘であることから、留め具としての機能が考えられるが、銅製のものは資料がほとんどなく、鉄製のものは全長 80㎜以下が多い。頭巻釘は戸板などを留めるために使われることが多く、今回出土した資料も同様の使用方法が想定される。

角釘の形状について、使用対象物の大きさ、使用する部分によってそれぞれ適正な形状、サイズが求められ、その結果が、素材の違い、全長、先端形状、頭部形状といった、形態の違いとして現れていると思われる。

調査区別に見た場合、鉄製、銅製共に K-14、L-14、L-15 のⅠ層から大量に出土している。このあたりは御蔵・取納座部分にあたり、近くには金属製品溜まりなどもあることから、それらと同様に戦後以降の時期にまとめて廃棄されたものと考えられる。

K-14 Ⅱ層及び L-14 Ⅱ層からも角釘が多く出土している。これらの層は遺構直上に堆積する焼土・炭層で、層中に溶解した金属製品や炭化木材が含まれることから、戦時中における中城御殿焼失時のものと断定される。K-14 Ⅱ層からは鉄製角釘 30 点、銅製角釘 52 点、L-14 Ⅱ層からは鉄製角釘 28 点と多く出土しており、これらの釘は中城御殿焼失時の建築物（御蔵）及び調度品等の痕跡の可能性が考えられる。

第 13 表　銅製角釘Ⅱ類全長別集計表

全長 ＼ 類型	10～20㎜	20～30㎜	30～40㎜	40～50㎜	50～60㎜	60～70㎜	70～80㎜	合計
Ⅱ類	1	5	175	9	6	10	1	207

第 14 表　銅製角釘Ⅱ類全長別集計表（30 ～ 40㎜間）

全長 ＼ 類型	32～33㎜	33～34㎜	34～35㎜	35～36㎜	36～37㎜	37～38㎜	38～39㎜	39～40㎜	合計
Ⅱ類	2	0	1	11	87	38	21	15	175

第６節　鎹

鎹に含める遺物は 7 点得られており、全て鉄製であった。いずれも錆による劣化が見られるが、比較的残りのよい 5 点を図化した。全長 10㎝前後のものが多く、軸部の断面形が長方形状になる。板同士などを繋ぐために使用されたと考えられる。

第 15 表　釘観察表 1

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	頭部分類	法量(mm,g) 全長 頭部幅 軸幅	重量	グリッド・層	所見
第50図 図版50	79	銅製品	角釘	Ⅰ-1	52.41 7.71 4.49	6.8	J-13 LTSTⅡ層	頭部付近の軸において、四隅の角が潰され、断面形が隅丸方形状となり、それより以下の断面は方形状となる。頭部平面形は円形に近く、軸部から端部にかけて径が僅かに細くなり、先端で尖る。
第50図 図版50	80	銅製品	角釘	Ⅰ-1	59.27 8.11 4.65	9.2	表採	頭部付近の軸が潰れ、断面形が隅丸方形状。それより以下は断面方形状となる。端部は端部先端のみ尖る。頭部は潰れ、隅丸方形状となる。
第50図 図版50	81	銅製品	角釘	Ⅰ-1	54 6.8 4.24	6.4	J-13 LTSTⅡ層	頭部付近の軸部に稜が形成される。稜のある軸部の断面形は隅丸方形状で、それより以下から端部までの断面形は方形状となる。頭部上面観は隅丸方形状で、四辺に亀裂が走る。
第50図 図版50	82	銅製品	角釘	Ⅰ-1	53.48 7.73 4.25	6.8	K-14 Ⅰ層	頭部は楕円形形に潰れる。頭部付近の軸部において四隅の角が潰され、断面が隅丸方形となる。軸部から端部にかけて僅かに細くなり、先端で尖る。
第50図 図版50	83	銅製品	角釘	Ⅰ-1	48.97 7.37 4.15	6.9	K-15 Ⅰ層	叩かれた衝撃で頭部付近の軸が曲がる。頭部平面は円形に近い。軸部断面は頭部付近で隅丸方形状、軸部から端部にかけては方形状になる。
第50図 図版50	84	銅製品	角釘	Ⅰ-1	44.2 5.18 3.61	2.4	L-15 Ⅰ層	錆による腐食が強く、所々膨らみが見られる。頭部は方形状。軸部断面は頭部付近は隅丸方形状、軸部から端部は方形状で、徐々に細くなり、先端で尖る。
第50図 図版50	85	銅製品	角釘	Ⅰ-1	35.65 4.54 3.34	2.5	J-14 TP1Ⅰ層	正面観では頭部が軸部より幅広くなる。頭部付近の軸部に稜が形成される。上面観は隅丸方形状。軸部から端部まで幅が変わらず、端部のみ尖る。
第50図 図版50	86	銅製品	角釘	Ⅰ-1	29.07 5.78 2.56	1.1	L-15 Ⅰ層	頭部は薄く、円形状に形成される。軸部断面は頭部付近で隅丸方形状、軸部から端部にかけて方形状。軸部から端部にかけて徐々に細くなり、端部で急に尖る。
第50図 図版50	87	銅製品	角釘	Ⅰ-2	61.24 7.53 4.42	9.6	L-15 Ⅰ層	正面観において頭部が軸部より幅広くなる。頭部平面形は円形に近く、軸部断面は方形、軸部から端部にかけて厚さが変わらず、先端で尖る。
第50図 図版50	88	銅製品	角釘	Ⅰ-2	55.46 8.12 4.93	8.7	Ⅰ・J-14 TP2Ⅰ層	正面観は頭部が軸部より幅広くなる。頭部平面は方形状で、軸部断面も方形状となる。軸部から端部にかけて僅かに先細り、先端で尖る。
第50図 図版50	89	銅製品	角釘	Ⅰ-2	57.64 8.83 5.15	9.6	L-14 Ⅱ層溝内	錆膨れなどによる腐食が強い。頭部平面形は方形状と考えられる。軸部断面は方形で、端部のみ尖る。
第50図 図版50	90	銅製品	角釘	Ⅰ-2	62.45 7.45 4.81	8.5	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	軸部から端部にかけて僅かに細くなり、先端で尖る。軸部断面は方形。頭部は潰れ、隅丸方形状に広がる。
第50図 図版50	91	銅製品	角釘	Ⅰ-2	36.51 6.16 3.26	2.5	L-16 TP8Ⅰ層	錆による腐食が強いが、恐らくⅠ類と考えられる角釘。木片が残った状態で出土した。軸部断面形は方形。頭部は隅丸方形状に広がる。先端部が木片に埋まっているため、先端形状は不明。
第50図 図版50	92	銅製品	角釘	Ⅰ-2	36.81 6.38 3.3	2.8	J-14 TP3Ⅱ層溝2内	頭部平面形は周囲に広がる隅丸方形状。軸部断面形は方形状になる。軸部から端部にかけての厚さが変わらず、先端で尖る。
第50図 図版50	93	銅製品	角釘	Ⅰ-2	38.68 3.95 3.24	2.4	L-16 TP8Ⅰ層	頭部は潰れたのか、軸部より僅かに幅広くなる。頭部平面形は方形状。軸部断面形も方形となる。頭部から端部まで厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
第50図 図版50	94	銅製品	角釘	Ⅰ-2	23.07 4.87 2.27	0.7	L-14 Ⅱ層溝内	小形の角釘。軸部断面形は方形で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。頭部は潰れ、両側縁に広がる。
第50図 図版50	95	銅製品	角釘	Ⅱ	63.16 5.67 5.67	10	L-14 Ⅰ層	Ⅱ類に分類される釘で、正面観において軸部と頭部の幅が変わらず、垂直に立ち上がる。頭部平面方形で、軸部断面形は方形状になる。軸部から端部にかけて細くなり、先端で尖る。錆による腐食が強い。
第50図 図版50	96	銅製品	角釘	Ⅱ	67.31 5.67 5.67	7.9	L-15 Ⅰ層	頭部平面は方形状で、軸部断面形も方形状となる。頭部と軸部の幅が変わらず、軸部から端部にかけてわずかに先細り、先端で尖る。
第50図 図版50	97	銅製品	角釘	Ⅱ	62.23 4.21 4.21	6.3	L-14 Ⅰ層	軸部から頭部にかけて垂直に立ち上がり、頭部平面形は方形となる。軸部断面は方形で、軸部から端部にかけて徐々に細くなり、先端で急に尖る。
第50図 図版50	98	銅製品	角釘	Ⅱ	64.69 5.22 5.22	8	L-14 Ⅰ層	頭部平面形は僅かに潰れているが、方形状となる。軸部断面は方形状。軸部から端部まで厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
第50図 図版50	99	銅製品	角釘	Ⅱ	36.58 3.6 3.6	2.6	L-15 Ⅰ層	頭部平面形、軸部断面形共に方形状。端部まで厚さが変わらず、先端のみ尖る。
第50図 図版50	100	銅製品	角釘	Ⅱ	37.32 3.58 3.58	2.6	L-14 Ⅰ層	頭部平面は少しゆがんだ方形状。正面観は軸部から頭部まで幅が変わらない。軸部上部で斜めに歪んでいる。軸部から端部にかけてあまり厚さが変わらず、端部で尖る。
第50図 図版50	101	銅製品	角釘	Ⅱ	35.88 3.35 3.35	2.3	K-14 Ⅰ層	頭部平面方形で、軸部から頭部まで垂直に立ち上がる。軸部から端部までの厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
第50図 図版50	102	銅製品	角釘	Ⅱ	36.9 3.38 3.38	2.6	L-14 Ⅰ層	Ⅱ類の中ではこの37㎜前後のサイズのものが最も多い。軸部から端部まで厚さはほぼ変わらず、頭部平面は方形状、軸部断面も方形状となる。
第50図 図版50	103	銅製品	角釘	Ⅱ	37.25 3.5 3.5	2.5	L-14 清掃	軸部から頭部にかけて垂直に立ち上がり、正面観での頭部と軸部の幅が変わらない。頭部上面は方形状で、軸部断面も方形状。軸部から端部付近までほぼ厚さが変わらず、先端で尖る。
第50図 図版50	104	銅製品	角釘	Ⅱ	28.09 2.99 2.58	0.9	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	Ⅱ類の中でも小型の釘。頭部は曲がっている。頭部平面形及び軸部断面形は方形で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。先端は欠失している。
第50図 図版50	105	銅製品	角釘	Ⅱ	37.04 3.72 3.72	2.5	K-14 Ⅱ層	全体的に錆び付きが見られるが、程度は弱く、Ⅱ類と判断した。頭部上面、軸部断面共に方形状で、軸部から端部にかけて厚さが変わらず、端部で尖る。
第50図 図版50	106	銅製品	角釘	Ⅱ	36.54 3.46 3.46	2.7	K-14 Ⅱ層	頭部平面形は方形となる、縁辺の角が潰れ、正面観では台形状となる。軸部断面は方形で、軸部から端部にかけて僅かに細くなり、先端で尖る。

第16表　釘観察表2

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	頭部分類	法量(mm,g) 全長 頭部幅 軸幅	重量	グリッド・層	所見
第50図 図版50	108	銅製品	角釘	Ⅲ	50.15 4.68 2.73	1.9	L-15 Ⅰ層	頭巻釘の一種と思われる。頭部を薄く作り曲げている。頭部平面形は長方形状で、軸部断面は方形状。全長に比して軸部が細い。軸部から端部にかけて徐々に細くなるが、先端が欠失している。
第50図 図版50	109	銅製品	角釘	Ⅳ	18.92 4.37 1.65	0.4	L-16 TP8Ⅰ層	小型の頭巻釘。頭部はヘラ状に薄く、曲げて作っている。軸部断面形は方形で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。
第50図 図版50	110	銅製品	角釘	Ⅳ	18.08 4.01 2.12	0.4	K-14 Ⅰ層	頭部を欠失した小形の頭巻釘と思われる。頭部付近の軸でくびれ、薄く曲がっていくと考えられる。軸部断面形は方形状。軸部より端部にかけて徐々に先細る。
第51図 図版51	111	銅製品	角釘	その他	91.38 7.47 6.72	25.1	L-15 褐色土層	軸釘として用いる折釘。頭部は逆L字状に曲がり、頭部先端は丸みを帯びた形状になっている。軸部半ばから端部にかけて徐々に細くなり、先端部で尖る。
第51図 図版51	112	銅製品	角釘	その他	43.09 4.25 2.4	8.6	J-13 LTSTⅡ層	頭部に孔の空く角釘。柱や壁などに打ち込み、フック等をかけるために使用したと思われる。頭部平面形は長方形状で、軸部半ばから端部にかけて徐々に細くなる。軸部断面形は方形となる。
第51図 図版51	113	銅製品	角釘	その他	38.85 5.03 5.03	6.8	L-15 Ⅰ層	頭部平面は方形状で、側面観では斜めになる。軸部半ばで段になっており、一回り細くなる。段部分から端部まで厚さがほぼ変わらない。先端部は欠失しているが、恐らく先端のみ尖ると思われる。
第51図 図版51	114	銅製品	丸釘	×	70.76 8.96 3.04	4.1	L-14 Ⅱ層	今回出土した中では大型の丸釘。頭部平面形は円形で、正面観では丸みを帯びた形になる。軸部断面は円形で、軸部から端部にかけて徐々に先細る。
第51図 図版51	115	銅製品	丸釘	×	79.42 7.89 4.37	5.7	L-14 西畦	比較的大型の丸釘。頭部側面観はドーム状になり、厚みを持つ。平面形は円形状で、軸部断面も円形となる。軸部から端部にかけて徐々に細くなる。
第51図 図版51	116	銅製品	丸釘	×	33.87 3.53 2.07	0.7	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	頭部はふくらみのあるドーム状。軸部には稜が見られる。全体的に錆が散見される。
第51図 図版51	117	銅製品	丸釘	×	30.19 5.4 2.66	1.5	Ⅰ・J-14 TP2Ⅰ層	頭部は潰れているが楕円形の傘が付く。軸部から端部までほぼ同じ厚さで、先端は四角錘状に尖る。
第51図 図版51	118	銅製品	丸釘	×	21.41 5.33 2.35	0.7	J-15 TP7Ⅰ層	頭部はドーム状で、三方に広がりを持つ。先端にかけて先細り、先端部は四角錘状に尖る。
第51図 図版51	119	銅製品	丸釘	×	32.48 4.23 2.08	0.8	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	頭部には円形の傘が付く。軸部には薄く稜が見られる。軸部から端部にかけてゆるやかに先細る。
第51図 図版51	120	銅製品	丸釘	×	14.33 3.62 2.06	0.2	L-15 Ⅰ層	先端部は四角錘状で、軸部から先端にかけてゆるやかに先細る。
第51図 図版51	121	銅製品	丸釘	×	17.71 4 1.94	0.3	L-15 Ⅰ層	頭部は平たく打ち出し、三方に広がりを持つ。先端部は錘状に尖る。
第51図 図版51	122	銅製品	丸釘	×	11.85 5.08 1.86	0.4	L-15 Ⅰ層	頭部はドーム状に近い。先端部は欠損のため不明だが、軸部の先にかけてあまり細くならない。
第51図 図版51	123	銅製品	丸釘	×	11.5 4.87 2.02	0.3	K-14 Ⅱ層	先端部は欠失しているため不明。頭部は僅かに丸みを持ち、軸部には稜が見られる。
第51図 図版51	124	銅製品	丸釘	×	13.49 4.01 1.84	0.3	L-15 Ⅰ層	頭部はドーム状になる。軸部から端部にかけてゆるやかに先細る。
第51図 図版51	125	銅製品	丸釘	×	18.99 4.38 2.04	0.4	表採	頭部は平たく打ち出し、広がりを持つ。先端にかけてゆるやかに先細り、先端部は四角錘状に尖る。
第51図 図版51	126	銅製品	丸釘	×	14.05 4.49 1.88	0.3	L-14 Ⅱ層	頭部はドーム状にふくらむ。軸部から端部にかけて先細る。端部は欠損しているため、先端形状は不明。
第51図 図版51	127	銅製品	丸釘	×	12.38 3.23 1.98	0.2	K-14 Ⅱ層溝2内	頭部は円形で、あまり広がらない。軸部から端部までほぼ同じ厚さで、端部で先細る。
第51図 図版51	128	銅製品	丸釘	×	12.89 3.64 12.9	0.2	K-14 Ⅱ層溝2内	頭部側面観はドーム状で、平面形は円形状になる丸釘。軸部断面形は円形状で、先端部は四角錘状に尖る。
第51図 図版51	129	銅製品	丸釘	×	15.27 5.86 1.98	0.3	K-14 Ⅱ層溝2内	所々錆による腐食が見られ、頭部先端は剥離によって欠損していると思われる。軸部断面形は円形状で、軸部から先端にかけて徐々に細くなる。
第51図 図版51	130	銅製品	丸釘	×	10.93 3.87 2.2	0.2	L-15 Ⅰ層	頭部側面観は厚みがなく、平坦な形状。平面形は円形状。軸部は稜がわずかに見られる。先端部分は欠失しているため、形状は不明。
第51図 図版51	131	銅製品	丸釘	×	13.97 4.38 1.83	0.2	K-14 Ⅱ層溝2内	頭部平面形は円形状で、側面観では厚みのあるドーム状になる。軸部断面形は円形状で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。
第51図 図版51	132	銅製品	丸釘	×	12.47 3.4 1.33	0.2	K-14 Ⅱ層溝2内	小型の丸釘。先端部は鋭く尖り、頭部は膨らみのある円形状。軸部断面も円形状になる。
第51図 図版51	133	銅製品	丸釘	×	14.7 4.48 1.62	0.3	L-15 Ⅰ層	頭部側面観ではやや厚みのある平坦な形状。平面観は円形状になる。軸部断面も円形状となる。
第51図 図版51	134	銅製品	丸釘	×	20.54 4.18 2.06	0.3	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	頭部側面観はややふくらみのあるドーム状。軸部断面は円形状で、先端部のみ尖る。
第51図 図版51	135	銅製品	丸釘	×	22.32 3.74 1.91	0.6	K-14 Ⅰ層	頭部平面観は平たく打ち出された隅丸方形状。軸部から端部にかけて先細る。軸部に稜が見られる。

第 17 表　釘観察表 3

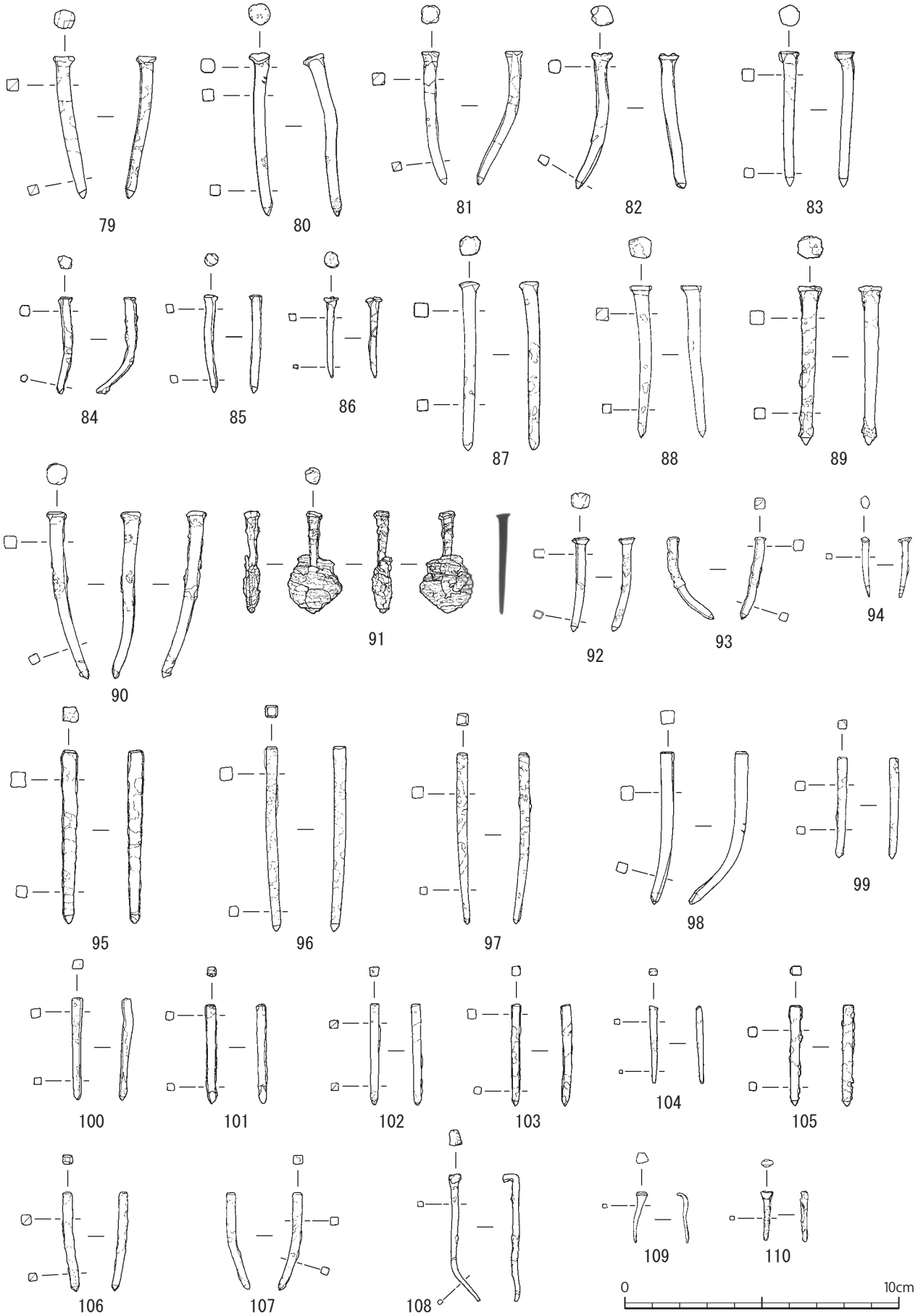
挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	頭部分類	法量(mm,g) 全長 頭部幅 軸幅	重量	グリッド・層	所見
第51図 図版51	136	銅製品	丸釘	×	18.46 3.88 1.99	0.4	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	頭部側面観はドーム状で、平面観では円形状となる。軸部から端部まで厚さが変わらず、先端部はわずかに欠損するが尖る。
第51図 図版51	137	銅製品	丸釘	×	15.46 4.04 1.44	0.2	K-14 Ⅱ層溝2内	頭部側面観は薄く扁平、平面観は円形状。軸部から端部にかけてゆるやかに先細り、先端は鋭く尖る。
第51図 図版51	138	銅製品	丸釘	×	15.21 4.09 1.97	0.3	K-14 Ⅰ層	頭部側面観はドーム状。軸部には薄く稜線が見られる。頭部下から軸部までほぼ同じ厚さで、端部は欠損。
第51図 図版51	139	銅製品	丸釘	×	18.22 4.75 2	0.4	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	頭部側面観は薄く扁平で、平面観は円形状。軸部から端部まで厚さが変わらず、先端部が欠損している。
第52図 図版52	140	鉄製品	角釘	Ⅰ	113.06 12.66 7.1	23.5	J-14 TP3Ⅰ層	ほぼ完形の鉄釘。全体的に錆びによる剥離が見られ、身が痩せている。軸部断面は長方形で、軸部から端部にかけて緩やかに細くなる。
第52図 図版52	141	鉄製品	角釘	Ⅰ	125.85 10.92 8.76	37.1	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	ほぼ完形の鉄釘。全体的に錆び膨れによる罅割れが見られるが、剥離はあまりない。軸部断面は長方形で、軸部から端部にかけて緩やかに先細る。
第52図 図版52	142	鉄製品	角釘	Ⅰ	120.32 10.66 7.46	27	K-14 Ⅱ層	軸部中央付近から曲がった鉄釘。全体的に錆に覆われている。頭部は軸部より一回り幅広く、長方形状になる。軸部断面も長方形状で、軸部から先端にかけて徐々に細くなる。
第52図 図版52	143	鉄製品	角釘	Ⅰ	115.89 12.14 8.17	38.7	K-15 Ⅰ層	頭部平面形及び軸部断面形が長方形状になる鉄製の角釘。先端部は錆による腐食が強く、形状は不明だが、恐らく軸部から端部にかけて細くなるものと思われる。
第52図 図版52	144	鉄製品	角釘	Ⅰ	142.67 12.97 9.7	51.2	L-14 Ⅱ層	頭部が軸部より幅広くなる鉄釘。軸部断面は長方形状と思われる。全体的に錆による罅割れ、剥離が見られ、胴部中央は身が痩せている。
第52図 図版52	145	鉄製品	角釘	Ⅰ	99.77 10.33 7.17	25.2	K-15 Ⅰ層	頭部が大きく広がる鉄釘。叩かれたことによって潰れたと思われる。軸部中央より以下が大きくねじ曲がっている。先端部は錆に覆われ、形状は不明。
第53図 図版53	146	鉄製品	角釘	Ⅱ-1	123.96 9.3 7.24	31.5	K-14 Ⅱ層	錆による罅割れと剥離が全体に見られる。頭部が軸部から垂直に立ち上がり、平面方形状になる。軸部断面も方形状で、軸部から端部にかけて緩やかに先細る。
第53図 図版53	147	鉄製品	角釘	Ⅱ-1	111.92 9.45 9.45	33.6	L-14 溝	頭部と軸部の幅が変わらない鉄釘。頭部平面形および軸部断面形は長方形状。軸部から端部にかけて緩やかに先細るが、先端部の腐食が強く、形状は不明。
第53図 図版53	148	鉄製品	角釘	Ⅱ-1	127.59 10.6 10.6	41.9	K-14 Ⅱ層溝2内	全体的に錆による腐食が強い。頭部は所々錆に覆われているが、頭部と軸部の幅は変わらないと思われる。頭部平面、軸部断面は方形に近い長方形状。
第53図 図版53	149	鉄製品	角釘	Ⅱ-2	105.22 8.11 7.84	25.9	L-15 Ⅰ層	軸部中央は錆による腐食、剥離が強く、身が痩せている。頭部は側面観では斜めに作られ、平面方形状となる。軸部断面は方形で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。
第53図 図版53	150	鉄製品	角釘	Ⅱ-2	48.07 3.6 3.95	3.4	L-15 Ⅱ層蓋溝2内	比較的小型の鉄製角釘。側面観では頭部が斜めに作られている。頭部平面形及び軸部断面形は方形状。軸部から先端にかけて緩やかに先細る。
第53図 図版53	151	鉄製品	角釘	Ⅳ	90.61 10.01 6.53	12.5	K-13 LTⅠ層	頭部は薄く幅広に作られる大型の鉄釘。頭巻き釘の一種と思われる。軸部断面は方形状で、軸部から先端にかけて先が細くなる。
第54図 図版54	152	鉄製品	角釘	Ⅳ	48.55 9.11 4.97	4.6	L-16 TP8Ⅰ層	比較的小型の頭巻釘。頭部は薄く幅広で、先端が曲がる。錆による膨れ等が見られるが、軸部断面は方形状と思われる。
第54図 図版54	153	鉄製品	角釘	Ⅳ	38.66 7.86 3.74	2.1	J-14 TP3Ⅰ層	小型の頭巻釘。軸部と頭部の境目でくびれ、頭部は薄く幅広になる。軸部は細く、断面形は方形状となり、軸部から端部にかけて細くなる。
第54図 図版54	154	鉄製品	角釘	Ⅳ	38.33 5.94 3.12	1.8	J-14 TP3清掃	小型の頭巻釘。頭部はくびれ、薄くなる。軸部断面形は方形状で、先端付近の断面形は円形に近くなり、鋭く尖る。
第54図 図版54	155	鉄製品	角釘	Ⅳ	38.71 5.08 3.08	1.3	K-14 Ⅱ層	小型の頭巻釘。軸部中央付近で折れ曲がっている。軸部断面形は方形状で、軸部から端部にかけて徐々に細くなる。
第54図 図版54	156	鉄製品	角釘	その他	96.3 8.71 11.74	40.6	L-16 TP10Ⅰ層	軸釘の一種。錆による剥離などが全体的に見られるが、元の形状を保っている。頭部は斜めに作られ、先端の角を取り、丸みを帯びた形状になっている。軸部で曲げられ、物をかけるための形状になっている。
第54図 図版54	157	鉄製品	角釘	その他	91.32 7.38 5.91	15.8	L-14 Ⅱ層	軸釘として用いられた折釘。全体的に錆びによる罅割れと剥離が見られ、身が痩せている。軸部半ばから端部にかけて徐々に細くなる。頭部先端は斜めに作られ、紐等を掛けるのに適している。
第54図 図版54	158	鉄製品	鋲	－	97.9 － －	7.6	K-14 Ⅰ層	錆による罅割れ、剥離によって身が痩せている。端部は欠損しているため形状は不明。軸部断面では、中央部は厚くなり、両端部付近になるにつれて長方形状に薄く扁平になる。
第54図 図版54	159	鉄製品	鋲	－	92.4 － －	15.4	L-14 Ⅰ層	全体的に保存状態は良い。片方の端部が欠損している。軸部断面は長方形状で、全体的に5㎜ほどの厚みを持ち、先端部のみ尖る。先端部は内側に曲がっている。
第54図 図版54	160	鉄製品	鋲	－	97.5 － －	9.2	K-14 Ⅱ層溝2	薄く扁平な形状で、片側の先端部のみ欠損する。軸部断面は長方形状で、厚さは全体的に3㎜程度。平面観では中央部分が最も太く、先端に向かうにつれて細くなる。
第54図 図版54	161	鉄製品	鋲	－	111.6 － －	34.2	K-14 Ⅰ層	軸部半ばで折れ曲がり、端部の片側が欠損する。軸部断面は方形に近い長方形状で、中央付近の厚さは8㎜ほどになる。両端部に向かうにつれて細くなり、先端へとゆるやかに先細る。
第54図 図版54	162	鉄製品	鋲	－	42.3 － －	3.5	J-15・16 TP7Ⅰ層	出土した中では最も小型の鋲。軸部断面は長方形状で、両端が先細る。形状としては合釘に近いが、断面形の厚みのなさから鋲とした。

第 18 表　調査区別釘出土量集計

グリッド層		E・F-13	F-13					F・G-13							G-13		H-13		I-13		I・J-13	J-13			K-13			L-13	G～L-13	I-14
		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅰ層			Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層		Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層
材質・器種		TP12	TP13	TP13	TP13 (ST1)	TP13 (ST2)	TP13 (ST1)	TP14	TP14 (ST2)	TP14 (ST1)	TP14 (ST4)	TP14 礫群	TP14 (ST2)	TP14 (ST2)	LT	LT	LT			LT		LT	LT (ST)			LT	LT	LT	LT	TP2北
鋼製品	角釘														1		1			3	2	2	12					1		1
	丸釘																						1							
鉄製品	角釘	1	3	2	1	1	1	3		1	1	1	1	5			1	1	1	2	2	1	7	1	1	6		3		1
	丸釘	2	1			1		3	1						3		1	1		1	1	3	8		1	1	1		1	
	鎹																													
合計		3	4	2	1	2	1	6	1	1	1	1	1	5	4	0	3	2	1	6	5	6	28	1	2	7	1	4	1	2

グリッド層		I・J-14		I・J-14		J-14											K-14				L-14				O-14	K・L-14	K-14・15	I-15		
		Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層			Ⅱ層				Ⅲ層	Ⅳ層		清掃	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層	Ⅱ層		清掃	Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅳ層
材質・器種		TP2	TP2	TP2 溝2内	TP2	TP1	TP2北	TP3	TP2	TP2南	TP3 溝2内	TP3 溝2内	TP3 溝2内	TP1 日石(0～20cm)					溝2内				溝内		TP3			TP4	TP6	TP6
鋼製品	角釘	3	1			2						1	1				12	52	6	1	130	10	2	1	1					
	丸釘	1															6	4	17		3	5					1			
鉄製品	角釘	2	2			1	1	7		3					1	1	15	19	18		23	28	5				4	2		
	丸釘	3	1		1	1		1		1		1	2				20	1	11		6	3					2	2		
	鎹																1		1		1									
合計		9	4	0	1	4	1	8	0	4	0	2	3	0	1	1	54	76	53	1	163	46	7	1	1	0	7	4	0	0

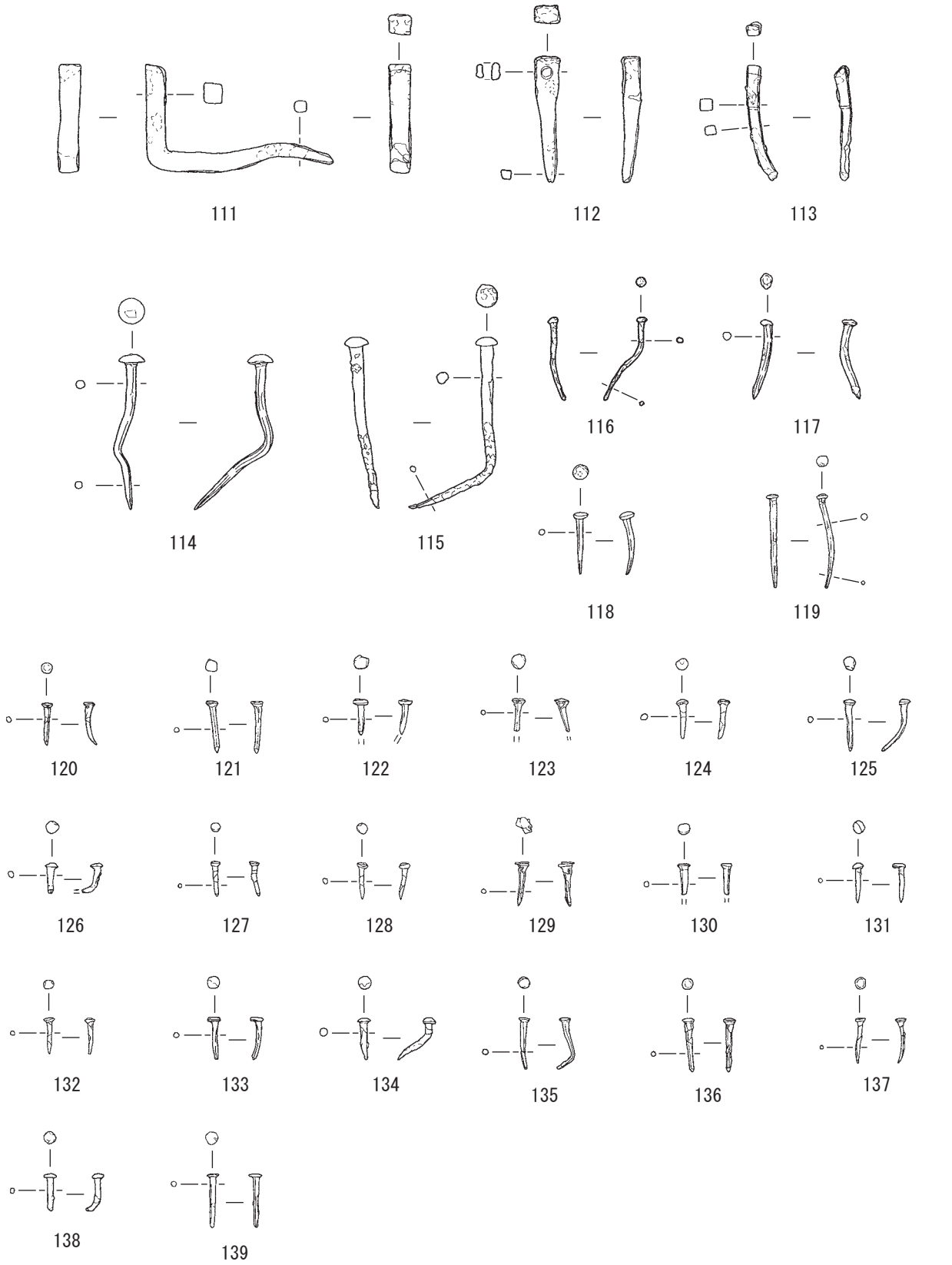
グリッド層		J-15	J-15		K-15					K・L-15	L-15					J-15・16		J-16	K-16	L-16			G-19	不明			合計
		Ⅰ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層	清掃	清掃	Ⅰ層	Ⅰ層			Ⅰ層	Ⅰ層	表採		
材質・器種		TP5	TP7			畦		溝1内	溝2内			石敷清掃		蓋溝2内	ドウ一括	TP7	TP7	TP5	TP9	TP8	TP10	TP11	TP15				
鋼製品	角釘		5		12						31		1	6		5				8				2	10		326
	丸釘		1		3						28			8						1					3		82
鉄製品	角釘	2	5	1	20	1					59	2	1	9		6			1	12	8	1	1	7	16		332
	丸釘	5	11		7	3	1			8	74		1			3			1	5				10	3		218
	鎹		1													1								1	1		7
合計		7	23	1	42	4	1	0	0	8	192	2	3	23	0	15	0	0	2	26	8	1	1	20	33	0	965


79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
10cm

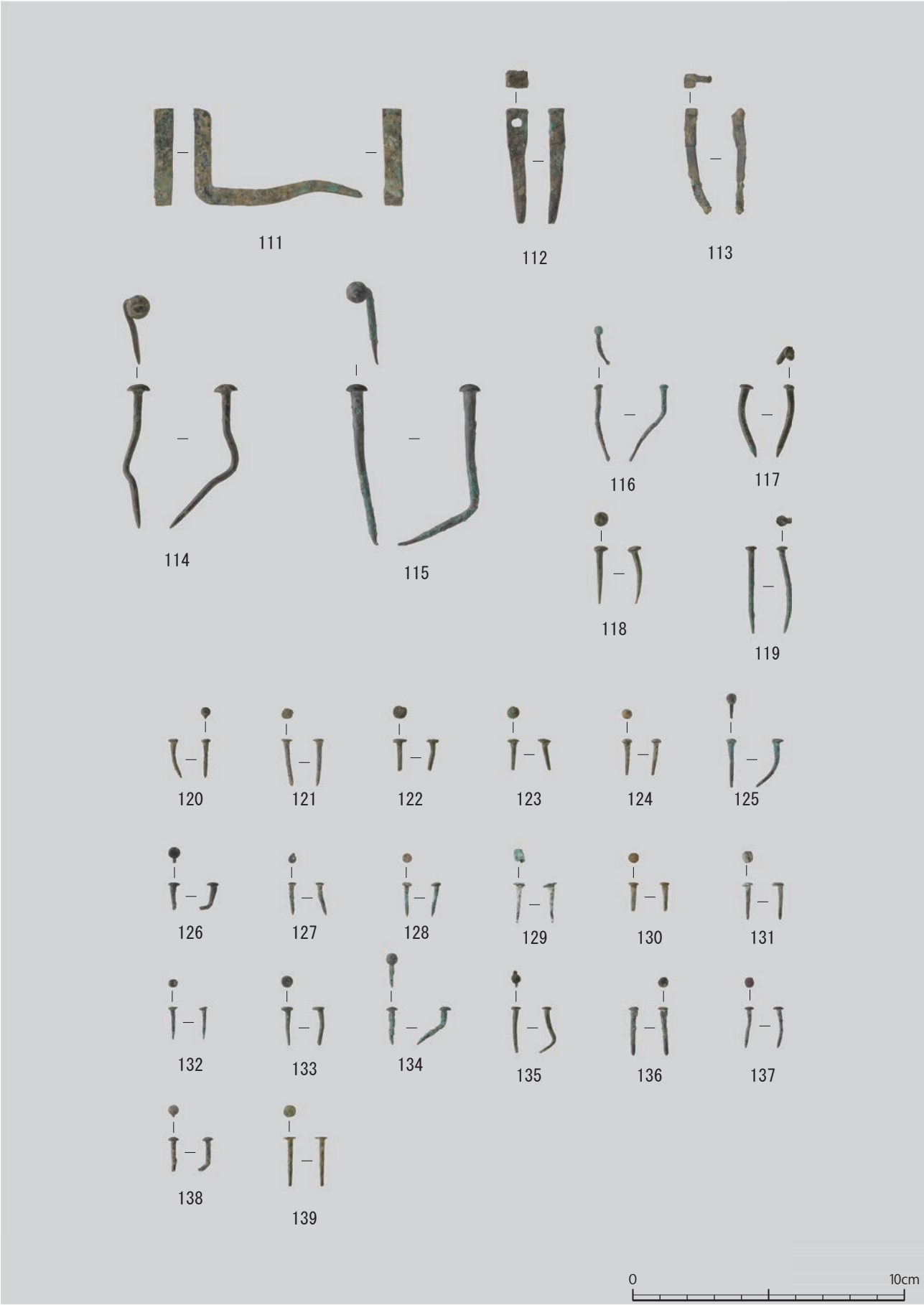
第 50 図　銅角釘 1

79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
10cm

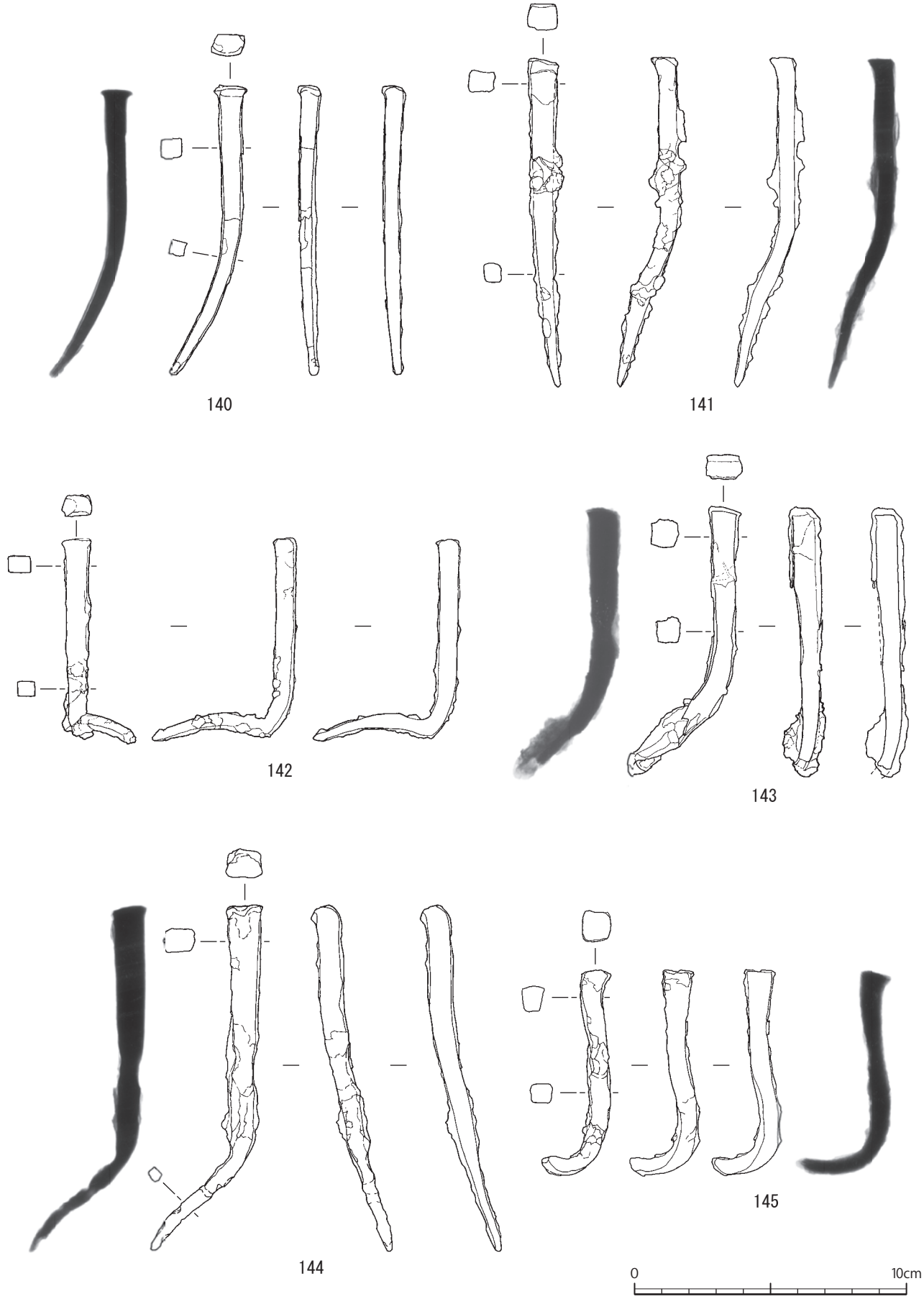
図版 50　銅角釘 1


111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
10cm

第 51 図　銅角釘２・丸釘

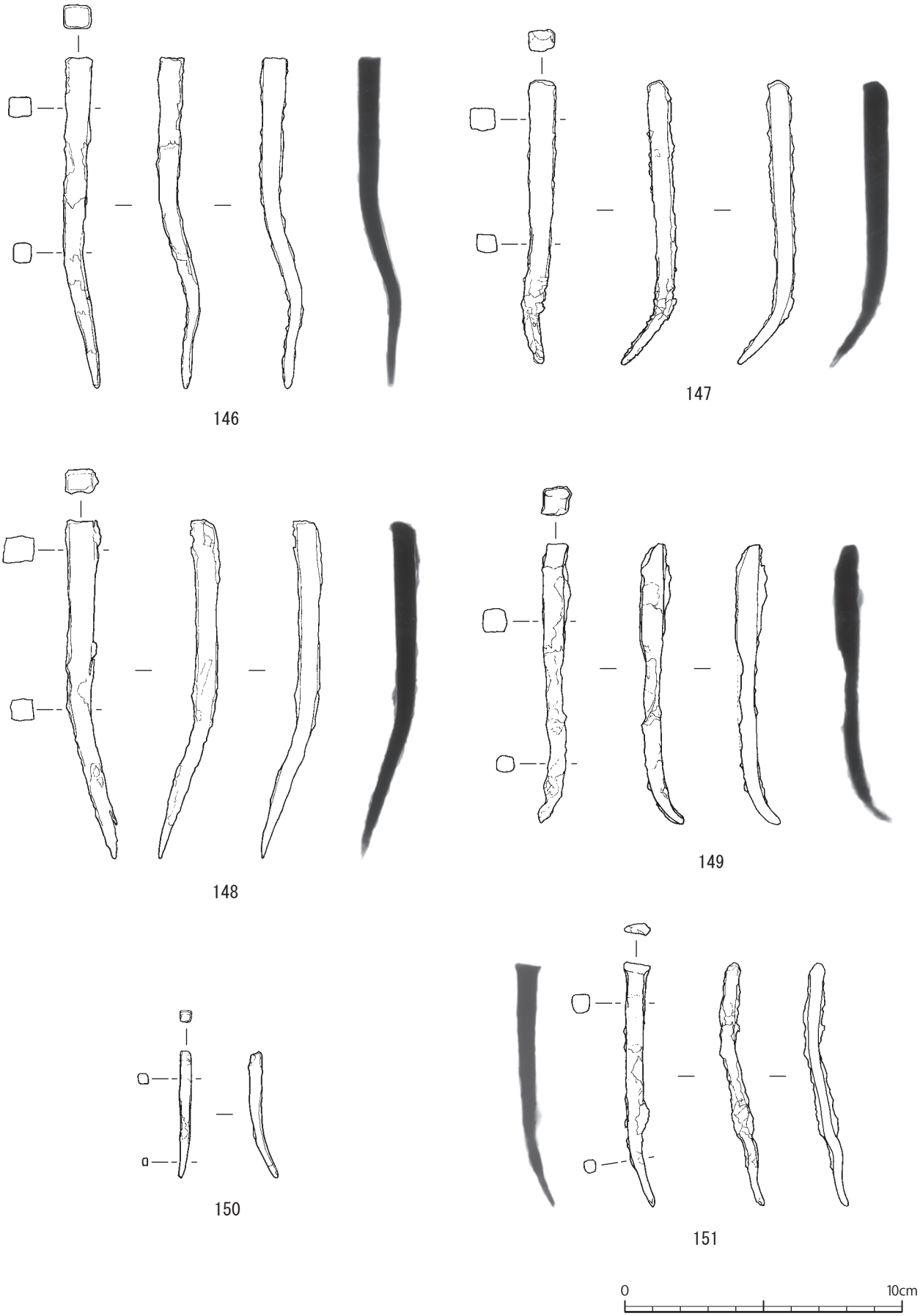

111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
0
10cm

図版 51　銅角釘 2・丸釘



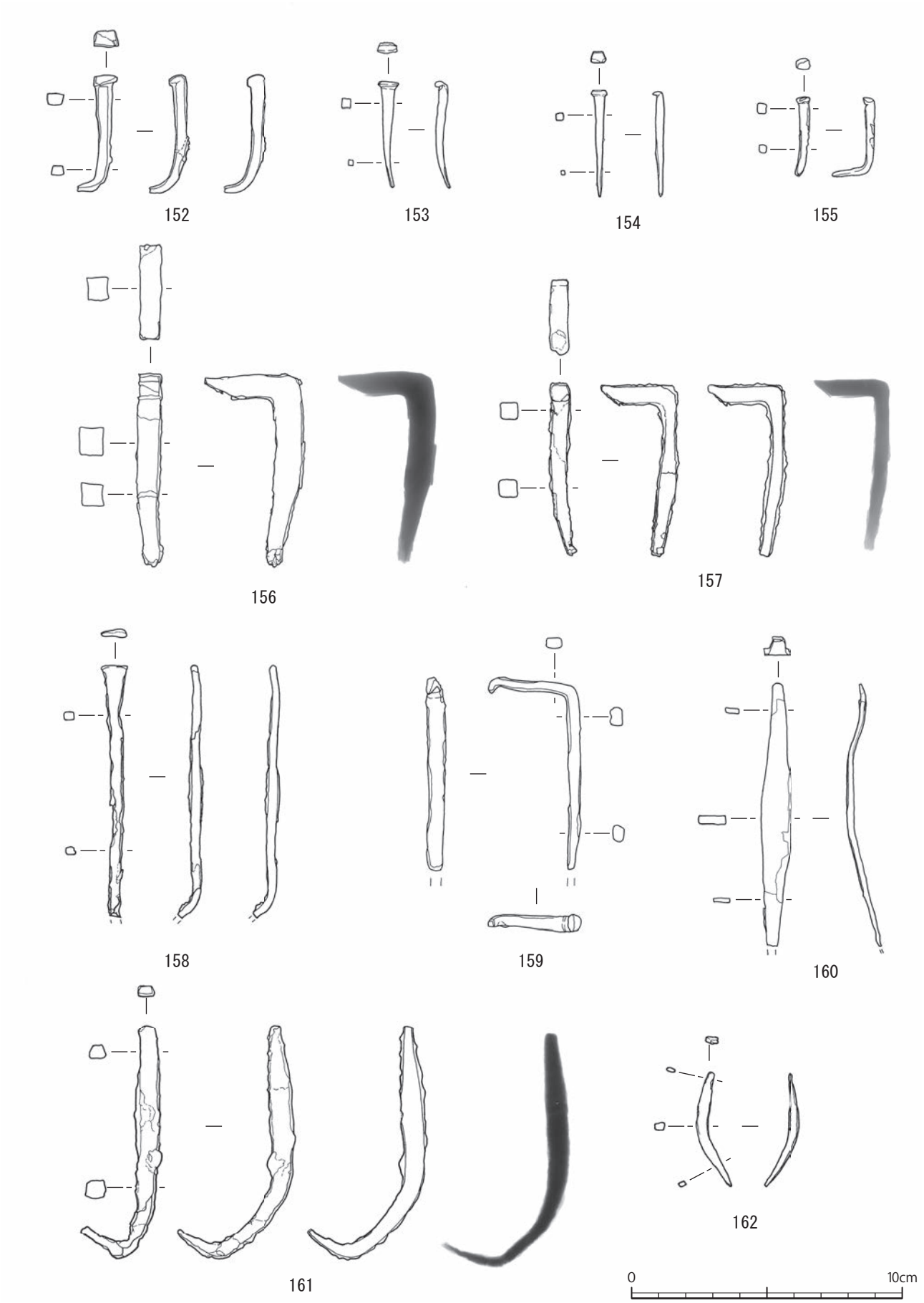
第 52 図　鉄角釘 1

図版 52　鉄角釘 1

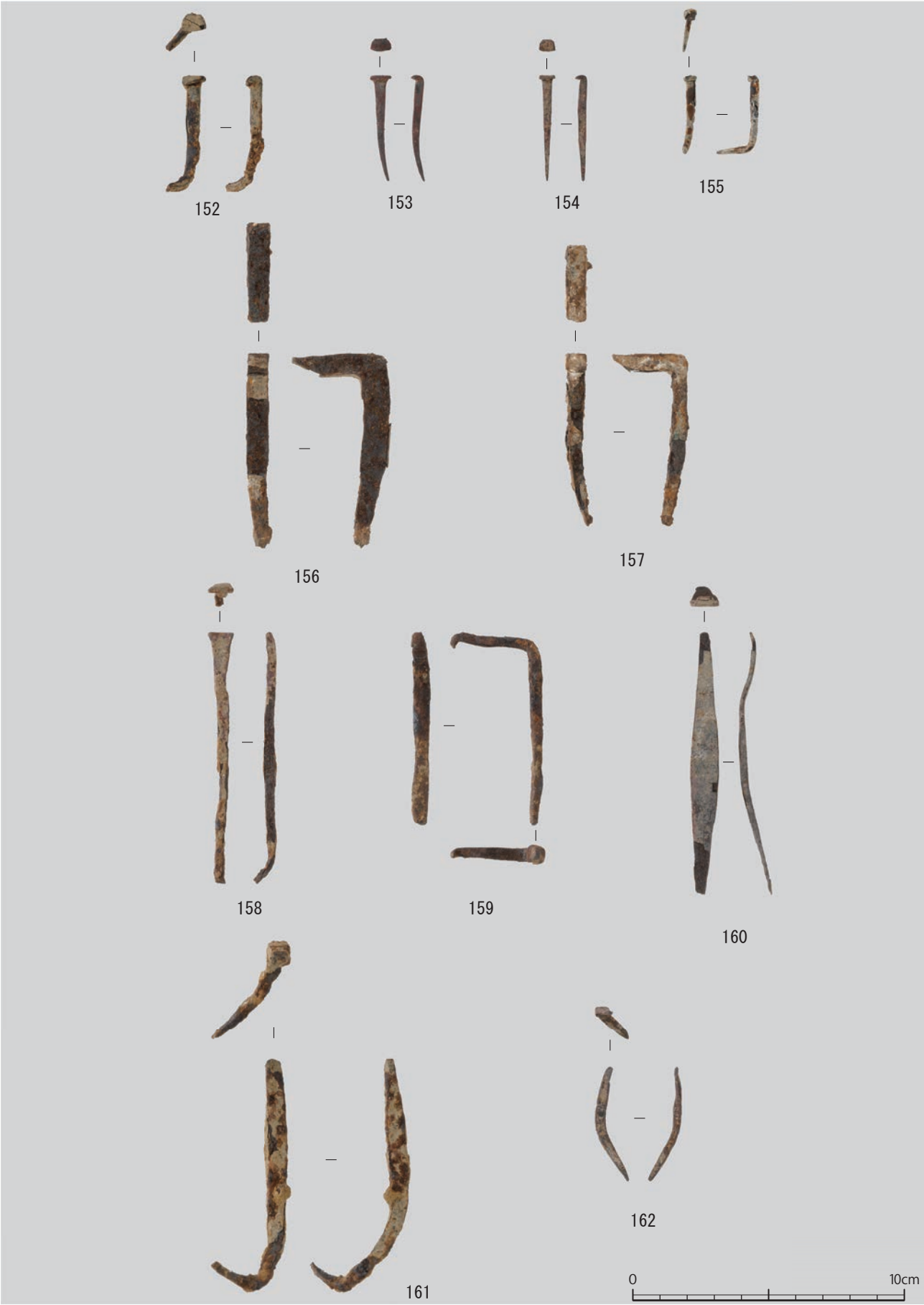


第 53 図　鉄角釘 2

図版 53　鉄角釘 2



第 54 図　鉄角釘３・鎹



図版 54　鉄角釘 3・鎹

第７節　銭貨

銭貨は、近世以前では嘉慶通宝と寛永通宝がそれぞれ１点、出土している。他は戦後の琉球政府時代の通貨が攪乱層ならびに表採で得られている。

第 19 表　銭貨観察表

挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第55図 図版55	163	銅製品	嘉慶通宝	0.9	F-13 TP13(ST1)Ⅲ層	半分に欠損した嘉慶通宝で「通」と「慶」が判読できる。背面には満洲文字で「宝」が刻まれている。直径2.5cm、厚さ0.9mm。
第55図 図版55	164	銅製品	寛永通宝	4	L-16 TP8Ⅰ層	銭銘の書体から古寛永に属する。直径2.5cm、厚さ2mm。
第55図 図版55	165	銅製品	5セント銅貨	5.3	L-16 TP11Ⅰ層	錆化が著しく、わずかに表面のモンティチェロの建物が輪郭として確認できる。直径2.2cm、厚さ2.7mm。
第55図 図版55	166	銅製品	5セント銅貨	5	L-16 TP11Ⅰ層	錆化が著しいが、文字ならびにトーマス・ジェファーソン像が確認できる。直径2.1cm、厚さ2.7mm。
第55図 図版55	167	銅製品	5セント銅貨	4.9	表採	錆化が著しいが、文字は読み取れる。直径2.1cm、厚さ2.1mm。
第55図 図版55	168	銅製品	5セント銅貨	4.9	L-15 Ⅰ層	残りは良好である。直径2.1cm、厚さ1.9mm。
第55図 図版55	169		10セント ニッケル貨	2.4	L-16 TP11Ⅰ層	残存状況は良好である。直径1.8cm、厚さ1.3mm。

第８節　その他金属製品

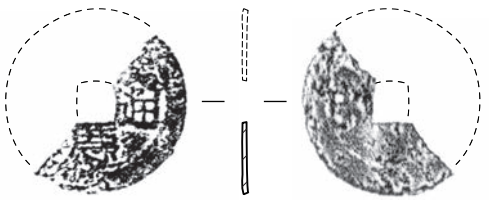
煙管、簪、銭貨、竿秤、帯金具、雨樋の金具、薬研といった特徴的な製品や用途不明の製品をまとめた。銭貨については銭銘の判読が可能なものや同定が可能なものを取り上げた。縁金具は、全て文様は見られないが、様々な形態が認められる。これらは調度品に付く金具と思われる。

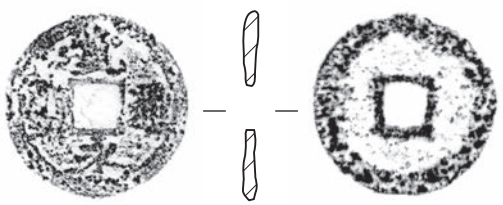
第 20 表　その他金属製品観察表１

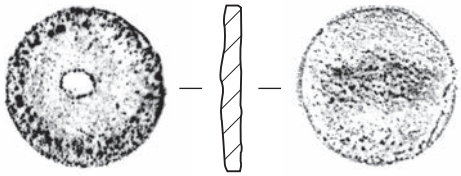
挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第55図 図版55	170		筒形製品	5.7	L-14 Ⅱ層	用途は不明の、板金を環状に繋いだ筒形製品。繋ぎ目は分離している。直径4.3cmであるが、端部はやや窄まる。
第55図 図版55	171		鉈尾	4.3	J-15,16 TP7Ⅰ層	帯金具の先端に取り付く金具。縦断面は扁平状となり、内部は空洞になっている。端部は細い窪みが付けられており、反対側の帯を留める孔は幅長さ23mmで幅は３mm。
第55図 図版55	172		竿秤	62.2	L-14 Ⅱ層	棒状製品で上下に各1カ所、左右に可動する突起が見られ、更にそれに直径1.7cmの鐶が取り付く。また、突起の反対側には約2mmの円孔が開けられている。端部は破損しており、もう一方の端部はやや窄まり、方孔が上下に見られる。この方孔には吊り金具が取り付いていたものと思われる。長さ12.4cm。
第55図 図版55	173		受け金具	8.9	L-14 Ⅰ層	雨樋の受け金具。欠損しており、全形は窺えない。受け部は円柱状となり、支部の断面形は五角形状となる。
第56図 図版56	174			499	L-15 Ⅱ層ドウ一括	変形が著しく、原形が判然としない。口縁帯と思われる区画帯が見られることから器物の可能性がある。厚さは２～３mmと薄く、文様等は見られない。
第56図 図版56	175			1940	Ⅰ・J-14 TP2清掃時	銅塊。高熱による融解により、木片や金属片、沖縄産陶器片を覆って凝固した銅塊。痘痕状となっている面がある一方で、反対面は平坦であることから、石畳などの平坦な床面で凝固したものと思われる。
第57図 図版57	176	銅製品	薬研	1515	L-15 Ⅱ層ドウ一括	高熱による融解で大きく変形しているが、全形は窺える。舟形の薬研でV字溝と注ぎ口が見える。板状の脚が底部に取り付く。
第58図 図版58	177		煮沸具	1195	K-14 Ⅱ層溝2内	高熱による融解で大きく変形しているが、全形は窺える。筒状の容器を鍋状の容器に収め、鍋状容器の上面のみを輪状の蓋が覆っている。筒状容器の底部と鍋状容器の側面に大小の円孔が各11カ所、開けられている。厚さは1mmと薄いため、全体的に脆くひび割れが各所に見られる。

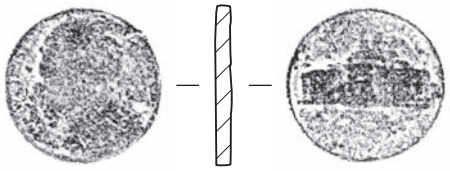
第 21 表　その他金属製品観察表 2

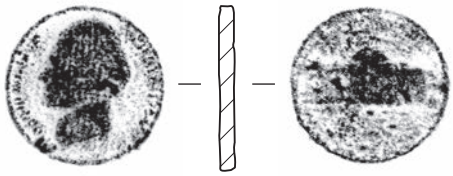
挿図番号 図版番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第59図 図版59	178			124.3	L-15 Ⅱ層ドウ一括	梵鐘の乳と考えられるが、厚みが4～5㎜と極めて薄いことから断定はできない。乳の断面形は分銅状となることから、梵鐘であれば中世まで遡る可能性がある。最大幅2.3g
第59図 図版59	179			15.6	L-14 Ⅰ層	脚または接続用の金具と考えられるが、詳細は不明。断面はS字状となり、端部には直径2㎜の円孔が見られる。裏面には球状の銅塊が溶着している。厚みは2㎜
第59図 図版59	180			16.9	L-15 Ⅰ層	厚さ2㎜の銅板で、二つ折れで大きく変形している。長方形状で文様は見られない。用途は不明。
第59図 図版59	181			20.7	K-14 Ⅱ層溝2内	左右対称の扇形となる銅板。接続用の金具か。幅広がり、縁が弧状となり、もう一方の端部には幅８㎜の突起が付く。直径２㎜と４㎜の円孔がそれぞれ１カ所見られる。
第59図 図版59	182	銅製品	棒状製品	269.8	L-14 Ⅰ層	断面形が六角形状となる棒状製品。高熱による融解で変形し、破損も著しい。先端部は丸みを帯びているが接地面は稜を有する。先端にかけて緩やかに屈曲しているが、被熱による変形か原形かは不明。また先端部近くには刻みが1カ所見られる。鋳造品。その形状から第59図183と同一個体になるものと思われる。
第59図 図版59	183		棒状製品	106	L-14 Ⅱ層	断面形が六角形状となる棒状製品。高熱による融解で先端部は欠損している。末広がりに開き、根部は中空となる。茎と思われる突起が付属しているが、その先端部も高熱による融解で欠損している。香炉の脚部か。鋳造品。第59図182と同一個体になるものと思われる。最大径6.1㎝。
第60図 図版60	184		縁金具	15.2	K-14 Ⅱ層溝2内	調度品などの縁金具。端部は入八双を連続させ、直角に折っていることから角部に取り付く金具であることが分かる。また斜位に伸びていくが、欠損しているため全形を窺うことができない。直径２㎜の鋲留の円孔が両端部にそれぞれ２カ所、中央部に２カ所の計６カ所開けられている。厚みは1～1.5㎜。
第60図 図版60	185		縁金具	5	K-14 Ⅱ層溝2内	断面形がくの字状に折れる縁金具。欠損してるため、全形は窺えない。端部に近くには鋲が1カ所ずつ、それぞれ打たれている。端部は入八双となり、先端並びに切り込みは丸味を有する。
第60図 図版60	186		縁金具	2.8	K-14 Ⅱ層	調度品などの縁金具か。欠損しているため全形は窺うことができない。横断面形はくの字状となり、端部近くに直径２㎜の鋲留の円孔が２カ所開けられている。角部は角欠きがなされる。厚みは1～1.5㎜
第60図 図版60	187		縁金具	6.1	K-14 Ⅱ層溝2内	調度品などの縁金具。T字状の金具で、端部近くに鋲が1カ所打たれている。端部は入八双となり、先端部と切り込みは丸味を有する。第60図188と同形態であるが、やや小振りとなる。厚みは1～1.5㎜。
第60図 図版60	188		縁金具	4.4	K-14 Ⅱ層溝2内	調度品などの縁金具。T字状の金具で、端部は入八双となり、先端部は尖らず平坦で切り込みは丸味を有する。直径1.5㎜の鋲留の円孔が端部近くに開けられている。厚みは1～1.5㎜。
第60図 図版60	189		縁金具	16.2	K-14 Ⅱ層溝2内	大きく変形しているが、原形は窺うことができる。櫃や箪笥などの調度品の隅部に取り付く縁金具。T字状の銅板を切り出し、直角にそれぞれの端部を直角に折っている。断面形はくの字状に折れ、端部は平坦になる。直径２㎜の円孔が計10カ所見られ、うち4カ所に鋲が付く。
第60図 図版60	190		縁金具	4.2	K-14 Ⅱ層溝2内	調度品などの縁金具。T字状の金具で、鋲が端部近くに1カ所それぞれ打たれている。端部は入八双となり、先端部と切り込みは丸味を有する点で特徴的である。厚みは1～1.5㎜。
第60図 図版60	191	銅製品	縁金具	7.4	K-14 Ⅱ層溝2内	調度品などの縁金具。十字状の銅板を切り出し、幅広の軸部の中央部を直角に折る。端部は入八双となり、先端部は尖らず平坦となり、切り込みは丸味を有する。幅広の端部には入八双を連続させている。また、直径1.5㎜の鋲留の円孔が入八双の切り込み毎に1カ所、開けられている。
第61図 図版61	192	鉄製品	刀子	83.1	L-16 TP10Ⅰ層	鉄製の刀子か。錆膨れ並びに剥落が著しいことから、原形はほとんど窺えない。僅かに茎と思われる舌状の突起が窺われる。全長12.5㎝。
第61図 図版61	193	銅製品	簪	2.8	F・G-13 TP14Ⅳ層	押差の簪。銅製。カブは耳掻き状となり、先端部は丸く成形する。頸の断面形は六角形状、竿の断面形は扁平な六角形状となる。竿は僅かに歪みが見られ、竿の先端部は尖らせる。カブ長15.5㎜、頸長23㎜、竿長54.5㎜、竿長77.5㎜。
第61図 図版61	194	銅製品	煙管	4.52	J-14 TP31層	煙管の雁首。火皿は欠損している。厚さ１㎜の銅板を管状に成形してしており、変形により合わせ部が開く。全長4.3㎝。
第61図 図版61	195	銅製品	煙管	5.06		煙管の雁首。火皿部分は破損により分離している。火皿の口径は16.5㎜で胴部は膨らみを有する。全長4.5㎝、小口径は9㎜。
第61図 図版61	196	アルミ 製品	煙管	0.47	L-15 TP11Ⅰ層	煙管の吸口。大きく変形し、一部欠損する。小口は外側へ丸く折り返しが見られる。全長4.2㎝。
第61図 図版61	197	銅製品	煙管	4.9	L-14 Ⅰ層	煙管の吸口。小口部分は大きく変形しているが、全体的に残りは良好である。厚さ1㎜の銅板を管状に成形しており、変形により合わせ部が開く。口付の径は5㎜で、内側へ窄まる。全長6.1㎝。

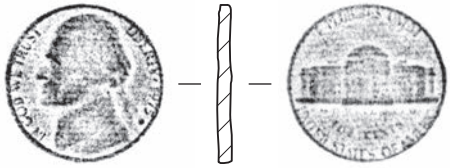

163

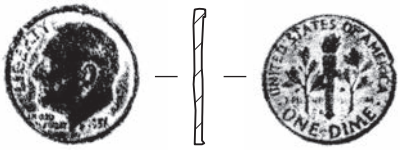

164


165


166

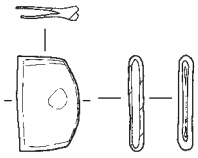

167

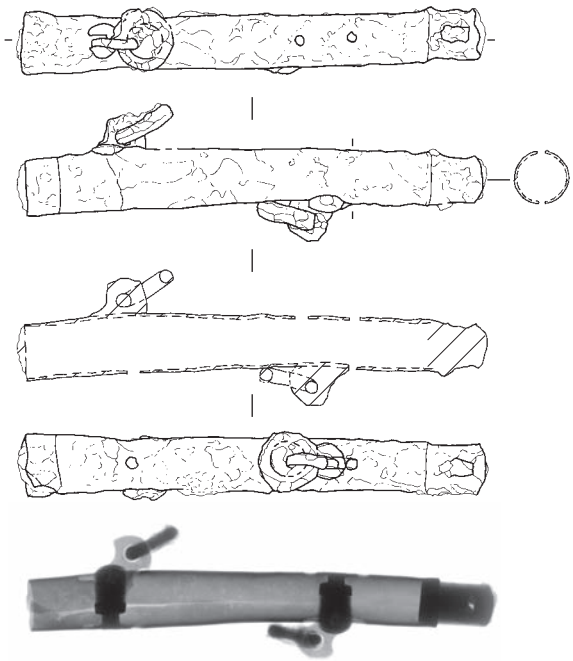

168

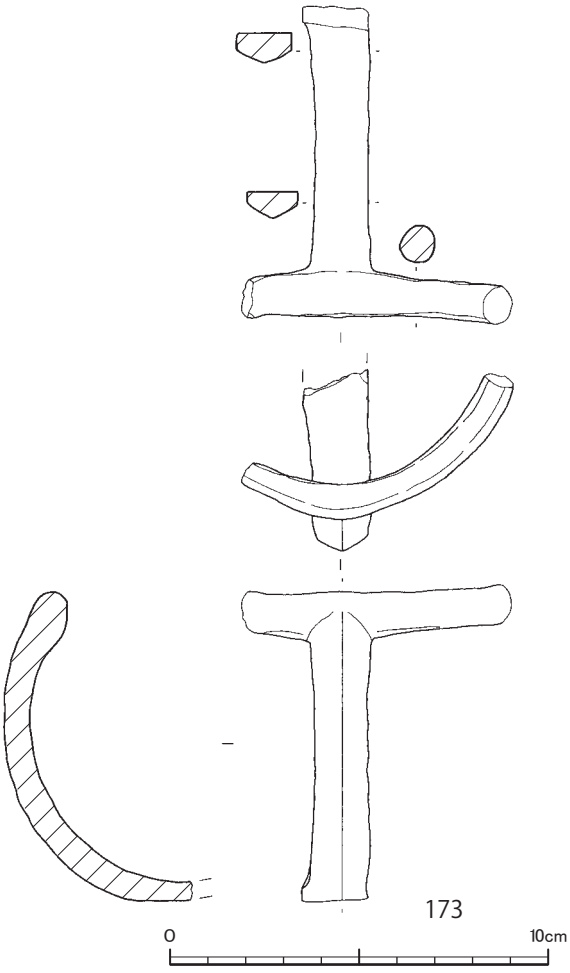


169

170

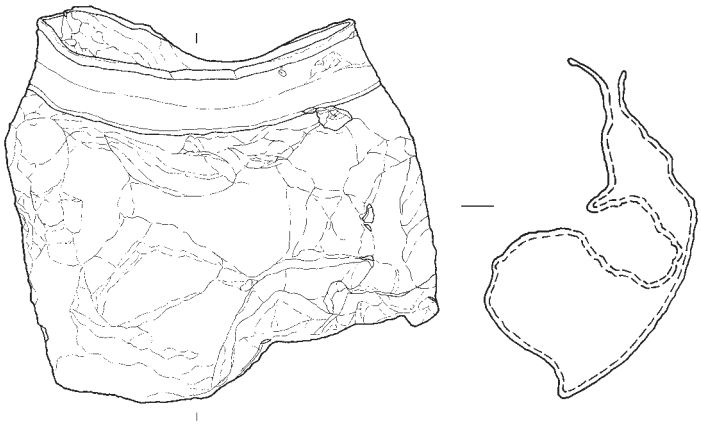

171


172

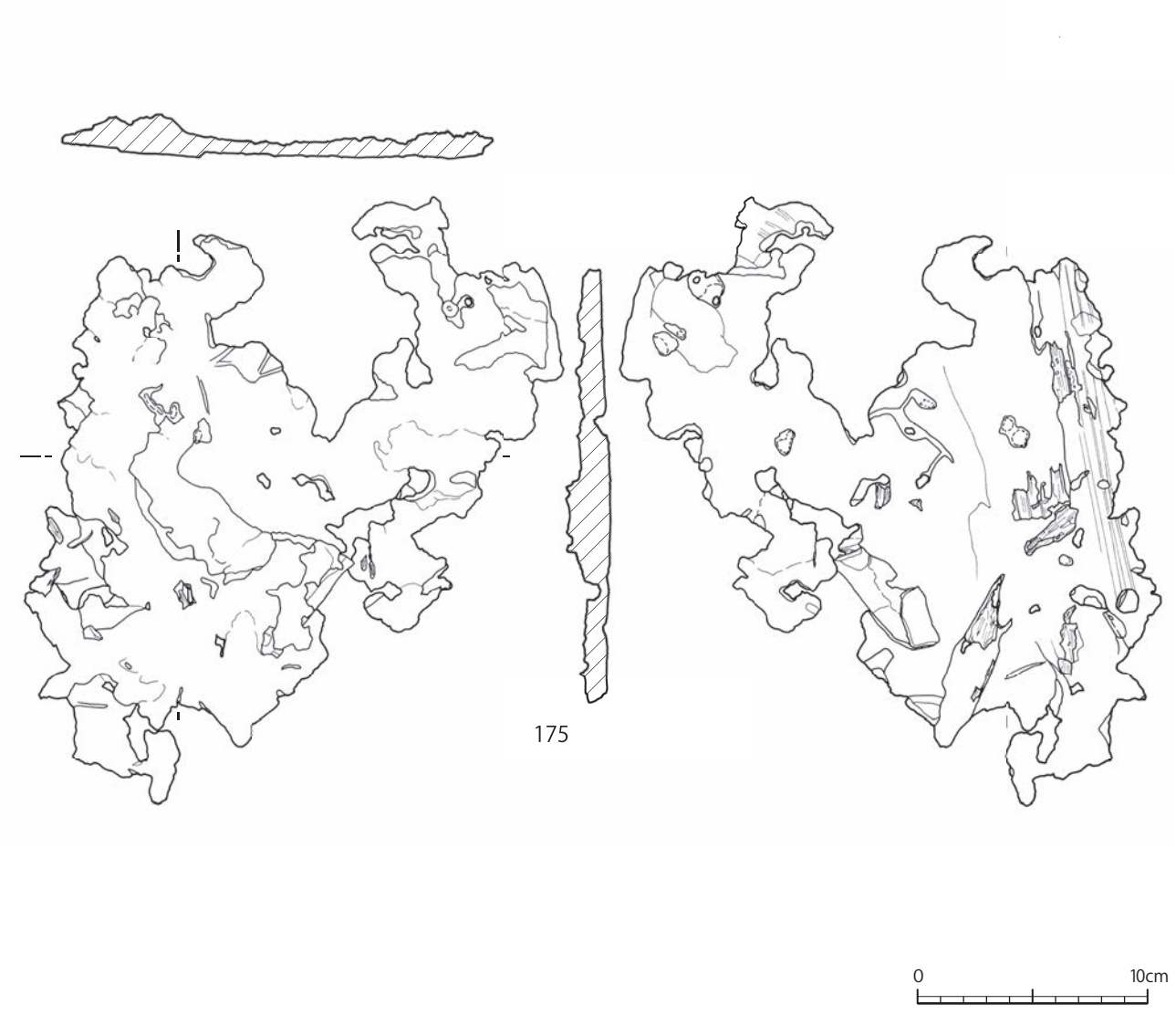

173

第 55 図　銭貨・その他遺物 1

図版 55　銭貨・その他遺物 1

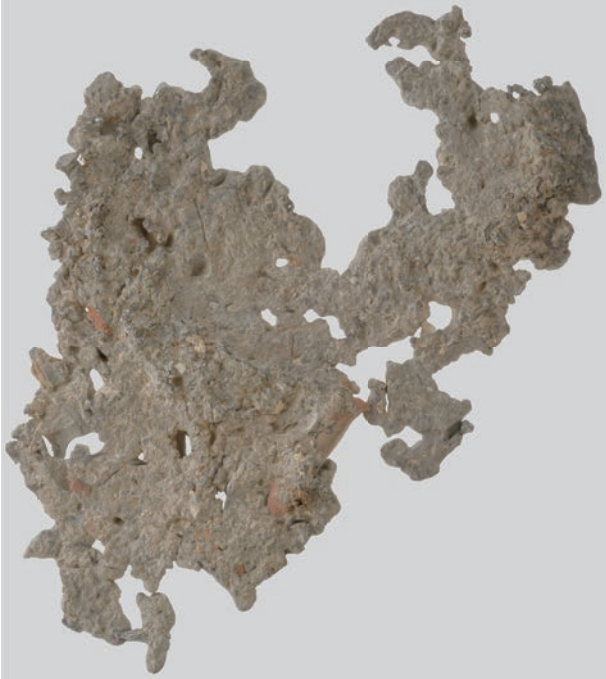


174



第 56 図　その他遺物 2

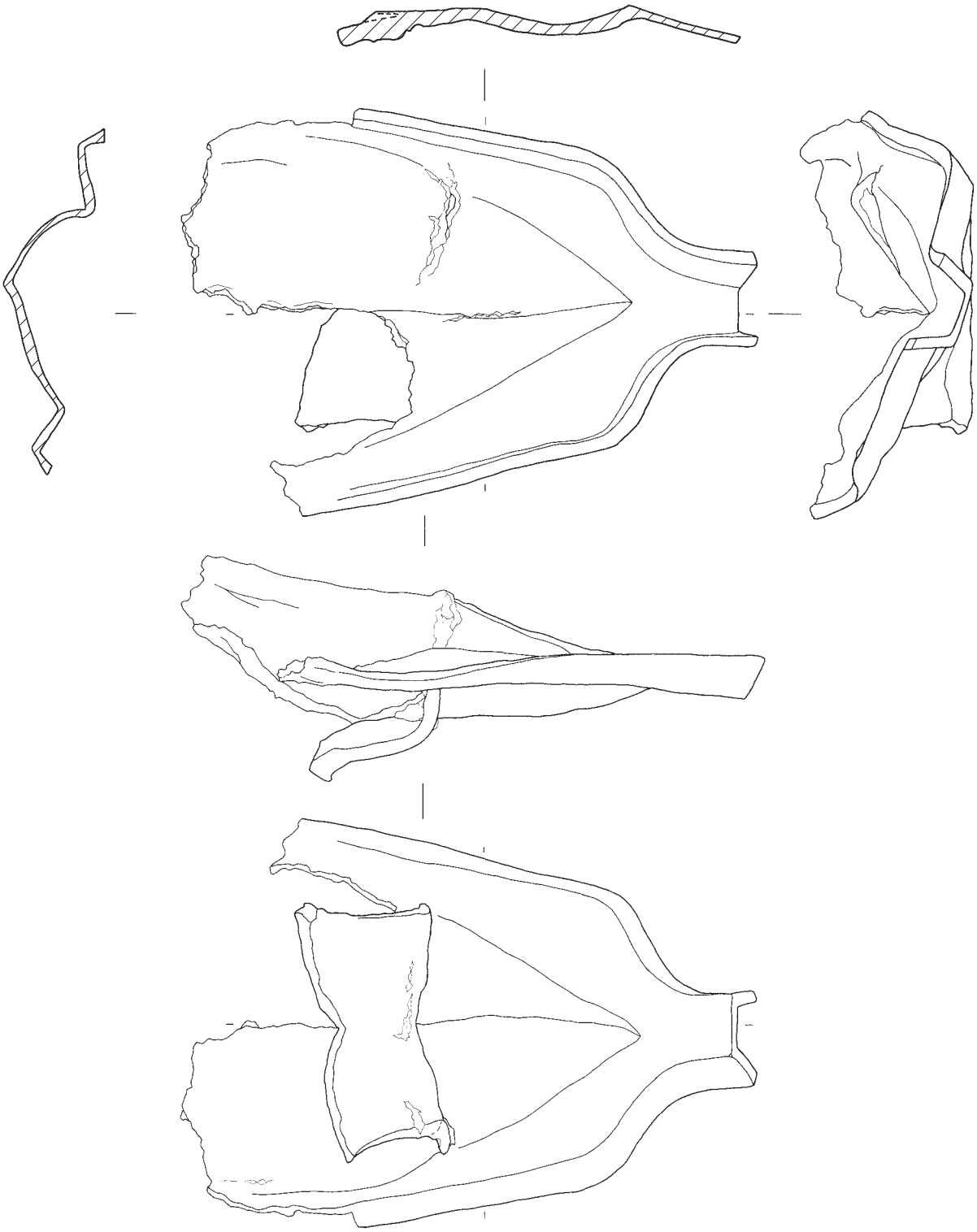
174



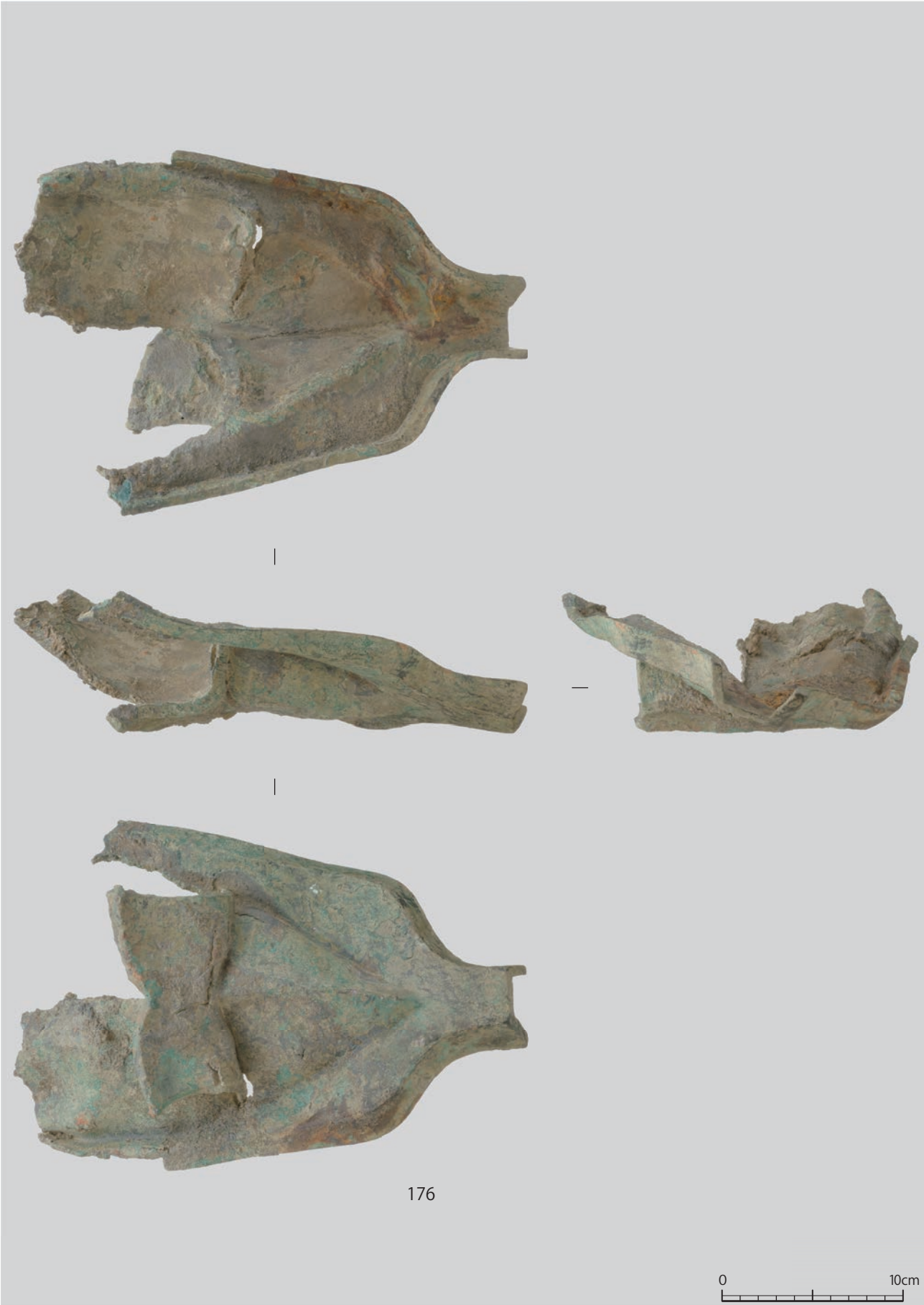
175

0 10cm

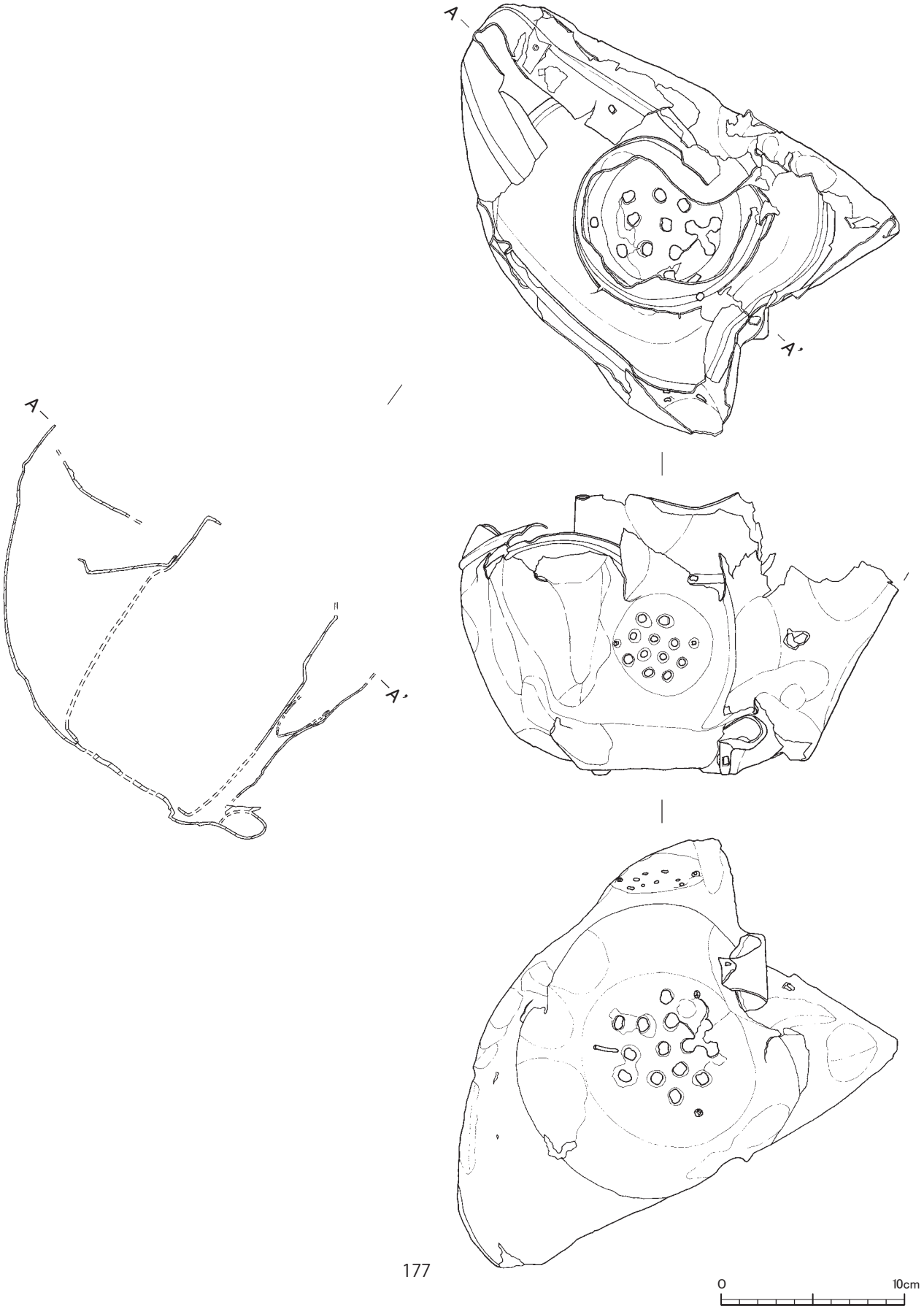
図版 56　その他遺物 2



第 57 図　その他遺物 3

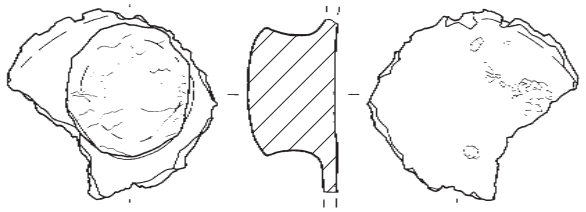


図版 57　その他遺物 3

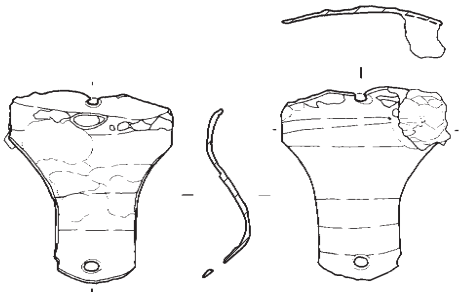


第 58 図　その他遺物 4

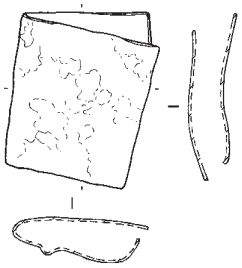
図版 58　その他遺物 4



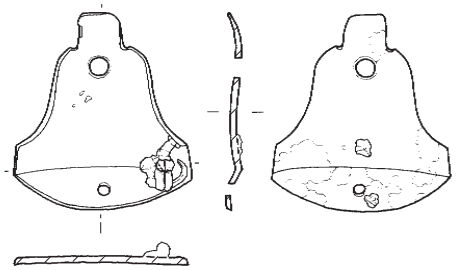
178



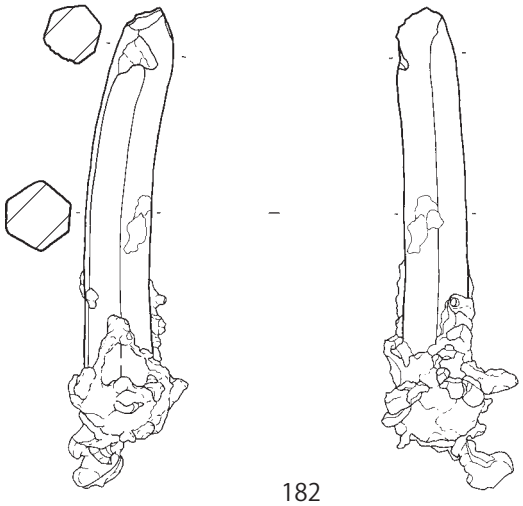
179



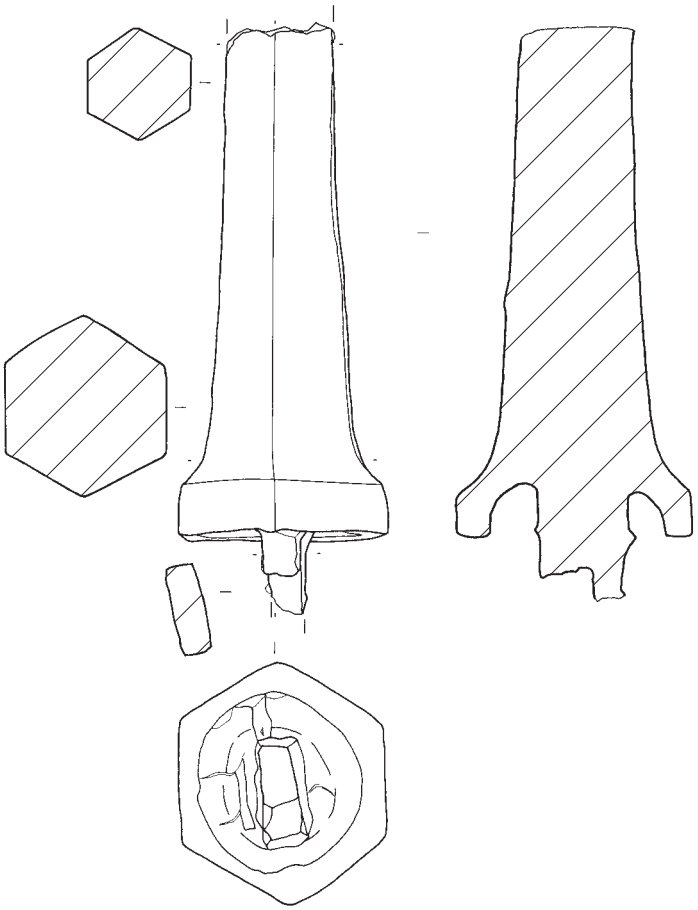
180



181



182

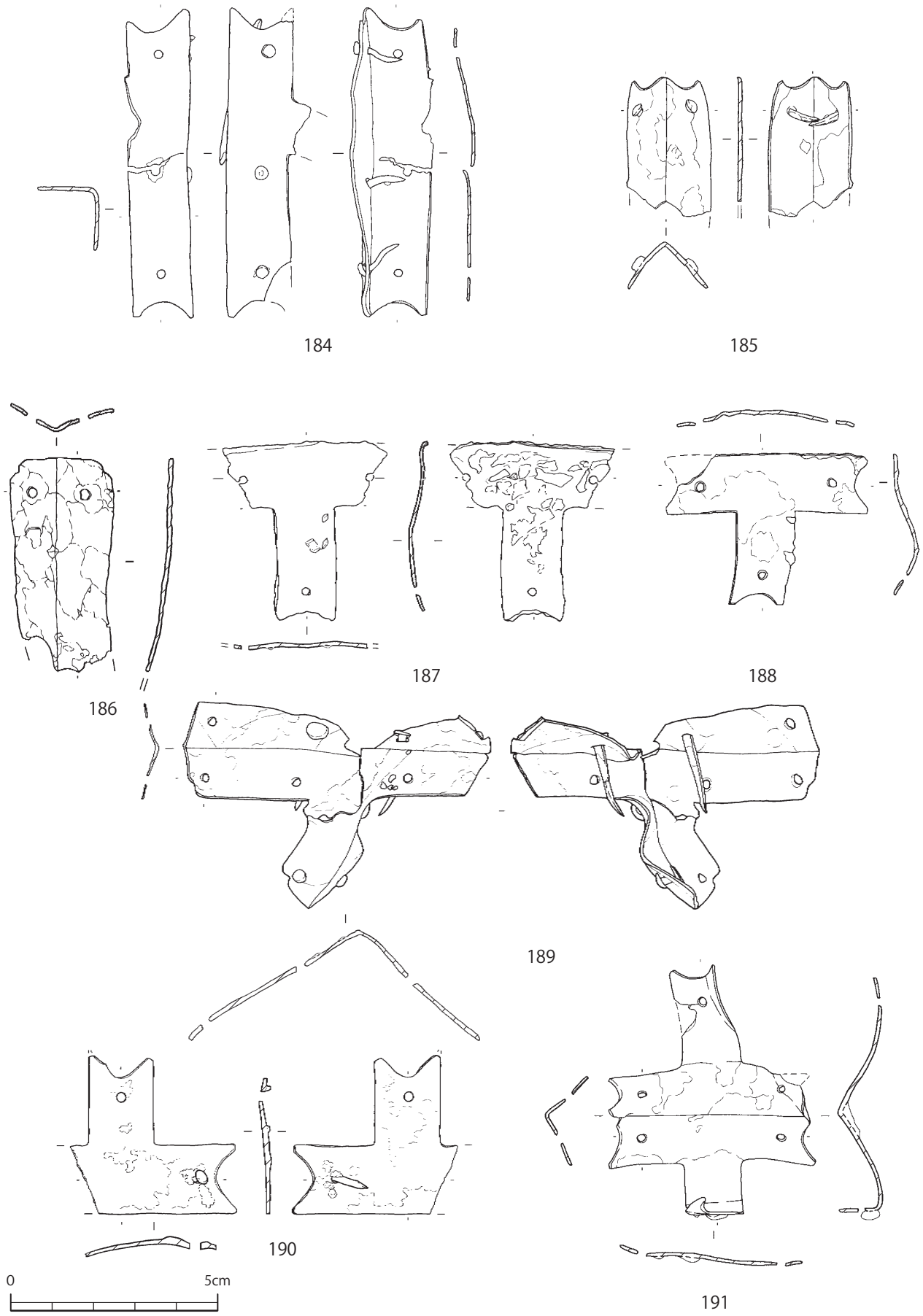


183

0 10cm

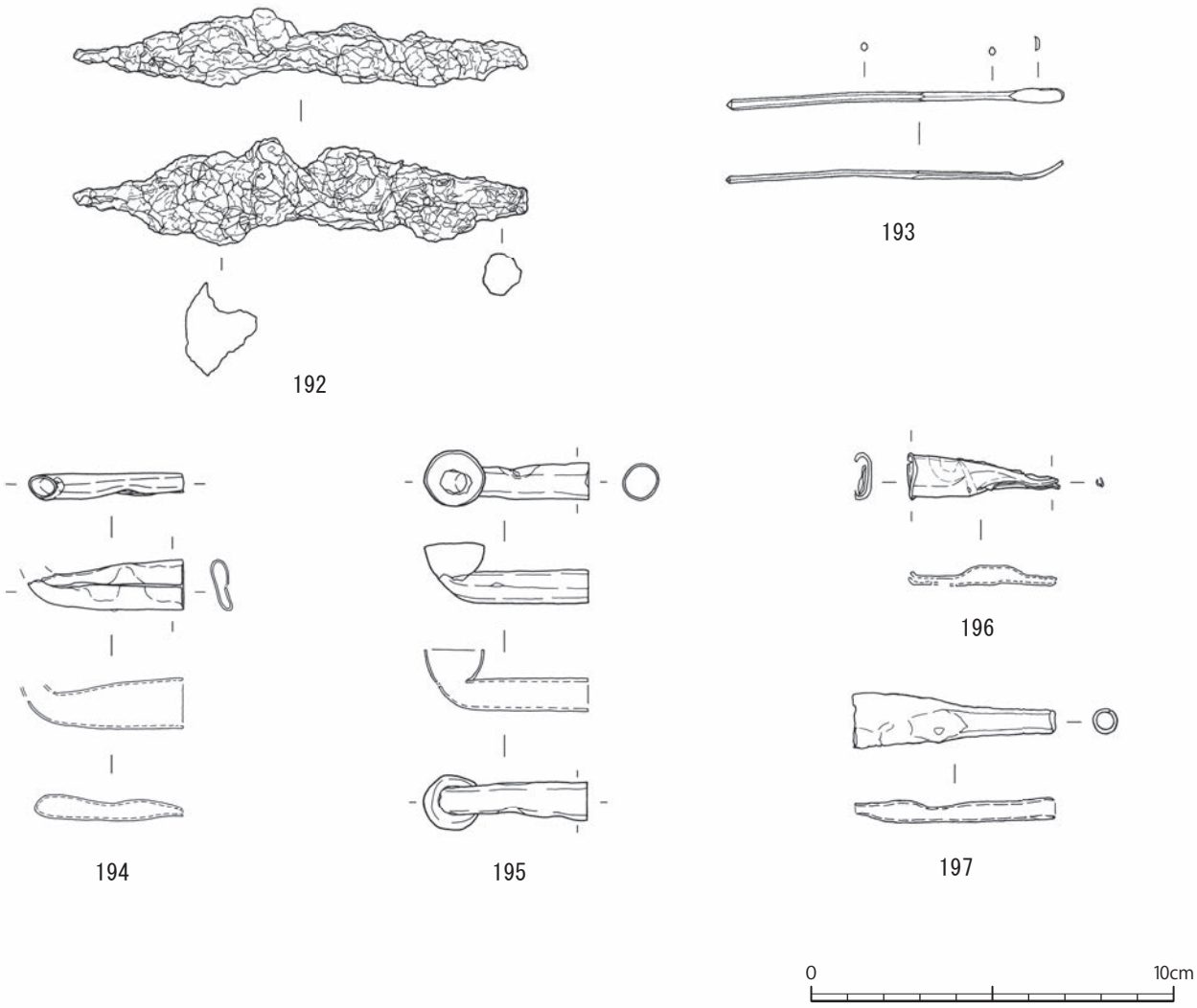
第 59 図　その他遺物 5

図版 59　その他遺物 5

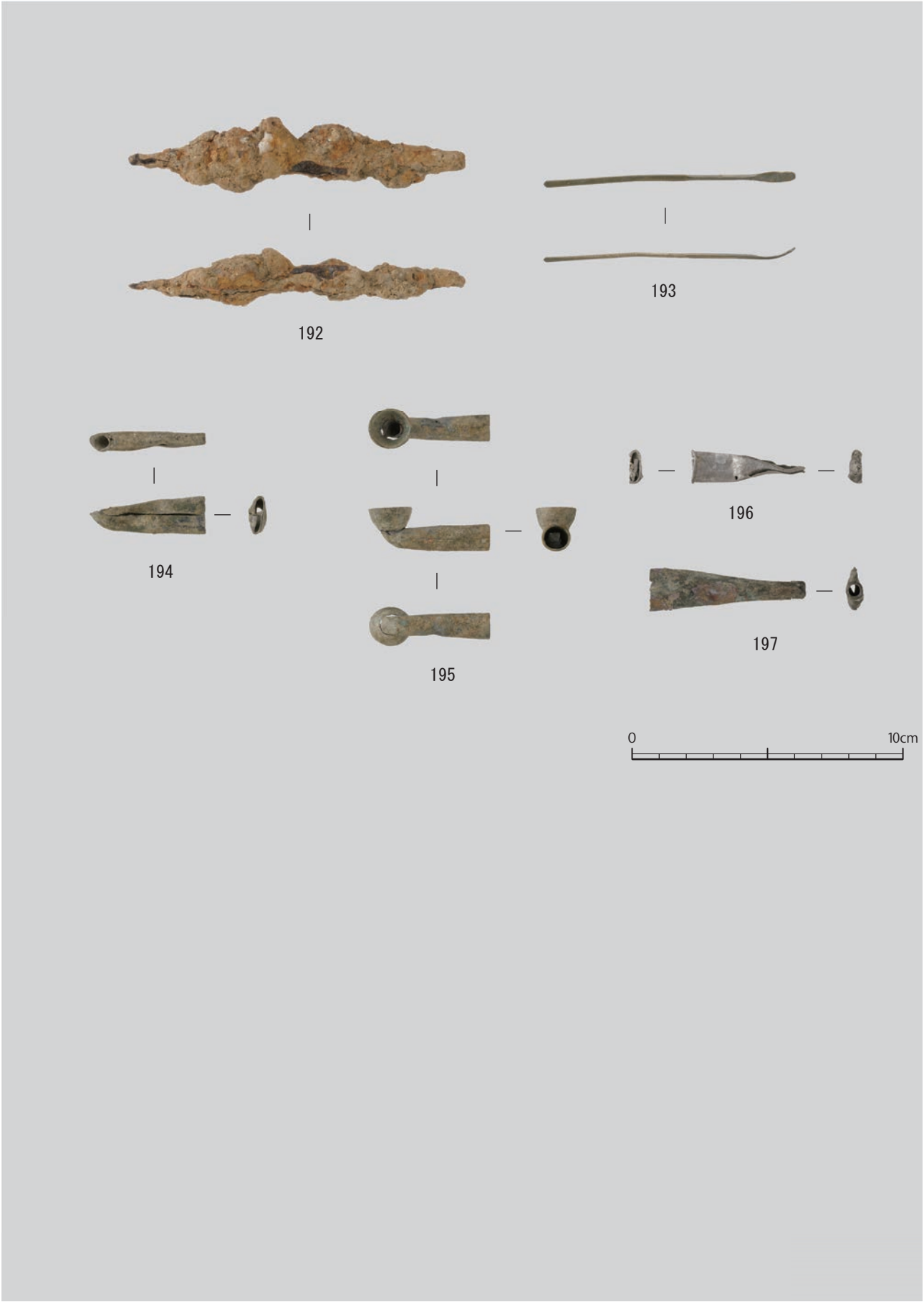


第 60 図　その他遺物 6

図版 60　その他遺物 6



第61図　その他遺物７



図版 61　その他遺物 7

第 22 表　金属製品集計表

グリッド・層 / 材質・器種		E・F-13	F-13			F・G-13					G-13		H-13	I-13		I・J-13	J-13		K-13			G～L-13	I-14	I・J-14	I・J-14
		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅰ層		Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅰ層		Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅱ層
		TP12	TP13	TP13	TP13 (ST2)	TP14	TP14 (ST1)	TP14 (ST4)	TP14 礫群	TP14 (ST2)	LT	LT	LT		LT	Ⅰ層	LT	LT (ST)		LT	LT	LT	TP2北	TP2	TP2
銅製品	建具												1			2		1							
	器物																						1		
	飾金具										1			1											
	祭祀具																						1		
	装身具	1	1					1																1	
	煙管									1															
	鈪																	1							
	銭貨				1																				
	その他	1																							
	ネジ																			1					
	不明	1	2	1		2	1		1	1		1	3		1		1	3			1	2	2	4	5
真鍮製品	飾金具																								
	装身具									1															
	煙管																								
	不明																		1						
鉄製品器種不明																									
合計		3	3	1	1	2	1	1	1	3	1	1	4	1	1	2	1	5	1	1	1	2	4	5	5

グリッド・層 / 材質・器種		I・J-14		J-14								K-14		K-14		L-14			K・L-14	K-14・15	I-15		I-15	J-15
		Ⅱ層	清掃	Ⅰ層			Ⅱ層				Ⅲ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅱ層	清掃	Ⅰ層	Ⅱ層		Ⅰ層	Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅳ層	Ⅰ層
		TP2 溝2内	TP2	TP1	TP2北	TP3	TP2	TP2南	溝2内	TP3 溝2内	TP3 溝2内			溝2内				溝内			TP4	TP6	TP6	TP5
銅製品	建具				1	1						6	4	7		2	5		1	1				
	器物											3	1	6		1	1							
	飾金具			1						2		6	7	9		1	20	3				1		
	祭祀具											4	28	4		5	2							
	装身具												1							1				
	煙管											2				1								
	鈪			1								1	1	1			3			1				
	銭貨																							
	その他		3										6	1		3	3							
	ネジ											2												
	不明	2		1		14	1	1	2	2	17	1	39	32	69	1	42	19				4	2	1	2
真鍮製品	飾金具																								
	装身具																								
	煙管					1																			
	不明															1	1							
鉄製品器種不明																								
合計		2	3	3	1	16	1	1	2	7	19	1	63	80	97	1	56	54	3	1	3	4	3	1	2

グリッド・層 / 材質・器種		J-15	K-15					L-15					J-15・16		J-16	L-16			G-19	不明			合計	重量（Kg）
		Ⅰ層	Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層		Ⅱ層			Ⅰ層	清掃	清掃	Ⅰ層			Ⅰ層	Ⅰ層				集計分
		TP7		畦		溝1内	溝2内		石敷清掃		蓋溝2内	ドウ一括	TP7	TP7	TP5	TP8	TP10	TP11	TP15		表採			
銅製品	建具	2	8					8		1	4					2		1		1			59	0.936
	器物											5				2							20	2.882
	飾金具	4	6	1			1	29	1		9	1				18	2			1	1		126	1.136
	祭祀具		1					2				14								1	1		68	24.580
	装身具		2																				8	0.025
	煙管		3									1											8	0.038
	鈪	1	6					9		1			4			2				1			33	0.051
	銭貨							1								1		3		1	1		8	0.037
	その他	1	1									3	2			1							25	5.846
	ネジ		1																				4	0.022
	不明	7	23		1	1		46	1	4	3	74	2		1	19	2		1	7	5	1	482	8.245
真鍮製品	飾金具													1									1	0.001
	装身具																						1	0.003
	煙管																						1	0.005
	不明		1					2								1							7	0.060
鉄製品器種不明																								67.900
合計		15	52	1	1	1	1	97	2	6	16	98	8	1	1	46	4	4	1	12	8	1	851	111.767

グリッド・層 / 材質・種		F・G-13		I・J-13	I・J-14	J-14	K-14		J-15	K-15		L-15	L-16	合計	重量(g)
		Ⅰ層	Ⅳ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅰ層	Ⅰ層	清掃	Ⅰ層	Ⅰ層		集計分
		TP14	TP14 (ST2)		TP2	TP2南			TP5				TP8		
アルミ製品	ドックタグ								1					1	4.30
	煙管												1	1	0.47
	不明			1	1	1	2			1		1		7	32.91
ガラス製品	ビーズ							1						1	0.10
材質不明	不明	1	1				8				1			11	117.73
合計		1	1	1	1	1	10	1	1	1	1	1	1	21	155.51

第６章　遺物（その他の遺物）

平成 20 年度発掘調査において出土した遺物の中で『中城御殿跡―県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書（２）―』において、金属製品以外での未報告の出土遺物を本章で報告するものである。とくに残存率の高い陶磁器、瓦を計７点取り上げた。

第 62 図１　沖縄産陶器の摺鉢。口縁部はくの字状に外反し、鍔状となる。口縁直下の器壁はやや薄くなり、胴上部は幅広の隆帯文が見られる。内面胴部にはわずかに刷毛目が見られる。外面には透明釉が、内面は黒褐色釉が共に薄く施される。内面の器表には微小な凹凸が見られる。胎土は細かく、茶褐色を呈し、小孔がわずかに見られ、黄色、白色粗砂が混入する。時期は 18~19 世紀か。A トレンチ　J-11 出土。

第 62 図２　中国産青磁碗の口縁部。直口口縁で口唇部は丸く収める。外面胴部には丸みを帯びた弁先の連弁文が線彫りで描かれる。外面の器表には大小の小孔が見られる。青緑色の釉を内外面共にやや厚く施している。胎土は密で灰白色を呈し、白・黒粗粒子が多く混入する。また、断面が茶褐色もしくは黒色に変色している部分が見られる。時期は 15 世紀後半～ 16 世紀前半。龍泉窯系。A トレンチ　J-11 出土。

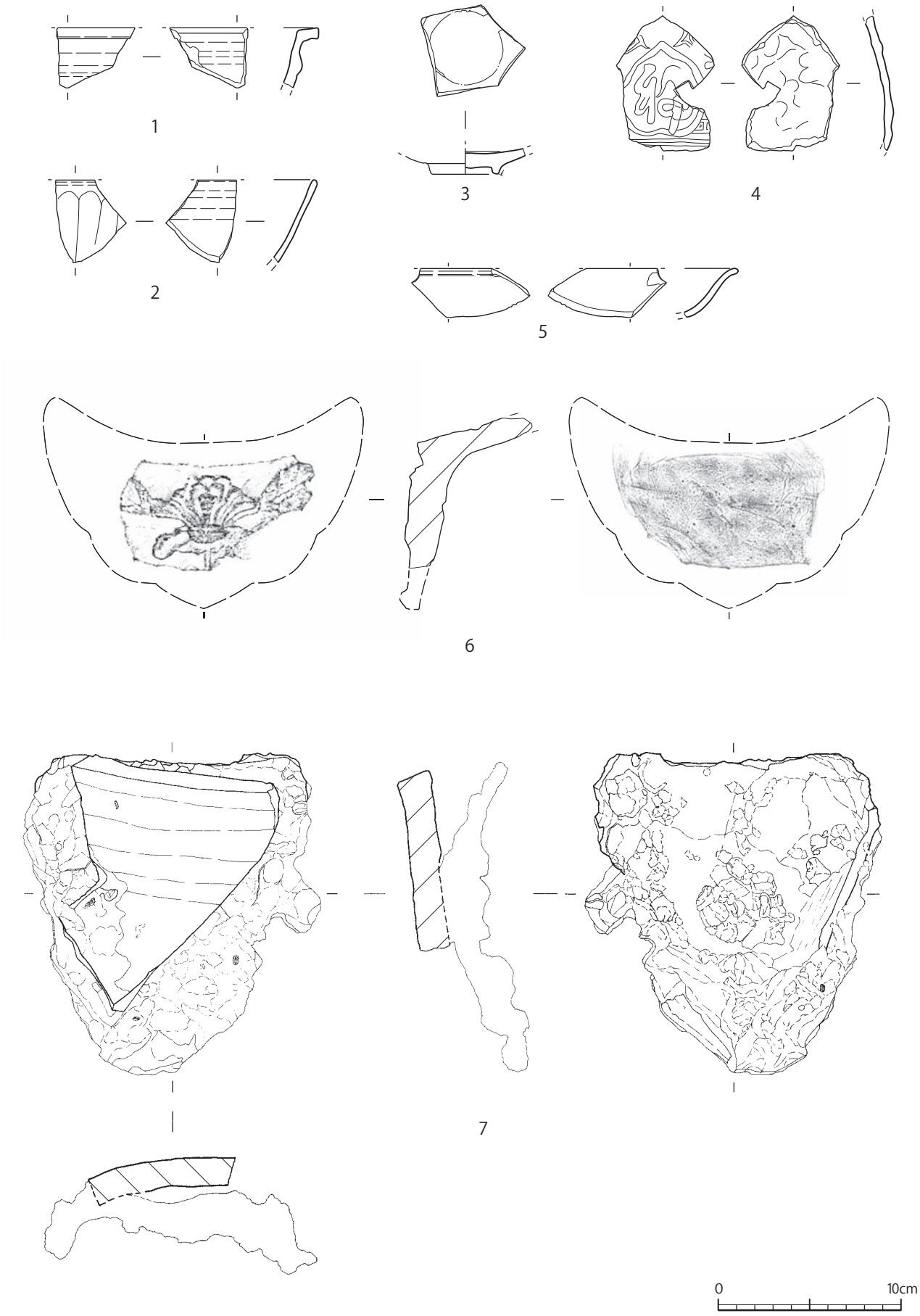
第 62 図３　中国産青磁皿の高台部。高台は低く内繰りは浅い。畳付けは水平に切られているが、幅は一定ではない。胴部は膨らみを有する。暗オリーブ色の釉を内外面共に薄く施す。内底面は円状に釉剥ぎがなされ、外面は胴部から高台外面から畳付けにかけて施釉される。外面は２次的に被熱したため、一部、器色が白色に変色している。胎土は密で灰白色を呈し、黄色、白色粗砂が混入する。時期は 15 世紀で龍泉窯系。A トレンチ　J-10 出土。

第 62 図４　中国産青磁の胴部で壺または瓶。膨らみを有する胴部で花弁を縁取った枠内に「福」の崩し字が型押しで大きく刻まれている。その上部にも文様はみられるが、全体構成は不明。内面は型押しの際の指押え痕が確認できる。焼成はやや不良で胎土は密で乳白色となる。また、小孔も見られる。暗オリーブ色の釉を内外面共にやや厚く施す。内外面共に２次的に被熱したため、器色に一部白色が混じる。時期は 15 世紀で龍泉窯系。A トレンチ　J-11 出土。

第 62 図５　本土産白磁皿の口縁部から胴部にかけての資料。薄手で、かつ無文の外反皿で口縁端部は僅かに肥厚する。胴部は膨らみを有する。胎土は密で白色を呈する。黒色の粗粒子が僅かに混入する。内外面共に透明釉を薄く施す。時期は 18 世紀～ 19 世紀で徳化窯系。A トレンチ　J-10 出土。

第 62 図６　明朝系瓦の軒丸瓦。両端部は欠損しているものの、全形は窺うことができる。瓦当部には花弁が牡丹様となる蓮華文が見られる。花文の下部にある茎は２条の縦位線で表され、左右には末広がりになる葉文が刻まれる。平瓦部が一部残り、瓦当部との接続部とは丁寧なナデ調整がなされている。色調は赤褐色であるが色斑が見られる。胎土は密で、褐・白色の粗粒子が多く混入している。A トレンチ　J-10 出土。

第 62 図７　用途不明の鉄製品と明朝系平瓦が接着する。鉄製品は錆化が著しく、瓦は錆に取り込まれる形で接着している。平瓦は狭端部周辺部分で、凸面は横ナデ調整痕が見られ、端部は僅かに肥厚する。鉄製品は厚さ 7㎜の鉄板状で、端部が大きく湾曲する。また、瓦との接着部周辺には錆が瘤状となって多数確認できることから、別の鉄製品が錆化により接着している可能性が考えられる。



第 62 図　その他遺物（金属製品以外）

図版 62　その他遺物（金属製品以外）

第７章　金属製品の科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中城御殿は、沖縄県那覇市首里、旧沖縄県立博物館跡に所在し、首里城から北へ 250m ほど離れた台地上に位置する。台地は第四紀更新世の琉球層群の那覇層を構成する砕屑性石灰岩、いわゆる琉球石灰岩からなる。

発掘調査では、琉球国王の世子の邸宅とされる中城御殿に関わる多数の遺構や遺物が確認されている。本報告では、調査区より出土した金属製品の材質に関する情報を得ることを目的とし、蛍光 X 線分析による非破壊調査を実施する。

1. 試料

試料は、表 1 に掲げた金属製品 10 点である。なお、これら試料は錆化を受けており、表面には腐食生成物が認められる。また、通し No.262 と No.255 は金による加飾が見られる製品であり、分析にあたっては加飾されていない地の部分と加飾部分の 2 箇所を対象とした。

第 23 表　試料

通しNo.	旧No.	種類1	種類2
291	257	青銅	釘隠しの座
2223	1046	すず製品	フタ
454	526	青銅	
279	861	青銅	
286	234	青銅	
275	313	青銅	
262	32	青銅	八双金具
257	27		
282	不明	青銅	金具?
255			

2. 分析方法

蛍光 X 線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される調査法である。表面分析法であるために、遺物表面の状況によって結果が大きく左右され、遺物表面が錆化の影響を受けている場合には遺物本来の元素組成を求めることが難しいが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は遺物の構成元素を知るためには極めて有効な手法となる。

本調査では、非破壊を前提とした概査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や錆（腐食生成物）の除去を行わず、調査に供する。なお、調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ (株) 製エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (SEA2120L) である。本装置は、下面照射型の装置であり、X 線管球は Rh，コリメーターサイズは 10mm φ である。測定条件の詳細については結果とともに図中に掲げる。なお、写真図版に示した丸枠が今回測定を行ったおよその測定箇所である。

3. 結果

蛍光 X 線定性スペクトルを図 1 ～ 8 に掲げ、以下に特徴を記載する。

(1) 通し No.291（旧 No.257 青銅 釘隠しの座）

銅（Cu）が特徴的に検出されたほか、鉄（Fe），金（Au），鉛（Pb）が認められる。腐食生成物の上から測定を行っているため、定量的評価は避けるが、スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄，金，鉛は微量程度である。純銅が用いられていたと推定される。

(2) 通し No.2223（旧 No.1046 すず製品 フタ）

アルミニウム（Al）が特徴的に検出されたほか、ケイ素（Si），リン（P），カルシウム（Ca），鉄，銅，亜鉛（Zn），鉛が認められる。スペクトルを見る限りではアルミニウムを主とし、ケイ素や鉄を伴う。銅，亜鉛，鉛といった一般的な銅合金に見られる金属元素は少量から微量程度である。蛍光 X 線分析による表面分析では確かなことは言えないが、アルミニウム合金の可能性が疑われる。

(3) 通し No.454（旧 No.526 青銅）

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄，スズ（Sn），鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮（黄銅）が用いられていたと推定される。

(4) 通し No.279（旧 No.861 青銅）

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄，鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮（黄銅）が用いられていたと推定される。

(5) 通し No.286（旧 No.234 青銅）

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄，スズ，金，鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮（黄銅）が用いられていたと推定される。

(6) 通し No.275（旧 No.313 青銅）

銅が特徴的に検出されたほか、鉄，金，鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄，金，鉛は微量程度である。純銅が用いられていたと推定される。

(7) 通し No.262（旧 No.32 青銅 八双金具）

地の部分では、銅が特徴的に検出されたほか、鉄，ヒ素（As），金，鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄，ヒ素，金，鉛は微量程度である。また、加飾部分には金および水銀（Hg）が伴われる。地には純銅が用いられていたと推定され、アマルガム法による鍍金によって加飾されたものと考えられる。

(8) 通し No.257（旧 No.27）

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄，スズ，鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮（黄銅）が用いられていたと推定される。

(9) 通し No.282（旧 No. 不明 青銅 金具 ?）

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄，スズ，鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮（黄銅）が用いられていたと推定される。

(10) 通し No.255

地の部分では、銅が特徴的に検出されたほか、鉄，金，鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄，金，鉛は微量程度である。また、加飾部分には金と銀および水銀（Hg）が伴われる。地には純銅が用いられていたと推定され、アマルガム法による鍍金によって加飾されたものと考えられる。

4. 考察

調査の結果、7 試料が青銅とされているが、通し No.291，275，262，255 の 4 試料は純銅製、通し No.454，279，286，257，282 の 5 試料は真鍮（黄銅）製と推定され、いずれも銅と錫の合金である青銅（スズ青銅）ではないことが示唆された。また、通し No.262 と No.255 における加飾細工は金と同時に水銀が検出された特徴から、アマルガム法による鍍金が施されたと考えられる。

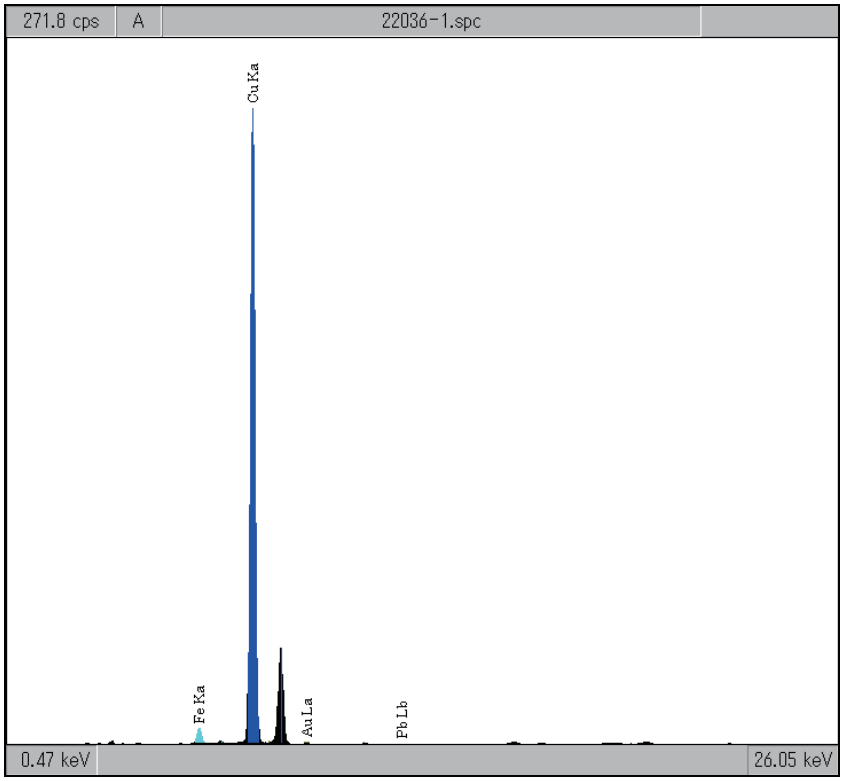
一方、すず製品とされている通し No.2223 は、スズのスペクトルが見えず、すず製品ではないことが明らかである。本試料については、真空雰囲気の条件で測定を実施したところ、アルミニウムが

特徴的に検出され、相当量のアルミニウムを含むことが示唆された。なお、アルミニウム以外にもケイ素や鉄，さらに銅，亜鉛，鉛といった元素が検出されているため、一材料であるならばアルミニウム合金の可能性が疑われるが、一方でフタの外側で黒銀色，内側でやや黄色味を帯びた銀色を呈し、やや色味が異なるなど気になる点もある。メッキ処理されている可能性も疑っておく必要があるため、本製品の材質を明らかにするためには精査を要する。すず製品ではないことは確かではあるが、現段階で材質について言及することは難しい。今後、金属組織学的調査を実施して材質を見極めることが肝要と考える。

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	225
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.291

［スペクトル］



［結果］

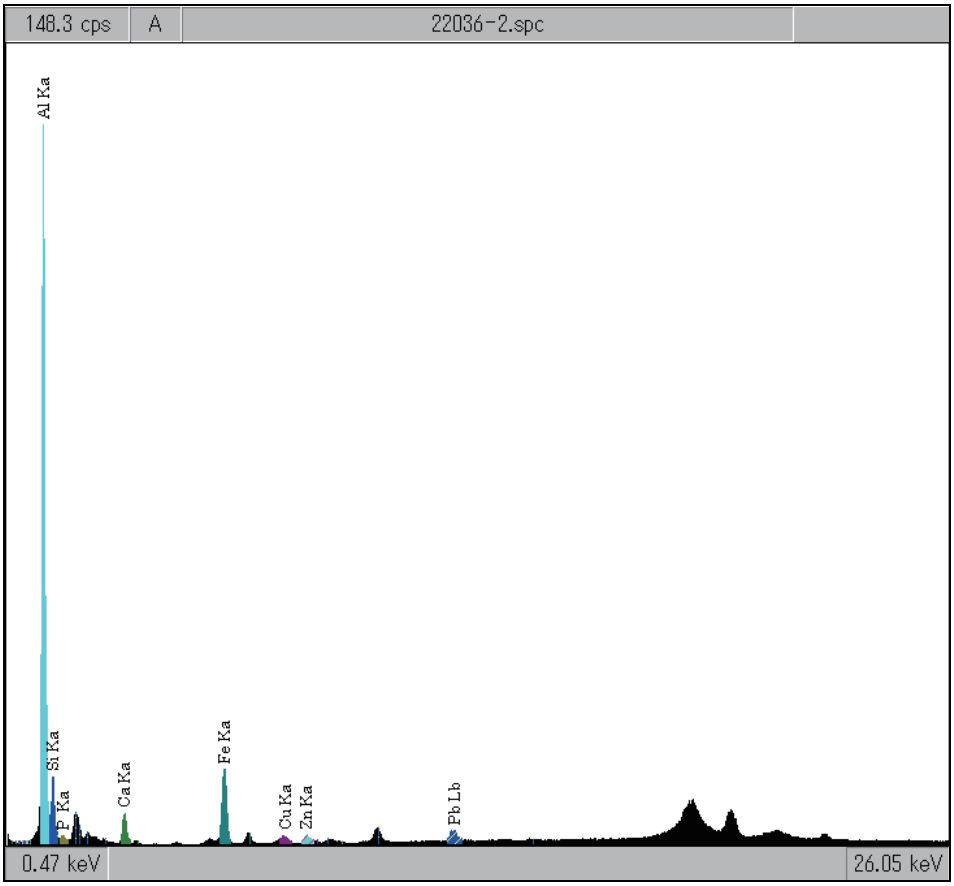
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	49.830	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2110.066	7.87- 8.21
79	Au	金	Lα	4.291	9.53- 9.88
82	Pb	鉛	Lβ	2.508	12.43-12.82

第 63 図　通し No.291 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	223
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	12
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.2223

［スペクトル］



［結果］

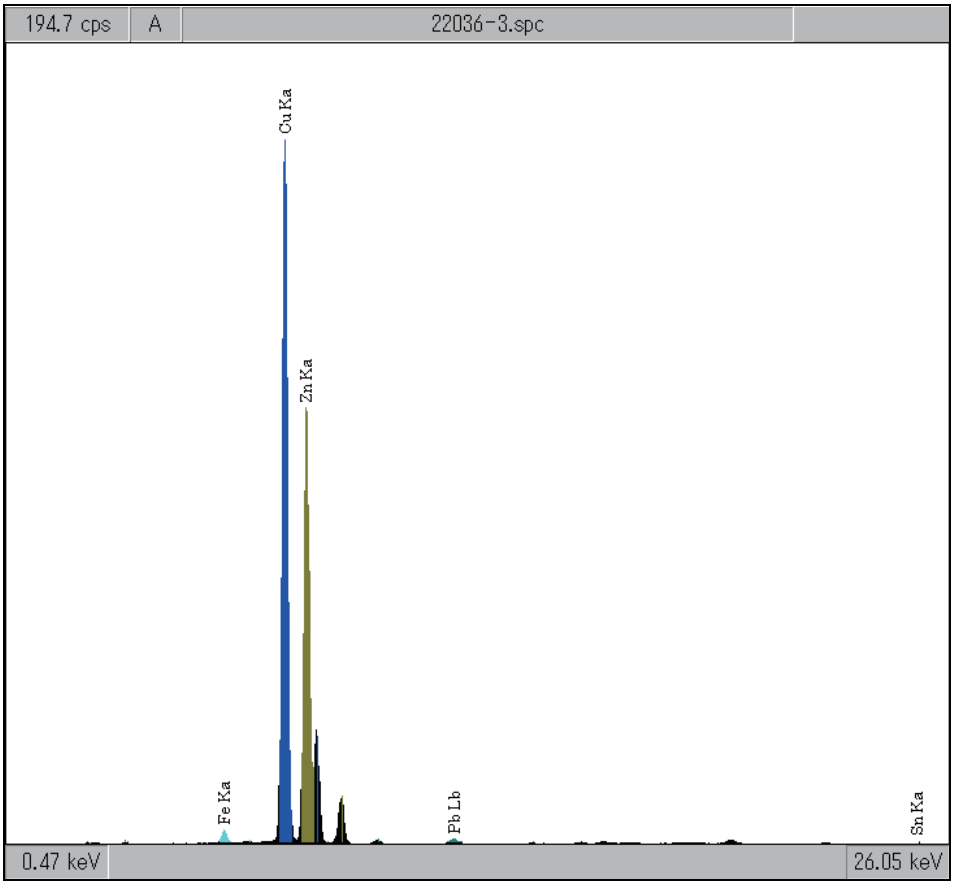
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	752.963	1.38- 1.59
14	Si	ケイ素	Kα	84.281	1.63- 1.85
15	P	リン	Kα	15.827	1.90- 2.13
20	Ca	カルシウム	Kα	42.043	3.56- 3.82
26	Fe	鉄	Kα	116.756	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	21.003	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	19.954	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Lβ	37.105	12.43-12.82

第 64 図　通し No.2223 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	218
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.454

［スペクトル］



［結果］

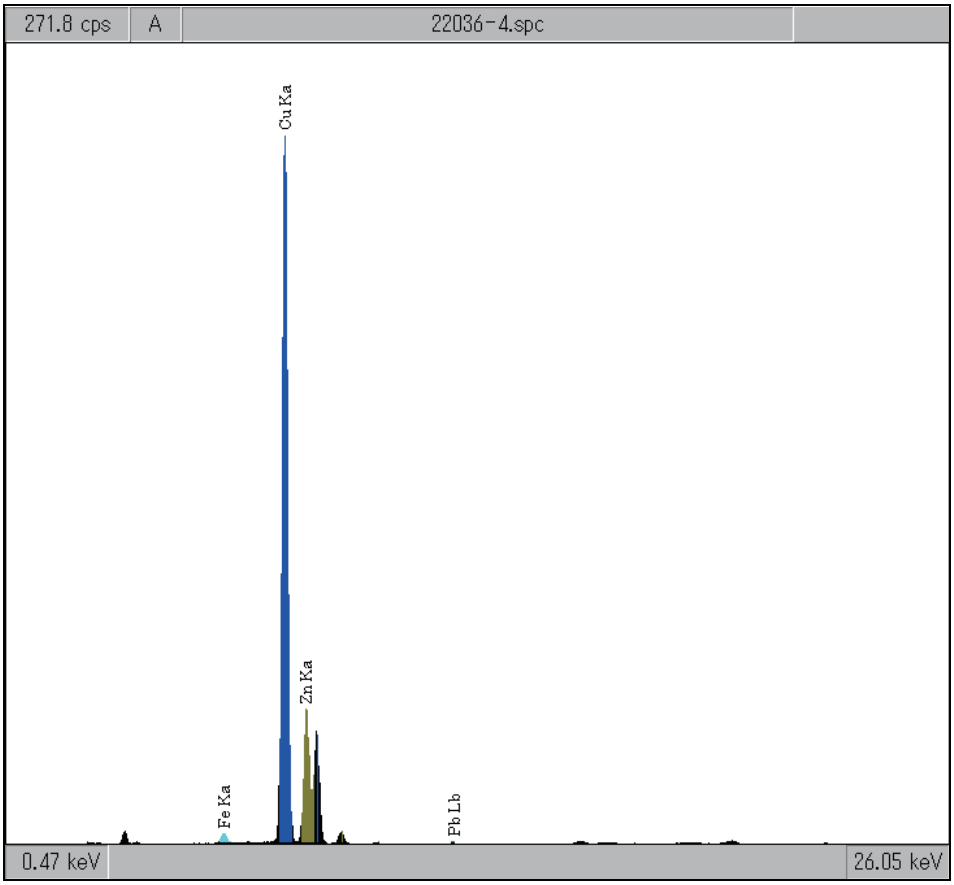
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	24.699	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	1475.501	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	970.851	8.46- 8.80
50	Sn	スズ	Kα	2.928	24.93-25.46
82	Pb	鉛	Lβ	9.851	12.43-12.82

第 65 図　通し No.454 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	215
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.279

［スペクトル］



［結果］

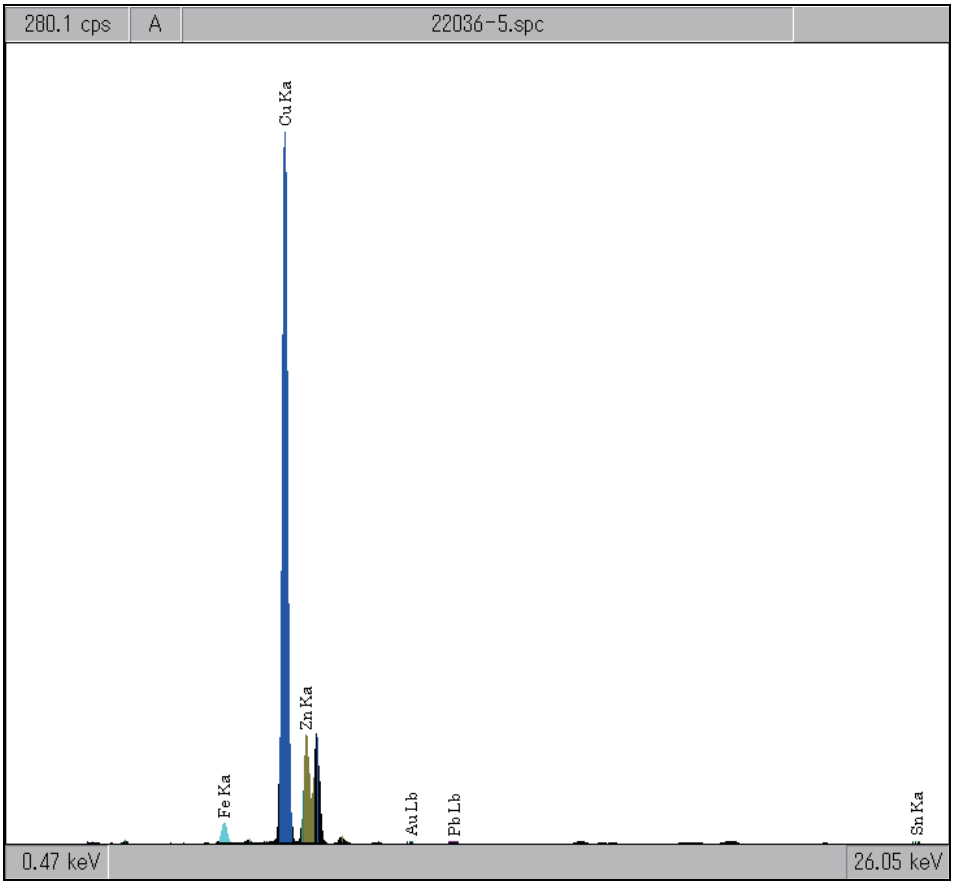
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	27.520	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2082.215	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	441.224	8.46- 8.80
82	Pb	鉛	Lβ	3.210	12.43-12.82

第 66 図　通し No.279 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.286

［スペクトル］



［結果］

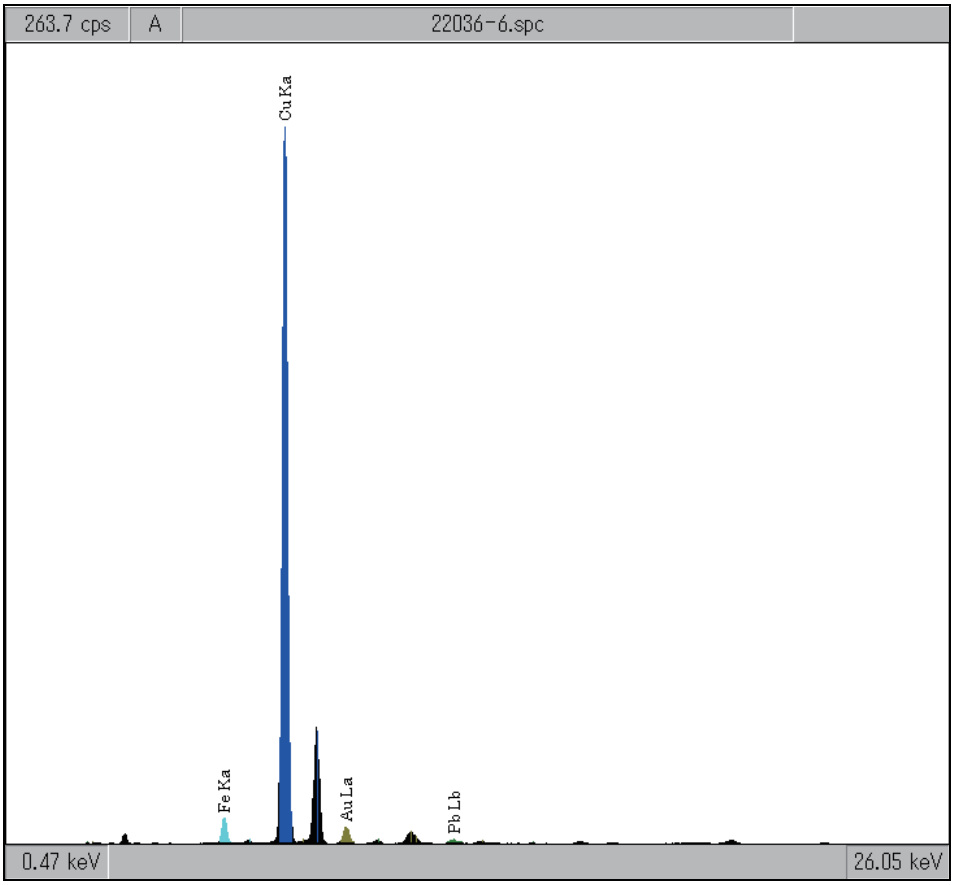
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	57.861	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2157.036	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	372.522	8.46- 8.80
50	Sn	スズ	Kα	4.761	24.93-25.46
79	Au	金	Lβ	3.735	11.29-11.67
82	Pb	鉛	Lβ	6.867	12.43-12.82

第 67 図　通し No.286 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	220
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.275

［スペクトル］



［結果］

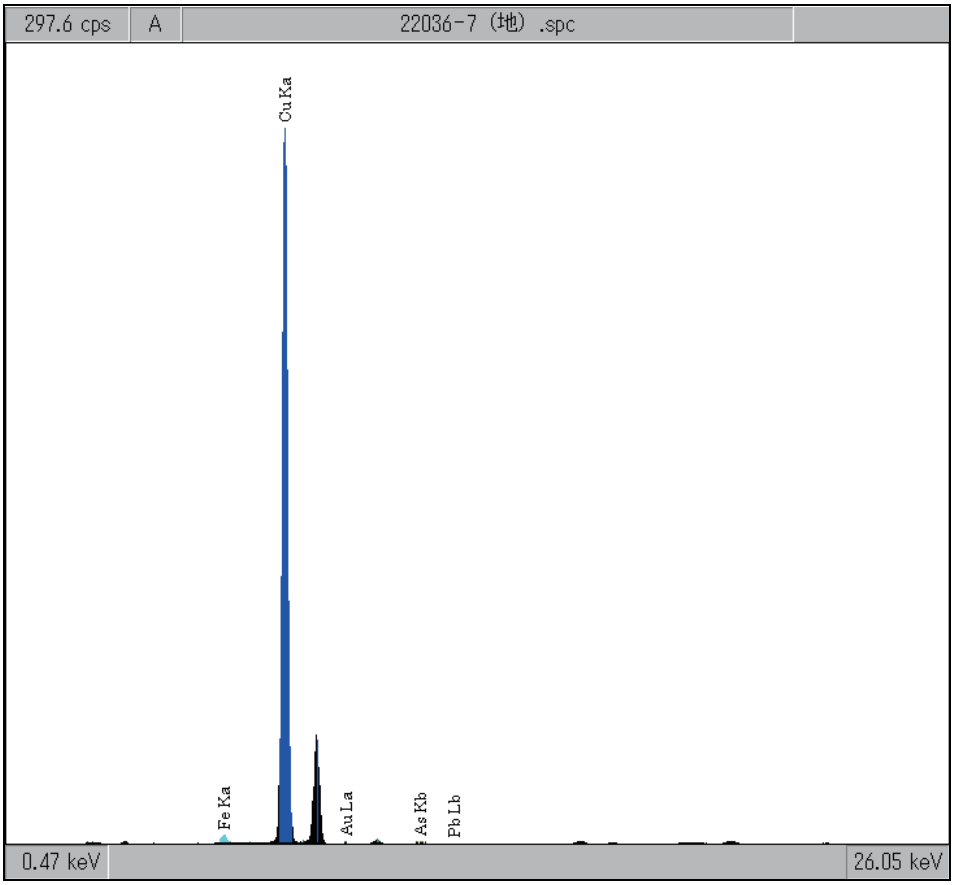
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	68.158	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2056.641	7.87- 8.21
79	Au	金	Lα	52.459	9.53- 9.88
82	Pb	鉛	Lβ	12.230	12.43-12.82

第 68 図　通し No.275 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	220
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	6
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.262（地）

［スペクトル］



［結果］

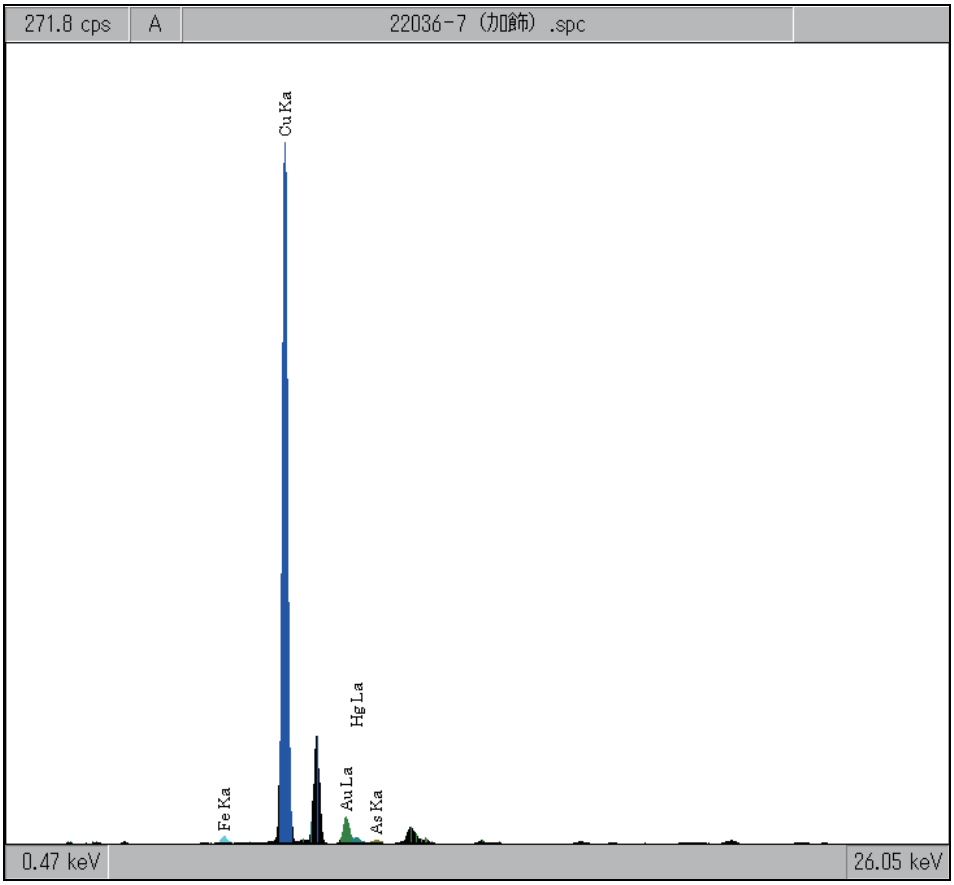
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	25.722	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2299.825	7.87- 8.21
33	As	ヒ素	Kβ	4.937	11.53-11.92
79	Au	金	Lα	2.995	9.53- 9.88
82	Pb	鉛	Lβ	2.313	12.43-12.82

第 69 図　通し No.262（地）の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	221
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.262（加飾）

［スペクトル］



［結果］

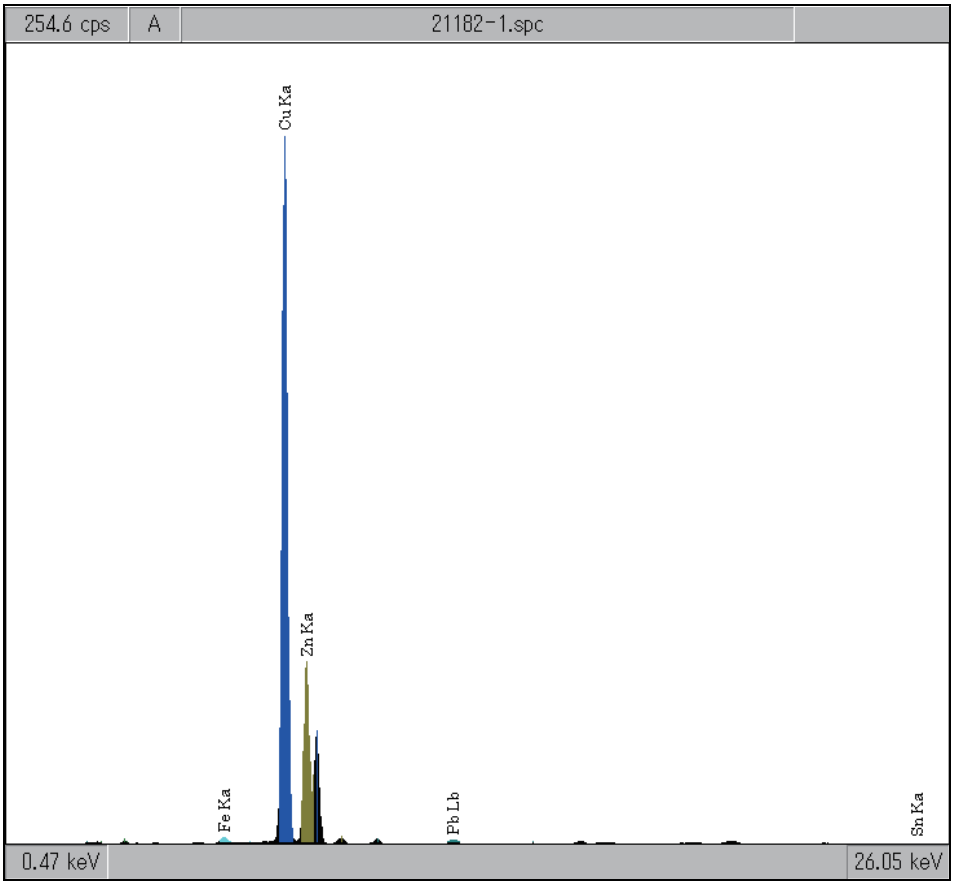
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	19.364	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2060.604	7.87- 8.21
33	As	ヒ素	Kα	9.386	10.35-10.72
79	Au	金	Lα	87.560	9.53- 9.88
80	Hg	水銀	Lα	28.895	9.80-10.16

第 70 図　通し No.262（加飾）の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	217
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	6
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.257

［スペクトル］



［結果］

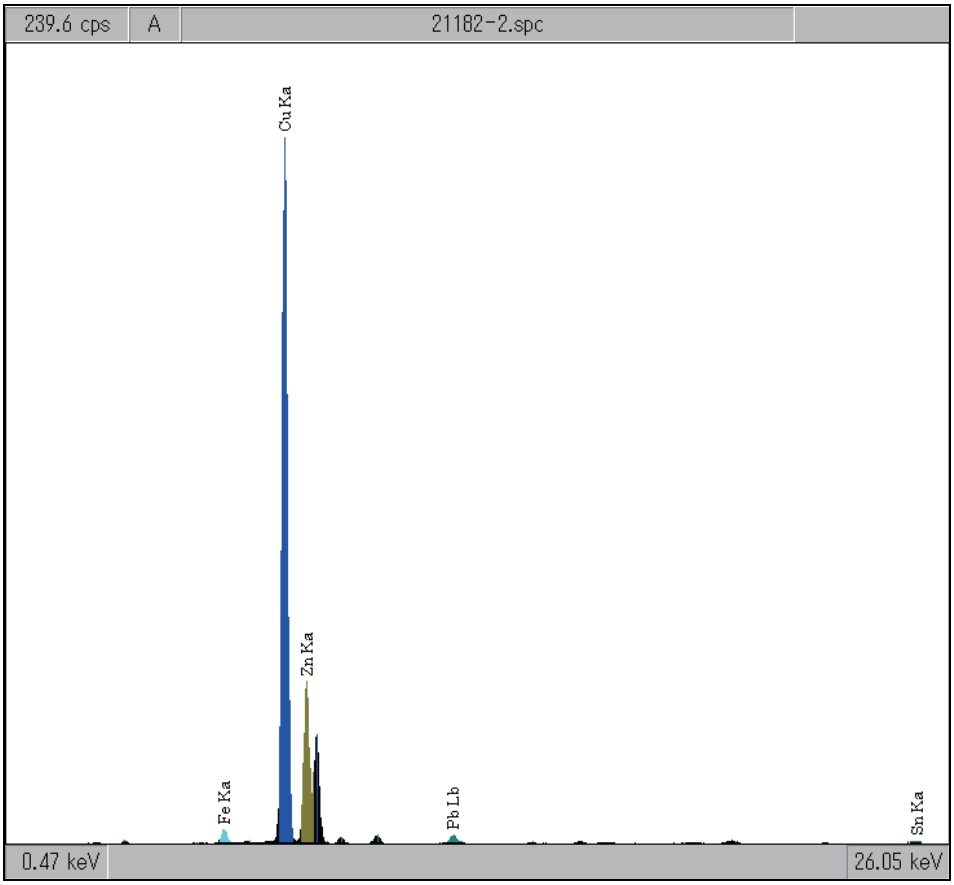
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	15.942	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	1960.572	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	538.926	8.46- 8.80
50	Sn	スズ	Kα	2.024	24.93-25.46
82	Pb	鉛	Lβ	12.171	12.43-12.82

第 71 図　通し No.257 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	221
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.282

［スペクトル］



［結果］

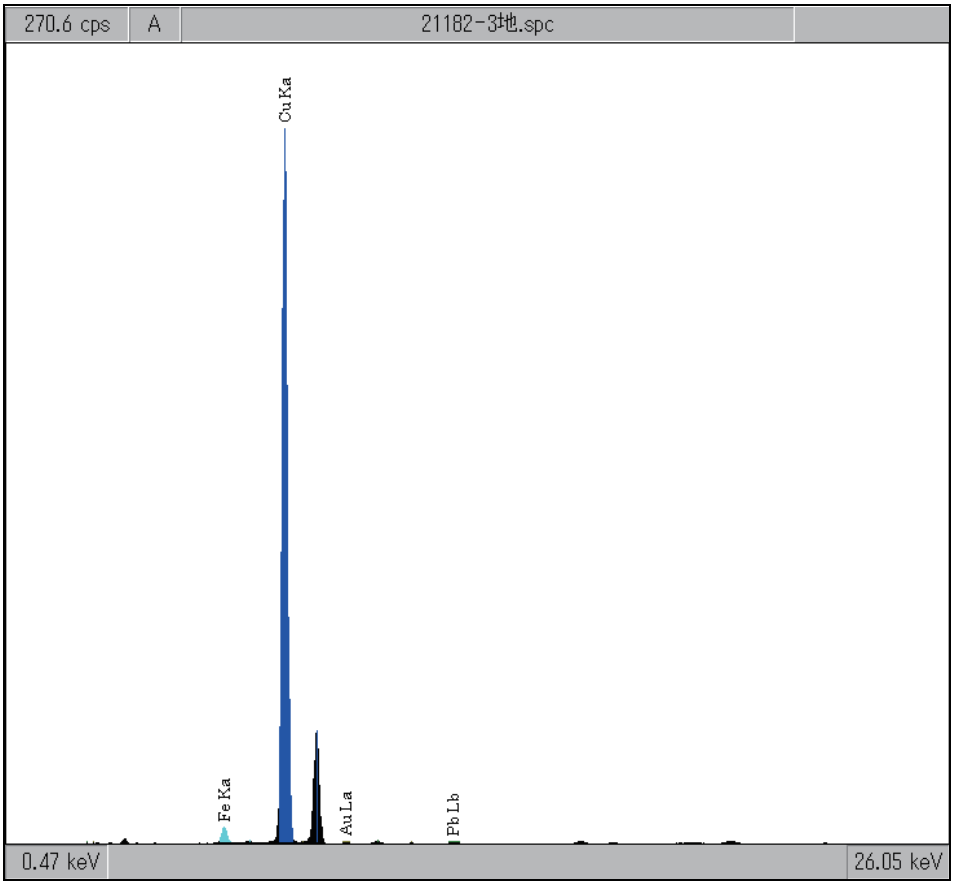
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	33.999	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	1841.927	7.87- 8.21
30	Zn	亜鉛	Kα	458.777	8.46- 8.80
50	Sn	スズ	Kα	5.158	24.93-25.46
82	Pb	鉛	Lβ	23.282	12.43-12.82

第 72 図　通し No.282 の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	225
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.255（地）

［スペクトル］



［結果］

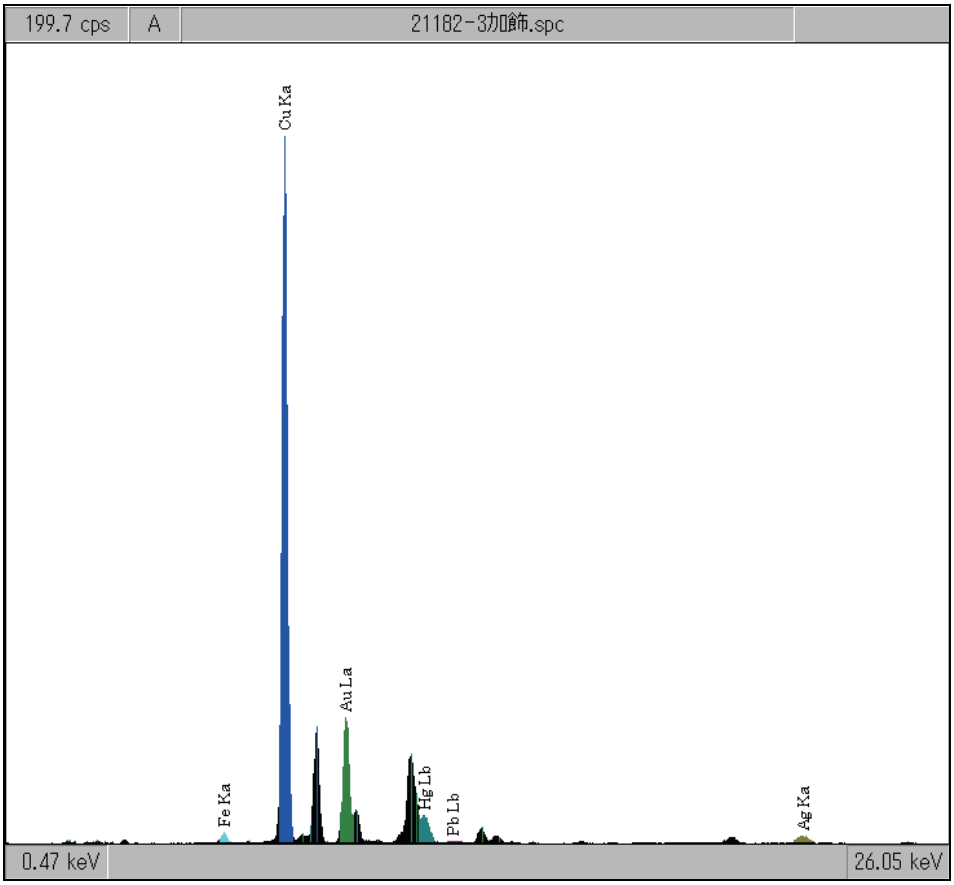
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	45.155	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	2094.676	7.87- 8.21
79	Au	金	Lα	3.595	9.53- 9.88
82	Pb	鉛	Lβ	7.011	12.43-12.82

第 73 図　通し No.255（地）の蛍光 X 線定性スペクトル

［測定条件］

測定装置	SEA2120L
測定時間（秒）	300
有効時間（秒）	217
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	5
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.255（加飾）

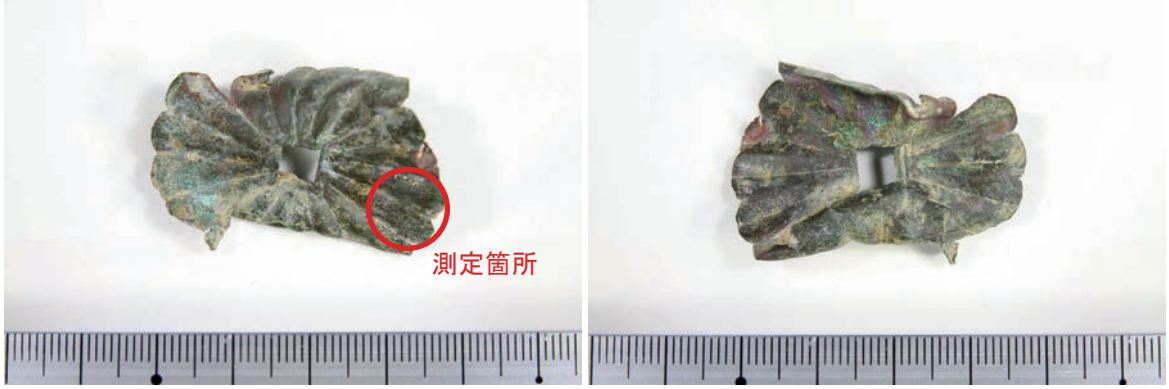
［スペクトル］



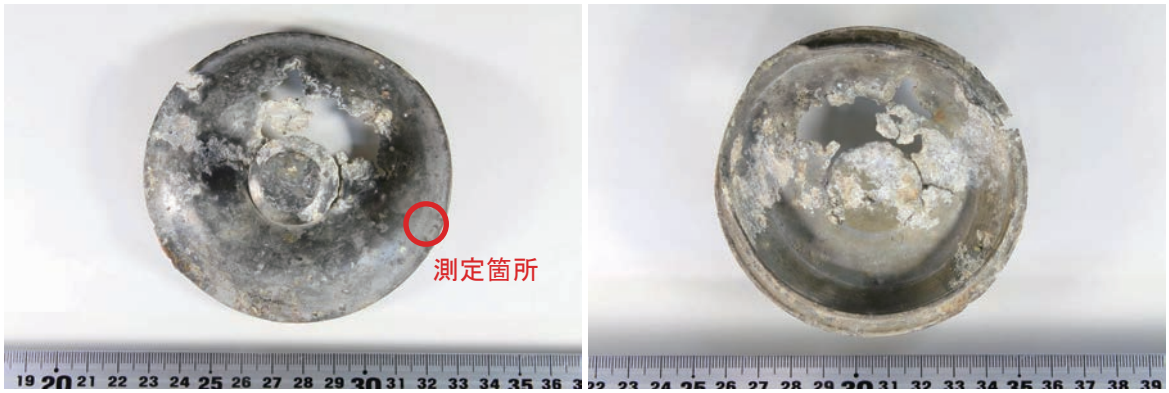
［結果］

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	21.073	6.25- 6.55
29	Cu	銅	Kα	1514.848	7.87- 8.21
47	Ag	銀	Kα	27.224	21.85-22.35
79	Au	金	Lα	318.578	9.53- 9.88
80	Hg	水銀	Lβ	103.451	11.66-12.05
82	Pb	鉛	Lβ	6.753	12.43-12.82

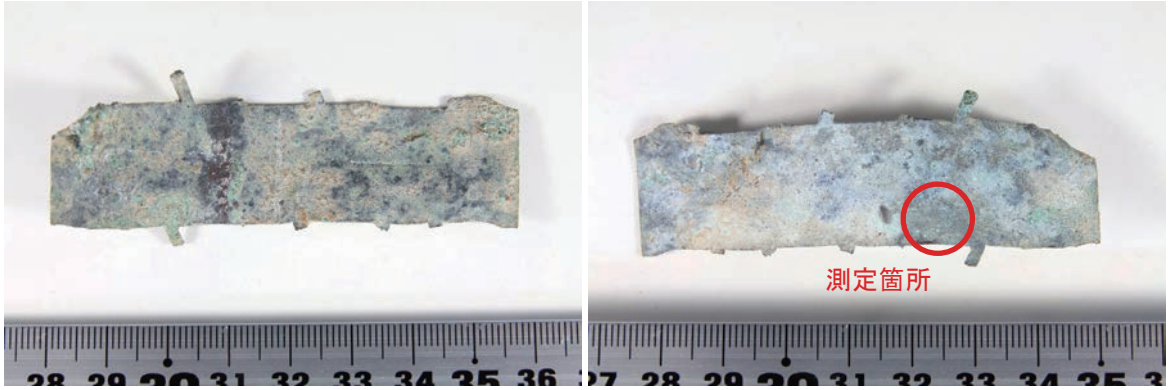
第 74 図　通し No.255（加飾）の蛍光 X 線定性スペクトル



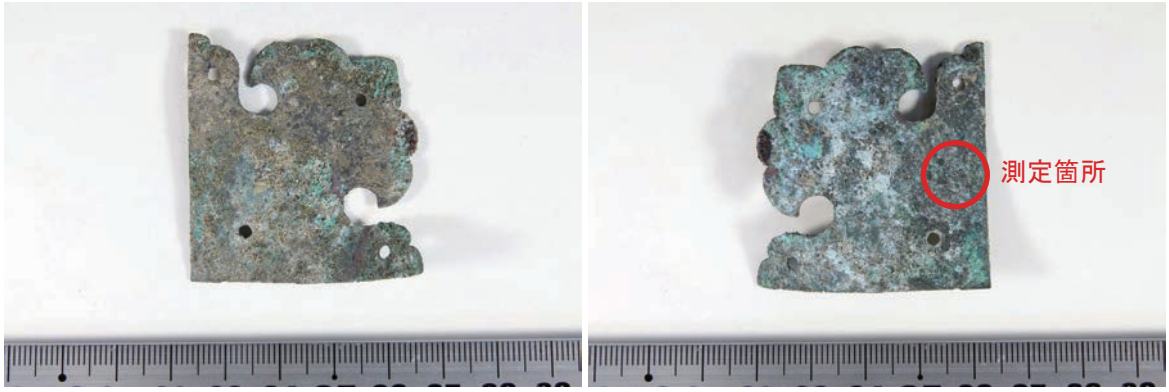
通しNo.291



通しNo.2223



通しNo.454

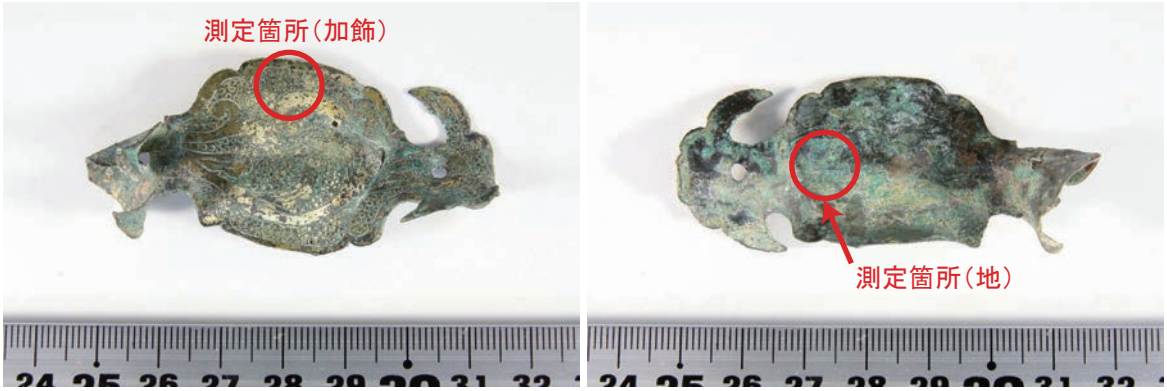


通しNo.279

図版 63　試料 1

通しNo.286

通しNo.275



通しNo.262

通しNo.257

図版 64　試料 2

通しNo.282

通しNo.255

図版 65　試料 3

第８章　総括

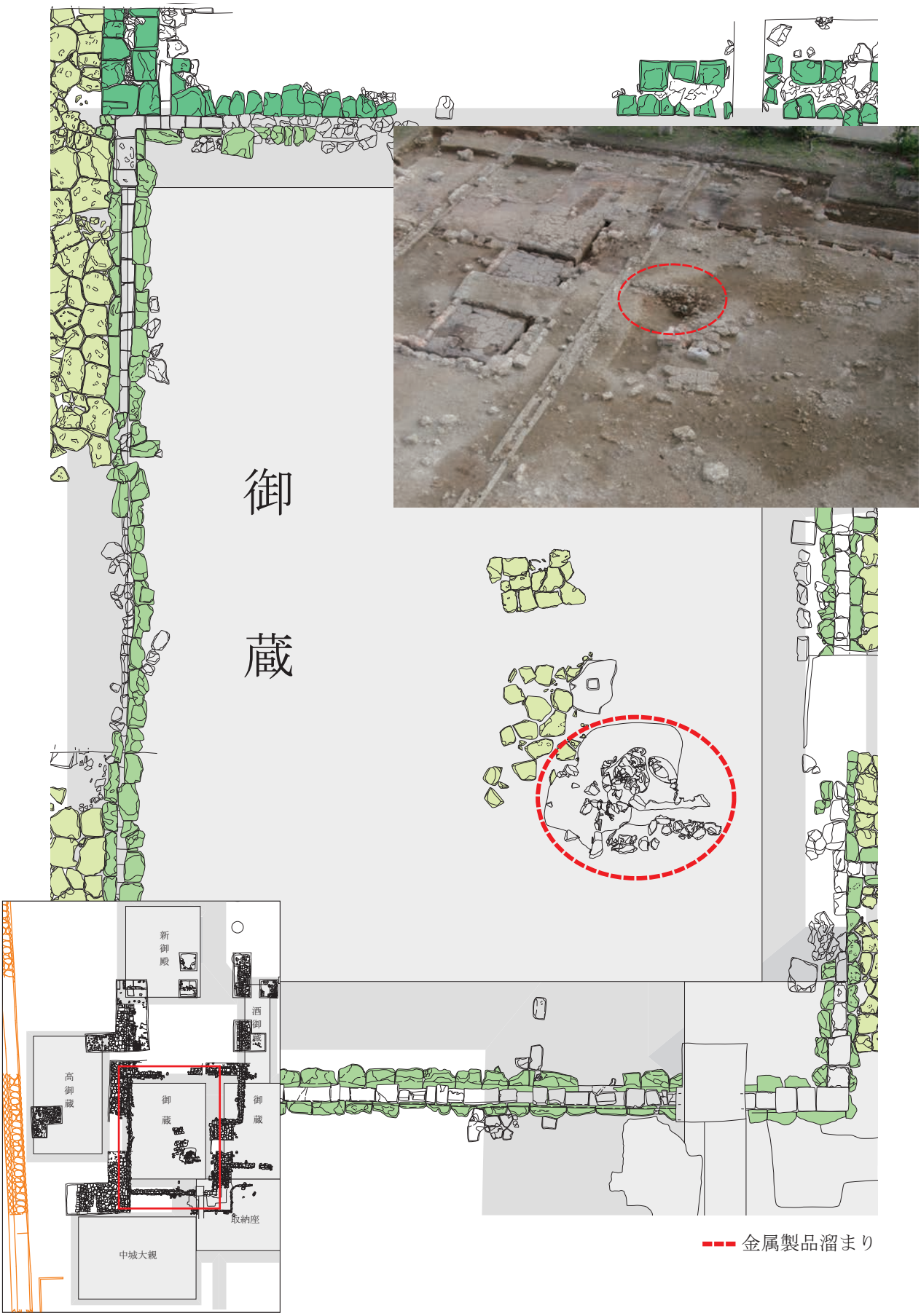
これまで、平成 19 ～ 21 年度に実施した中城御殿跡発掘調査で出土した金属製品と、これに関する遺構について報告した。本章では、その中でも特徴的な遺物についてまとめ、総括としたい。

調査を実施したＪ～ L-14・15 区の一帯には、かつて御蔵と呼ばれる蔵があったとされており、発掘調査によりこれにともなう石畳や石列などの遺構が確認されている。出土遺物は 18 世紀から近代の陶磁器や飾り金具、耳盃、釣り灯籠などの金属製品が出土している。さらに金属製品を一括廃棄したと考えられる土坑と考えられる金属製品溜りからは、多数の大型金属製品が折り重なった状態で出土している。出土した金属製品はすべて (青) 銅製で、長柄付銚子、香炉、花瓶、壺といった製品で構成される。このような大型の金属製品は、移転前の中城御殿 (現首里高校) からはほとんど出土していないことから、琉球処分以降に首里城や複数の御殿から宝物などが持ち込まれたとする関係者の証言に由来すると考えられる (沖縄タイムス 1975)。これらの金属製品はいずれも高熱を受け破損しており、また遺構の覆土は周辺のⅠ層と同様に瓦片等も多く出土していることから、戦時中に形成された被弾痕に、周辺に散乱する破損品や瓦礫を一括して投棄したものと考えられる。

その他特筆できることとして、この区域からは鉄製・銅製の釘が多く出土しており、特に銅釘のⅡ類が多く出土している。このⅡ類とした釘は小型で、建材には向かないことから、調度品やその他の飾り金具などに利用されたものと考えられ、終戦直後には先の金属製とともに木製品の家具や櫃なども廃棄された可能性がある。

今回報告した金属製品は、種類、量ともに豊富であることから、当時の中城御殿における金属製品の多様性をみることができるとともに、祭祀用具や絢爛豪華な生活の様子を知ることができる貴重な資料として今後も引き続き調査・研究を行う必要がある。

最後に、発掘調査・資料整理作業にあたっては、多くの方々に指導助言・協力を賜った。記して感謝申し上げたい。



第 75 図　金属製品溜まり検出状況

図版 66　L-15 金属製品溜まり検出状況①（北から）

図版 67　L-15 金属製品溜まり検出状況②（北から）

図版 68　L-15 金属製品溜まり検出状況③（北から）

引用・参考文献

球陽研究会（編）1974 『沖縄文化史料集成５　球陽　読み下し編』角川書店
沖縄県土木建築部 1984「首里城公園基本計画」
沖縄県土木建築部 1988「首里城公園基本設計」
沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿―石牆工事地域にかかる第１次発掘調査―』
沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿―石牆工事地域にかかる第２次発掘調査―』
沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿―石牆工事地域にかかる第３次発掘調査―』
沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館 50 年史』
都築昌子 2005「龍のひそむ島－近世琉球の風水－」『沖縄県史各論編第４巻近世』沖縄県教育委員会
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010「中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（１）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 53 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011「中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告（２）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 58 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2012「中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（３）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 63 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2013「中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告（４）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 67 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2016「中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿発掘調査報告書（５）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第 67 集
株式会社国健（編）2010『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』財団法人 海洋博覧記念公園管理財団
那覇市市民文化部歴史資料室（編）2003『尚家関係資料総合調査報告書』那覇市
沖縄県教育委員会 2008「沖縄の金工品関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第 146 集

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかぐすくうどぅんあと
書　　名	中城御殿跡
副 書 名	県営首里城公園中城御殿発掘調査報告書(6)
巻　　次	―
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第95集
編著者名	山本正昭、田村　薫、上地　博、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	平成30(2018)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかぐすくうどぅんあと 中城御殿跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりおおなかちょう 首里大中町1 ちょうめ　ばん 丁目1～3番	472018	―	26° 13′ 15″	127° 43′ 05″	2008.12.01～ 2009.02.27 2009.0602～ 10.30	650㎡	県営首里城公園整備事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	近世～現代	土坑	金属製品(祭祀具、器類、建具、飾り金具、煙管、簪、釘、鎹)	K-14グリッドから大量の金属製品が一括して出土した。金属製品は近世期に相当するが、他の出土遺物や検出状況から近代に埋蔵されたと考えられる。鍍金された飾り金具や大型の香炉が多くみられることから中城御殿内で使用された祭祀道具や建築部材である可能性が高い。

要 約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870年から1945年まで存在していた。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は遺構の残存状況を確認する目的で7本のトレンチを設けて行い、石組みや石積み、造成層などの遺構が良好な状態で検出された。

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 95 集

中　城　御　殿　跡

―県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書（６）―

発行年　2018（平成 30）年３月 31 日

発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒901-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098（835）8751・8752

印　刷　有限会社ドリーム印刷
〒901-1117
沖縄県南風原町字津嘉山1537-6
TEL 098（889）2784

沖縄県立埋蔵文化財センター2018 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

首里古地図

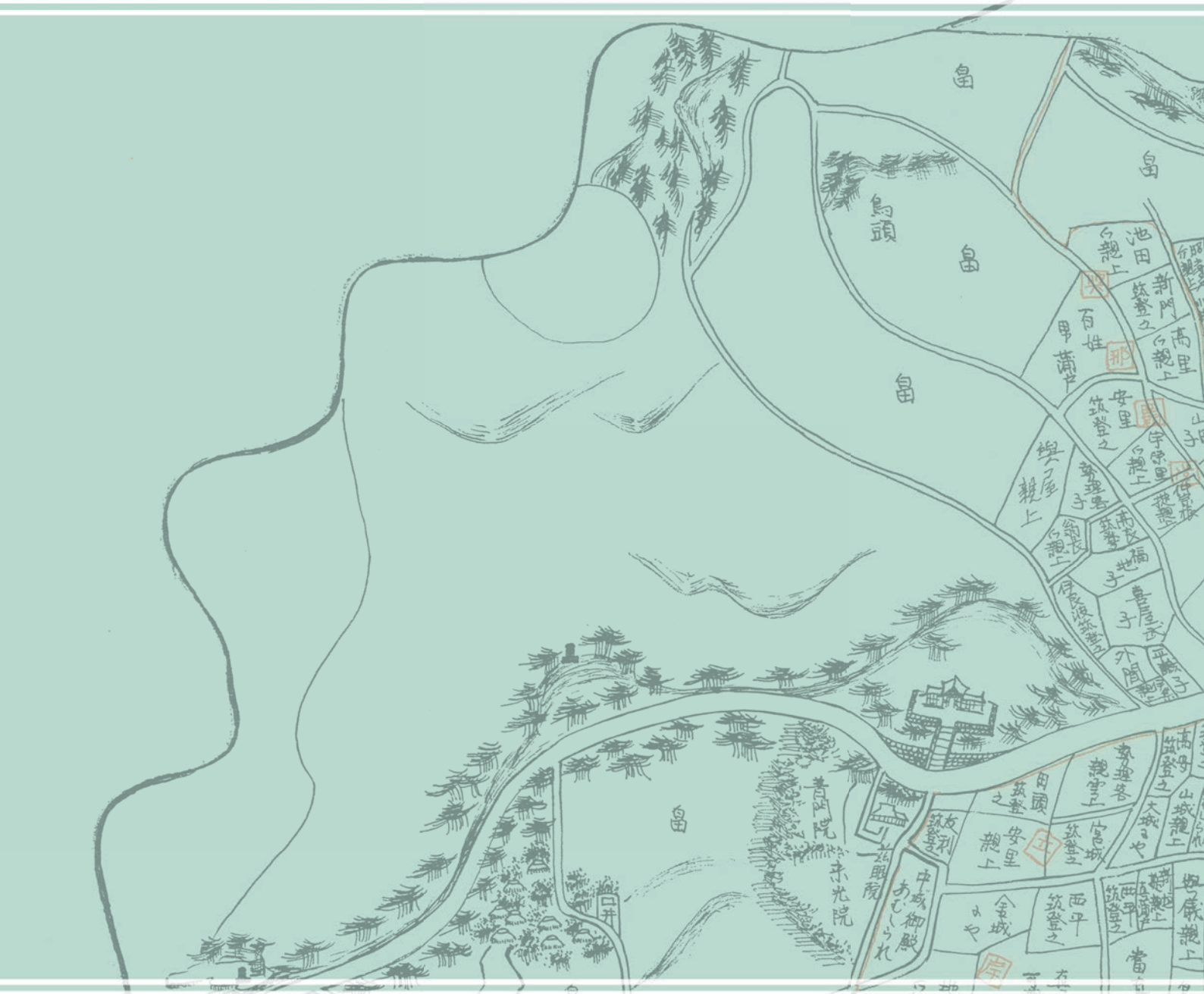
康熙39（1700）年に作製されたものである。これより２年前に江戸幕府から全国各藩に対して、地図を作製提出するよう指令が出ておるので、この地図もその一環であろう。

ところが、この地図も時代が経つにつれて、汚損はなはだしく、咸豊のはじめごろには開くことさえ出来ず、まったく使用にたえない状態になっていた。秋姓家譜によると、九世紫俊（さいしゅん）が絵図書調方筆者として、この地図を再調製したことがみえている。当時、原図は使用できないので、屋敷図帳、山敷図長を参照し、各当事者にきいたりして、この仕事を完成し、褒賞を賜っている。

図中約千百余の公署、屋敷等が綿密に記載され、270年前の状況を詳しく伝えているが、この地図が年代推定に疑問を宿した理由は1700年当時の状況を伝えながらも、当事者たちの記憶違い、あるいは伝え違いによって、後代的な要素があるからである。

この地図の原図は６畳敷大の大きさで、研究に不便になるため、よく観察して書きあらためたものである。（嘉手納宗徳）

沖縄風土記刊行会1970



沖縄県立埋蔵文化財センター